
魔法少女リリカルなのはStrikerS 青年と魔導師の交わり

スペリオルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 青年と魔導師の交わり

【Nコード】

N8645Q

【作者名】

スペリオルス

【あらすじ】

東京某所にある孤児院生まれつき異常ともいえる力を持った青年彼が戦うことになる犯罪組織…そして彼とともに戦うことになる時空管理局機動六課の魔導師達笑いあり、涙あり、恋愛ありのとても物語が、今、始まる！！すいません、ちょっとタイトル変更しました。これに伴い、これの設定のほうもちゃんと変更しますね。設定をこの小説内に盛り込みました。

第1話 過去と今

ここは『第97管理外世界地球』

かつて『P.T事件』、『闇の書事件』で舞台になった場所である

その時活躍した魔導師達はみな管理局に勤務し、職務を全うしている

最近では新たに設立される部隊『機動六課』に全員が所属することになってもある

そして今日、今この時、新たな魔導師が、ここから誕生する

東京・某所に手1人の青年がぶらぶらと街を歩いていた

彼の名は 『せきせい赤青 りゅうじ龍士』

この近辺に住むのだが…彼は少しわけありの男だった

彼は小学4年の時両親と死別し、その後は叔父の経営する孤児院で育った

高校に入ると同時に親の遺産で1人暮らしを始め、現在20歳なのに学校も行かず、働きもしない

以前そのことを叔父に言及されるも、適当にあしらったというぐらいいのだ

実は彼は、両親と死別するかもしれないかの前後からちよっとした『歪

み』や『淀み』のようなものを感じていた。

『ここは本当に俺の居場所なのか…』

『俺はこうして生きていく上で、一体何をして、何をどうすればいいのか…』

そして、両親についてもあまりいい噂というのを聞いたことがない
何せ大昔（弥生や飛鳥時代などから）現在まで現存している日本に
ある武術関連の本

そして技術などを完全に再現しようとしている研究をされており、
その上で多少の遺伝子操作が必要と分かると自身の子供にやるほど
だったのだ

なので龍士は多少（というかかなり）常人よりも身体能力が高い
しかもイケメン、頭脳明晰、スポーツ万能（ここらへんも遺伝子操
作によるところがあるが）というように完璧超人のような存在であ
った

もつとも、高い身体能力を備えているとはいえども、鍛えなければ
使いこなせはしない

なので毎日のように筋トレをして、普段から鉛入りにプレスレット
とアंकレットを身につけている

だが故に周囲からは疎まれ、その力を欲しがった犯罪者に狙われる

ことも多々あった

両親が死んだのもそう行った背景がある

しかし周囲からの評価（？）は万場一致で『自業自得』であった
なので警察となぜか強いつながりを持つ叔父に世話になっていた、
という形なのだ

そして本日はその両親の命日、この日で死別して10年たったとい
うところである

龍士は両親の墓がある寺に行き、墓参りを済ませた後でいいので来
てくれと叔父に呼ばれていた

そして叔父が経営し、龍士が10歳から15歳まで過ごした孤児院
『心喜院』

「龍士、こんな日に、しかも突然呼び出してすまなかったな」

「叔父さんはいつもじゃないですか…働けとか、そういう話だった
らよしてくださいよ、今日は…」

「わかっている、全てな…じつは、今日はお前に渡したいものがあ
ったから来てもらったんだ」

「渡したい…もの？」

「ああ、…ついてきてくれるか」

そしてついたところはここでも子供たちの中で『幽霊が出る』と言われている場所だった

「こんなところに連れてきて…いきたい、どういっつもりなんだい、叔父さん」

「本当に連れて行きたいところは、この中なんだが…私は入ることができない」

「はあっ!?!?」

「ここは…この孤児院は…本来、おまえの両親が経営する予定だったのだ」

「!?!?!?!?!?」

「しかし、お前の両親は…『いつか…ここが危なくなる時が来る』と言ってここを飛び出していった」

「…」

「実はここは何十年も前に犯罪者…しかも得体のしれない力を使う連中がアジトとして使用していたところだったんだ。そいつらの犠牲者になった者たちの鎮魂のためにもと、私たちの先祖がここを立てて、一族で経営して来たんだよ…そして、おまえの両親はここで育ったものの中でもひとときわ勘が鋭く、その時の残党の子孫が再びこの力を狙ってくる…と確信して、対抗するための…ここを守るための力を求めた」

「…」

「その扉は、そいつらでも開けることができなかつたらしい…しかし、俺はお前が両親を失ってここに来た時確信した、おまえがその扉を開いてせいぜいうるさい!!」

「…」

「父さんも…母さんも…おじさんも…勝手なことばかり言っつて!! そんなに力がほしかったら自分で手に、無理やりにも、その扉をぶつ壊してでも手に入れればよかつたじゃないか!! なんて俺がやらないといけないんだよ!! 望んでもいなかつたのに!! こんな体にされて!! 古今東西のありとあらゆる武術・技術を強制的に習得させて!!」

「…」

「拳句の果てにここを守るため!! ぶざけんなつ!! 俺はここにいた時から幸せなんて、守りたいなんてこれっぽちも思わなかつた!! ここにいる間だけじゃない、学校に行つてもいつも変な眼で見られて、勝手に恨まれて…俺がどんなに苦しんでいたのか…わかつたわかつているとも」

「お前がどれだけ辛い思いをしてきたのか、想像することはできる…しかし、事態はここだけの問題にはとどまらないのだ」

「どついつことだよ」

「連中がここの力を手に入れてしまえば…地球は滅びる」

「はあっ!!…??」

「それほどの力だ、ということだ。しかしお前なら…平和の、人々の笑顔のために使ってくれると思ったから、こうして、案内しているんだ」

「なんで…俺が絶対そんなことしないって確信しているんだよ」

「お前は…世界で一番やさしいからだ」

「…」

「お前はほかの人にどんなに虐げられても、俺や兄貴たちから強制されても、逃げ出したりはしなかった…」

「逃げても捕まると思ってたから逃げなかったんだけど」

「いや、少なくとも孤児院に来た時点で君が本気を出せばおれでは捕まえられないぐらいの力は有していたさ…しかし、逃げなかった…それどころか、新しく入って来た子たちの面倒をよく見て、世話をしてくれたじゃないか」

「…そいつらが俺の力におびえて避けるまでの、2〜3日という短い期間だけだったかな」

「しかしお前がいなければ彼らはずっとなじめず、おまえ以上に孤独なっていただろう…そしておまえは毎朝一番に起きて草木に水をやり、ここで世話したりしていた動物達にえさをあげたりしていたじゃないか」

「…そうしないと、そいつらは…両親みたいになっちまうからって

わかってたからだよ」

「それがやさしさだよ」

「…」

「お前が受け取らなければ、おまえの両親のような…お前のような子供が何十、いや何百人と出てくる…お前は…それで…いいのか？」

「…おじさん…めっちゃ卑怯ですよ…」

「確かに…だが…お前なら、絶対にという確信があったんだよ…それにこの土地柄状、ここで生まれ育ったものは天性的というか、まあ第六感が鋭いから…だな」

「…わかりました…俺は俺みたいな子を出すくらいだったら…この身を…両親に救われた命を投げだす」

「それだけは、命を投げ出すのだけは、やめなさい…お前の両親は…兄貴たちはそういう思いでお前にその力を植え付けたわけじゃないのだからな」

「わかった…じゃあ…行ってくる」

そうして龍士は扉の前に立ち、開いて進む覚悟を決めた

第1話 過去と今（後書き）

はやて：「うちら全然出てへんやん」

なのは：「タイトル詐欺なの、作者には責任とってSTBなの」

龍士：「いや、まずは俺の話からなんだって」

フェイト：「具体的に、構想では何話ぐらいから出てくるのかな…」

龍士：「作者の構想だと、早いと2話の終盤、遅いと3話ぐらいまでかかるかも」らしい」

はやて：「ついでに聞くけど、作者はあんたとうちらのうち誰を恋愛関係に持っていくつもりなん？」

龍士：「今のところ第一候補がはやてで次点でなのは」

フェイト：「…私、この3人の中で一番下？」

龍士：「本編ではアリサやすずかも出す予定らしいから」

はやて：「5人の中で1番下ってことやね」

なのは：「そこから推察すると順位は1位はやてちゃん、2位私、

3位すずかちゃん、4位アリサちゃん、5位フェイトちゃんってこ

とであっているのかな、作者さん」

龍士：「ただ作者は本人いわく、女性にもてないからハーレムのようになる可能性も大ありだそうです」

フェイト：「ほ、ほんとに…（嬉しそう）」

龍士：「まあ、こんな感じで後書きをやってみた。作者はノーブラだから急に変わったたりすることもあるが、気にしないでくれ」

はやて：「それじゃあ次回は『第2話 現在から先の未来へ』」

龍士：「次回も楽しみにしてくれよな！」

第2話 現在から先の未来へ（前書き）

両親の命日に叔父から呼び出された龍士

呼び出された理由は自分の体の力の本当の理由と両親の秘密だった

そして両親の願いを受け継ぐことを決めた

扉の前に立ち、開けようとするが…

第2話 現在から先の未来へ

「…って叔父さん」

「ああ、俺も、どうすれば開けられるのかわからん」

「…自分のやりたいようにやってみていいですか…」

「好きにきなさい」

「わかりました」

そついうと龍土は扉の前に利き腕である右手の掌をかざす

すると……

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

という轟音に近い音共にその扉が開いていく

そしてその音を聞きつけた孤児院の子供たちがどンドン部屋から出てくる

「今の音何〜？」

「あっ！龍土お兄ちゃんだ！！」

「ほんとだっ！！！」

「遊ば遊ば！一緒に遊ば！！」

「へ？」

そう言っているうちに龍土は子供たちに両腕を持たれ、引っ張られる

「ちよちよちよ！……！」

「こらこらみんな、やめなさい。お兄ちゃんが困っているじゃないか」

「はい」

そう言っただけで子供達は離れてくれる

「お兄ちゃんは今から少しだけやることがあるから、先に外に行つて遊んでなさい」

叔父がそう言つたと子供達は「はい」という元気な返事と共に外に走つて出ていく

龍土は『心喜院』に入った後、率先して叔父の手伝いをしていた（掃除洗濯料理に子供たちの遊び相手など。学校に言っていない間だけ。また、このため家事スキルはかなり高い）そして、高校入学した後も定期的に『心喜院』を訪れており、そこで子供たちの遊び相手や食事を作ったりしていたため、子供たちは龍土が来ると必ずほぼ全員集まってくるのだ（このとき言うことを聞かせられるのは叔父と龍土のみ）

「じゃあ…行ってきます」

そういつて龍士は扉の奥へと入っていく

「さて、俺は先に子供達のところに行っておくかな」

叔父が子供達の元へ向かったのと同時に扉が閉まり、龍士は扉の中にあつた階段を下り始めいた

「いったいどうなってんだよ…かなり暗い…てか今扉閉まつたな…真っ暗でもないか」

そうぼやきながらも龍士は薄暗い明りのついた階段を下へ下へと下りていく

5分たつたか…10分たつたか…とにかく階段を下り続けるといつしか光が見え始めた

「あそこか」

たどりついた場所には唯一光があり、そこにあつたのは円柱状のケースに入った黄色の表紙に剣十字に輪がついた装飾のついた本と正八面体の形をした赤色の宝石があつた

そこに近づいて再びケースに利き手をかざすと今度は音もなくケースが開く

恐る恐るといつた体で右手で赤い宝石に触れるも、何も起きない…

なので右手で宝石を持ったまま左手で本を持ってみるも…何も起きない

「いつたい…どういうことなんだ…とにかく、これが叔父さんが言っていたやつに違いない…と思うんだが」

明りの下で観察してみるが宝石はただ光に反射して輝くのみ、そして本を開いてみるのだが何が書いてあるのかさっぱり分からない…

「この言語…ドイツ語に似ている感じだけど…ちょっと違うな…全く読めない…案外、叔父さんに聞いたら何かヒントぐらいのものはつかめるかもしれないな、あんだだけ隠し事してた人だし」

そう決めた龍士はもと来た道をもとに戻り始め、中腹ぐらいに差し掛かったところで

ドオオン！！

「！？」

いきなり轟音が響きわたり、急いで外に出る龍士

しまっていた扉は龍士が近付くとまた音を立てて開き、龍士を外に…孤児院の中に戻す

「外か！」

そう言つて龍士は外に飛び出していき、衝撃的な光景を目撃する

その遡ること数時間前

「いや、ようやく休暇も取れて、海鳴に帰ってこれたわ」

「そうですね、はやてちゃん」

そう言って現れたのは新設部隊「機動六課」の部隊長である「八神はやて」とその補佐兼融合ユニゾンデバイスである「リインフォース?（ツヴァイ）」である

「ほんと久しぶりだよ、はやてちゃんは」

「ほんと、なのははともかく、『忙しい』って噂のフェイトもちよちよい顔ぐらいは見せてくれるのに」

その2人を出迎えたのは彼女達が出てきたポータルがある庭の屋敷の一家の娘の『月村すずか』とその親友の『アリサ・バニングス』である

「あはは〜…ごめんなあ〜。ほんとに今の今までめっちゃ忙しかったんよ。ようやくひと段落ついて、うちが数日おらんでもいいような状態になったんで休暇とってこっちに来たんよ」

「うん、わかってるよ。なのはちゃん達に聞いてるし」

「ちよつとからかっただけよ」

「おおきにな、すずかちゃん、アリサちゃん」

そう言って2人は門の方へ向かう

「あれ、お茶とかしていかないの?」

「うん、今回あんまり時間なくなってな…お茶は戻ってきてからでもええか？」

「私達は別にかまわないけど…どこに行くのよ」

「東京の方に行くです!!」

「「東京?」」

「はいです!実はミッドよりこっち(地球)の物の方がイイものが多いので、品そろえの多い東京の方に行ってそれを買っていくです!後前にエイミイさんから美味しいご飯屋さんのことか聞いてて、ちよつと食べてみたいからです!」

「ごめんなあ、わがままばっかで…」

「水臭いよ、はやてちゃん」

「へ?」

「そうよ、そんなだったら、私たちも一緒に行くわよ、いいわね?」

「もちろんや!」

「それだったらエイミイさんやリンディさん、なのはさんのご家族の方も誘った方がイイです!!」

「「「そうね(そやね)」」」

そう言ってさっそく連絡を取り始める3人…そして名前が出てこな

かつたすずかの姉・忍は仕事ですでに日本にいないことが分かっていたためである

その1時間ぐら以後

「ごめんなあ、車まで出してもろつて」

「ほんと、ありがとうね、すずかちゃん」

「いいのよ、別に、気にしないで、はやてちゃん。エイミイさんも集まったメンバーははやて、すずか、アリサ、リインの4人に加えリンデイ、エイミイ、カレル、リエラ、高町美由紀、それに子犬形態のアルフである

「でも、よく休みがとれたわね、はやてさん」

「シヤマル達が『はやてちゃんは働きすぎです！』と喋ってうちの仕事をちよつとずつ取り上げて作ってくれたんよ。やから、帰りはお土産を…翠屋のケーキをホールで買っついていかんとな」

「そつ…」

そうこうしているうちに目的地について目的のことをどんどん済ませていく彼女達

ちなみにバーゲン会場では…凄まじい争奪戦を繰り広げる彼女達がいた、とのちに遠い眼をしてアルフがフェイトに語っていた

そして昼食も済ませたので

「それじゃあ私の家お茶にしましょうか」

「……………さんせい！」「……………」

そして帰る途中にいきなり

フォン！！

「これは…リンディさん！！」

「ええ…結界ね…でも…いったいぜんたいどうして、誰が何の目的でこんなことを…」

「しかも、ここにいる皆さんは全員この中に取り残されているです！」

「すずかさん、無茶を承知で申し訳ないですが、このまま発生源のところまでこれで行ってもよろしいでしょうか」

「もちろんです！それにそこに行って解かないと…出れないんですよね、ここから」

「はいです！」

「だ、大丈夫なの、そんなところに行つて…危険じゃない？」

「大丈夫です、美由紀さん！ちゃんとこの周りにリイン達が攻撃を受けない結界を張っておきますから！！」

「とにかく、急ぎましょー！」

「はい…！」

そうして向かっていくはやて達…

そこで起きるのは運命の出会いと力の目覚め…

それが示す意味とは…

第2話 現在から先の未来へ（後書き）

龍：「ここまでが第2話になるな」

は：「何とかいい予定のほうにむいたみたいやね」

フ：「でも私となのはセリフないね」

な：「名前が出ただけだもんね」

龍：「ちなみに作者の予定じゃ戦闘シーンとかが長引きそうだからなのはとフェイトの登場シーンは5話か6話になる可能性が高くなるらしい…最悪もつと遅くなるかもと言っている」

は：「戦闘シーンはうちとラインと龍士君だけなん？」

龍：「いや、昨年発売したPSPのゲームやってラインフォース？（アイン）の存在があった方がやっぱりいいんじゃないかと作者は考えているらしい…しかし、机上の空論になるだろうから、期待しない方がいいな」

フ：「でもいいな」

な：「何がなの、フェイトちゃん」

フ：「セリフがあるって」

な：「たしかに…お姉ちゃんすら出番あるのに…本編で主人公の私に一度も出番もセリフもないなんて…やっぱここはキャラ崩壊」
「それだけはやめて」「」「」

龍：「と、とにかく次回俺の覚醒と力が紐解かれる予定らしいから、ぜひ読んでくれよな！！」

フ：「次回、第3話『信念と力と心』」

は：「本編であんななかつた私の活躍シーンにご期待や！」

5/1：本編とあとがき少し変更しました。

第3話 信念と力と心（前書き）

叔父と会い、叔父の気遣いに触れ子供たちと遊ぶ約束をした龍士
そして謎の本と宝石を手に入れ、地上に戻るうとする途中に響く轟音
何事かと慌てて外に出る龍士

一方その頃、八神はやてが久しぶりに海鳴に戻り、東京にて友達達
とショッピングを楽しんだその帰り、謎の結界が発生する
こちらは何事なのか現場に急行する

第3話 信念と力と心

外に飛び出た龍土が見たのは…大きくえぐられた『心喜院』の壁と泣き叫ぶ子供たちの姿、そしてその子供たちを必死にどこかへ逃がそうとする叔父の姿に加え…

「なんなんだよ…これ」

翠とも黒ともつかないような色に覆われた空…もとい、空間であった

「って今はそんなことを考えている場合じゃないな…叔父さん!!」

龍土が叔父の元へと駆け寄る

「龍土…見つかったのか」

「まあね…ってそんなことを言っている場合じゃないでしょ!早く子供達を安全なところへ!」

「ひゃーひゃっひゃー!」

「その安全なところなど…どこにもないぞ」

「いいかげんはいて楽になっちゃったらどうなんだよ…ええ!!おい!!」

「その通り…我ら「ネオ・ダークフロア」の望むものを差し出せばよいのだ」

「「ネオ・ダークフロア」…?」

突如聞こえてきた4人の男の声に振り向く龍士

「やつらが…さっき言っていた連中のことだ…」

叔父がそう教えてくれる

「でもいったいどうしてこんなことに!」

「その男が我らの言うことを聞かぬからだ」

「何!」

「さっき言ったじゃねえかよ」我らの望むものを差し出せ」ってよ

「ここに封印されている…かつてわれらの祖先が我らが故郷が滅びかけた時に持ちだしたその土地の最高の魔導書とハイ・インテリジエントデバイス…「光天の魔導書」と「ユニストス」をな」

「そんなもの…ここにはないと言っているだろう!!早く立ち去れ!」

「虚言を…あれは封印箇所から動かせぬ…われらとて…かつての同胞の子孫を傷つけないのだ」

「!?!?…どういうことだ!」

「おぬしたちと我らの子孫は、元をたどれば同じところに行きつく

…しかし支配を目論む我らの祖先と、協力と共存を掲げる貴様らの子孫は袂を別れたのだ」

「…」

「そして貴様らの子孫はその力を捨て、我らの祖先は力をため、この世界を支配しようとしたのだが…」

「折悪くてめえらの子孫の一人がとんでもねえ力持って生れてきやがってよあ〜」

「ゆえに我らの祖先は敗北し、落ちぶれ…この地は貴様らのものとなったのだ」

「しっかし、これだけ聞いても出そうとしやがらねえなあ〜」

「なら…出さざるを得ない状況にするまで」

「何を…」

そう叔父が言った瞬間、いくつもの光球ができ奴らの周りに出来ていき…

「…く…く…く…く…く…く…」

そう言った瞬間弾が飛んでいく…子供達の方へ

「なっ！…！」

龍士は驚くもすぐに走り出し、子供達を庇うように光弾に背を向け

て立つ

当たる…誰もがそう思った瞬間に…

ドドドドドドドドン！！！！！！

その光弾のほぼ全弾が別の場所から飛んできた別の白い光弾にかき消される

そのことに驚く「ネオ・ダークフロア」の4人…

しかし…

「ぐああ！！！」

「きゃああっ！！！」

相殺し切れなかった光弾が龍士の背に2発ほど着弾し、子供達が悲鳴をあげる…しかし、子供達にはけがはまったくない

「皆…無事か？」

龍士が相当と子供たちは皆コクコクと頷く

「そうか…よかった」

そういうと龍士は4人の…「ネオ・ダークフロア」の方に向き直り、それと同時に…

「時空管理局・特別捜査官の八神はやてや！！一般人への魔力行使、

及び傷害の容疑であんたらを拘束させてもらうで!!」

元気のいい掛け声とともに飛び込んできたのは八神はやてだ

「大丈夫ですか…お怪我は…無いようですね」

「ええ…あの…あなたは…」

「リンディ・ハラオウンです…さあ、こちらに…」

叔父のもとに現れたのはリンディ・ハラオウン

そして逃げようとしている最中に

「ああ…っ!!…子供達が!!」

「そちらももう大丈夫です」

そう言われてみると子供達と龍士は白い半円状のドームに覆われており、どうやら自分もそこにこの女性（リンディと言ったか？）とともに向かうらしいということも叔父は理解した

「いったい…何があったんですか？」

「連中が急に現れて…たしか…「光天の魔導書」と「ユニストス」とかいうもんを渡せて…こっちはそんなもん知らないということを言つと…いきなり…」

「そつですか…」

そうこうしているうちに先ほど見たドームの中にはっている

「リインさん、子供達や、その男性の容態はどうですか？」

「子供達にけがはないです。男性の方も、背中を撃たれていますが、軽傷のようです」

「そう…」

そう言いつつも、リンディの顔は晴れない…

「どうか…したんですか？」

龍士が尋ねる…

「いえ…昔…その2つの…「光天の魔導書」と「ユニストス」のことを聞いたことがあるんです…いつで…どんな状況だったか…」

そういうリンディを見た後、龍士は空に目を向ける

外では先ほど現れたはやてという少女と先ほどの4人が戦っている

4人は戦い慣れていないのか、実戦経験が少ないのか、積極的に戦う気がないのか…4対1だというにおされぎみだ

「あの子…すごいな…」

ぼつりとつぶやいたのだが、その言葉は近くにいるリインにはバツチリ聞こえていた

「当然です！！はやてちゃんは『夜天の魔導書』の最後の主ですから！！それに魔導師ランクは総合SSダブルエス、ラインの自慢のマイスターです！！」

「そう…てか君、ちっちゃいね…」

「そんなことは今はどうでもいいのです！！…って、何を持っていますか？」

「これか？」

そう言つて龍士が手に持っていた黄色の本と宝石を掲げ、それを見た瞬間

「……………ああっ！！」「……………」

と、「ネオ・ダークフロア」の4人、はやて、リンディ、ラインが驚きの声を上げる

「…そ、それが「光天の魔導書」と「ユニストス」なの（です）よ！！」「」

「…ええっ！！」「」

龍士、叔父が驚きの声を上げる…ちなみに子供達はすでについてこれないので全員が『ポカン』とか『キョトン』という顔をしているつまり自分が持っているものが今回の争いの原因…しかし…

「これをあいつらに渡せば…悲しい顔をする人たちや…子供達が増

えるんですよね」

龍士がリンディに尋ねる

「ええ…間違いなく、ね…でも渡さないと…」

「ここが消えてなくなってしまうかもしれない…」

「そう」

そして上空の戦いは激しさを増していた…先ほどまでとは打って変わって連中全員が積極的に攻勢に回るようになったのだ

これでは1人のはやてでは防いだりさばいたりするのは難しくなる

「なんで…なんでこんなことするンヤ!!」

「なぜ…だと…決っておろう…愚かなる者たちを支配し、よりよい…我らの理想の国家を建設するためだ…『夜天の主』よ」

「なんやて!!」

4人が上空に、はやてがドームの前に位置どり、「ネオ・ダークフロア」の首領と思しき男が語り始める

「我らもまた、貴様の持っている『夜天の魔導書』と同じく「古代ベルカ」を発祥とするのだよ」

「!?!」

「我らの祖先は滅びを恐れ、文明開化がはるかに遅く、離れたところに移住して国家を再考しようと考えたのだ…それがこの地だ。しかし、すでに人類が多く、またミッドチルダの連中のような者が多かったため、確実なる手を打つために潜伏することにしたのだ」

「それで馴染み、ここに適応してこの地の人として暮らすことにした俺達の祖先と、おまえたちの祖先に分かれたということだな」

「そうだ…しかも、そうすることにした連中が大半だった…ゆえに我らの祖先はここを…この靈感が一番強い地であるここに隠れ、期を窺い続けた」

「しかし…それは失敗したんだろう」

「そうだ…期は熟したと判断し、宣戦布告をしようとした瞬間、おまえたちの祖先がここに攻め入り、我らの直系のもの以外はすべて捕らえられた」

「その捕らえられた人たちは…」

「秘密裏に貴様が所属している時空管理局に引き渡されたよ…運よく連絡装置を隠し持っていた仲間が教えてくれたおかげだがね…そしてこの地は二度とそのようなことが起きぬよう、貴様たちが管理することになったのだがな」

「しかし…お前達の力ならその直後にでも再び襲えば奪い返すことぐらいはできたんじゃないか…」

「いや…管理局の連中が秘密裏に我らが近づけぬように結界を張っていたのだ…しかし…我らにも好機が訪れた…10年前のクリスマス」

又頃のことだ…」

「「「！！！？？？」」」

「『闇の書』の崩壊の影響が知らんがそれによってこの結界の力が徐々に弱まり…そして今日！！この日！！我らの願いが成就のため第1歩が再び始まり、我らが支配する新たな国家…強きものが弱きものを支配する国の誕生の日だ！！」

「…ふざけんな」

「何？」

「ふざけるな！！」

ゴオツ！！

「！？」

龍士から発せられた気魄に周囲にいた者だけでなく、はやてや「ネオ・ダークフロア」の4人も体をこわばらせる

「強いものが弱いものを支配する…人はそれを独裁というんだ！！そんな世界で…人が…今を生きている人たちが笑顔になれるはずがない！！お前達のせいだ…お前達の身勝手な欲望で…今ある平和を壊させるわけにはいかない！！俺は…お前達を認めない！！」

「ふっ…しかし…お前出は我らには到底勝てない…」

「それでもやってやる！！俺が力をつけたのは…火人の…今を生き

る人の…俺の後ろにいる子供たちの笑顔を守るためだ！！それを壊そうとするお前達なんか…俺がぶっ倒してやる！！」

そう龍士が宣言した瞬間…！！

「光天の魔導書」から黄色の光が、「ユニストス」からは赤い光が巻き起こる

「な、何だ！？」

「何事だ！！」

「な、なんや…って引っ張られてる！？」

「す、すごい光と魔力が…あ！！リインの体が…ひき寄せられているです！！」

そのまま光は輝きと勢いを増し、龍士を包み込んでさらに大きくなつていき、さらに…

「「キヤアアアアツ！！」」

はやてとリインまでものみこんでしまった

「…いったい…何が起こったのかしら…エイミーさん！」

『解析してみましたけど…どうやら闇の書の覚醒時と似ていますね…でもはやてちゃん達まで取り込まれたので詳しい解析には時間が…』

「出来るだけ急いでくださいね」

『はい!』

『はやてさん、リインさん、そして青年さん…どっか「無事」で』

（光の中）

「いったい…ここは…」

中心と思しき所に、龍士はいた。そしてそこに

「「キヤアアアアツ!」」

「!?!」

声とともに先ほどまで外にいたはやてという女の子とリインという子が落ちてくる

「ウオ…トト!」

龍士は見事にはやてをお姫様だっこの形、リインをその上にのせるという形で2人をキャッチする…

「大丈夫か?」

「いったい何が…ってああ!…すみません!…だいじょぶです!」

「そうか…しかし…なんで君らまで?」

「理由はおそらく…これやね」

そうして見せられたのは「光天の魔導書」のこげ茶色版と思しき本だった

「これは『夜天の魔導書』…君の持つ「光天の魔導書」のついでなす存在や」

「なるほど…ってことは」

「俺を覚醒させる…俺が力を貸したいと思うものが現れるのは…あいつらが持ち主のせいで闇にとらわれちまって以来だな」

いきなり自分達3人以外の声が響いたことに驚き、その方向を見る3人

そこにいたのは…黒服に身を包み、金色のショートカットの青年だった

「あなたは…」

「俺か…俺に名は…無い」

「なっ!?!」

「本当だ…そしておまえが…あいつらを闇から解放してくれたやつだな」

「は、はい…」

「しかし、妙だな…」

「何がですか？」

「俺の記憶じゃ、あいつはそんないちっこくないし、銀髪だったしな」

「もしかして…リインフォースのことを言うてるん？」

「リインフォース…そうか、おまえがあいつにその名を与えたのか…ということはあいつは…」

「これだけを残して…逝ってしもつたわ」

「そうか…しかし、完全に消えたわけではないがな」

「「えっ！」」

「俺とリインは互いが互いのバックアップとなっている…おそらくだが、しっかりしたところでやれば…蘇生させてやることができるだろう…」

「ほんま…ほんまか？」

「確証はないがな…そして、おまえが俺を覚醒させたやつか…ものすごい魔力だな」

「そう…なのか？自分では実感がないが」

「大体そんなもんだよ…お前は…俺の力を使って何がしたい」

「え……」

「やつらみたいにか弱い奴を支配することか……」

「違う！俺は……俺はその支配されがちな弱い奴らを守りたい……俺は、自分が正しいなんて自身がないし、それに悪人を滅ぼすべきだとも思っていない」

「なぜだ……」

「あいつらにも……家族とか……そういうのがいるだろう……俺はもう……誰も悲しませたくない……もう……誰も……」

「……わかった」

そついうと男は龍土の前に立ち、片膝をついて頭を垂れる

「我が力……あなたが思いと信念を貫くためにお使いください……我が主」

「……わかった……それにお前には名が無かったな……主としての最初の務めはお前に名をつけてやることだな……」

「……」

「そつだな……お前の名は……俺とともに守るもの……ゆえに……」
「セイテンタイ聖天大
齊」……通称、セイ……」

「はっ……！……」

「よかったなあ……」

「そうですね」

「そして主……「ユニストス」についてなのですが……」

「ああ……こいつはさっきから何も言わないんだよな……」

「彼は……その……かなりシャイというか……」

「必要なこと以外しゃべらない、か……気にいった!」

「は?」

「そういったやつの方がサポートとかも優れていそうだ……ユニストス……これからお前もよろしく頼むぜ!」

返事の代わりに光る、ユニストス

「で……どうすれば使えるんだ、これは?」

「『SET UP!』といい、後は主の望む服装と武器をイメージすればよろしいです」

「わかった……『SET UP!』」

龍士が言うとその体を赤い光が包み込み、数瞬のうちに解け、セイ同様黒服に身を包んだ龍士が現れる

「武器が…ありませんね」

「今…わかった」

「何がです、主」

「ユニストスは衣装を自由に変えることも、武器を自由に製錬することが可能だ・・・」

「つまり…武器にしる、衣装にしる、必要に応じて変えることで戦局に有利に立つことができる、ということですね」

「そう…俺にはぴったりだな」

「というか…早くでえへんと…外大変なことになったるかもしれへんで…!」

「そ、そうだな…」

「では主、私と融合を、そうすればすぐに出られます」

「わかった、行くぞ、セイ!」

「はっ!」

「リイン、うちらもいくで…あいつらをのさばらせるわけにはいかん!」

「はいです!」

「「「ユニゾン・イン！！！！」」」

〈外部〉

「ネオ・ダークフロア」の4人から攻撃を受けるも、結界はびくともしない…それだけ術者の能力が優れていることだ

「これだけ攻撃しても破壊できんとはな…」

「強いなあ〜」

「しかし、我々全員の力を一点に集めれば確実に砕けます…確実にそれほどに弱っているはずです」

「では…あの邪魔な結界を破壊して「すべて」を手に入れるぞ！！」

「「「はっ！！！！」」」

その瞬間…！！

ピシピシピシ…パァン！！！！

光が割れ、中からセイと融合した龍士と、ラインと融合したはやてが現れた！！

「何！！！！」

「「さあ…反撃開始だ！！！！」」

第3話 信念と力と心（後書き）

龍：「思いのほか長くなったな」

は：「ほんまやね」

フ：「ここでは当然のように会話しているけど私となのはは会ってもないし、はやても会ってはいるけど自己紹介とかもしてないよね」

な：「まあそんなことしている場合じゃないけど…フラグ建てなきゃいけないからそこはあえて空気読まないとね、はやてちゃん」

龍：「いや、一応リインから教えてもらって入るんだが…」

は：「でも確実に覚えてもらうためにはその方がいいと思うは、うちも…」

な：「それに本編じゃ顔しか知らない状態だよな」

フ：「たぶん次回で決着だと思うから…気長に待とうか」

は：「それよか龍土君やセイの格好っていったいどうなってるん？」

な：「それは私も気になっていたの」

フ：「あ、私も私も」

龍：「作者の頭の中にはすでに出来上がっているが絵にすることはできないらしい…ゆえに別口で短編小説式の解説式で出来上がると思う…いつになるかはわからんがな…ちなみにそこで俺とセイのイメージ声優も発表する予定らしい、まだ正式に決めただけではないらしいがな」

は：「候補としては誰が上がってるの？」

龍：「成人男性声優として有名な方ばかり…これが解答だ」

フ：「け、結構アバウトだね…」

な：「まあオリジナルヒロインを出さないだけいいと思うの」

は：「そやね」

龍：「次回は『第4話 一時の結末』」

な：「次の最後にちよっとだけでイイから出られますように…」

フ(ものすごい勢いでうなずいている)

は:「切実やね」すでに出ているものの余裕」

5/1:あとがき少し変えました

第4話 一時の結末（前書き）

自身の心を示したことで『光天の魔導書』と『ユニストス』に認められた龍士

そして自身の思いを力に変え、『聖天大斉（通称：セイ）』、八神はやて、リインフォース？とともに『ネオ・ダークフロア』に立ち向かう！！

第4話 一時の結末

「な、何だ…あの…姿は…」

現れた龍士たちの姿に驚愕する『ネオ・ダークフロア』の4人
それと対照的に

『かつこいい〜!!! 龍士兄ちゃん!!! 頑張つて〜!』

「あれが…隠されていたものの…」

「はい…真の姿です」

興奮する子供たちと驚きつつも受け入れている叔父とリンディ

そして当の本人達は

「え〜っと…これからどうしよう?」

「「えっ!?! 考えとらんかったん(てなかったのですか)?」」

「いや…あいつらをあなた達と協力して捕まえる、までは決めたんですけど…この力の使い方が良くわからないんですよね…」

「…そりゃそうやな…簡単に言つとやけど、あいつらや私がやったみたいにやればええんよ」

「簡単すぎですよ…それがわかんないから困ってますけど…」

「…それもそうやな…」

「主」

「なんだ？セイ」

「長年起動していなかったので時間がかかりましたが、私の能力が発動できます」

「どんなだ？」

「『学習行使』です。これは、主が書物や見聞などで正確に得たものを使用できるようにする能力です」

「つまり俺が今ちゃんと知っているものは使える、ということか」

「はい。それと、両腰にあるものは主が最も使いやすかったものを『ユニストス』が具現化したものです。必要な制御はすべて、ユニストスと私がやりますので、主は奴らを倒すことに集中してください」

「わかった、頼んだぜ、2人とも！！」

呼応するかのように輝くユニストス

「で…え〜っつと」

「はやてや、八神はやて。はやてって呼んでくれればええから」

「リインはリインで結構です」

「わかった。はやく、リイン、俺は中距離ミドルレンジから近距離クロスレンジが得意なんだが、どの距離レンジが得意なんだ？」

「だいたい、中ミドル遠距離ロングレンジやね」

「わかった。なら俺があいつらを距離を詰めて戦うから、その援護をお願いできるか？」

「任しとき！『最後の夜天の王』の実力、あいつらに特と見せたるわ！！」

「ですう！！」

「よし…行くぞ！！」

その声とともに龍士が『ネオ・ダークフロア』の4人に向かっていく

「ふっ…笑止！！」

だがその直後に龍士の姿が消え、直後に極太の光線が4人に襲いかかった

『なっ！！』

リーダー格の男は驚きつつも防ぎきつたが他の3人は大ダメージを負い、しかもその内の1人には

「はあぁ！！」

という声とともに龍士に肉薄され、なすすべなく撃墜され、リンデ
イのバインドで拘束されてしまったのだった

「くっ！！散れ！！そのまま三方向からやつに攻撃する！！」

『はっ！！』

龍士に三方向からの同時攻撃で襲いかかる

「ちい！！」

リーダー格とその補佐らしき男の攻撃はホルスターから出した銃剣パヨネット
の下部の刃で受け止められたが最後の一撃はくらくら…と残った『ネ
オ・ダークフロア』の全員がそう思ったその瞬間

「フリジット・ダガー！！」

という声とともに最後の―撃をくらわせようとしたやつに上下から
無数の刃が襲いかかり、撃沈され、先ほどの男と同様の形になった

「くっ！！」

リーダー格の男がうめく

なぜなら、会ったばかりの連中がこうもうまく連携して攻撃してく
るのだからたまったものではないからだ

「疑問に思っているよなあ…俺達がどうしてこうもうまく連携でき
るのかって」

「！」

自身の心のうちが見透かされたことに驚くが、荒げそうな心を抑えて問う

「その通り…なぜだ」

「簡単さ…お前らが俺達より弱いからだよ」

「なんだと…！！」

「当たり前やんか…私さつきあからさまに接近戦苦手な感じだよ…
とつたのに気づかへんもん」

「多少訓練はしているみたいだけどデータとかそういったものに頼
ったもんじゃなくて完全に独学だし、連携もなんかうまくいってな
いよな」

「逆にこっち…特に私は人との連携で力を一番発揮できる…それに
一発で気がついて思念通話で指示してくれた龍士君はすごいけどな」

「あれ思念通話つうのか…でも最初に策はあるなんて聞いてくるか
らちょっと驚いたんだぜ。まあ何事もなくてよかったけどさ」

「そうやね。そして残りの2人はちょっと手ごわそうやけど」

「まあ、サクッと終わらしちゃいますか」

そう言って再び戦闘態勢を取る龍士とはやて。対して先ほどの話を

聞いていた『ネオ・ダークフロア』のリーダー格とサブリーダー格は

「貴様らあ!!」

「もはや許せん!!八つ裂きにして屠ってくれるわ!!」

キレた

「来るか…はやて、サブリーダー格（片方）任せたぞ!!」

「了解や!!あのくらいの相手やったら私ただけでもなんとかやるからな!!ただ…」

「ただ…何だ？」

「…気をつけてな」

顔を若干赤らめながら龍士に言うはやて。それを見ていた周りに人々は

『は、はやてちゃんまさか…』

『ま、まさかはやてさん…』

『龍士…あの天然たらしめ』

龍士は昔っから女性に意外と惚れられやすかった。しかし、力のこととかもあつて周りから見ているだけという人が多く、それによつて他の男性陣からの嫉妬の感情をくらい、そののみを感じていたため孤立していた、という裏があつた。

ちなみにはやてが惚れたのは子供達を守ろうとするところ、自分のことをちゃんと見てくれていたこと、そして守護騎士ヴォルケンリッター以外で自分と見事に連携攻撃をしてくれたことなどがあげられる

「…ああ!」

イイ笑顔でそう返事をして龍士はリーダー格のところに向かっていく
はやてはサブリーダー格の男と対戦を開始する

フリジットダガーやブラッディダガー、バルムンクにクラウソラスを巧みに使いこなして追い詰めていくはやて

「な、なぜだ!お前は…1対1タイムは苦手なはず!」

「確かに苦手や…私1人やつたらな」

「っ!まさか!」

「そや、今私はリインと融合ユニオンすることで自分の能力を自分1人の時以上にしている。それに…後ろにいる人たちをちゃんと助ける…私が昔…救ってもらったように!!それが私に去らに力を与えてくれるんや!」

そう宣言したはやてのシユベルトクロイツからいくつもの白い鎖のようなものが飛び出し、相手をとらえる

「な、何だこれは!」

「これで最後や…」リュドルファス・タクティオス『！！』

そうしてとらえているシュベルトクロイツの先端に光球ができて、そこから光線が発射される

「ぐああー！！」

拘束からの射撃。これを避けることも耐えることもできるはずはなく、相手の男はそのまま気絶し、白い鎖でそのままがちり逃げられないように再度拘束された

『あつちはどうなったんかな…』

そう思ったはやてが龍士が戦っている方を見ると…とてつもない光景が広がっていた

「はああー！！」

「ふんー！！」

龍士が手に持つ銃剣パヨネットで射撃すれば相手はそれをかき消しつつ、手に持った剣で龍士に斬りかかり、切りかかれれば龍士は手に持った銃剣パヨネットの下部の剣でそれを防ぎ、いなして相手に攻撃をする。

しかし、それを見切って相手によって力強い一撃が来たため、龍士は片手では防ぎきれないと判断したのか両手で防ぐ…だが相手の力の方が強いため徐々に徐々に刃のところろに食い込んできて、ついに右手のものが破壊されてしまう

はやてが見たのはちょうどそういう状況であった

『あ、あかん…このままやと…あの人…殺されてしまう!!』

しかし、割って入るすきもないほどの攻防は2人は繰り広げているため、むやみに割って入れば逆に彼を不利にしかねない…どうすればと思ひ悩んでいたところに

「龍士……!!!!」

という声が響く

見ると、いつの間にかバリアから出た龍士の叔父が1本の木刀を持つていたのだ

「これを使え!!お前なら…いや、おまえしか使えない刀だ!!」

そう言つて龍士の方に刀を投げ飛ばす

しかし、リーダー格の男もこれに反応して刀を奪い取るうとするが

「させへんで!!!!」

その言葉とともにはやての攻撃によつて行く手を阻まれ、そうこうしているうちに刀は龍士がしっかりとキャッチした

『おそらくこの刀も…セイヤユニストスと同じ方法で使用できるはず』

そう考えた龍士は己の思いを刀に込める…人々を…たくさんの人を守りたいという心を…

すると刀が光を放ち、一部が動いて鏢のような形となった

それを確認した龍士はひと思いに刀を引き抜く

刃の峰の部分には両側に龍が彫られている

そして、そうした龍士にはこの刀の名前がはっきりとわかった

「『双龍飛天』これが…この刀の名前」

「ふざけるな・・・」

「？」

「ふざけるなアあ！！！」

いきなり最後の1人、リーダー格の男が叫び出す

「その力は我らが…我が使ってこそふさわしいもの！！愚かなる…魔法も使えぬ愚かなる者どもは我らにつかえてこそ幸福になれるのだ！！愚かなる者どもを守ろうというさらに愚かなる者に…なぜ力を貸すのだあ！！！」

「『そんなの…決っているだろ』」

「今を生きている人に…何も差がないからだ」

「誰にでも得手不得手はある…それ皆理解して自分にできることを精一杯やって生きとる」

「人々は互いに協力し合い、対等な立場になってこそ、本当の平和は訪れる」

「あんたのはただの独善で独断で独裁：あんたに洗脳でもされん限りそんなもんに賛同する人は0や」

「逆に俺の…いや、俺達のはたくさんの人が心の底から望んでいるもの…それを…本当の平和を望んでいる人たちの心が…俺達に力を与えてくれる…今みたいに」

「ふざけるなあ！！」

「それ以外の言えへんのか…」

「決着^{ケリ}つけてやるぜ」

そう言つて龍士が刀を構えると同時に男が飛びかかってくる

龍士は瞬時にそれに反応して敵が振り下ろしてきた剣を刀でたたき折り、返す刀で相手に一撃をたたきこんだ

重い一撃をくらい、気絶して墜落していく相手…その体はバインドによつて拘束され、無事に地面に横たわった

龍士は刀を納め、バリアジャケット騎士甲冑を解く。はやても同様だ

それと並行するように結界が解けて、いつも通りの光景に戻る

「あれ…壊れてない」

「ええ、結界内であったから自動修繕されたのよ」

「…あそー」

魔法万歳、であった

第4話 一時の結末（後書き）

龍：「というわけでようやくかけました、第4話」

は：「意外と長く感覚があいたなあ」

龍：「しゃーねーよ。作者が『構成まとまんない』と言いつつとゲームしてたんだから」

フ：「でも、ちよつとずつ書いていくことはできたんじゃないの？」

龍：「いざ書こうとしたらノートPCのディスプレイがぶっ壊れて使いもんにならず、何もできなかつたらしい」

な：「でも、それなら帰ってきたらすぐやればいいんじゃない？」

龍：「やってなかつたりたまつたメールをチェックしてたりしたらこんなにかかつたらしい」

3人：『阿呆だ…』

は：「とにかく、これで次はどんな感じになるん？」

龍：「作者の予定じゃ俺の今後の身の振り方と、ようやく本編に追いつくところだな」

な：「ということはようやく私達の登場だね」

龍：「無事にそこまで行く自信は皆無だそうだがな。しかも遊戯王のまで書こうとかしているようだから…」

フ：「最悪、このまま数カ月放置っていうのもあるみたいだね」

は：「それは嫌やなあ〜」

な・フ：「そうだね」

は：「龍君とのフラグ忘れ去られそうやもん」

な・フ：「えっ!!そっち!?!」

龍：「（苦笑）まあ、次回の掲載は未定だが、内容はほぼ決まっているから、楽しみにしてくれ」

は：「次回、第5話『新たな土地へ』待っててや!」

追伸：敵の組織名間違えていたので修正しました

5/1：あとがき変更しました

第5話 新たな土地へ（前書き）

「ネオ・ダークフロア」の4人を見事なコンビプレーで退けた龍士とはやて

その後は近くに待機していたすずかの家の車で全員でハラオウン家へと向かう

そこで知らされる驚愕の真実

龍士が選択するのは…

第5話 新たな土地へ

あの後ハラオウン家にて一堂に会した面々

無論皆車の中で自己紹介と挨拶、呼び名とかは済ませている

そしてここはハラオウン家のリビング

「…まあというわけなんですが」

リンディ・ハラオウンから教えられたもの

それは…現在、『第1管理世界・ミッドチルダ』及び周辺の世界で
とある次元犯罪者が暗躍しているというのだ。しかも…

「おそらく、彼らに情報をリークしたのもその犯罪者の可能性があるわ
るわ」

「マジ…ですか」

「もはや驚く以外できんな」

「でも…ちょっと気になるどころもありますね…」

「なんですか？」

「どろちゃって接触したのかというのと、リンディさんがどろちゃっ
てそのことを知ったのかということですよ」

「前者は私にもわかりません…しかし、後者のことは単純明快です。ただ来るまでの間にちょくっとお・話・してもらっただけです」
ニツコリとすぐいい笑顔なんですけど、後ろになぜか般若の面が見えたのは龍士たちの気のせいでは恐らく違うだろう…とそう思うことに決めた龍士たちであった

「で…俺は今後どうなるんですかね…やっぱり、『心喜院』の子供たちみたいになふうになるんですか？」

ちなみに子供達にされたのは簡単な記憶操作処理である。彼らから恐怖になり、今後の成長の妨げになるような記憶を消したりされたのだった。

「いえ…出来ればあなたには今後、時空管理局に協力…一番いいのは所属してくれることなんです…してもらいたい…これがこちらの意見です。そして、龍士さんの叔父さん」

「なんですか？」

「もしよろしければ、今後『心喜院』の方…こちらで支援させてほしいのですが」

「どづいつことですか？」

「言葉通りの意味にとつてくだされば結構です、もちろん、条件もありますけどね」

「その条件というのは…」

「時空管理局は様々な次元世界に行つて事件などを解決します。その事件に巻き込まれて、孤児となつてしまふ子供達も少なからずいるのです。その子たちの受け入れ先になつていただく、及び保護者になつていただく、こちらが条件です。無論、受け入れ人数に限界があるのもわかっていますから、そういったものを教えて下さるといふのもありますけどね」

「子供達の方で選んでくる、という場合もありますよね」

「基本的にはそうですね。どうです、受け入れてくださいますか？」

「ええ。支援の内容も多少気になりますけど、そういったことならお引き受けいたしますよ」

「…ありがとうございます」

そう言つて叔父たちが交渉している間、俺はじつと考えていた。

今回の件の黒幕を捕まえたりするにも管理局に協力したほうがいい、しかし…ここを離れるというのが少し…引つ掛かっているのだ

さらに付け加えるならそつちの方には知り合いが皆無といえる点だ…ゆえに行くべきか否か迷っていた

そこにそんな龍士の迷いを察したのか…

「龍君…迷つとるん？」

「はやて…ああ、俺には向こうに知り合いがないからな…ここを離れるのもちよつと…って感じだしな」

「…気持ちはよくわかるよ、私もそうやったし」

「私も？」

「今は向こうに住んでるんよ。16歳、こっちで言う高校1年の時あたりからやね」

「…マジか！？友達とかも別れて…さみしくなかったのか？」

龍士がすすか、アリサの方を見ながらはやてに問い、それに対してはやては

「そりゃあさびしかつたよ、それだけやない、アリサちゃんにもすすかちゃんにもさみしい思いをさせてまった…でもな」

「？」

「これから先に自由に平和に行き来できる、そうすれば普通の友人同士みたいに会いたい時に会えるようになる、そんな世界にするために私は頑張ってるんよ」

「…そつか…」

「そつちや」

「はやてちゃん頑張ってるもんね」

「ほんと、今日だってあったの1年半ぶりぐらいだったかしら？」

「マジで？」

「ほんとだよ。フェイトやなのはもここ半年ぐらいは帰ってきてないけど、それまでは2カ月に1回ぐらいの単位で帰ってきてくれたんだけどね」

「あはは〜」

「笑ってごまかさない方がいいと思うが」

そう言いつつ、和やかな雰囲気の流れていた

「：なら、俺もそれに付き合うかな」

『えっ？』

「俺も管理局に協力、もしくは所属するのさ。話を統合したら、向こうに行っても知り合いがいるってこともわかったしな」

「誰？」

「はやてだよ、今、向こうに住んでるんだろう。知り合ったんだから知人、いや、手合わせて戦ったから友人か戦友…かな？」

「…そうやね、うん、私らは友達や!!これからもよろしくな、龍君!!」

「それなら私たちも友達よ、いいわね、龍士!!」

「へ？」

「友達の友達は友達、ということだね、アリサちゃん」

「そういうことよ、いいわねー!!」

「すごい流れの持っていていきかたのような気もするが…まあ友人が多いことはいいことだからな、よろしく頼む。アリサ、すずか」

そうやって龍士はアリサ、すずか、はやてに手を差し出し、3人はがっちりとその手を握って握手する

「では、話はまとまりましたね」

つまり状況的にはこういうことになった

・龍士は時空管理局に所属することになる。しかし、ランクや所属する部隊などは不明

・『心喜院』は時空管理局の管理する施設の1つとしても使用できることになった。無論、その中から管理局に就職したいという希望者が出た場合は優先する。ただし、魔法等のことは基本的に論外禁止

・龍士とはやて、アリサ、すずかと友達になる

そして龍士は気になりつつもきけなかったことを聞くことにする

「そう言えばさ…なのはとフェイトって…誰？」

「あ…そう言えば言ってなかったね」

「フェイトさんは私の義娘よ^{Step}」

「なのはは私の妹で…あと、はやてちゃんとアリサちゃんとすずか

ちゃんとは同じ年だよ、2人共ね」

「義娘？娘じゃなくって？」

「故あつて…ね、養子なのよ」

「ふ〜ん…ま、リンディさんの娘で美由希さんの妹っていうんだから2人とも美人で可愛いんだろうな」

「あらあら…龍士君ったらお上手ね」

「ほんとですね」

『…全くこいつは』

龍士は素でそういったことを言う。もともとあまり友達ができなかったため出来た友達をなくさないように相手も心情を考えて言葉で話すので必然的に女性への口説き文句とかも（天然で）できるようになってしまったのだった

ぶつちやけ叔父がそこだけが龍士の欠点であり、また羨ましいと思っっている部分でもあった

「ちなみに2人も基本的にはミッドチルダに居るわよ」

「そうなのか？」

「せや、あ、それで1つ龍君にお話があるんやけど」

「なんだ？」

「うん、所属とかはまだ決まらんし、希望出したら基本的には通るようになってるんよ。それで、私が部隊長をする『古代遺物管理部機動六課』に来てくれたらなあ〜と思ってな」

「ああ、それはいいわね」

意外なところから賛成の手が上がる

「その『機動六課』が追っているもの、実は先ほど出た犯罪者とながっている可能性もあるの」

「なるほど…それは俺にも、そっちにもかなりイイ話だな」

「そうね…受けた方がいいんじゃない？」

「私のそう思うよ」

「私も」

「そうだな…他にはわかんないことだらけだし…友のはやてと、その友人達がいる所ならばなれる時間も短いだろうから…そうさせてもらおうよ」

「でも1つだけ問題があるのよね〜」

「なんですか？リンディさん」

「龍士君、行くのはいいとしても寝泊まりはどうするの？即日行くにしても、右も左もわからないと厳しいわよ」

「あ…考えてなかった…そうだった場所のこと」

「ふう…そうだったところが抜けているのも、相変わらずだな」

「やったら、私のところに泊まる？」

「え？」

「私の家やったら広めやし、部屋あまつとるから生活しやすいと思
うで。」

「うん…じゃあ、御言葉に甘えようかな」

「…たしかに、それが今は最善の手かもしれませんね」

「…そうさせてもらいなさい、龍士」

「ああ、よろしくな、はやて」

「うん！」

かなり格好良くほほ笑む龍士と、とびっきりの笑顔で答えるはやて、
それを見ていたアリサ、さすが、美由希は

『はやてちゃん…龍士（君）に惚れてるね…』

そう思い、

「まあ、あれだけ格好いいし…」

「しかもはやてちゃんにすっかり合わせられるし…」

「意外とお似合いかもね、あの2人」

そうして時間は過ぎていき、夜になり、はやてが戻るのは明日の昼ごろ、それに合わせてリンディとエイミィは龍士の書類の制作、龍士と叔父は事情説明とアパートの解約のためにいったん戻るという形で解散となった

ちなみにリインとセイは…

「ス〜す〜」

「……………」

それぞれのデバイス、『光天の魔導書』と『蒼天の魔導書』の中で戦いが終わった後ぐっすりと眠っており、エイミィは戻ってきたら難しい話になるのが分かっていたので子供達を子供部屋に連れて行って寝かせていたので不参加だった

一方 ミッドチルダ

「え〜っと、それがこっちでこれがあっち…やっぱりなかなか終わらないなあ〜」

もう少しで発足する『機動六課』、それに合わせた任務の引き継ぎなどの書類に奔走するなのとはと

「これはこうしてそしてここはああして…やっぱり時間かかるな…」

同じように頑張っているフェイトがいて、同時に言った

「はやくちゃん…こんな時期に休暇取るなんて…羨ましいような…
…妬ましいような…はあ」「」

ちなみにこの時、すずかの家にアリサとともに宿泊していたはやてが盛大なくしゃみをしたのは言うまでもない

第5話 新たな土地へ（後書き）

龍「というわけで終わったな、5話が」

は「結構短かったんちゃうかな？」

フ「でもその割にはちゃんと書けているような気も…」

な「そんな気がするだけって作者も言ってるよ」

龍「でもこれでここにも出ているメンバーが本編にも出たことになるからな」

は「せやね、予定では『六課』発足の寸前まで進める予定だったらしいけど」

フ「無理は禁物、なおかつ書いていたらどんどん変わっていったやつたんだよね」

な「計画性があるようでないよね」

龍「そう言ってるな…それと、告知だ。短編小説形式で俺やセイ、叔父や『ネオ・ダークフロア』の連中の設定が乗っている『人物紹介』が作られた。作者名のところから作者のページに行けばあるはずだから、ぜひ読んでほしい」

は「後この作品等の感想やアイデアも待っています。作者はそういうのがもらえるとテンションあがってはりきつたりするタイプなので、ぜひお願いします」

フ「次回から土地がミッドチルダに移るんだよね」

龍「ギャグを中心にする予定…とは聞いているが…ちよつと嫌な予感がするな。ヴォルゲンリッターのみんなも出てくるらしい」

は「それは楽しみやね」

フ「今回よりもうちよつと出番があればいいな」

な「高望みはしてはいけないと思うよ、フェイトちゃん」

龍「次回、第6話『ハプニング！？始まりの道』」

は「楽しみにしててや〜」

5/1：あとがき変更しました

人物紹介（前書き）

龍士たちの詳しい設定です

もともと別設定でしたが何とか統合しました

ほかのもう少しお待ちください

人物紹介

赤青せきせい 龍士りゅうし

本編の主人公。イメージC.Vは『白鳥哲』さん。

20歳。

身長は185cm程度、体重は75kg前後。

外見はかなりイケメンだがつしりした肉体をしている。髪の毛は黒でストレートのオールバック気味（アホ毛みたいに1〜2本前に垂れている）。目の色は灰色。ぶっちゃけ『るろうに剣心』の緋村剣心の顔に斉藤一の髪形をくっつけた感じでイメージしてもらえるといいです。

性格は基本的に真面目だが時と場合に応じた行動を取るなど柔軟な思考を持つ。また1人でいることが多かったため人の気持ちに敏感で、たいていの状況下では冷静沈着であることが多い。激昂することはあってもそれでも最低限の理性は残すためやみくもに暴れまわるといったことはない。

祖先は古代ベルカ人（笑）。そのために魔導師、もしくは騎士としての活動に必要な不可欠なリムカーコアを持つ。

魔力の色は血のように赤い深紅色

服は出自の関係か黒やグレーの服を好む。普段の服装は上は無地の黒Tシャツに二の腕にベルトがあるジャケット（季節によって丈の長さが違う）、下は『ガンダムSEEDDESTINY』のキラのズボンのようなもの、靴と靴下はグレーの無地で装飾があまり

派手でないものを好んではいている。

バリアジャケットはフェイト同様に黒ベース、手から肘にかけてはフェイトの左手の手甲と同じものが両方についていて、掌の部分も覆われている。その下には上半身を覆うアンダースーツ、ボディにはさらに丈夫な防護服つき、それには変色するラインが首回り、中心、両端、真ん中に走っており、その中心にはユニストスがある。その上には七分丈で両方の鎖骨、骨盤のあたりから自由に伸びる紐（平たいロープといった方がいいか？）が出ている。下半身は膝から爪先にかけても前腕部と同様になっており、そこに収まるようにズボンをはいている（普通のズボンをブーツインしているイメージ）。

武器は本編で言ったように自由に作れるため、ほとんど不自由しない…詳しくは別のにて

生前両親が自身が生まれ育った土地に降りかかる危機を感じ取ったため、精子、卵子の状態で当時（というか今もだが）本来は行つてはいけなさとされる遺伝子操作を行われてこの世に生を受けた（当然禁則事項）。身体能力は10歳の時点で基本的な成人男性を上回っていた。そういった出自から他人には嫌われがち。その上10歳の時に両親が交通事故で亡くなったため、叔父の経営する孤児院『心喜院』に身を寄せて中学卒業まではそこで、高校時代は1人暮らし。

いくら高い身体能力を持っているとはいえど鍛えなければ宝の持ち腐れとなってしまうので両親から物心ついたときからトレーニングをさせられ、かなりきれいなプレスレットとアंकレットを両腕両足につけている（おおよそ1つ30kg、銀色で表面にプレスはレッドサファイア、アंकにはブルールビーがはめ込まれており、

それ以外は無地)。その状態で常人よりも強い程度になっているため、かなり気に入っている。

セイテンタイセイ
聖天大斉

龍士の相棒^{パートナー}。イメージCVは『野沢雅子』さん

『光天の魔導書』の管制人格。『レア技能』^{スキル}として『学習行使』を持つ。『この技能』^{スキル}は『光天の魔導書』の主が書物などで学習したものを使用できるようにする能力。ただし、本人の能力が使用するに値しない場合は使用不可となっている（体をこわしたりするのを防ぐため）。

性格は穏やかであり、龍士同様冷静沈着。体格も似ている。

容姿はリインフォース？の男性版といった感じで

騎士甲冑はリインフォース？の下半身がスカートではなく長ズボン、紋様がない、羽が白金色ということ以外に大きな差異はない

普段は『光天の魔導書』の中に居るため普通の服装はしない（互いにこの方が楽という意見もある）。

元ネタは『西遊記』の『孫悟空』。

叔父さん

龍士の父親の弟。5話ぐらいまでしか登場しなかったためイメージC

Vはありません

年齢はだいたい45歳ぐらい

龍士の両親が亡くなった後は彼の保護者となっている。

性格は優しい人+優柔不断。なのでいまだ独身(笑)

それ以外は本編参照

ネオ・ダークフロアの面々

リーダー格の男：怒ると力が増す。精神的未熟。実は実力も初期のエリオですら無傷で完封できるほど低い。龍士が苦戦したのは初めての魔法戦だったため

サブリーダー格の男：基本的にリーダー格の男と一緒に。ただ頭の回りが悪い。

他の2人：一人は無口(本編でもセリフなし)、もう1人はやたらハイテンション。先にやられたのが前者、フリジットダガーくらったのが後者です。雑魚

全員の共通点・龍士の力を覚醒するために出てきたようなもの。あとはやての活躍の場を作るために作りました。ただ長いと名前とか作らなきゃいけないので本編でもあっさり退場。以後出番なし(確定事項)

かつて『ダークフロア』という組織があった、その再編という設定です。元ネタは『機動戦士ガンダム』シリーズの『ジオン』と『

人物紹介（後書き）

まずは『人物』紹介です

追記：4 / 1、「叔父」と『ネオ・ダークフロア』についてたしました

追記：4 / 17、『前書き』書きました。一部の間違い訂正しました

追記：4 / 24・26 / 5 / 8 / 9 / 12「龍士」の設定で一部変更と追加です

第6話 ハプニング&amp;始まりの道(前書き)

龍「今回から前書きも俺達が担当することになった。それと前書きとあとがきの時は基本的に俺〓作者という設定にするらしい…面倒な」

は「そんなこと言ったらあかんで…というか出番を増やしてあげようっていう心遣いなんやからありがたく受け取らな」

フ「そうだよ、龍士は1話から出てるからいいけど、私達は存在が4話、5話の最後にちよつと、本格的に参加したのは今回なんだよ」
な「それと今回から保存したりできるよう別の書いてこつちで編集して投稿するんだって」

龍「以前2話の時に間違えて消したのが若干トラウマになっている」
は「な・フェ」なるほど…」

龍「そして前回の後書きのタイトルと今回のが違うが、そうだったときの修正もここでやる…ここを便利場と間違えているな」
は「まあまあ、とにかく、前回管理局に入ることを決めた龍君と私が管理局に帰るところからや」

フ・な「始まります…！」

第6話 ハプニング&始まりの道

その翌日の昼、龍士とはやては月村邸の庭の一角に来ていた。

「しっかし…あんましゆつくりできひんかったなあ〜」

「まア昨日あんな事あったんだから…それとリンディさんから聞いたけど結構偉いんだって？それを加味すると1泊できただけでも良かったらしいよ。本来はトンボ帰りクラスらしいから」

「…すずかちゃんやアリサちゃんともっと一緒に過ごしたかったのに…翠屋いけたけどお土産らしいお土産買えへんかったしな…」

そう言うてはやては手に持っているものを見る。そこには『喫茶翠屋』のロゴが書かれたホールケーキの入った箱を1つ持っていた。

「2つか3つは買って帰る予定やったのに…」

「そんなに家族がいんのか？…そういや叔父さんも結構買っていったなあ…うまいのか？」

「うん、リイン以外にも3人と1人兼1匹…かな？おるんよ…にしてもみんな遅いなあ〜」

「（1人兼1匹？）…まあ確かになあ。この時間に行くって言うてはあったからそろそろ来てもおかしくはないと思うが…」

『リインも早く外に出たいですう〜!!』

『確かに…さすがにちょっと窮屈な感じになってきた』

「セイ…おまえは自分からこうが良いといったんじゃないか…まあ気持ちはわかるけどよ」

「ごめん！！お待たせ！！！！」

そういつて走ってやってきたのはすずかと龍士の叔父と孤児院の子供たちだ。

「すまんな子供たちの準備がなかなか整わなくてな」

「準備？ミッドチルダ（向こう）に行く俺にはあってもこいつらには何にもないはずだろ？」

「それは見てのお楽しみ、というやつだ。みんな、見せてあげなさい」

『はい！！！！』

元気な返事と共に子供たちが龍士とはやての前に来て何かを差し出し、

『龍士お兄ちゃん、はやてお姉ちゃん、昨日は守ってくれてありがとう！！！！』

そう言って差し出されたのは花で作られた飾りだった。

「家の花壇にあったのでみんなで協力して作ったんだそうだよ。みんなが朝から何かやっていたから何事かと思ったが…まさかこんな

「ことをしていたとはな」

「お前たち……」

「みんな、ありがとうな……これ、大切にさせてもらっな」

「ああ……これ以上ない饞別だな」

『龍土お兄ちゃん、はやてお姉ちゃん』

「何だ（なんや）？」

『またね！……』

「……ああ、またな……」

「うん、またな」

「ごめん……！……待って待って……！……」

「あ、アリサちゃん……！……」

「すみません、お待たせしてしまって」

「リンディさん……！……」

「昨日のことと龍土君のことで各書類がいっぱい……でもエイミィさんが手伝ってくれたから何とか終わったわ」

「あとクロノ君もちょっと手伝ってくれたしね」

「クロノって？」

「リンディさんの息子でエイミィさんの旦那さんで、カエル君とリエラちゃんのお父さんや」

「へ〜…まア管理局にいりやどっかであうかな…？」

「何言ってるの…あなたたちは今から絶対あうわよ」

「へ？」

「ってリンディさん、龍君は仕組み知らへんのですからしやあないですよ。龍君、管理局にこのポータルから一気に行く分けちゃうんよ。いったん止まっている『次元航行艦』ちゅうのに立ち寄って、そこから本局のほうに行くんよ」

「へえ〜…結構面倒ってかごちゃごちゃしているんだな」

「そういったのはちょっと危険だから事故を起きないようにするためにそうしているんだよ。あと、結構エネルギー使うからってのも理由かな」

「なるほどな…それからはやて、さっきからアリサとすすかがお前の方見てっから話してこい」

「あ、うん！！（龍君のそばにいたかったから無視してたなんて言えへんしな）」

「はやて…」

「あはは…ごめんな、アリサちゃん、すずかちゃん、ふえいふえいふえいよ、あいふあひゃん…！」

「友達無視して男のそばにいた罰よ…！ちゃんと受けなさい…！」

「しゅじゅかひゃん…！」

「はやてちゃん…私たち、彼みたいな人と知り合えるのってすごく低い確率だつて気づいてる？」

「ふえ？」

「私たちだけじゃなくて、はやてちゃんもなのはちゃんもフェイトちゃんもだけど、能力や家柄とか、体…そういったの目当てでしか男の人たちって近づいてこないっていうの、知ってるでしょ」

「…」

いつのまにかアリサははやての頬を引張るのをやめてはやてと共にすずかを見てその言葉に聞き入っている

「でも昨日、そういうことをいったら彼は『俺と君らが仲良くなんのにそんなの関係ないだろ』って…私、実はとてもうれしかったんだ。だって、そんな言葉を言ってくれた人って、彼が…龍士君が初めてだったから」

「すずか（ちゃん）…」

「だからね、私もアリサちゃんと同じで、ずっとそばにいたはやて

ちゃんがうらやましかつたんだよ…それだけじゃない、これからずっとそばにいられるから…私たちは…」

「すずかちゃん…でも、私も譲ることはできひんのよ…私にも初めてやったんやから…それは…」

「わかってるよ。だから、勝負だね」

『勝負？』

「誰が一番早く彼を落とせるかっていう勝負！ハンデとかも一切なしの、自分の魅力やアプローチでの勝負だよ」

「へえ…つまりはすずかちゃんも龍君に惚れている、と…ええよ、その勝負のつたわ」

「アリサちゃんは？どうするの？」

「わ、私はまだ…確かに気なってるけど…惚れているのかどうか、わかんないわ」

「うーん、それならしょうがないか。じゃあ勝負だね、はやてちゃん！」

「負けへんよ、すずかちゃん！」

ちなみにそのことを唯一聞いていたのは叔父だけであった。龍土はリンディ、エイミィから今後どうすればいいのかという基本的なことの情報とかを聞いたりしていたため、全く耳に入っていなかったりする。

そして…

「時間やから…いくな」

「じゃあ叔父さん、後のことよろしくお願いします」

龍士は今住んでいるところの契約のこととかをすべて叔父に任せる、という判断をした。まあ一晩で終わらせれるわけもないので妥当と言えば妥当な判断のだが…任せられた叔父の心労は…推して然るべし

「じゃあね、はやて、龍士」

「また来てね、みんな！あ、それと龍君」

「なんです？」

「龍君、私と…付き合ってくださいませんか？」

(((((告白したあゝ!!!!???) (((((

「あ…え…えつと…」

「あ、もちろんすぐに返事しなくていいよ。ただ…私はあなたのことが好き、それだけ知ったおいてほしかったから…ちゃんと伝えておかないと後悔しそうだし」

「あ…わかった…ちゃんと考えて…返事もする」

「うん、待ってるね」

「あらあら…面白いことになったわね」

「あ…確かにどうなるのかは興味ありますね…というか時間いいの?」

「あっ!…そうや、はよせえへんとクロノ君に怒られてまう!…」

「そうか…じゃあな、みんな」

「またな」

そう言っではやてと龍士は転移ポータルの光に包まれて次元航行艦『クラウドディア』に転送された

「結構遅かったな…まあいいが」

「クロノ君!…」

「えっと…初めまして」

「ああ、君が赤青龍士君か。母さんとエイミーから話は聞いている。必要なことのほとんどはこちらでやっておくから、安心してくれ。それから、わからないことがあったらとなりにいるはやてに聞くといい。9歳のころから務めているから勤務歴でいえばベテランの域に入っているからな」

「あ…はあ…」

「クロノ君、そんなに一気に言ってもわからへんよ。要約すると、向こう行ってやることは環境に慣れることぐらいってことやね。あと分かんないことだらけやるうからそれは基本的に私に聞いてくれればいい、っていうことや」

「なるほど…わかりました」

「それと、もう本局への転送準備も完了しているから」

「わかったわ。ほな龍君、いこか」

「ああ」

そういつて本局行きのポータルに行く龍土とはやて。それを見ていたクロノは

「結構お似合いみたいな感じだな…というか僕もそろそろ休暇がほしいんだがな…」

と呟き、それは誰にも聞かれることはなかった

はやてと龍土は船の中に設置されているポータルから移動して本局に来ていた

「ここが時空管理局の本局や」

「へえ…結構すげえところだな」

そう言ってあたりをおのぼりさんのごとくきよるきよると見渡す龍土。そうしている2人のところに1人の女性が歩いてきた

「あら、はやてさん。意外と早く戻ってきたんですね」

「あ、レティ提督」

「あ、そっちの子がリンディの言っていた子ね。…うん、確かにと
いった感じね」

「…（小声で）はやて、一体どういうことだ？」

「（小声で）簡単に龍君のことがつたわっとるだけや」

「（小声で）なるほど」

「で、さっそくで悪いんだけど、ちょっと一緒に来てもらってもい
いかしら？」

「あ、はい」

レティに促されるままついていく龍士と、どこかわかった顔をし
て一緒に行くはやて。そうしてついた先に所は

「ここにちよつとデバイスたちをおいて、あなたはこの器具をつけ
て向こう側に言ってもらえるかしら？」

「あ、はい、わかりました」

示された器具は何か計測機のようなもので、示されたところに『
ユニストス』と『光天の魔導書』をおく。するとガラスケースのよ
うなものに包まれる。

「これはもしかして…俺たちのことをちょっと調べる、といった感じではないんですか？」

「ピンポーン、せいはい。管理局の協力者っていう建前だから簡単なんだけどね。局員だったらもつと詳しく、しかも時間かけてやられるし、何日も何時間も拘束されるのよ。これでちょっと様子をみて、本人の意思が強いようなら局員にする、という措置にしたのよ。どうかしら？」

「いえ、それで一向に構わないです。この采配にはリンディさんも協力しているんですよ？後でお礼言っておいて貰えますか？」

「もちろんよ、じゃあ始めるわね。マリー！！」

「わかりました。じゃあ力抜いて、立っててもらえますか？」

「了解した」

ただ立っているだけの龍士、そして両手首両足首についた機器が動き始め計測を始める。それと同時に、ケースの中に入っている『ユニストス』と『光天の魔導書』もスキヤニングによる調査が開始される。

「えっ…これって…」

「どっつしたの？」

「簡易計測ですが…彼はおそらく…はやてさんと同じかそれ以上の魔力を保持しているということがわかりました。それと…」

「それと…何？」

「身体能力値が局員の平均データ値のおよそ1.5〜2倍近い数値をはじき出しているんですが…」

「うそっ…!」

「またすごい子を見つけ出したものね…リンディは」

ちなみにこの会話は龍士には聞こえてはいないし、聞こえていたとしても気にすることはなかっただろう。検査されるといふ時点で自分の体の異常性はばれると思っていたのだから

「ま、彼みたいなのが所属してくれるって言うなら戦力になるんだから、何も問題はないわよね」

「そうですね。それに龍君がどうであろうと龍君に変わりはないですから」

「あら、彼に気があるの？」

「そうなんですか？はやてさん」

「ふえっ？えっ…あ…その…」

「その反応だけで肯定しているようなものよ。ま、恋愛は個人の自由だから止めはしないけど…あなたの家族でリンちゃん以外は何か反対しそっね…」

「あはは…目に浮かびます」

「ふふつ…あ、龍土さん、計測終わりましたので、出てきてくださって結構ですよ」

「わかった」

出てきた龍土とそれに伴ってデバイスのスキヤニングも終了し、計測の結果もすぐに出てきた

「先ず単刀直入に言わせてもらおうね。あなたの魔力値はSSからS、わかりやすく言うとはやてさんたち 局内では一般的にはEーSと呼ばれている 人たちと同じぐらい、そしてその人たちはほんの一握りだからかなり珍しいということになるわ。それとデバイスたちのほうを簡単に調べたら、こっちも珍しいタイプで、ミッドチルド式とベルカ式、しかも古代のタイプの混合タイプということがわかったわ」

「…はやて、管理局の人って一気に捲し立ててしゃべる癖でもあるのか？」

「そういうわけやあらへんよ。ただたんにゆっくりしゃべると変なこと言われたりするからその対策って考えてくれればええんよ」

「そうだったことは小声で話してくれない…ま、これで話は終わりよ」

「あ、はい、わかりました」

「お疲れ様でした」

そう言って退室していく龍士とはやて。

「んで、これからどうするんだ？」

「ん、もう地上に降りてもいいんやけど、ちょっと会ってほしい人たちがいるからそっちの方に連れて行くな」

「わかった」

そう言って案内されたのは食堂であり、そこにはピンク色の髪をポニーテールにした青い服を着ている女性、金髪のストレートで先のほうを黒いリボンで結んだ黒い服を着た女性、茶色のサイドアップポニーにした白と青の混じった服の女性、オレンジ色っぽい髪をみつあみでピンクの女性と同じ格好の女の子、黒服よりも淡い金色のショートカットに茶色の服の上に白衣を着た女性、その下に青い毛の犬(?)っぽいを合わせて5人と1匹がいた。

「みんな、ただいま」

「はやてちゃん!!」

「もう帰ってきたの!?!」

「向こうでちょっとごたごたがあったってな、でも、かなりリフレッシュできたで!!」

「そうですね、それは何よりです。そして…そちらの男性は？」

「ああ、そのごたごたの中でこちらと同じ魔導士、騎士の方がええ

かな？になつた赤青龍士君や」

「赤青龍士という。一応、ここの協力者、となるのか？それと、俺のことはできれば名前で呼んでほしい」

「まあそういうことや、ほら、みんなも自己紹介自己紹介」

「私はシグナム。主はやてを守護するヴォルゲンリッターの将だ、シグナムと呼んでくれ」

「私はフェイト・T・ハラオウン。テスタロッサ執務管で、はやてとは10年来の親友なんだ、呼び方はフェイトでいいよ」

「私は高町なのは。戦技教導隊の教導官で、私もフェイトちゃんとはやてちゃんと10年来の大親友なの、あ、私もなのはでいいよ」

「あたしはヴィータだ。さっき自己紹介したシグナムと同じでヴォルゲンリッターの1人だ、呼び方はヴィータでいい」

「私はシャマルで、医務官です。後、ヴィータちゃんとシグナムと一緒にヴォルゲンリッターの1人よ、呼ぶ時はシャマルでいいわ」

「我は盾の守護獣、ザフィーラだ。ザフィーラと呼んでくれ」

「！？犬がしゃべった！？」

「…狼だ」

「そつか…すまん」

「ちなみにザフィーラは人の体にもなれるからな」

「なんでこっちの姿でいるんだ？俺みたいに勘違いする奴がいっぱいいるだろうに…」

「気が楽だからだ」

「そうか」

「ところではやて、ごたごたって？」

「あ…それはな…」

簡単に昨日の出来事を話すはやて、それを聞いたみんなは

「それは…大変だったね」

「それでお前が持っているそれが…」

「何か見た事あるような…」

「もうヴィータちゃん、シグナム、忘れちゃったの？私達夜天の魔導書の同じく『天』を冠する魔導書の1冊じゃない。私たちが『闇の書』となる前に持ち出されて行方知らずになっちゃったから覚えてなくても仕方ないと言えば仕方ないけど…」

「へえ、そうだったんだ…じゃアリンちゃんみたいに管制人格のユニゾンデバイスがいるの？」

「ああ、出てきてもいいぞ、セイ」

そうして出てきたセイ。それに合わせてリインも出てくる

「久方ぶりだな、ヴォルゲンリッターの皆。1人居ないがまあそれを気にしたところで意味はない。こうして再会できたことを喜ぼう」

このセイの一言で龍士以外が若干凍りついたがすぐに戻り

「そうだな、会つのは久しぶりだが名前で呼ぶのは初めてだな、セイ」

「ほんと、死んだのかと思ってたぜ」

「ヴィータちゃん！でも、変わってなくて安心したわ」

そばでザフィーラもうなづいている。

「そういえば、龍さんが覚醒した時に『夜天の魔導書』の管制人格が再生できるとか言ってませんでしたっけ？」

そのリインの言葉に…

「ええ〜〜！〜！」

と先ほど自己紹介した全員がびっくりした声を上げる

「あ〜そんなこと言ってたな〜」

「そのあとの戦闘と俺のことで色々あって結局詳しい説明受けてなかったな」

「簡単に言うと、『光天の魔導書』や『夜天の魔導書』と言った『天の魔導書』シリーズは互いがバックアップのような役割を果たしている。『闇の書』の無限再生はそれがうまく機能しなかったせいだろうな」

「なるほど、そのころには確か『天の魔導書』シリーズは『夜天の魔導書』以外なかったからな」

「あゝ…俺の先祖が悪かった…とでも言えばいいのか？」

「いえ、あなたの先祖のやったことは攻められることではありません、気にしないでください」

「そう言われるとありがたい、シャマル」

「話を戻します。状態を見ないと分かりませんが、先ほどの検査の時の機器を見る限り、この設備ならばおそらく1月から3月ほどあれば再生させることは可能だと思えます、ただ…欠点もあります」

『欠点？』

「はい、その間『光天の魔導書』と『夜天の魔導書』、そしてリンちゃんの持っている『蒼天の魔導書』は絶対にその場所から移動させてはいけませんし、知っている人以外近づけてはいけません」

「もしかして、その中に『闇の書の闇』みたいなプログラムを入れる人がいる可能性があるから？」

「むしろそうでしょうね。自分の好きなように使おうとする輩はいらっしゃる。なので隔離されたところでやるのが一番です」

「でもリインの『蒼天の魔導書』は『夜天の魔導書』をベースに作ったんだぞ。それを使う意味ってあんのか？」

「もちろんだ、ヴィータ。というよりも、『夜天の魔導書』のなかに『蒼天の魔導書』は入っていたようなものだ」

「えっ!! そうなんか？」

「…聞いていないのか？」

その言葉に関係者全員が首を横に振る。

「おそらく侵食された影響でそれは記憶の中から消えてしまったのかもしれない。とにかく、実はあったんだよ。資料があれば何とか説明できるかもしれないが…」

「じゃあ無限書庫に行ってみる？」

「無限書庫？」

「無限書庫っていうのは全世界の資料が基本的に全部揃っている資料庫のことだ。ただ…」

「ただ？」

「あまりの資料の多さに正確に物事を把握できない場合がある」

「それって資料庫とかとしては成り立っていないんじゃないか？」

「でも10年前と比べるとかなり状況は改善されたんですよ。10年前だと100人入れて正確な資料仕入れるのに2、3カ月かかるといわれていたもの」

「…地獄か、そこは」

「マシになった、とは言ったけど今50人ぐらいがフル稼働して何とか処理に当たっているのが現状で、毎日徹夜は当たり前、最悪1週間徹夜している人もいるわ」

「そういえばこの間言ったら司書のみんながユーノをどうにか寝かせようといういろいろやってたな…」

「ユーノって…誰？」

「その司書長よ。ちなみにはやてちゃんたちと同じ年」

「へえ…ならそういつた資料って請求できないかな？」

「可能だと思うからしといたるわ」

「いいの？」

「…うちも、ぶっちゃけリインフォースには会いたいねん。おかげでここまできれたよ、とかいろいろ報告したいことがあるからな」

「…悲しませることを言うようだが、あまり過度な期待はしないでほしい。バックアップとは言ったが、記憶まで正確に再現できるか

は…さすがに自信がない」

「そうか…」

ちよつと落ち込んでしまつ一回…しかし

「ならこれもその時には一緒に使ってな」

はやてがそう言つて見せたのは先ほどの杖の先端部のシュペルトクロイツようなペンダントだった

「それは？」

「これは、リインフォースが消えた時に私に残して行つてくれたものや…この中にあつたものと資料と『魔導書』からリインと『蒼天』を作つたんよ」

「そうか…ならば、低かつた可能性も上がるかもしれない。その時はぜひとも拝借させてくれ」

「あ、なら私のデバイスも使つてくれないかな？」

「私のもね」

「なんでだ？」

「『闇の書の闇』のプログラムを消滅させた後、特別な結界を使つたんだ」

「その時に使用したのが私たちのデバイス。戦闘経験もあるから役

に立つと思うよ」

「そうか、それならば完全再現が可能になる可能性も高い…あとは時間と場所と人員だな」

「時間はともかく、場所と人員は結構きついよね。ほぼ私用で局員を最大3カ月近く貼り付けにするんだから」

「まあその問題はおいおい考えていこう。時間のほうも状況によっては改善される可能性も出てきたしな」

「そうだね。こうしていろいろなことがわかったただけでもかなりの前進やから」

「では、龍士ちょっと付き合ってもらおうぞ」

「は？」

「その腰指している獲物を見て、主はやてと共に戦ったと聞いて、お前の力に興味がわいた。1試合してもらおうぞ」

「はあ？」

「ああ、それはええね」

「はやて!？」

「私も連携戦、それとあまり長時間の戦闘じゃなかったから詳しい実力は知らへんから」

「…わかった、やろう」

「そうこなくてはな。では、ついてきてくれ」

そういつて出口に向かうシグナム。それに倣い全員が後を追う形でついていく。そのなかにはやてとシヤマルから念話が龍士に届く

「ごめんね、シグナム、いわゆる戦闘バトルマニア好きなの」

「成り行きやけど、もともと誰かと戦ってもらって龍君の実力見るともりやったから…でもいきなりシグナムはきつかったかな…」

「そう思うなら止めてくれよ…」

「それはむり」

2人からハモって否定されるほどのひどさらしい

「着いたぞ。ここで勝負しよう。準備してきてくれ」

「わかった」

「セイもどうだ？」

「いや、俺は遠慮しておく」

「たしかに、ここは俺1人でいった方が良いかもしれないな（1人に負けたとなればあいつもおとなしくなるだろ）」

「では少し後に」

そう言っ出ていくシグナムと龍士。その後そばにある観戦室兼測定室では

「いきなり呼ばれたと思ったたらデータ取りですか…がんばりますよ」

「ありがとな、マリーそれと一つお話があるんやけど」

「いえいえ、なんです?」

「実は…」

はやてたちは先ほどセイから語られた内容を本人を交えてマリーに言つと

「なるほど…では私も微力ながらお手伝いしますよ!!」

「ほんまか!?!」

「第一、はやてさんの作ったの誰だと思っているんですか?」

「そうやったね…ほんなら、時期が来たら要請するでお願いな、マリー」

「はい!」

「お、そろそろ始まるみてーだな」

ヴィータの言葉に全員が目が訓練場のほうに向く

「ほう、それがお前の騎士甲冑とデバイスか」

「ああ、ユニストスってんだ。ちなみにすげえシャイだから基本的にしやべらん」

「私の愛剣^{デバイス}、レヴァンティンだ」

そう言っつてシグナムは右手に持っている剣を掲げる

「準備はいいか？」

「ああ」

「じゃあ行きますよ、勝敗判定はどちらかが戦闘不能になったとこちらが判断したらです。では…始め!!」

シグナムVS龍士の闘いが…幕を開けた!!

第6話 ハプニング& a m p・始まりの道（後書き）

は「：ハプニングは？」

龍「いや、まずとりあえずFW以外の主要キャラ出しとこうと思ったらこうなった、ちなみに予定では地上下りてはやての家でひと騒動、というものだったらしい」

フ「後、始まりの道にはまだ何とか立てたような状態にもなっていないが…」

龍「これ以上いじめてやるな、大学の研究に就活で忙しいのだから…ほとんど何もやっていないが」

な「それはダメでしょ、どっかの元キングみたいになるよ」

龍「言うな！！自覚してんだから！！それからあんま他の漫画のネタを出すな！！」

は「でも書いたりしてるのは龍君「言うなって！！」わかったわ」

フ「でもシグナムも木刀見ただけで模擬戦申し込むなんて…」

な「でもフェイトちゃんも申し込んだそうにしてたの」

龍「お前もかい！！てか、どんどん俺のキャラ崩壊してない？」

は「作者がそんな人やとこれを読んでくれる心の広い読者に思われるだけや、それに今回のここでのことが今後本編でも出てきそうな気がする」

フ「それもちよつとまずいんじゃないか…」

な「でも作者さんはそういうのが好きだから…大丈夫かな？」

龍「ギャグ系をやるのは最初から決めていたことだから…恋愛と戦闘は多少やったがギャグをどうにか放り込まんとな…次回ぐらいにフ」というわけで、次回第7話

な「『突き付けられたもの』」

は「大いなる空にテイク・オフや！！」

龍「これ使って大丈夫か…？」

5 / 1 : 前・後書き少し修正しました

第7話 突き付けられたもの（前書き）

作「やっぱ俺自身がでたほうがいいと思ってでてきました」V」

は「ほんま乗りでどんどん変えるなあ、作者」

龍「しかし、今回の内容は一種の『OP詐欺』ならぬ『タイトル詐欺』になるんじゃないのか？」

フ「それは言っちゃあだめだとおもっ」

な「でも実際にs「それ以上はガチのネタばれになるからやめてくださいお願いします」…わかつたの」

は「でもまあ面白そうやね」

フ「男の人って…」

作「だああ！！それも半分ネタばれだから！！怖いもの知らずだな、お前ら！！」

龍「では本編だ。楽しんでもらえると嬉しい」

作「ちょ…それ俺のセリフ」

第7話 突き付けられたもの

訓練場での模擬戦を行うために準備をしに行ったシグナムと龍士。そしてそれを観測室兼観覧室にて待っているはやて、フェイト、なのは、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン、セイ、マリエル。「いったいどっちが勝つんでしょうかね？」

「私は…申し訳ないけど…シグナムかな」

「私もおんなじ予想だよ、フェイトちゃん」

「そうですね…龍さん、実力はあるにはあるみたいですけど…いかにせん実戦形式のものは一応2度目ということになりますから…分が悪いですよね」

「例えそうだとしても、それが勝敗の結果につながるかは考えにくい」

「え？」

「素人ゆえの極端な発想、というものだ。テストロッサは高町との経験があるのではないか？」

「あ…あれか…」

「フェ、フェイトちゃん！？あ、あれってなんのこと？ていうかみんな納得気味だし」

「なのはちゃん、フェイトちゃんとの闘いの時や、『闇の書の闇』にとどめを指す時に使った…」

「にゃ！？あ、あれはちゃんとしたのだよ…今は」

「ということは当時のものはめちゃくちゃなものと認めているようなものだな」

「おい、始まるみてーだぞ」

互いの準備が完了しているのが確認されたところでマリエルが声をかける

『え〜と、お二人とも準備はよろしいですか？』

「ああ」

「無論だ」

『それでは判定方法ですが、こちらで決着がついたと判断したらです。それと、この模擬戦を利用して龍土さんの正確な魔力量と戦闘技能も一緒に計測させていただきますね』

「かまわない」

『それじゃあ行きますよ〜…よ〜い…始め！〜！』

マリエルの開始の合図とともに龍土が「はっ！」という掛け声とともに気合を入れるとかなりの量の魔力があふれ出る

「なっ！」

見ていた全員が驚愕し、マリエルがあわててモニターを確認するとそこには

魔力値：EX（測定限界）

筋力：EX（測定限界）

体力：EX（測定限界）

そう出ていた

一方、そんなことも気にしないシグナムが獲物を手に龍土に突っ込むと同時に龍土もまた腰のホルスターから獲物を 今回はライフルタイプ を取り出し、シグナムの攻撃に合わせて瞬時に照準を絞ってトリガーを引く

「くっ！」

シグナムは苦悶の声と共に身をひねるが、そこにも銃撃が走る

（なんとという正確な射撃：避けてもすぐにカバーされる。それだけではない、一撃一撃が高町の誘導弾1発クラスの威力がある…だが！！）

「遅い！！！」

「くっ！」

シグナムは威力があるのを確認したが、連射性が低いということを見抜き、速度を上げて一気に龍土に迫ることを選択した。それは

間違っではないなかった

ライフルモードは連射性能が下がる代わりに1発1発に威力が上がっている。逆に、ピストルモードは威力が低い代わりに連射性能がかなり高くなっている。前回は敵が多数だったため、牽制にもってこいのピストルモードを使用した今回が1対1（タイマン）、連射性が低くても威力のあるこちらを選択したのだが…いかんせん相手の速度が予想よりも早かったため、一気に欠点である懐まではいりかけられたのだ。しかし…

「なめんな!!」

龍士は右手側のライフルの下部についているナイフの部分でレヴアンテインの一撃を受け、斬撃をいなし、それと同時にあいている方でシグナムに一撃をたたき込む

「くっ!!」

一度くらって体勢を崩したシグナム、チャンスと見た龍士は交互に射撃を開始し、次々とシグナムに銃撃を浴びせる

だがこのままで終わるシグナムではない。爆煙を利用してシールドを張り、さらに粒子に肉薄する方法まで考え付いたのだ

そして、龍士からの銃撃が止まったその瞬間…!!

「はあっ!!」

シグナムが一気に龍士に突っ込んでいった。それに対して龍士はなんと両手に持っていた2丁の銃を上空に放り投げたのだ

見ていた全員が驚き、シグナムは驚愕しつつもチャンスと思い込んで終わらせようとする

「もらった！！レヴァンティン！！」

《Explosion！！》

「紫電…一閃！！」

誰もがシグナムの価値と思った・・・だが！！

「！！！！」

龍士は手首の部分から魔力刃を作り出し、それによってレヴァンティンを真剣白羽取りしたのだ

行った龍士以外が全員の顔が驚きに染まる。しかし、さらに龍士の両腰にあるホルスターが先のほうをシグナムへと向け、そこに魔力を充填して至近距離からはなったのだ

「ぐっ！」

これには流石のシグナムも対処できずまともに食らってしまい、その上威力もかなりあったのか衝撃でレヴァンティンの持ち手から両手を離してしまったのだ

衝撃で少し離れるシグナム、対する龍士はレヴァンティンを持ち替え、シグナムに向かってレヴァンティンを上に振りかぶって切りかかる

「くっ！」

とっさの判断だったがシグナムは瞬時に鞘を出してその斬撃を防ぐ……だが、

「あめえよ」

龍士は左手で斬撃を繰り出していた

シグナムが気づいたときにはときすでに遅く、龍士の右の拳がシグナムの鳩尾にクリーンヒットしていた

「かはっ！」

これにはさすがのシグナムも耐え切ることができず、意識を手放してしまった。というか耐えられるやつがいたらすごいだろう……何せシグナムの騎士甲冑はちょうど龍士の拳がクリーンヒットした部分のみなくなっていたのだから

無論それに気がついた全員が驚き、マリエルがあわてて試験の終了と観測兼見学室に戻ってくるよう伝えたのであった（ちなみにシグナムはすぐにシャマルとフェイトが抱えていった）

そして、そんな事態になったのだから龍士がみんなから詰問という形の質問攻めに合うのはいうまでもない

「龍君！今の模擬戦のシグナムのあれ……いったいどういことや！？」

「騎士甲冑を貰いたってわけじゃなさそーだからな…ちゃんと説明してもらうぞ」

「ああ…というか自分でもびっくりだったんだが…あの結果は」

「え？意図してやったんじゃないの？」

「いや…ただ最初に…といってもはやてしか知らないけど、やりあったやつらを筆頭にさ魔力の攻撃ってさ、やっぱり厄介なんだよな、打ち落としてもすぐに次が来るから」

『うんうん』

「で、だから最後に防御に回せるのは両手足だけ。そして両手足には手甲がついてる。それに魔力対策のを常時展開させておけばいいかな〜と思ったんだが…あそこまで効果があるとはまったく思わなかった」

「そうだよな、バリアジャケット シグナム達は騎士甲冑 がなくなったら戦闘中は無防備になっちゃうから」

「それに一番魔力が割かれてる、そしてそれを消したっていうことは…本当にすごいみたいだね」

「みなさ〜ん、シグナムさんが目を覚ましましたよ。それと、計測結果も出ました〜」

その言葉にみんな興味がそつちに移り、わらわらとマリエル、シグナム、シャマルの周りに集まる

「迷惑をかけてすまなかったな。それと赤青、なぜ、あの時持っていた木刀を使わなかった。加減したのか」

「そうっちゃんそうだが…さっきの場所ぶっ壊しかねんからあえて使わなかったんだが…」

「そうか…ではいずれそういう不安のないところで再びやるっ」

「個人的にはもうごめんこうむりたいのだから」

「なぜだ」

「…1つ聞きたい、お前らって羞恥心持ってるのか？特にはやてとシグナム」

「どういうことや？」

「あんだだけ短いや何も下に履かないことが、かな」

少し思案するシグナムとはやて、しかしまいち思いつかないようであったので

「えっと、龍土君…意味がよくわからないんだけど」

「服装…騎士甲冑やバリアジャケットか、あの格好で空をびゅんびゅん飛び回られると…な」

「あの格好…あー！」

「はっ！…！」

『！！』

「どうやら全員気がついたようで…」

「え…えっと、龍君…そういう…意味？」

「俺も年頃の男だっただよ…さすがに戦闘っただよ…だから気にしなかったが冷静になって考えると…な」

「龍君のエツチ…」

「不埒者め…成敗してくれる…！」

「いやいやちょっと待て…！そういうのに目っつーか意識がいつちまうのは男の悲しい性分サガなんだよ…！しょうがねーだろ…！」

「…まあそれは今後皆さんでどうにかしてもらおうとして、早く結果を見たらどうですか？」

「これがそうですよ…たぶん皆さん見たら腰抜かしちゃうと思いますよ」

「あはは、マリーさん、冗談が…えっ！？」

「どしたん、なのはちゃん…はっ！？」

「え、なに、なのは、はやて…うそっ！？」

「私も見たときには…驚きを通り越してあきれたな…」

そこに書かれていたのは…

魔力量	：EX
魔力放出量	：EX
補助適正	：SSS
空戦能力	：EX
陸戦能力	：SSS
魔導師ランク	：『総合EX』

というまさに『なにこのチート』とか『お前、ちょ、マジありえなす』とか言う評価がはつきりと聞こえてきそうな結果が並んでいた

「か、管理局でも本当に存在するのかといわれていたEXランク…それに値するひとが本当にいるなんて…」

「本と…もう驚く以外できねえな」

「それで、私はこれをリンディさんやレティ提督、クロノ提督に届けてきますね」

「あ、マリー、私も行くよ。提出しなきゃならないものもあるし」

「あ、はい。ではみなさん、さようなら〜」

「またね、みんな」

そういつてマリーとフェイトは退出していく

「あたしもそろそろいかねえとな…じゃーな、はやて、なのは、み

んな」

「私もそろそろ時間だ。じゃあね、みんな」

なのはとヴィータもそういつて食堂を出て行く

「私もそろそろ時間ですね、では主はやて、失礼いたします。それから赤青、また模擬戦をしよう」

「あ、私もそろそろ休憩時間終わっちゃう。じゃあはやてちゃん、失礼します。龍士君、体に何か違和感があったら遠慮なくきてね。ザフィーラ、いきましょ」

シグナム、ザフィーラ、シャマルもまたそうして出て行き、残ったのはこれまで一緒にいた面々だけとなった（みんなちゃんと出て行く前に挨拶しましたよ、ええ、ちゃんと）

「あつちゅー間に元のメンバーに戻ったなあ」

「仕方ないですよ、みんな忙しいですから」

「昨日言っていた人材不足つてのにも関係してるのか？」

「まあなあ…それもあるけど、みんな優秀やからつて言うのもあるなあ」

「へえ…全員ちょっと抜けている感じに見えたけどやっぱり中身は違うのか」

「ん〜、でもちょっとドジとかそういうところはあるんよ」

「でも公的などころではめったにないんだろ、だったら優秀じゃないか」

「それもそうやなあ…あ、そろそろいかんとな」

「わかった」

そう言っつて食堂から出て行き、地上本部へのポーターに向かうはやてたち、その道中で

「あ、ユーノ君」

「やあ、はやて。あれ、そっちの方は」

「ああ、民間協力者になってくれた赤青龍士君や」

「赤青龍士だ。呼び方は龍士でいい。よろしく頼む」

「こちらこそ。ユーノ・スクライアです。僕も呼び方はユーノでいいですよ」

「ユーノさんは無限書庫の司書長もやっているんですよ」

「へえ…俺と年齢がそんなにかわんなそうなのに…すげえな」

「いや…僕なんかより、なのはたちのほうがすごいよ」

「謙遜するなよ。情報っていうのは戦いの中じゃ一番重要なんだぜ、それがなきゃ勝てる戦いも勝てない、その情報があるのが無限書庫

って聞いている。そしてそこで働く人たちをまとめる立場にあるのがユーノ、君だ。もっと誇ってもいいと思うぜ」

「そう言われると嬉しいよ、ありがとう」

「ああ、それと、褒めたついでに少し頼みたいことがあるんだが…」

「なんだい？」

「実は、龍君がもつとる本、実はうちやリインがつことる『夜天』及び『蒼天の魔導書』と同じく『天』を関する『魔導書』の1冊らしいんよ」

「それでそれに関する資料がほしい、と」

「それだけじゃないです、実は互いが互いにバックアップとして機能するらしくて」

「それに関する方法とかも見つけてもらえたら万々歳って感じかな。同じシリーズが全部で何冊あるかがわかると、最高なんだが…無理はいわねえよ」

「いいよ。最近は忙しさも鳴りを潜めてきたから」

「ありがとなあ、ユーノ君」

「すまない、恩に着る」

「僕はそれぐらいしかできないから…」

「『自分ができることを精一杯やるやつには神様が必ず味方してくれる』昔父さんが俺に言ってくれた言葉だ」

「なるほど、つまりユーノ君には常に神様が味方し取るわけやな」

「ははは…ありがとう」

「おう…ってはやて、いいのか、時間？」

「あ、忘れとつた！！ほな行くで、龍君、リイン！！」

「おう」

「ハイです！！」

「ユーノ君、またな！！見つかったときの連絡先はいつもんどこでええから！！」

「じゃな、ユーノ」

「さよならです、ユーノさん」

「うん、またね」

簡単に挨拶と依頼をして分かれる4人…これが重要な意味を持つ
出会いだとは、このとき誰も想像をしていなかった

そして場所は移り…

「ここがミッドチルダにおける要所にして治安の中心、地上本部や」

「へえ…（ん？）」

「どしたん？龍君」

「なんでもないよ（これは…悪意…いや違う…これは…欲望だ…とびつきり気持ちわりい…あいつら見てえな…この上のほうに…しかし、今は調べられない。でも、ちゃんと調査しておいたほうがいいな）」

「龍君、早くしないとおいでくで〜」

「早く来ますよ〜」

「おう、今行く」

何かを感じたが今は人が呼んでいるので探るのをやめた龍士

そして龍士が感じた地上本部にある悪意じみた欲望…その正体がわかるのはまだ先の話である

第7話 突き付けられたもの（後書き）

龍「けっこう複線らしきもんが出てきたな」

は「でもここに来る人たちってみんな本筋のやつ見てきとるやろうから想像はつかれとるんちゃう？」

フ「でもこれって読者数も少ないk」出番さらに減らすよ」「すみませんでした」

作「まあいいけどな、俺が嫌いなやつはたいてい悪役だし」

な「でも「ハリー・ポッター」のスネイプは結構好きなんだよね」

作「7巻まで読むとさすがに嫌いになれない……」

フ「これとのコラボは……」

作「予定としてはない、終わったら書く可能性も低い」

は「プランとしてはある見たいやな」

作「ただあつちとこつちの時間軸が相当ずれてるから……本当にきついんだよ」

龍「なるほどな」

な「他作者さんとのコラボは？」

作「俺のほうで書くのは難しいだろうな、『Fate』とかWikiとかで見ないとわからんし」

フ「書かせてつてきたら？」

作「来るのか？まあ許可するよ。というか拒否する理由がない」

龍「というわけでコラボ小説を書きたい、という心が全宇宙より広い作者の皆さんご連絡お待ちしております」

な「レビュー、評価はできたらしてほしい、それが作者さんの本音です」

は「感想は首を長くして待っています。書けるんでしたらどしどし書いてくださいな」

フ「誤字脱字や間違いの指摘も待っています」

龍「次回、第8話『共に歩む者』」

な「大いなる空へ、テイク・オフ」
作「ほんとにだいじょぶかな」

第8話 共に歩む者（前書き）

龍「前回も結構面白かったか？」

は「まさかああいう効果があるとは……」

フ「そうだね……でも、ちよつと戦つてみたいかな」

な「にはは……フェイトちゃんも戦闘好きだからねバトルマニア」

作「ちゃんとここにいる全員と戦うようにするよ。後ヴィータとのシグナムとの再戦も考えてるし、まだ出てきてないけどフォワード陣とも考えてある」

龍「あいつらはいつつ出て来るんだ？」

作「これはいわば序章のようなものなんだが……絆を深めるほうが大事だとおもつて後なのはとフェイトとの絡み話もあるから……後2話位後かな」

は「結構長いな……」

作「代わりに本編は削れるところは削る予定」

な「ドラマCDは？」

作「時間みて聞いて見て面白かったら書く」

フ「じゃあ下書きしているときに聞けばよかつたんじゃない？」

作「……!!」

龍「気がついてなかったな」

な・フ・は「ちよつとOHANASHIしようか」

作「ちよ、ちよつとま……グホアアアアツ!!」

龍「自業自得だな、というかこういうのも後書きですべきなんだろうな」

は「本編は私とリインと龍君が家に着いたところからです」

作「で、では……どうぞ……」

龍「よく生き延びたな」

作「死んだじいちゃんがいきれーな川の向こうで手え振ってるのが一瞬見えた」

第8話 共に歩む者

「ここが私たちの家やで〜！」

「です〜」

龍士、はやて、リン、セイ（魔導書の中）が来たのははやてたちが住んでいる家である（Vividに出てきたものそのままと考えてください）

「でかいな…」

「ま、一応7人ですんどうからな、これくらい大きくないと逆に狭いんよ」

「でもちよつと大きすぎて使っていない部屋がいくつか…」

「…ちなみに俺ははやての申し出受けなかったらどこに住むことになつてたんだ？」

「ん〜、たぶん局員の寮に1週間ぐらい仮住まいさせてはもらえるとおもっけど」

「人の数は結構多いので多分すぐにアパートとか契約するか、局員にならないとちゃっっちゃと追い出されちゃうですね」

「…申し出を受けてよかった」

『本当ですね』

「ま、こんなところで立ち話もなんやから早くはいるか」

「そだな」

そして家に入る…それは孤児院と安アパートに住んでいた龍士には衝撃しかなかった

「あはは、やっぱりおどろいとるなあ」

「なのはさんやフェイトさんが始めてきたときと同じ顔してるです」

「これみて驚かんやつは神経がないんじゃないのか？もしくはこういう、もしくは上回る家に住んでいるやつぐらいだろ、驚かないのは」

「それもそうやね…ってあ！」

「どっした？」

「晩御飯用の食材買ってくるの忘れとったわ！！」

「別に俺はこれからでもかまわんぞ。ぶつちやけ先に荷物を置いておきたかったからな」

「うーん、それもそうやね、リイン。龍君に客間案内したって」

「ハイです！龍さん、こっちですよ」

「了解」

そう言って紹介されたのは八神家の一角にある客間だった。ちなみにここに来るまでにはやてのほかに『ヴィータ』『シグナム』『シヤマル』と書かれたプレートのかかった部屋があったので、それを疑問におもった龍士は

「なあリイン、シグナム戦闘狂たちもここに住んでるのか？」

「はい、ヴィータちゃんたちははやてちゃんを守るヴォルゲンリッター守護騎士ですから」

「そついやそんな風に自己紹介されたな…あん時は聞けなかったけどヴォルゲンリッターって言うのは？」

「夜天の主を盾となり、矛となる存在のことです、主」

「セイ…あそつか、お前は元をたどれば同じところにいたんだもんな、知ってて当然か」

「はい、強さで言えば管理局のEースといえども1対1であればまけることはまずない強さです」

「つまり勝った俺はそれ以上つーことか？」

「ありていに言えばそうなりますね」

「確かに強かったですね、でも勝っちゃったからますますシグナムから模擬戦挑まれるですよ」

「うげ…勘弁してくれよ」

部屋に入って荷物を置きながらもそういう会話をする3人。そして戻っていくとすでに出かける準備をしたはやてがいた

「ほな、いこか」

「はいです」

「おう」

そして出発しようとして龍士はあることに気がついた

「ん…車とかでいかねーのか？」

「あ…実は…車は持ってないんよ」

「忙しくて買いに行く暇がなかったんです」

「…今回みてーに休暇とって買いに行けばいいじゃ」

「それが…なかなか休みが取れなくてな…」

「ちゃんと申請とかしてんのかよ、ほかの社会人だって結構休むぜ」

「詳しいですね」

「お前らに会うまで、会う直前まで一応バイトとかしてたんで」

「さよか…ところで龍君は免許もっとするん？」

「二輪も四輪もお手の物だ。まだ二十歳だから大型は無理だけどな。来年また教習所行ってそれも動かせるようにするつもりだが」

「熱心やなあ」

「好きというか資格として持っておきたいだけだ。資格って物はあればあるほどいいからな」

「地球で車は持ってたんですか？」

「ああ、中古の軽だったがな。でも割と新車のやつだったから使い勝手もよかった」

「どうしてこっちに持ってこなかったん？」

「こっちにして置き場所があるとは思わなかったからだ。ちゃんと単車も中古だが持ってる」

「中古ばかりですね」

「金がないからな」

「ま、そっちのほうもリンディさんとかに頼めば何とかなるから、明日にでも話しく？」

「持ってこれるのか？じゃあそっちさせてもらおうかな」

「ただガソリン車ですよね」

「…貧乏人が電気自動車かえると思うのか？そもそも電気自動車は

「一般にはあまり出回ってない」

「それやとこつちでちょい調整が必要なんよ」

「何でだ？」

「こつちは自然が多いですよ、環境を守ったりするためにモガソリン車はあまり歓迎されないんです」

「なるほどな…で、調整ってどんな感じだ？」

「ただ単にガソリンじゃなくて電気で動くようにするだけや。時間も短時間で終わるしお金もあんまりかからへんと思うで」

「へえ…そついやこつちと地球って金とかそついったのはどうなってるんだ？」

「あんまり変わらないですよ、ただこつちのほつが持ち運びは楽です、ね、お店によっては自宅までの転送もできますから」

「へえ、そつは楽だな」

「ちなみにこつちは家族が多いから必然的に買つ数も多くなるから重宝してるで」

「なるほど、それも車を買わない理由のひとつ、てどこか」

「そ、ほならいつまでも話とらんで行くで〜」

「ハイです!」

「はいよ」

そう言って近隣のショッピングセンターへと向かった面々。そこで十分な量の買い物をして帰ってくる

「はやて〜、腹減った〜」

「ヴィータ、はしたないぞ。お帰りなさいませ、主はやて」

「はやてちゃん、送られてきたのは全部冷蔵庫に入れておきましたから」

「うん、ただいま、シグナム。シャマルもありがとうな。ヴィータ、ちよつと待つときな、すぐに作るで」

「おう…ってあれ、何でここにお前がいるんだ？」

ヴィータの視線の先にいたのは龍士。そしてヴィータのその一言によって守護騎士全員が警戒する

「ああ、そついや言つとらへんかったなあ。龍君、こつちに住む所ないし地上本部の寮に入れてもすぐに追い出されそつやから『六課』が始まるまで家に住んでもらうことにしたんよ」

「こやつをですか！？主はやて、お言葉ですが先ほど不埒な目で」

「見とらへんよ。第一そついう風に見とるんやつたらすでに私が制裁しとるて。ま、なのはちゃんたちはさっきの発言自分たちは関係ないとおもつとるやろつけどな」

「…わかりました。主の決定ならば逆らいません。しかし」

「うん、もし変なことしたりしたら容赦なくやってもええで」

「はい」

「その時はあたしも参加させてもらうからな」

「…とんでもない事になっちまったなあ…」

「しかし、お前の自業自得のようなものでもあるがな」

「わーってるよ。というか心なしか嬉しそうだな、ザフィーラ」

「いままで男は我1人だったからな」

「…今度つまい酒でも飲もうぜ」

「いいな」

はやてたちが物騒な約束をしている傍ら、
図らずも男同士の友情が結ばれていた

「ん？そっぴやはやてって料理は…できるんだよな？後は誰が？」

「私以外はできひんよ」

「シグナムやヴィータはともかく、シャマルはできるんじゃないのか？」

ビシッ！！！

「な、何だ？俺…めっちゃめっちゃまずいこといったのか？」

「ああ…」

「『シヤマルをキッチンに立たせるな』これは我が家の掟に近い」

「掟…んなおおg」大げさじゃねーぞ、実際食って悶絶したやついるし」マジかい…」

「ひ、ひどいです。私だっ」こないだそう言っただけでお前が入れた茶を飲んだとき失神しかけたが」うっ…」

「ま、そんな訳なんよ」

「…なら俺が手伝おう」

「お前料理できんのかよ」

「自慢じゃないが10歳のころから調理場には立っていたし、1人暮らしのときも可能な限り自炊していたから最低限のものは作れる」

「ほんならお願いしようかな」

「サンキユ」

そう言って台所に行く龍士。それを見てヴィータが

「なあシグナム、あいつほんとに信用できるのかな」

「今すぐに判断するのはやはり難しいな」

「戦闘力でいえばシグナムにも勝っていますからね。それにさっきの話から行くところ」

「ああ、主は彼を六課の一員として迎えるつもりだ」

「でも、もし彼が敵の一員だったら……」

「ああ、我々にとってはかなり危険な状態になる」

「……ごちゃごちゃ考えずに本人たちに聞いてみようぜ」

「ヴィータ（ちゃん）！？」

「みるよ、あのはやての顔」

そうして2人で料理しているはやてと龍士をみる……そこにいるはやては龍士の事を完全に信頼しきっている顔であり、なおかつとても楽しそうだ

「はやてのあんな顔、あたしは久しぶりに見た」

「確かに……そういえばはやてちゃん、彼とずっと一緒にいたのよね、リンちゃん」

「はい、もし皆さんが考えていることをするんだったら私を無力化すればすぐにできました。でもまったくそんなそぶりはありません」

でした…というか彼、『光天』を手に入れるまではまったく魔法とは無縁だったのでその心配は絶対にはないですよ」

「でも本人にちゃんと聞くか」

「そうですね」

「では食事のときに」

「ああ(うん)」

そうして約20分後、かなり美味しそうな料理が食卓の上に所狭しと並んでいた

「うわ…美味しそうです」

「ほんとね」

「ほなみんな席について、せーの」

『いただきます!』

「……………」

「なあはやて…」

「どしたん？」

「みんなが無言なのがすごい怖いんだが」

「ああ…なら任せとき」みんな、そない黙ってたら美味しいご飯もおいしくなくなってまうで、ほら、おしゃべりおしゃべり」

「あ、申し訳ありません…その…あまりに美味しかったので言葉が出ませんでした」

「ほんと…私が作ったのより美味しい」

「「いや、それは当然だから」」

「み、みんながむごいわ…」

「ははは…教えようか？」

「えっ？」

「孤児院でも覚えたいって子達に教えてたから…はやてたちは忙しいからちゃんと学ぶ暇がなかったんだろ。俺はただの『民間協力者』だから時間には余裕があるし」

「い、いいんですか？」

「ああ、俺は別にかまわない」

「あ、ありがとうございます…！」

「…すまない、赤青」

「ん？」

「我々はお前を疑っていた。主を誑かして我々の情報を得ようとす
る敵や内部のスパイではないか、とな」

「ん、ああ、そんなことか。べつに気にしてないよ。というかそう
するのが普通だからな。気にする必要自体ない」

「しかし」

「くでーぞ、シグナム。それに俺も失礼なこと言ったからな。それ
でお相子だ。どうしても納得できないんなら、俺の言うことひとつ
聞いてくれ」

「…なんだ」

「二度と俺に模擬戦を申し込むな」

「…!」

「気にしないといったらさっきのは関係ない。でも納得できないん
だったらさっきのを飲んでもらうぞ」

「わかった、気にしない」

（ ）（シグナムの性格すでにつかんでる）（ ）

「まあさっきはやてから言われたとおりだ。大体のことはリンディ
さんからも聞いているし、これからよろしく頼むな」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「よろしくな」

「よろしく頼む」

「…（こく）」

「みんな仲良くなったところで、食事再開しよか」

「そうだな…あ、デザートも作ってあるから」

「マジか…！」

「そういえば先ほど孤児院って言ってましたけど…」

「ああ、10歳のときに両親が爆発事件 事故だったかな で俺をかばってな。以来ずっとだ」

「ハシヤマル…！」

「お前なに考えてんだ…！」

「気にしないでくれ、両親は肉体が死んだだけだから」

「肉体が？」

「両親の思いは俺の心の中に生きている。俺が忘れない限り、両親は俺の中に生き続けているからな」

「立派な志だな…すばらしい」

「それにこつちに来る前にまた墓参りして報告もしてきたからな。何も心配しなくていい」

「そう…でも…ごめんなさいね」

「いいさ。君らの事だけ聞いて俺のことを語らないって不公平だから」

「そうか…ん？我々のことは誰から」

「あのユニゾンデバイスじゃね〜の？」

「後リインとはやてからだな。大体のことを聞いた。君たちの今までのつらい思いと比べたら…な」

「そうか…ありがとう、そしてすまない」

「礼も謝罪も言われるようなことじゃないさ」

「はやて、おかわり」

「はいはい、龍君はどう？」

「貰おうかな」

「もう少し空気を読めんのか…」

「言っても無駄だとおもうわよ、ザフィーラ」

「まあ、しんみりした空気をうまく振り払ったな」

「ほらほら、シグナムもシャマルもザフィーラも早く食べ」

「はい(コクッ)」「」

そして楽しい夕食が終わり、

「ほい、お待ちかねのデザート」

「フルーツゼリーやで」

「いったきま〜す!」

「これは…美味しいわ!」

「ああ…ギガウマだ!」

「喜んでもらえると作った甲斐があるな」

「主が作ったのではないのですか?」

「あはは、私はちょっと手伝いをしただけや。主に作ってたのは龍君やで」

「マジか、お前、こんなうめえの作れるのかよ!」

「まあね…孤児院でも人気だったから作ってみたんだが、喜んでもらえてよかったよ」

「さ、食べ終わったらお風呂や」

「お〜!!」

そしてみんなが交代で（といっても広いので女性人が先に入り、出た後龍士が入るといった形です）お風呂を楽しんだ後、少しTVなどを楽しんだらラインが舟をこぎ始め、ヴィータもとうとうと始めたため、この日はこれでお開きとなった

「それじゃあお休みな」

「はい、おやすみなさいませ」

「おやすみなさい、はやくちゃん」

「おやふみ…ふあ〜」

「お休み、みんな」

それぞれがそれぞれにあてがわれた部屋に行き、眠りについた

第8話 共に歩む者（後書き）

な・フ「ま、また出番がない…」

は「しかし打ちの子達、警戒心高すぎへんか？」

龍「自分が主と慕う人がいきなり若い男を家に連れ込んだんだ。そりゃ警戒するさ。というかあの約束は何なんだよ作者」

作「フラグ」

は「なんの？」

作「それは次回以降のお楽しみということだ」

な「次回は私とフェイトちゃん、どっちのほうが出番あるのかな？」

作「フェイト」

は「まさかの即答やね」

龍「まあリンディさんに会いに行くことが決まっているんだから、そうなるわな」

フ「それに、もう始まる直前だから本局で引継ぎとかしている最中だろうしね」

な「うゝゝ…なんか納得できないの」

作「その代わりなのは2人きりなるシーンが多くなるよ」

な「ほんと!？」

は「ちよい待ち!メインヒロイン私ちゃうん？」

作「あ、変更してダブルもしくはここにいる全員にガチでフラグ立てる」

フ「ならずかはどうなるの？」

作「そっちについてもちゃんと考えてある」

龍「どうするつもりだ？」

作「前書きで「ドラマCD」について触れただろ？」

4人「うん」

作「実は「1」を使うことは決めてた」

4人「ええっ!?!」

作「ほかの作者さんのところでは必ずといっていいほど使われてるからな、なのでそれに便乗しようということだ」

4人「な、なるほど…」

作「そしてこの作品を呼んでくださっている皆さん、感想はいつでも受け付けています」

は「作者はもらえると嬉しがります」

な「そういえば前話ではじめてきたんだよね」

フ「そう、ジエサスさんとその作品「魔法少女リリカルなのは」とある転成者の戦闘記録」の主人公・高町当麻さんから貰ったんだよね」

作「あまりに嬉しくて涙でそうになったよ」

龍「そして次回、『第9話 狸と炎と雷と』」

な「新たな境地へテイク・オフ」

は「狸つて…もしかしてもしかすると私のことか？はつきりいわへんとOHANASHIやで」

作「策士という意味でだ。それ以外の意味はない」

は「ふ〜ん…でもムカついたからOHANASHIや」

作「ちよ、はつきり言ったのに…あああああつ…!!」

龍「ご愁傷様」

第9話 狸と炎と雷（前書き）

龍「9話に入ってもまったく本編に入らないな」

作「それに関しては本当に申し訳なく思っております」

は「本編やと中盤にさしかかつとるのに」

フ「そうだよね、ちなみ本編のこちら辺（8〜9話あたり）かなり
改変されてるよね」

な「私が完全に悪役だけどね」

作「でも俺も見てここの読んだらお前が悪いとしか思えねえよ」

は「まあまあ、メタ的発言はそこらにして前回の説明せえへん？」

作「原因はお前ら…吸いません土下座して誤りますのでデバイスし
まってください」

龍「俺が八神家に招待され夕食をいただいた」

は「で、そこから起きるところやね」

な「ではどうぞ…！」

第9話 狸と炎と雷

翌朝…龍士はゆっくりと目を覚ました

「ん…ふああ」と

起きようと左手を動かすと何かに触れた

（ん？何だこの柔らかいものは？ふわつと言っかなんと言っかなんか…触つてて気持ちいい…）

確認しようとその触っているものの方を見てみると…寝ぼけ眼だった目が一発で覚めた。そもそも全部が吹っ飛んだ

（え？何で？何でこの人がここで、しかも俺の隣でこっち向いて熟睡してんだ？というか俺昨日ちゃんと鍵かけたよな？）

いろいろあつてパニックになっているようだ。ちなみに状況を説明すると左を上壁に背を向けて寝ていた龍士の反対側に向かうようにはやてが寝ていたのだ。あ、左手で今なお胸はつかんでます

（やばい、いろいろとやばい！！こんな状況シグナムに見つかったら間違いなく粛清される！！ヴィータも便乗してたし最悪全員が敵だ！！まず左手を離し）

「はやてちゃん、どこですか？」

（…！…！）

「リン、どうしたんだ？」

「あ、シグナム、はよてちゃんがいないんですよ」

「キッチンじゃないのか？」

「いなかったぞ」

「どこにいるんですかね」

「全部見たのか？」

「後は龍土さんが使っている客間だけです」

「でも昨日寝るとき鍵をかけていたからいないと思うが……」

「でも見てみね」とわかんねーだろ」

「そうだな、まずは開くかどうか確認してみよう」

(やばい!!本格的にやばい!!……まずは左手はなして狸寝入りしよう!!……うん、そうしよう!!……)

間一髪のところできり抜く手段を思いついた龍土……だが世の中と
いうのはそんなに甘くはない

「失礼する、龍土、主はよてがここに……」

「ん?どうしたんだよシグナ……」

「リンちゃんは向こうに行きましょね」

「えっ!?!?どういことですかシャマル?あ、あ」

配置としてベッドはドアを開けたらすぐに確認できるところにあるそして壁のほうに龍士が、その反対側にはやてがいる

つまり入ってきたシグナムたちからすればはやてが見え、その奥に龍士が見える状態である

さらに問題になるのは互いの顔の位置である。龍士は起きてすぐにはやての顔が見えた、つまり入ってきたシグナムたちからすればまるでキスをしているように見えるのである

故に…

「赤青…眠っているのか?」

殺気混じりのシグナムの声が室内に響く。ここで起きたらまずいと思って狸寝入りを決め込む龍士。しかし歴戦の猛者であるシグナムに見抜かれぬはずはなく

「ではそのまま介錯してやろう。辞世の句が読めぬことだけを悔いとしろ」

「イヤマテえええ!!とりあえず言い訳っつーか弁明だけさせろ!」

「最初から素直に起きてりゃシグナムだってあんなこといわねーよ」

「デバイス起動させて説得力もなんもねーぞヴィータ！！てかシグナム！！お前も昨夜はやてがリンと一緒に部屋に入るところを見ただろーが！！俺だって何でいんのか疑問に思ってたんだよ！！」

「だから最初から素直にそういえばいいものを」

「昨日お前らが物騒な会話してからだよ！！つか介錯って殺す気満々じゃねーか！！」

「う、うん」

耳元で、しかも大声で騒がれたためかはやてが起きたのかゆっくりと体を起こした

「うん、よう寝たわ。あ、龍君、おはよう」

「あ、ああ、おはよう…で、後ろの2人の方、どうにかしてくんない？」

「後ろの2人…ああ、ヴィータ、シグナム、おはよう」

「お、おはようございます、主はやて」

「おはよう、はやて」

「2人とも、どうしたん？朝っぱらからデバイス起動させて、物騒やなあ」

「いえ…それより主はやて、どうしてこちらに？」

「うん…なんか…なんとなくや」

「な、なんとなく」

「そんな理由で俺は朝っぱらから殺気浴びて殺されかけたのかよ…」

（龍君が好きやからってはっきり言いたいけど、言ったらこの2人やと暴れかねんから黙ったといたほうがええかな）

「と、とにかくもうすぐ出勤時間ですので準備をお早く」

「先に行ってるぜ」

「うん（おう）」

「というわけで、部屋から出て行ってくれるかな？はやて」

「あ、うんそやね…なあ、龍君」

「何だ？」

「うちの子たちが朝からごめんなあ」

「昨日の会話を思い出せば別に気にする必要はないな。というかなんでこんなことをしたんだよ。俺をからかっただけか？それともあいつらに殴らせるためか？」

「…そうやね、ハッキリと言った方がいいな。龍君」

「何だ？」

「私、八神はやては赤青龍土のことが好きです」

「えっ?」

「すずかちゃんから告白されてちょっと困つとる龍君に言うのは卑怯やと思う。でも、ちゃんとやわんと後悔しそつやから」

「……君の気持ちはわかった。ただすずかから向けられているものも無視できないし、返事もしなければいけないから君への返事もすくにはできない」

「うん、ええよ。どんな結果でもちゃんと受け入れるし、待ってるから」

「ああ、で、時間はいいのか?」

現在時刻 6:50

「ああ、あかん!!はよせえへんと遅刻してまう!!」

そう言つてばたばたと部屋を飛び出していくはやてそれを見ていた龍土は

「…朝から騒がしいな…にしてもはやてもか…なんでモテるんだろ?」

自分がなぜモテるのか疑問に思っている龍土

ちなみに理由としては

・相手がどんな人であろうと懇切丁寧かつ、自分と対等に見る（敵対者以外）

・ワイルドなイケメン

・優しく気配り上手

・笑顔がとても素敵

・相手にどんな過去や素性があつたとしてもそれを気にしたりしない（自分が気にしてほしくないため）

などといったものがあげられる…そりゃ惚れるよね

ちなみに小・中・高校と貰ったラブレターやチョココレートの数は数え切れないほどらしい（本人談）

その後身だしなみを整えて（洗顔や歯磨き、着替え）昨晚同様はやてと一緒に朝食を作り、食べた後にはほぼ全員が同じタイミンで家を出ることとなった

「はやてちゃん、今日からまた本局と地上本部の往復ですか？」

「うん、機動六課が始まるまでもう少しやからね」

「あたしはまた地上本部でひよっ子どもの世話だな。また数日は帰れねえ」

「私は医務官だから急患がない限り昨日と同じですね、シグナムは？」

「また待機とデスクワークだろうな。明日からは高町が教導に来るから楽しみなのだが」

「リンははやてと一緒にか？」

「ハイです!!」

「おめーはどうすんだ？」

「リンディさんに会って地球にある俺の残ってる私物を持ってくる。といっても中古のバイクと車だが」

「たしかに、リンディさんならそういったことにも融通を利かせてくれそうですね」

「後、協力者であることの証明書みてーなのを貰って帰ってくるってところかな」

「さよか、じゃあ数日は家にいるのは龍君とシャマルとザフィーラぐらいやね」

「ただ俺も自分の能力とかをちゃんと把握したいんだが…」

「あれが全力ではなかったのか？」

「魔力とかそういうのはな、武装とかについてはいまだに暗中模索って状態だ。どんな物がつかえるのかまったくわからん」

「たしか「武器生成」って能力がユニストスにはあつたんやっけ？」

「ああ、それでどんなものが作れるのかまったくわからないから実験もかねているいろいろやってみたいんだが…ぴったりの場所ってないのか？」

「それだつたら模擬戦室が使えるぜ。こないだシグナムとやりあった場所みたいなところ」

「そうか、ならそれを使わせてもらつとしよう」

「では、主はやて、また」

「うん、がんばってな、シグナム」

「あたしもだな」

「ヴィータもがんばってな」

「はやても無理すんなよ」

「ほな本局のほうにいこか」

「」「ああ（ハイ）です（）」「」

その後本局につき、はやてとリン、シャマルとザフィーラという組になってそれぞれの仕事場へ、龍士は先ほど教えてもらった場所へと歩いてたどり着いたところ

「ここか…：すみません、リンディ・ハラウンさんはいらっしやいますか？」

「ハイ…：あ、龍士君いつたいどうしたの？」

「実はお願いがあつてきました」

「何でしょうか？」

龍士は自分の私物の中古のバイクと車をこっちの世界に持ってこないかの交渉をここにしにきて、そのことを説明した

「ああ、そんなこと。わかったわ。すぐにやってあげる」

「本当ですか？ありがとうございます」

「地球でちょっとお世話になったんだもの、お礼しないと」

「お礼って…：そんなたいそれたことをしたつもりはなかったんですけどね」

「調整を含めると2〜3日かかっちゃうけど、それでもいい？」

「ええ、ぜんぜんかまいません。それと…：」

「なに？」

自分のデバイスの能力について教え、そのことをもう少し明確にしたいため訓練場を借りれないかという相談だった

「そう、そういうことな」失礼します「あら、フエイトさん」

「頼まれた資料を…：お邪魔でした？」

「いや、別に気にしなくていいさ。そっちの用事のほうが重要そうだからな」

「あ、ううん。ちょっとした資料と引継ぎ関連の資料を持ってきただけだから…そっちのほうが重要なことだったんじゃないの？」

「いや、デバイスの能力を確かめたいからどこか使えないのかわかるか？相談をしてただけだから」

「ううん…なら、フェイトさんと戦ってみたら？」

「えっ!?!」

「実践に勝る訓練なし、よ。昨日シグナムとの模擬戦で使ってたの以外を使えばいいんじゃないかしら？」

「ううん、それもそうですね。フェイト、頼めるか？」

「あ、うん。これ提出しちゃえば今日は仕事ほとんどないし、いいよ。それに…」

「それに？」

「私も龍と戦ってみたかったし」

「リンディさん、もしかしてフェイトも？」

「ええ、お察しのとおり、シグナムさんと一緒よ。」

ちなみに昨日の模擬戦のことはマリエル伝でリンディの耳にも届いており、自分お知り合い全員と知り合っていることも聞いていた

「じゃあ、10分後に第11訓練室で、いいわね？」

「はい」

10分後…

『それじゃあ始めます。ルールは昨日と同じ、いいわね？』

「はい」

フェイトも龍士もジャケットを展開し、フェイトはバルディッシュをアサルトフォームで、龍士は刀身の黒い日本刀（イメージとしては刀身はBLEACHの天鎖斬月、鍔と柄は普通の日本刀）を手に持っている（無論それにあわせた鞘が左越しにあります）

『それじゃあ…始め！』

「行くよ！！」

「いー！」

龍士とフェイトの戦闘が始まり、それを見守るのは母親のリンディ、昨日はやてたちから頼まれた資料を持ってきたユーノ、昨日の事態に備えて呼び出されたシャマルとザフィーラである

「すごいですね、フェイトの速度に見事ついていっている」

「あの黒い刀、出せるんだったらなぜ昨日ださかったのかしら？」

「おそらく、昨日と違って今日は準備する時間があったからでしょ

うね

「なるほど」

観覧室でそんな会話が繰り返されている間も龍士とフェイトの戦闘は続いていた

フェイトが高速でヒット・アンド・アウェイで戦うのに対し、龍士は一点に留まってそこでフェイトの攻撃を捌いていた

（あいつのスピード、めっちゃめっちゃはええ！！追っても多分無理だ…なら、こうして待ってカウンターで…）

（すごい、私のほうが速いのに、まったく動じてない…しかもあの構え、確実にカウンター狙い…だったら！！）

「フォトン・ランサー…ファイア！！」

「いつ！！」

龍士はフォトン・ランサーを右手に持った刀で次々と打ち落とし、その生じた隙に乗じて

「はああ！！」

フェイトが上空からバルディッシュをサイズフォームにして切りかかる…しかし！！

「あまい！！」

龍士は即座に刀で受け止め、押された勢いを利用してフェイトの腹に蹴りを入れる

「かはっ！！」

今度はフェイトのほつに隙が生まれ、それを逃すような龍士ではなく…

「はあっ！！！」

刀を両手で持ち、フェイトに詰め寄ると腹部と頭部に一撃ずつ入れ、撃墜したのだった

『これで終了です、お疲れ様でした』

「りょうか…ってああ！！フェイト気絶してる！！！」

『ええっ！！！！』

「間に合え！」

ギリギリフェイトを受け止めることに成功した龍士…ちなみにその格好は俗に言う『お姫様抱っこ』であった

『龍士君、後でOHANASHIがあるのですが…いいですね？それとフェイトさんをそのまま運んでください』

「わ、わかりました…」

怯えながら了承する龍士…そりゃ可愛い娘が傷つけられて怒らない

親はまったくもっていないだろう

「うん…ここは？」

「あ、フェイトちゃん、気がついた？」

「シヤマル…あれ？私？」

「龍君と模擬戦して撃墜されたのよ。覚えてない？」

「ああ、そっか…私も負けちゃったんだ」

「でも凄かったわよね〜龍君のあの動き…」

「うん、魔法での戦い方は素人だけど剣術や武術でもやってたのかな？そうじゃなきゃあの動きは説明でk「フェイト…無事か？」龍…ってどうしたの？その格好？」

「気にするな…逆鱗に触れただけだから」

「????？」

「後でバルディッシュに記録されている戦闘映像見て、観戦してたのが誰か思い出せば納得するわよ」

「う、うん…ってそれなに？」

「ん、ああ、昨日ユーノと知り合ってたさ、それで昨日行っていたことに関する資料を集めてもらって、とりあえず昨日から今日までで集めたやつをまとめたやつだったさ」

「へえ…それで、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「何だ？」

「龍つて武術とか何か習つてたの？魔法戦は素人だけど身のこなしはかなり上手だったから」

「ん、ああ、習つたというか正確には『覚えた』って感じかな…家にはそつという本がたくさん…というかそつという本しかなかったからそれを読まざるを得なかったんだが」

「へえ…でも実践慣れしてたよね」

「ははは…やっぱり喧嘩ふっかけてくるやつっていつの時代でもいるんだよね…そいつらを警察とかにばれないようなところでやりあつてたからかな」

さすがの龍士のセリフにシャルとフェイトは呆れ気味に笑うしかなかった

「で、シャル。フェイトの怪我のほうは？」

「まったく問題ないですよ。ただ脳がちょっと強く揺らされただけですから」

「さすがに俺もやりすぎたかなとは思つた」

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「いや、無事だったならそれでいいさ」

そう言ってニッコリと凄くいい笑顔を浮かべる龍士。すぐ傍でそれをみたフェイトは…

「あ、え、えっと…うん」

顔を真っ赤にして俯いた

「ん？フェイト、大丈夫か？」

そう言ってフェイトの顔を覗き込む龍士

シヤマルからすればどうして顔が赤くなったかはっきりとわかっている、しかし多少色恋沙汰に鈍い龍士からすればなぜか待ったくわからないため…

「風邪か？」

と行ってフェイトの額と自身の額をくっつける、ほぼキス寸前、よって…

「きゅ〜〜」

頭から煙を出しかねない勢いで、ボンツと言う擬音が聞こえないぐらい真っ赤になったフェイト

「お、おいフェイト？」

気絶してしまったフェイト…

傍からみていて空気化していたシャマルは

（あらあら…春かしらね…）

などということを考えていた

第9話 狸と炎と雷（後書き）

な「スターライトオ…ブレイカー!!!」

作「いきなりなにす…ギヤアアアアアアアアアアツ!!!!!!」

は「なのはちゃん…容赦ないなあ」

フ「そうだね」

龍「まあ久しぶりに出番がなかったからな」

作「次回メインの予定だったのに…変えようかな？」

は「復活早!!!」

作「ここでは神にも等しい存在ですからね」

龍「まずは感想へのお礼をさせてもらおう」

な「nukosanさん、感想ありがとうございます」

作「ちなみに質問のほうですが、今回のここで書かせてもらいます。なのはとのフラグが立っていないので」

フ「そういえば、今回で私とのフラグも立ったよね」

は「龍君すずかちゃんとも立てとったし…今後どうなるんやろ？」

作「ああ、するかもと言っていたハーレムを本格的に行う」

な「ということはアリサちゃんも立つの？」

作「うん、どこで立てるかはまだ未定だけど」

龍「俺の精神が死を向かえそうだ…というかアリサとのフラグがたつた後にしたほうがいいんじゃないか？質問の答え」

作「大筋のストーリーが考えてあるから大丈夫、女性陣だからとりあえずStrikersに出てくる予定の人とこれまで出てきた人全員分書くよ」

龍「次回の後書きがとんでもない事になりそうだな」

は「それはそうと私やすずかちゃんは告白したけど他の3人はどうすんの？」

な「私もフェイトちゃんも恋愛経験値0だから…というかはやてち

「やんも同じはずなのにどうしてこうなったの？」

作「ちゃんと原作設定を流用しただけだよ、本をよく読む文学系少女って感じだったから恋愛小説読んである程度そういう知識があるといった感じかな」

は「逆になのはちゃんはその両親やし、フェイトちゃんは結構奥手って感じやから絶対時間かかるな」

作「なのはの方はほぼストーリーができてるから、はやてたちへの返事をどうするかが困ってる」

龍「何でなのはのだけできてんだ？」

作「本編で出番が多いから結構絡ませやすいんだよ、龍士を。はやてもデスクワークの手伝いや見回り時の護衛的な感じで出せば何とかなるけどフェイトは重要な調べ物したりするから一番絡ませづらい」

は「原作設定と龍君を「民間協力者」設定にしたのが響いたなあ」

フ「うっ…」

な「何とかがんばってほしいものだね」

龍「そうだな、たたき折られるのはさすがに可愛そうだ」

作「うん、個人的にもイヤだからがんばるよ」

は「では次回、第10話『危険だらけ』」

龍「新たな空へ、テイク・オフ」

フ「感想や誤字脱字の報告など待ってます」

第10話 危険だらけ（前書き）

作「設定で明かしてなかったけど龍士の魔力光は血のように赤い深紅色です」

な「ほんとに今さらだね」

は「何度も銃撃しとるのに…遅すぎると思っで」

フ「描写しなかったツケがきたね」

龍「そういえば眼の色もなかったな」

作「実は目に関しては少し設定があるのでまだ語らないです」

は「なんや気になるなあ…普段の色は青やのに」

な「イノベーターみたいになるとか？」

フ「「SEED」を発動させるとか？」

作「なのはとフェイトは近いね、ちなみに考えていることは没にはならない」

龍「とにかく俺の目には何か秘密がある、ということだけ覚えておいてもらいたい、そういうことだな」

作「そういうこと」

な「今回は私がメインということらしいんだけど…」

作「実はもうちょい進める予定だったけどちょっと量がやばいことになったから次回にも持ち越す」

フ「いつになったら本編に入れるのかな？」

作「予定じゃ次回だ…ギリギリかもしれないけど」

龍「とにかく第10話だ、ちょっとグダ展開みたいだが気にせず読んでくれるとうれしい」

作「後書き方ちょっと変えました。こっちのほうを書きやすいので今後もこういう風に書いていきますね」

第10話 危険だらけ

Side 龍士

「しつつかし、あの後も大変だったな」

あの後リンディさんが医務室に来て顔を真っ赤にして横になっているフェイトを見て

「いったい何をしたのかOHANASHIしてくれますよね？」

といつてきて何とかシャマルの援護もあつて誤解は解けたのだが…

「確実に心証は悪くなったな…自業自得といえばそれまでだが…ただあの後外に退出させられて、もっかいフェイトにあつたらまた顔真っ赤にして…しかもリンディさんとシャマルはなんかニヤニヤしてたな…」

よくよく思い返せば学生時代にもそんな顔をしている連中がいたこともないような気がするが…気にしても仕方ないだろう。しかし困ったことといえばあれぐらいしかできそうにないことだ。あの後シャマルに言つてすぐに帰ってきてからずっと考えている。手持ちのカードは多いほうがいい、特にこれからずっと戦つていくとなればなおさらだ。それに…

「ユニストス…セイのやつはシャイだつて言つてたけどありやどつちかというところの機能が無い」のほうが正しいかもしれねえな」

バルディッシュをみていて思ったことだ。あれの能力とユニストスの能力にはまったく大差がないように思える…『武器精製』のこ

とを考えるとこっこのほうが上の気もするが、とにかく同じインテリジェントデバイスということは見当がつく。実際俗に言う『ミッドチルダ式』の魔方陣を展開できたのだから

「これまでのことを考えると俺はミッドと古代ベルカの両方が使えるって事か…はやてと一緒…でも教わることは無理そうだな」

はやてはシャマルから教わったが『一点に留まって広域魔法による殲滅』という戦い方が主らしい。ラインがいる場合は単機戦闘力も格段に上がるらしい…それを踏まえて考えるとあんどき戦った連中ってめっちゃ弱かったってことだよな？

「できれば俺の趣味のあれらの武器や技が少しでも使えれば多少は楽になるんだが…やっぱm』できますよ』ってセイ？」

そう言っつてセイが出てくる

「さすが主ですね。短期間でそこまで仮説を立てることができるとは」

「あたってんのか？」

「はい、『機能』は『ない』のではなく『封じられてる』が正しいですが」

「強力すぎる力は自らの滅びを招く。俺はそう思っているから別に問題はないが…それよか俺の趣味のあれの武器や技が使えるって本当か？」

「はい、今日ここに残りたいたいだったのはそれらを記録するため

す

「なるほど…で、お前さんを介してユニストスに転送して俺が使用できるってわけだな？」

「正確には魔導書ですが…ですが、無理なものもありますよ」

「そりゃ全部欲しくはねえよ。ありすぎると逆にやりづらいからな」

そう言っただけはこの部屋に備え付けてあった棚のほうに目を向ける。そこには俺が10歳以降嵌ったゲームや漫画、アニメのDVDなどが鎮座していた

「以外に面白い趣味をしていますよね、主は」

「あれ位しかなかったんだよ、ほっとけ」

しかし、あの中の話や武器が使えるのは心強い…全部覚えていかな。こつこの言葉もだいたいリンディさんが見せてくれた本とかで大体把握した。たった1日で把握できるとかそういうのは自分の能力に感謝スキルだな

「とにかく、発動条件とかは？」

「ユニストスを使用していることぐらいですね。ちなみに私と主はリンカーコアを経由して繋がっていますのでどれだけ離れていても大丈夫です」

「そうか…なら明日からちょこちょこ使って慣れていかないな」

「そうですね…もうすぐ夕食の時間ではありませんか？」

「そうだな…飯でも」ただ今帰りました」シャマルか…ちょうどいいから約束果たしちまうか」

俺はセイを伴って降りていく。ちなみに持ってきたのは上記のやつと服だけだ。それ以外はリンディさんに頼んだやつぐらいか、こつちでも使い道がありそうなのは。ほかのは無題にでかかったりなんだりで置いてきたが

Side 龍士 Out
Side シャマル

少し時間がかかったけど何とか帰ってこれたわ。はやてちゃんとも少し会って話したら今日は少し遅くなるが帰ってはこれるらしいけど、シグナムとヴィータちゃんは無理だと念話で連絡されたわ…そうだわ、龍士君はもう帰ってきているはずだからお料理を教わってははやてちゃんをびっくりさせましょう！うん、そうしましょう！

「シャマル、帰ってきたのか、おかえり…ザフィーラは？」

「あら龍士君、ただ今。ザフィーラははやてちゃんの護衛に付くつて」

「そうか…ともあれ、お帰りだ、シャマル」

「セイ君もただ今。」飯はどうされました？」

「まだだ。だからシャマルに教えようと思ってな」

「えっ…あ、ありがとう！！実は私も教えて欲しいなと思っていたところなのよ」

「じゃあとりあえず準備してくれるか？」

「ハイ、ちよつと待っててくださいね」

そう言つて私は管理局の制服から私服に着替えてエプロンをしてキッチンに戻ってきた。龍土君はすでにエプロンをしているからすぐにでも料理できる状態だ

「では先生、お願いしますね」

「ああ…できれば先生じゃなくてそのまま頼む。むず痒い」

「はい」

そうして私は龍土君に料理を教わることになった

Side シャマル Out

Side セイ

主がシャマルに料理を教え始めた。私の記憶に残っている彼女の料理は出来がよくても人が最低3日は寝込むほど、最悪だと致死量の毒と代わらない威力を持っていたような気がする。しかし、主の料理の腕前は確かだろう。地球にいたときに朝と夕を頂いたがこれほど美味しい料理があつたのかと思うほどだったな

「だああ！！何でんなもん入れようとしてんだよ！！」

「疲れているときには漢方って聞いて…」

「確かに薬膳料理とかあるがそれはまず普通の料理ができるようになってからだ！！それ以前に料理の基本、知ってるのか？」

「えっ！？料理に基本ってあったんですか？」

「そこになおれ、一から叩き込んでやるから」

どおやらシャマルは基本ができていなかったようだ。それをまず教えてそこからということらしい。確かに基本は重要だな。主もトレーニングは基本に重点を置いている。建物とかと一緒にだ。基盤がもろいとその建物はすぐに崩壊してしまう、そうしないためには基盤をしっかりとする。人も同じだ。基礎や基本ができぬうちに応用をやるうなど愚かなことこの上ないのだから…

それからしばらくして、キッチンのほうから何度か主の怒号兼突込みが何度も聞こえてきたがどうやら完成したらしい。そしてテーブルの上に並べられた料理を見て私はびっくりした。何せこれまでのシャマルの料理とは色も匂いもまったく違ったのだから

「ふふ、どう、セイ。見直した？」

「ああ、主はやはりすばらしい方だという意味だな」

「どういうことかしら？（頬びくびく）」

「お前が料理してできたものはみな危険物だったのに、ここまで修正したからだ」

「うっ…（多少は自覚があるため反論できない）」

「俺も味見したが、これが普通だ。おそらくシャルルの料理を知っている面々からすれば『美味しい』の部類に入るだろうが…」

「龍士君まで…」

「とにかく、食べましょう」

「そだな」

「せうの」「頂きます」「」

そうして我々は主指導もと作られたシャルル作の『ホワイトシチュー』を食べる…これは…!!!

「うまいな…いい具合に野菜も肉も煮えている」

「ほ、ほんと？」

「嘘を言っただろう。こっつもの感想は素直に言ったほうがいいだろう」

「よ、よかった」

「はやてたちもびっくりするんじゃないか？」

「そうね…明日の朝が楽しみだわ」

それから私たちは昨夜と同じように行動して就寝した。主がドア

のところになにやらやっていたが気にする必要はあるまい…

Side セイ Out

Side 龍士

「どうやら今朝ははやての襲撃は免れたらしい。する気はないと思えるが用心するに越したことはないだろう。そして起きてセイを起こして下に行く（昨日はずっとここに居たいと言っていたので起こさなかったが今日は何も言われなかったので起こした）そして食卓のほうに行くとはやてとライン、シャマルがすでに居た

「龍君、セイ、おはよう〜」

「龍士さん、セイさん、おはようございませすです…!」

「龍士君、セイ君、おはよう」

「おはよう、みんな。それともう少し待っていてくれ。すぐに準備する」

「おはよう、夜天の主、ラインフォース？、シャマル」

「ラインのことはラインでいいですよ〜」

「私のこともはやてでええよ〜」

「…了解した」

俺が昨日の朝と同じことをして朝食を食べた（ちなみに昨晚シチユーを食べて俺が作ったのかと聞かれたがシャマルだということ心底

びつくりしていた…そんなにもムゴかったんか？）後、地上本部の訓練場を使わせてもらい、昨晚セイから教えられたものを少しずつ試していく（ちなみに許可はシグナムが取ってくれた）

「よし…こんなところか」

大体のところが終わり、シグナムに礼を言って家に帰る（これをやってもらったので模擬戦を挑まれたら受けてやろうと思ったのは内緒だ）。これを数日繰り返し返したある日の昼の地上本部の食堂…

「龍君、ちょっといいかな？」

「ん？よお、なのは…そういやシグナムが教導でお前がこっちに来てるって言ってたな」

「うん、それでね、ちょっとお願いがあるんだけど…」

「お願い？」

「うん、実は龍君のことちょっと噂になってて…それでねちょっと私の教導に参加してくれないかなあ…って」

「かまわねえよ…教えられることなんか皆無と思うが」

「じゃあ後でね、あ、場所は（地図をモニターに表示して）ここだから。わからなかったら人に聞いてね」

「りょーかい」

その『お願い』…断ればよかったと俺は後々心底後悔することに

なる

1時間後…

「おい…なのは」

「なに？龍君」

「俺は確かに教導に参加するとは言った…だが何だ？この状況は？」

俺の前にはなのはしかも周りには観戦客、もといなのはの教え子とシグナム、ヴィータだけでなくなんかお偉いさんもいる雰囲気だ。実際にユーノもいるし…ほんとに本局と陸って仲悪いのか？

「どういふことかきつちし説明してくれるか？」

「え〜と…実力がみたいという上からの」

「もういい、わかった…お前も大変だな」

「勝っても負けても龍君のほうが大変になると思うよ」

「なん…ああ、はやてやユーノから聞いてたこと忘れてたわ」

「そついうことだから…ユーノ君からは何か聞いた？」

「一応全部、かな。お前さんの8年前のこととかもな」

「そつ…でも加減はまったくいらぬよ」

「『いつでも全力全開』それがお前さんのスタンスとも聞いているからな…じゃ、準備はいいか？」

「いつでも!」

『では、教導用特別模擬戦闘を開始します…始め!』

「おお!」

俺は声を張り出すとともに抑えていた魔力を放出する。それと同時に武器を作り出す。今回の相手であるなのは『射撃型』という情報が事前にあつたためそれにあわせたものにさせてもらおう。左手側には『00』に出てきた『ダブルオーガンダム』の『GNソード?』を、右手には『00V戦記』にでてきた『ダブルオーガンダム7S/G』の『GNソード?ブラスター』を装備する。と、同時に「アクセルシューター!」

Shoot

なのはから攻撃が来るが…

「あまいな」

俺はその中に突っ込むようになのはのほうに向かっていく。これにはなのはも驚いたのだろうが、咄嗟に周りにある弾を操作して俺のほうに向かわせる

(誘導操作付きか…でもあまいのに変わりはねえな…動きが単純すぎる…!)

俺は必要最小限の動きでなのはからの攻撃を避けつつ接近していくが、なのはもすでにそれを読んでいたらしく…

「デイバイーン…」

「は？」

「バスター！！」

(直射砲！？だけど、周りには何も無い…それなら！！)

Side 龍士 Out

Side なのは

アクセルシューターの中に入ったときは驚いたけど、後
は私の思惑通り。動きを最小限にさせてそこに砲撃。撃墜レベルに
はいかないだろうけど少しはダメージを…

Master!!

「えっ！？」

レイジングハートからの警告にも近い呼び声の後私のそばを赤色の砲撃が飛んでいった。しかもそれだけじゃ終わらないで2発、3
発とどんどん飛んでくる

「！！レイジングハート！！」

Protection Powered

守るために発動させたけど、そんなことお構いなしに射撃は続く。しかも一撃がかなり重たく、維持するだけでかなりの魔力が奪われる。でも、これはチャンスかもしれない。着弾で私の周囲には煙が出ているから…

Side なのは Out

Side 龍士

なのはにデイベインバスターを『GNソード?』を投げて盾代わりにすると同時に爆煙が上がり、俺はそれに乗じて少し空に上がった。『GNソード?バスター』でなのはに射撃攻撃を行う。無論防がれたがこれでいい。なのはは威力はあるが機動力はフェイトよりも低く、おそらく接近戦も不得手だ。防御力は高いようだが、それに対抗する手段もすでに俺は見つけている。そのための武装を俺は両腰に出現させる

『GNショートブレイド』と『GNロングブレイド』

この2本は刃の表面がAMFで覆われているようで実際にセイのシールドをあっさり切り裂いた。そして俺はこれを各2本ずつ両腰にセットする。これで準備は万端…

「さて、なのはは…」

「エクシード・ドライブ!!」

Drive ignition

なのははどうやら先ほどのよりも戦闘力に特化したタイプになっ

たようだ。しかし…

「はあ！！」

俺の接近を放置しておいたのはあまいことこの上ない… 一気に決めさせてもらおう！！

Side 龍士 Out

Side なのは

エクシードモードを使うことになるなんて… やっぱりフェイトちゃんやシグナムさんを倒しただけのことはあるな… (注：フェイトは全力の真・ソニックフォームを使ってません) でも、負けられないもんね！！ 私のほうが先輩だし！！

接近してきた… 武器もさっきと変わって長い剣と短い剣を2本ずつ腰さしてる… 明らかに接近戦試用だ。今突っ込んできていることからそれはもう明らかだ… なら私のとるべき方法は… 進路上に全力の砲撃！！

「エクセリオン… バスター！！！！」

龍君に向かって私の魔力光に彩られた極太の砲撃が龍君に向かっていく… その瞬間、龍君は信じられない行動を起こした

Side なのは Out

Side 龍士

なのはから砲撃が放たれる… それは俺が今まで喰らったことのないサイズ(まず砲撃を食らうこと事態がめったにないが)

対処法すでにある、俺は両腰の『GNロングブレイド』2本をその砲撃に向かって投擲する。表面にはAMF効果が付与されているためなのは砲撃をはじいていくが、どちらかと威力を落としているといったほうが正しいかもしれない。だが威力が落ちれば何も問題は無い。俺は残った『GNショートブレイド』を両手に持ち、なのはのほうに突っ込んでいく。無論砲撃は残っているから『ショートブレイド』を正面にクロスして残りの砲撃をはじき、なのはの正面に出る

「にゃ!？」

なのはが驚いたので、その隙に乗じて杖(まだ名前を知らない)を左手に持ったほうで弾き飛ばして右手に持ったほうを首筋に突きつけ

「チェックメイト…なのは、お前の負けだ」

試合を終了させた

Side 龍士Out

Side なのは

今私は地上本部の休憩室にいる。まさか…というかやっぱり負けちゃった…強いなあ、龍君…でもどこか手加減していたように思える。だって最初のデイバインバスターの時点であれをやられていたら私はあの時点で負けていたはず…しかもそれだけじゃない、攻撃の仕方もさせ方もまるで私に負担がかからないようにされているみたいだった…まさかね、そんなはず…ないよね

「なのは」

「あ、龍君…どうしてここに？」

「とんずら」

「あはは…でも何で？龍君の実力だったらはやてちゃんと同じかそれより上の階級から始められるのに…」

「ん、ああ、俺は管理局（こく）に協力する気はあれど所属する気はない」

「何で？」

「正義を語っているのが気にいらねえからだ。というかお前とユーノの勧誘なんてもろ詐欺だろ。本人も認めだし、ユーノもうすうすう感じてたあ言ってたがな」

「…でも私は」

「今のお前を否定する気はない。だが、お前は体のどこかに故障か、もしくはちょっと体調を崩している。他の奴からはわからないよう功名に隠している、しかもそれは体の中心辺り…おそらく8年前の怪我の後遺症だろうな」

「…よくわかりましたね」

「ちゃんと隠してたつもりなんだけどな、なんでばれちゃったんだろ？」

「俺も無理なトレーニングをしたことがあってな、体を壊しかけた

「ことがあるんだ」

「そうなんだ…でも後遺症や怪我の残りの類って何も無いようだけ
ど…」

「ああ、一応治療法あったからな…やってやるつか？」

「えっ！？そんな簡単にできるものなの？」

「まあなのは体の状態にもよるが…マッサージの類だよ…ただ…」

「ただ…？」

「結構痛いというか辛いものがあったな…」

「…叫び声とかあげないの？」

「声にならないものがあがるな…てかあげたな…それでもいいか？」

「…うん！みんなに迷惑かけたくないから！！」

そういうと龍君の顔が一瞬曇ったように見えたけどすぐに私のほ
うを見てできれば防音でベッドのあるところと言われたので私のと
こに招待した

Side なのは Out

Side 龍士

俺はなのはの体に不調があっさりと見抜けたためそれを治療しよ
うと何とか勧誘の嵐を抜け出してなのはに会いに行った。それで治

療に適した場所を聞いたら「今日はもうお仕事終わりだから」ということでなぜか家に招待された…こいつは危機感とかそういうのがないのか？

「んじゃ、いくぞ〜」

「よ、よろしく願います」

それで俺はなのはへマツサージを行った…思っていたより体の調子は悪かったようだ、かなりひどい…が、このマツサージなら何とか全快させられる。ただ明日1日安静にしていることが絶対条件だが…最悪このままベッドにでも縛り付けておけばいいだろう

1時間後

「……………」

完全に脱力しきつたなのはとどこか満足しきつた俺がいた。弁明のために言っておくがなのはにはラフで露出の少ない格好をしてもらったし、真正面からのマツサージはまったくやってはいない。

「とりあえずはやてというかシャマルには嘘をついてここに居させてもらったほうがいいな、こいつ無茶しそうだし、ちょっと聞きたいこともあるし」

そう思って俺はシャマルに念話をつないで事情（嘘8割、真実2割）を説明して今日はなのはの家に泊まるといった。そして少しキッチンにある食材を拝見するとちょうど量が程よくあったため、後で謝罪することを決めて食事作りを開始する

2時間後

「う、うん…」

なのはが目を覚ましたようだ…体の調子のこととかを説明するために俺は傍に行く

「よお、目え覚めたか…調子はどうだ？」

「うん…あ、やってもらっ前よりだいぶ軽い感じ!！」

「そうか…だが、俺がやったのは応急処置に近いんだ」

「え、そうなの？」

「ああ、だから明日1日は休暇をとってゆっくりと休んでもらいたいんだが…」

「そうしたら体の調子はもっとよくなるの？」

「ああ、というかちょっとレイジングハートに聞いたんだが…お前働きすぎだろ、1ヶ月の間に合計して休みが4日しかないっていつの時代のサラリーマンだよ」

「には「笑って誤魔化そうとスナ。こういうことをするって言うことは何かしら理由があるが…お前のはちょっと根っこが深そうだな」…」

「まあ、見ていればなんとなく理由はさっせるがな」

「え!？」

「お前：自分が魔導士じゃなくなったり、魔法が使えなくなったら今まで知り合った全員が自分から離れていくと思ってるじゃねえのか？」

「そ、そんなことないなんて何ですぐに言えないんだ?」…」

申し訳ないが畳み掛けさせてもらう。昔の俺みたいだからほつけないし、何より救えそうな奴を救わないのなんて絶対にイヤだしな

「お前は心のどっかで自分を律している。自分がしつかりしてないと他の人は自分を捨てていってしまうんじゃないか?お前の周りにいる奴は、俺の見立てじゃそんな薄情な奴は1人もいない。フェイトもはやても、守護騎士の連中も、みんなお前のことを見捨てない、お前がどうなるかと…無論、俺もな」

「…どうして…どうしてそんなこというの?あつてまだ間もないのに、どうして…」

「昔の俺みたいだからだよ…俺も昔はお前みたいにしていないと両親から捨てられるんじゃないかと思っていたときがあった…誤解だったがな、それで傷ついているのを知った、だからわかったんだ…」

正直に言う…へんに誤魔化すより、ちゃんとやってやったほうが聞き入れてくれそうだからな

「だからこそ、見捨てない!!俺が救ってもらったように、お前を救ってやる!!!だから…本当のこと…話してくれないか?」

俺がそういとなのはは俯いてしまった…言い過ぎたかと思ったとき、なのはの口から自分の今までのことを語られた…5歳のころに父親が瀕死の重体でなのは以外の家族が忙しく、かまってもらえず「いい子にしていなければいけない」というのが今のなのはを作り上げたようだな…というから5歳で親に我侷がいえないって…ドンだけ辛い思いしてきたんだか…そう思ったときには俺はなのはを抱きしめていた

「もう…いいんだよ…我慢しなくても」

「えっ?」

「辛い思いとかそういうの…全部吐き出せよ…俺がちゃんと受け止めてやる…いつでも、どんなときでも…だから…吐き出せ…全部」

「う…う…う…うあああああゝん」

そういとなのはは俺の胸に顔をうずめてないた…今までの気持ちを吐露するように…それで料理が一部焦げたりしたのは内緒だけどな…ちなみにセイはなのはとの模擬戦の後すぐに帰っちゃまった

第10話 危険だらけ（後書き）

フ「雷光一閃：プラズマザンバー！！！！」

は「響け終焉の笛：ラグナロク！！！！」

作「またかよおおおおお！！！！」

龍「自業自得」

な「でも意外と中途半端なところで終わったよね」

龍「次回冒頭を想像すると俺は笑えないんだが…」

作「その不安：現実になる可能性になるほうが高いから楽しみにしてるよ」

な「相変わらず復活スピード速い…」

フ「そういえば質問の答えやらなくていいの？」

は「その前に感想のお礼言わなあかんのとちやう？」

作「前回の感想はもらってないから…（泣）」

作「それは龍士自身に答えてもらう。とりあえず今回までに会話をした事のある女性陣だな」

龍「わかった…とりあえず以下の感じかな」

はやて：かなり可愛い。家庭的だから将来性もいい

フェイト：スタイルよし、器量よしの優良物件。ただ家族は…

なのは：心の闇を抱え込むタイプ、ほおって置けない

すずか：おとなしい子かと思ったら意外と大胆だった、逆玉

アリサ：ツンケンした感じだが実際は心優しい子

作「異性的という感じですがそれは告白してきた人はそういう風に見ますね、龍士は…ただ女性と付き合ったことがないので不慣れです」

は「ほう…ということはかなりチャンスがある、と？」

作「そう、でも龍士自身は今後なのはとの絡みが一番多いと思う」

フ「でも、みんなちゃんと告白するんだよね？」

作「うん、告白は女性陣から決めてる。ただフェイトとアリサだけまだタイミングを決め切れてない」

は「ああ、ほとんど絡みがないもんな」

な「私はどこら辺で…？」

作「それはネタばれになるから内緒。でも自覚するのは結構速い、これだけ言っておこうかな」

は「それでは次回『第11話 集う仲間たち』」

作「ようやく本編入ります…ただ、カットできるところはカットしていきますので、そのおつもりで…！」

龍「新たな場所へ、テイク・オフ」

第11話 集う仲間たち（前書き）

作「今回から本編にはいるぜ〜!!」

龍「以外に時間かかったな・・・」

は「今回から一気に行けるかもな」

フ「それともうひとつお知らせがあるんだよね」

作「はい、基本的に更新は一般的にお休みとなっている日になります」

な「土日と祝日ってことだね」

作「+その日に何も用事がない場合、バイトとかあったらそっちを優先する」

龍「つまりこれを更新する可能性は0ということか」

作「それで次回からアリサとすずかも出そうと思うんだが・・・」

な「いいんじゃないかな」

フ「いいとおもうよ」

は「私もかまわへんよ」

龍「アンケートとかにしたらどうだ？」

作「感想も1話につき一人貰えればいいような小説だぞ!!期待して落ち込むのはイヤだからやらん!!」

な「切実だね」

フ「へたれって言うのかな」

作「フラグへし折るぞ貴様ら!!」

な・フ「やれるものならやってみなよ（目が単色&デバイス機動）」

作「どうも申し訳ありませんでした」

は・龍「弱!!」

な「とにかく、第11話始まるの!!」

フ「楽しんでくださいね!!」

第11話 集う仲間たち

Side 龍士

なぜだ…なぜ俺となのははやてとフェイトに正座させられているんだ…しかも後ろに般若が見える…とりあえず回想してみよう

回想

とりあえずなのはを泣き止ませて、顔が少しくシャクシャだったので顔を洗わせてその間に俺は食事の用意をする

「あ、食事は…つてもうできるの!？」

「ああ、お前が気絶(?)している間にな。勝手に食材も使わせてもらった。もし問題が「う、ううん!!ないない!!むしろ御もてなししなきゃいけないのに…」気にするな」

あんなに疲労がたまつて抜けたばかりの人にあまり無理をさせるわけにはいかないし、俺も料理は好きだからね。口に合うといいんだが…

「ま、食べようぜ。さめると美味しさ半減だからな」

「うん、じゃあ…「頂きます」」

とりあえず俺は自分が造ったもので軽く味見をしているから気にはしないがやはり他人の評価は気になる。なのはのほうを見ていると…

「……………」

「…無言で食べられるとさすがにへこむんだが…」

「にゃ!?!…あ、ご、ごめんなさい!…」

「いや、謝らなくても…」

「あ、え…えつと…美味しいね!…」

「ほんとか?」

「うん、味付けもしつかりしてるし、お店とかに出しても遜色のないレベルだよ!…」

「そう言われると嬉しいな…まあはやてたちにも好評だったからあんまり不安はなかったんだが」

「はやてちゃんたちにも振舞ったの?」

「居候させてもらっている身だからな、このくらいはしねーとな」

「そうなんだ…」

なぜ落ち込む…いや、そんなことよりも言わなきゃならないことがあるな

「それとなのは、1つ言い忘れてたんだが…」

「なに？」

「レイジングハートに言ってお前、明日強制的に休みにしてもらったから」

「…ええー！」

「俺のやったマッサージ、あれで体調完全に整えるには翌日休まなきゃだめなんだよ。それを言ったら…」

「レイジングハートがしちゃったってこと？」

「ああ、まあ有給たまってたし代わりの人の手配ももう完了しているらしいから、明日はゆっくり休めよ」

「…わかった」

あれ？意外と素直だな…もうちょい駄々こねられたり食い下がられたりするかと思っただが…

「その代わりに…」

「なんだ？」

「明日…一緒にお出かけしてくれる？」

「…いいぞ」

「ありがとう…！」

めっちゃいい笑顔だな…やってよかった、お節介かけてよかったと本当に思えるよ…だが俺はこの後起こる事態を想定していなかった…

食事も終わり、風呂も貸してもらった後、寝るということになって気が付いた。なのはの家…客間らしいもの見たらない…まあ一人暮らしようだからそれもそうだし、俺は一人暮らしの時ベッドに入らず寝てしまったことが多々あったからそういう風に寝ようと思っただが…

「龍君…一緒に…寝る？」

こいつは本当に危機感というものがないのだろうか…ちょっとこいつの親の顔が見てみたい

「なのは…おまえ、意味分かって言ってるのか？」

「へ？寝るだけだよ…それにお客さんをソファーに寝かせるなんて悪いし…」

初心だ…この子…超初心だ…というか貞操教育どうなってんだ…

「だめ…」

…涙目+上目遣い…しかもなのはのように可愛くて綺麗な子にやられたら反抗するきなんざ起きるはずもなく…

「すすす…」

マジで…ほんとにこの子の精神構造どうなってるんだ…男がすぐ

隣に居て熟睡とかつてうおお！俺の右腕にしがみついできやがった！！そうなるやと女性の象徴があたり、感觸まではつきりと分かる…マズイ…はつきり言つて超マズイ…理性が崩壊するのも…時間の問題…これを解決するには…

そこまで考えて俺は意識を手放した…どうやら極度の緊張と疲れが原因と分かつたのは翌朝目覚めてからだつた

ちなみにその翌朝も似たような状況だつたが目覚ましがなつたおかげでなのはが起き、状況が分かると「に、にゃああー！」というわけ分からん叫びとともに俺に砲撃を打つてきた…俺じゃなかつたら大怪我だな、あれ

「うづ…ごめんね、龍君」

「自覚なしたつたからいいが今後は…な」

「ごめんなさい」

今は朝食中。無論毎朝すべきことはしてある。そしてこの後どこに行くかだが、最近できたショッピングモールに行くこととなつた。なのは車を持っていながつたが、数日前リンデイさんから届けてもらった車を取りに地上本部のほうに来たのだが…

そこでフェイトとはやてに見つかり、冒頭へと戻る

回想終了

「で、説明してくれるかな？」

「うん、なのは、ちゃんと話してくれば何も文句なんてないよ」

こええよ、後ろに般若が見えたり、フェイトにいたっては重力に逆らって髪の毛が逆立ってる…そして周りの奴ら、目をそらすな、助ける…あ、ヴィータ、シグナム、ちようどいいところに…！

「赤青…気を確かに…な」

「がんばれよ」

何が!?というか見捨てられた!?なのはのほうは怯えきってて話ができそうにないし…正直に言うとなんかひと悶着ありそうだが…言うしかないか

「ちゃんという…ただ、それで文句言うのは無しな」

そう言っただけ俺は昨日の模擬戦の後のことを一部始終はなした…無論、なのはに何度か変な視線がいったが徐々になくなり、最後にははやはりちよつとびっくりした顔をしていた

「まあ、というわけだよ」

「うん、ならしょうがない…かな」

「うん、最後のほうはちよつと聞きづてならんけどまあ目つぶるわ」

何で聞きづてならないんだよほおっておいてやれ…も危険だな。こいつ際限なく無茶するタイプみたいだし

「だから俺らは今から出かけ…って何してるんだ？」

「え？休暇申請だよ（やで）」

「当日休みってできるの？」

「たまってるから」

お前らもか…ま、2人つきりよりも多少は楽しい…ってなのは…
なんだその目は

「…ふえ！？なんでもないよ！！」

なんでもないならいいか…とにかく、行くか…

- 10分後

「何でお前らまでいるんだ？」

車がおいてある駐車場、場所をあの場で確認したからはやて、フ
イトが知っててもおかしくないが…なぜに私服？しかもなのは同
様結構可愛目の（なのは、フェイトの私服は漫画版Striker
Sの休暇のときの、はやても似たような服装です）

「わ、私も服欲しかったし、休暇もう取っちゃったし…」

「私もや！！」

結構上機嫌だな…というかなのはの機嫌がちよつと悪そうだが…

「ま、休みを取るのはいいいことだからな」

「わ、私はちよくちよく休んでるよ」

「私は六課関係でちよお忙しかったから…」

「おめー数日前に休み取ったくせにか？」

「昨日ようやく落ちついたんよ!!」

「で、正式始動はいつからだ？」

「もう数週間後、地球で言う4月末ごろやね」

「まあいい、それが始まったら休む暇はほとんどないだろうから、今日は楽しもう」

そう言っ て俺たちはショッピングモールに行った

Side 龍士 Out

Side はやて

最初龍君となのはちゃんが私服で仲よさそうに歩いとるのを見てまだ返事もらってないとはいえやっぱりええ気はせえへんかったな…でもちよつと話を聞いたらやつぱりなのはちゃんちよつと無理しとつたみたいや…というかたつた一度の手合わせで見抜くなんて龍君すさまじいなあ…でも私らは過去知ってるから下手にできへんから…そや、民間協力者やけど龍君にはなのはちゃんの教導の補佐をしてもらおう!! ヱィータだけじゃ不安やしな

「なあ龍君、なのはちゃん」

「なに(なんだ)、はやて(ちゃん)」

ちなみに今はシヨツピングモールにむかつとる最中で、運転手は龍君、助手席にフェイトちゃん、龍君の後ろ側がなのはちゃん、その隣が私や。じゃんけんで決めただけどフェイトちゃん強いな、なのはちゃんも…

「どうした？」

「ん、ああ、ごめんごめん、実は龍君に、なのはちゃんの補佐をしてもらいたいんよ」

「補佐？」

「うん、実は今度の部隊は新人さんが多くて、なのはちゃんにはその指導を行ってもらうんよ、それで、龍君にその補佐を頼めたらなあ、って」

「何で俺なんだ？教官やつてるヴィータの方が適任じゃないのか？」

「もうヴィータがやることはきまっとるんよ、で、今日の様子見て龍君にもやつてもらおうかな」と

前方の2人もなんか納得しとる…隣でなんかなのはちゃんが言うてるけど無視や…これ以上友達に傷ついて欲しくなんかないからな

「頼むわ、龍君。なのはちゃんにこれ以上無理されて体壊されたら…」

「はやてちゃん…」

なのはちゃんもさつき龍君が自分の体がどういう状態か私らに言ったから多少自覚も出てきた見たいやね

「私は受けたほうがいいと思うよ。今後の指針にもなるだろうから」

「あゝ…俺今回の件が終わったら地球に戻るつもりだったんだが…」

「「えっ!?!?」「」

「だって正義のために戦うなんてイヤってかさ、言ってることとや
つてることがめっちゃくちゃな組織に誰が好き好んで所属するかよ」

「どづめちゃくちゃなん?」

「ロストロギア古代遺失物は即時回収がモットーなのに、なんでなのはとフェイト
トがあつた事件はあんなに遅かつたんだよ」

「「!?!?!」「」

「…誰から聞いたん?」

「一番資料手に入れやすい当事者」

「…他には?」

「正義には対立すべき悪がいる、なんかの本で読んだんだけど正義
の味方になりたがっている奴に対してそういう風に言った人がいる
んだよ」

「管理局は自分らの正義のために『悪』をつくつとるゆー事か？」

「第一フェイト、お前の家族が死んだのだって『事故』にされてるけどありゃ『殺人』だぞ、巧妙に隠された」

「えっ…」

「資料見たけど、そこ書いてあるのは『材料による事故』としか書いてない、でも材料が原因だったらその材料がどこにどんな風に使われたのか普通は書くはずだ。他のはそうだったからな」

「そ、そんな…」

フェイトちゃん…相当シヨク受けとるな…無理もないわな…自分の家族を奪ったのが自分が所属しとる組織やったなんてな

「でも安心しろ、その事は既に信頼できる人たちにこっそり教えてある」

「…誰？」

「お前の母親のリンディさんと兄貴のクロノ、それとレティ提督だな」

「他には報告していることあるの？」

「お前らがかかわったことは全部な、もともと多少調べてあったから結構短期間で終わったな」

「でも誰かが処罰を受けたなんて聞いてないけど…」

「当たり前だ。今ここは少し危険な状態だ…だから時機を見て発表してくれといってある」

「とにかく、いろいろ裏で悪事をやってる人たちはどのくらいそうなの？」

「本局と地上本部含めると6〜7割はいる気がするな…あのレジラス中将とか言う人も裏でなんか危険な橋を渡っていきそうだな」

「あつたん？」

「じじじきにスカウトしに来たよ…きな臭い感じがしたからオブラートに包んで断ったけどな」

ちよ…ちよっと暗い感じになってまったな…まあ私が悪いような気もするから何とか話題変換してみな…

「そういえば数日後六課に誘おうと思うとる子達の魔導士ランク試験があつてそれになのはちゃんが設置監査、ラインが試験監督、私とフェイトちゃんはヘリで見る予定なんやけど龍君もどや？」

「そだな、仲間の实力を見ていくのはいいな」

「でもそのヘリって2人乗りだよ、はやて」

「ああ、補佐の前哨としてなのはちゃんの補佐してくれればええよ」

「ん…私のほうも話せばできると思うから大丈夫だよ」

「なら何も問題ないな…と、着いたぞ」

その後私たちはショッピングモールで買い物したんやけど、なのはちゃんもフェイトちゃんも龍君と腕を絡ませたり手をつなごうとしとったけど龍君にはうまく避けられとった…でも服を選んでもらつたな、あ、私も選んでもらつたで。でも龍君が服ないようなことを言つたから私らで選んだつた…結構楽しかつたな

Side はやて Out

Side 龍士

今日なのはたちとショッピングしてそのまま皆送っていつてはやての家に帰ってきた。シャマルが料理を作っており、久しぶりに全員がそろつて食べたなら初めて食べたらしいヴィータとシグナムは心底びっくりしていたな。ちなみに直したのが俺だと知ると自分たちも覚えたいといつてきた。時間ができたら教えてやるとしよう

それから数日たつて俺はリインと一緒に地上に行つてなのはと合流、俺はそのまま一緒にターゲットとサーチスフィアの場所のチェックをした

そして試験が始まつた…受けているのは『スバル・ナカジマ二等陸士』と『ティアナ・ランスター二等陸士』…数日前になのはとヴィータで直に引き抜きに行つたらしい。格闘系と射撃型…なるほど、バランスはいいな

しかし…スバルというほうはちよつとお調子者の用だ。油断しやすいつつべきか？とにかく、後ろにアタックターゲットにいるのが気づいていない…しかしパートナーであるティアナという子が気がついたようで、射撃をするが、ちよつと狙いが曖昧…いや、足元

で何かに引つかかったな…大丈夫か…って

「おいおい…サーチぶっ壊しまったぞ」

「まあ事故だから…ね」

「でもよお…」

「まあでもこのままじゃまずいし…見に行こうか」

「………そうだな」

そう言っただけ俺はなのとともにバリアジャケットを展開して彼女たちのゴールのほうに向かっていく

それからしばらくして、足をくじいたであろうティアナを背負い、スバルが猛スピードで走ってくる

「時間は？」

「後16秒…！ギリギリ間に合う…！」

「よおし…魔力全開…！」

「バカ…！スバル、止まるときのことを考えてるの…！」

「へっ…きゃああ…！」

「うっ、うわああ…！」

「アクティブガード、ホールディングネットでいいかな」

「俺は風を起こせるからあそこに弱い上昇気流を起こそう」

ドーーーーーン！！

ふと上のほうを見るとヘリから乗り出して夜天の書を広げている
はやてと魔法を発動準備をしているフェイトがいた

《こつちで何とかしたから大丈夫だ、ヘリの中に戻ってスカウトの
準備でもしておけ》

《了解や》

《じゃ、後でね》

《ああ》

念話を終えて下のほうを見るとリインがティアナに治療を、なの
はとスバルはどうやら感動の再開のようであった

「しっかし危なっかしいコンビだな」

「「あ、龍士さん（君）」」

「リイン、治療のほうはどうだ？」

「あ、はい、もう大丈夫ですよ」

「あ、ありがとうございます」

「あの…あなたは…」

「ん、あ、自己紹介してなかったな。俺は『スバル二等陸士、テイアナ二等陸士終了していただきますので早急に戻ってきてください』お呼びがかかったな、早く行きな」

「は、はい！」

この後俺はなのは、ラインを手伝って試験結果をまとめ、その連絡のために彼女たちがいる部屋に行くと、そこにははやとフェイトがスカウトしている最中だった

「あ、ごめん。おじゃまだった？」

「ううん、今終わったところやから」

「試験結果でたの？」

「ああ」

2人が緊張した面持ちになる。説明は全部なのはに任せた…という俺が説明できることは皆無だ。だからはやてたちのほうに向かっていった

「1週間再指導受ければもう一度受けられるから、がんばってね」

「はい！ありがとうございます！！」

「部隊のほうの返事もそれが終わってからでええよ」

「また落ちました〜じゃ話にならないからな」

「はい！…で、そちらの方は…」

「ああ、すまん。自己紹介がまだだったな、俺の名前は赤青龍士。お前たちがスカウトされた機動六課に協力する民間協力者だ」

「み、民間協力者が新設部隊に協力するんですか？」

「ん？協力者がどこにどんどころに協力しようと思ったく関係ないだろ、『管理局』の『民間協力者』なんだからな」

「無茶苦茶ですな…でも実力はあるんですか？」

「一応な…ただ魔法戦の経験はお前らより下だから俺に対して敬語を使う必要がないぞ。それから、呼ぶときは名前でいい。その代わり、お前らのことも名前で呼ぶから」

「…分かりました」

「はい！…」

「試験、がんばれよ！…」

「「ありがとうございます！…」」

それで俺はなのは、フェイト、はやてとともに試験場を出る。

「ちょっと危なっかしい奴らだな」

「でもいい子達だよ」

「だがあの突撃思考みたいなところは直さないとだめだし、スバルなんか油断しやすいから…今回ティアナって子が怪我したのもあいつが油断したせいだしな」

「結構厳しいなあ…」

「甘やかす事は連中のためにならんだろう…あの2人はスターズ、ライトニングのほうは？」

「あ、始動に数日前に副隊長を勤めるシグナムが迎えに行ってくれるんだ」

「お前が行かないのか？」

「時間が取れなくてね…」

「せやったら龍君も一緒に行ったらどうや？車持ってるんやし」

「そうだな、そうするか」

「ほななのはちゃん、フェイトちゃん、またな」

「うん」

「次は機動六課始動の日だね」

「そうだな」

「じゃあまたな」

「うん、またね!!」

「ほなな」

そして時は進み、俺はシグナムとともに空港にライトニングの2人を迎えに行った

第11話 集う仲間たち（後書き）

作「まずは感想を書いてくれたジェナスさんと書いている小説の主人公の高町当麻さんにお礼を！！」

全「ありがとうございます！！」

な「でもこんな形なんてね」

フ「評価が厳しいよね、龍って」

龍「突撃思考のせいで味方が全滅しては意味ないからな」

は「せやね」

な「今後の展開は？」

作「とりあえず次回はライトニングとの会合と機動六課の始動、それとできれば一番最初の訓練も」

龍「本格的に進んでいくんだな」

フ「オリジナル要素はどうするの？」

作「今回で隊長陣は管理局の闇をちよつと知ったからね、その手のものの暗躍もある…かも？」

は「嫌なんで疑問系やねん」

な「大筋はできてるけど細かい肉付けのところだから？」

作「そんなところだよ、ぶつちやけると考えるのがメンドイから」

フ「ほんとにぶつちやけたね」

作「大学が忙しいんだよ！！」

他「言い訳しない！！」

龍「では次回『第12話 始動・機動六課』」

な・フ・は「新たな空へ、テイク・オフ」

第12話 始動・機動六課（前書き）

作「今回より本格始動!!」

ア「今回から私もずかも参加します!!」

す「前書きと後書きだけですけどね」

は「しかしちよっとしか訓練していないのになのはちゃんに勝つのは凄いな」

フ「シヤマルの料理を改善するのよね」

な「感想でも言われてたよね」

龍「理由は簡単だ…なのはに勝てたのは基本スタイルを知り、後は接近戦ができるかどうかを確認、できなかつたから本編のような手をつかつたんだ」

フ「魔法をはじいたのは？」

龍「AMFを表面につけておいたからな…はじくのは当然だ」

す「シヤマルさんの料理改善できたのは？」

龍「孤児院にいたころ他の子供達も学びたがつてな、その子達の中にも苦手な子は居たんだよ」

ア「その子達に教える方法で言つたわけね」

作「正確にはそこで培つた教え方すべてです」

は「そんなにひどかつたんや…ヴィータにシグナムも学びたがつてたな」

作「ここでの彼女達はなんか負けたくないと思うのと今後はやてがないときにできればいいと思つたからです」

フ「で、結局教えたの？」

龍「本編じゃ書かれてないがちゃんと教えたぞ。2人ともな」

は「あゝ確かに美味しかつたな」

作「いずれ出てきますよ、というか伏線です」

ア「結構大胆にきたわね」

す「私達が出たことも関係は？」

作「あんまりないよ、ただこの6人が幸せになるというEDだけは
決定事項」

は「つまりここはその前哨用ってことでいいんか？」

作「まあね、ただ今の龍士の心情は今回の後書きで」

は「それでは第12話」

全「お楽しみください!!」

第12話 始動・機動六課

Side 龍士

俺は今シグナムとともにターミナルを歩いている。理由は簡単、始動が後数日に迫った『機動六課』のメンバーを迎えに行くためだ。ちなみにそのメンバーはフェイトが隊長を、シグナムが副隊長を務める『ライトニング分隊』の新人2人だ。しかし…

「何で名前と髪の毛の色しか教えてもらえなかったんだ？俺は身体的特徴つったのに」

「主はやてにも何か考えがあるのだろうか…いたぞ」

「え？どこに？てか、待ち合わせ場所ってここら辺じゃね？」

「だからそこにいるだろう…エリオ・モンディアル三等陸士だな」

「あ、は、はい…！」

そこにいたのはまだ10歳ぐらいの少年だった…何を考えている…はやて…こんな子供を戦場に出すべきじゃない、まだ学校行って友達と遊んでいるほうが似合っている

「龍士、お前も自己紹介をしろ」

「ん、ああ…赤青龍士。民間協力者として『機動六課』に協力することが決まっている」

「あ、はい!!よろしくお願いします!!」

「…もう1人は?」

「まだ来ていないようだな」

「あの、僕探してきます!!」

「シグナム、お前はエリオと逆の方向に探しに行け、俺はここでピ
ンク髪の子が周りにいないから試してみる。んで、各自見つけたら念
話で連絡」

「わかった」

「はい!!」

そう言っホーク・アイてシグナムとエリオは探しに行く。俺は自分の能力の一
つ、『鷹の目』を使ってはやてから教えられた唯一の特徴を探す

「龍士さん、シグナムさん、キャロ・ル・ルシエさん、見つけまし
た」

「了解した、すぐにそちらに行く」

「わかった」

俺とシグナムは途中で合流してエリオとキャロ・ル・ルシエがい
るところに行った…そこにいたのはエリオとさほど年齢が変わらな
い少女だ

「あ、は、始めまして！！キャロ・ル・ルシエです」

「ライトニング分隊副隊長シグナムだ」

「赤青龍士、民間協力者だ…揃ったようだし、行くか」

「そつだな…荷物を忘れるなよ」

そう言っただけで俺たちは機動六課隊舎に戻るために駐車場に向かつて歩き出し、少し遅れてエリオたちもついてきたようだ。その後駐車場にとめてあった車に乗り込み、向かう最中に昼ごろになったため近くの店に入る…俺はそこで、2人にもどうしても聞きたいことがあった

「エリオ、キャロ…お前たちはどうして『機動六課』に来た？」

「え？」

「教えてくれ…まだお前たちは学校に行って友達とかと遊んでいるほうが似合っている年齢だからな」

「僕たちはフェイトさんに救ってもらって、僕はその恩返しがしたいと思っただからです」

「私もです」

「フェイトに？というか恩返しだったら他にも方法があるだろ」

「この2人はテストロッサが保護をされていてな、背景にもいろいろ事情があるのだ」

「でもな…」

「いったい、何が不満なんですか？」

エリオがかなり噛み付いてくる…そりや会って間もないやつに否定されたらイラつくのは分かるが…

「さっき言ったる、お前たちはまだ学校言っているような子供だつて…それに、戦いに出れば下手をすれば命を失うことも、奪うこともある…その覚悟があるようには見えんしな」

俺の今の言葉に完全にうつむくエリオとキャロ…『命』のやり取りの部分がどうやらこたえたようだな

「いいか、お前たちがこれから行くところは『力』がなきゃだめだ…戦場に出る人として最低限の力がな」

「それはいつたいどんなものだ、赤青」

「『護る』力だ」

「具体的に言ってくれないか？この2人にはまだ難しいだろう」

「自分の命、それを護れなきゃだめだ。お前らが死んだらいったいどれだけの人が悲しむか…分かるか？」

「……」

「それだけの力…持っているようには見えない、今からでも遅くは

ないから、すぐに撤回w」「イヤです!!」「…」

「僕は、確かに力がないかもしれませんが!!でも、僕はフェイトさんに助けてもらった!!そして、フェイトさんの力になれるって分かった!!だから!!」

「私も、力はないです…でも、フェイトさんは私に暖かい居場所をくれました!!その恩返しと、力になれるって…だから!!」

「僕（私）は機動六課（こく）にきたいと自分の意志で決めたんです!!」

「…どうやら、覚悟は本物のようだな」

ふうつとため息をつく…『心喜院』に入って1年もしたら自分が年上という自覚からかこういう子供たちの面倒を見ることが多くなつた、自分に憧れを抱いて自分と同じように武術のトレーニングをする子も増えた、その子達には『無闇やたらに力をふるわない』という条件で自分の持っているものから最適と思えるのを教えてきた…この子達も似たようなものらしい…仕方ないか

「お前達の覚悟は分かった。ならば俺もそれにはこたえらとしよう」

「…どういことですか?」

「その覚悟に誠心誠意こたえてやる、これ以上はまだ言ったらいけないから言えんが…お前らにマイナスになることはない、とだけ言うておく」

「…分かりました」

「もう皆食い終わっているし、行くぞ」

そうして俺たちは店を後にして六課に向かう…はやてはもう居るはずだから戻ったらちよつと話を聞きに行かないとな

Side 龍士 Out

Side はやて

いよいよ機動六課の始動まであと少しになった…物資や資材の搬入も終わりに近づいている…

「いよいよですね」

「シャマル…そやね、私の夢…これが第一歩や」

「はい、これから忙しくなりますね」

「うん、でもここで弱音はいとる訳にもいかん、さ、いこか」

「はい」

私たちは隊舎に入ってチェックをする、そこに

『主はやて、今ライトニング分隊の2人を赤青と共にここにつれてきました』

「ん、ありがとうな、シグナム…龍君はどうしたん？」

『案内なんて場所を知らないからできないと…それと主にお話があ

るといつてそちらに向かいました』

「お話…わかったわ、ありがとうなシグナム。ライトニングの子達案内したらゆっくり休んでや」

『はい』

私は通信を終えてまたあるきだす、そこへ

「はやて！！」

「あ、龍く」どういっつもりだ！」「へ？」

「あんな幼い子を部隊員として使うのはどういっつもりだって聞いているんだ！！」

龍君がめっっちゃ怒ってる…意味も訳も分かる、あの子達はまだ学校行っているのが普通や、そんな子達を使うというのが文句があるのも当然や…それに龍君はああいった子達を護るために戦うことを受け入れた、やから納得できひんのやろうね

「…正直に言うから、ついてきてくれるか？」

「…分かった」

了承してくれた…私はシャマルと分かれて（このとき龍君はシャマルがいることに気づいた）私の部屋である部隊長室に来た

「正直な話、私もあの子達を使うのは気が引けたんよ」

「じゃあ何でだ？」

「これや」

私は隠してもしかたはないと思って彼らの、エリオとキャラコの個人データを渡す…龍君は最初は無表情だったが、徐々に驚愕に染まり、最後は信じられないという顔になった

「はやて…これは本当か？」

「真実や…否定したくても絶対にできないほどにな」

エリオはフェイトちゃん同様 『プロジェクトF』で生み出されたクローン、キャラコはその力を恐れられ故郷から追放同然のことをされた、そんな彼らに救いの手を差し伸べたのがフェイトちゃん

「ひどすぎる…少し疑問もわくがな」

「どんな？」

「どうしてエリオがそうなのかと研究者たちがかぎつけたのかと、キャラコが追放同然のことをされたのかだ」

「エリオのほうは行った連中が保身かけてタレ込みをした、キャラコのほうはそのままちゃうん？」

「いや、保身をかけたとしても結局は別の『違法』で捕まるはずだし、少数民族といえど竜使役の一族だったらその制御を教えることぐらいはできたはずだ…」

「つまり、それにも管理局が絡んでいると龍君は考えるんか？」

「ああ、エリオのほうはフェイトが既に『ハラオウン』という大きな力に庇護されていた、ゆえにそれを使った『研究』が『管理局内』ではできなくなった」

「そしてエリオの元となった人物を…」

「内部事情を知っている連中からすればやりやすいことこの上ないだろうしな」

「腐っとるな」

「キャロのほうなんかもつとひどいとおもつ…これ見る限りじゃキャロの力は相当なものだ」

「そしてそれを欲しがった管理局がその一族の長に秘密裏に接触」

「恐らく少数から大民族に認定とか庇護を与える代わりに彼女を追放しろと要求」

「それを飲んだ、でもキャロには真実を告げなかった」

「告げられなかった、俺はそう解釈したいな、それに長のほうも皆の決断だったろう…一族の皆を護る為にたった一人の幼い女の子を辛い目にあわせなきゃならなかったんだから…」

「…これから私はどうすればいいんや…」

龍君の推測を聞いて私は俯いてしまった

「はやて?」

「私は『闇の書事件』で起きた罪を償うためにこうしとる、でも犯罪を大きく発生させているのはその事件の解決に尽力してくれた管理局…」

「腐っているのは一部に過ぎないだろう、そしてお前達はおう知ったところを見てこなかった…いや、見ないように配慮されていたといふべきか」

龍君の言葉に顔を上げる

「恐らくリンディさんやクロノがそう気を配っていたのだろう…はやて、フェイト、なのは…お前達は華やか、つまりは光だからな。そういったのを処理するのは自分たちの役目、薄汚い仕事をおうのが『腐らせた』という自覚を持つものたちの役目ってことだろうな」

「でも、知った異常無視はできひん…」

「だがここの敵は強大なんだろ、いっぺんに二つも「一つや」は?」

「恐らく今回の敵は『管理局の闇』によって生み出された人物である可能性が高い、龍君のように推測してみたらそんな感じがしたんよ」

「なるほど、それで捕まえないし保護して聞きだそうってところか?」

「せや」

「なるほど…とりあえず話すべきことはこの辺だな」

「そやね」

龍君が座っていたソファーから立ち上がり、私も仕事再開しよう
と思い立ちあがる知己なり龍君に真正面から抱きしめられる

「り、龍君！？な、あにを「我慢しなくていいぜ」へ…」

「悲しく、辛かったんだろ…ちゃんここで処理しとけよ…じゃね
えといういろこじれそうだしな」

そういわれると我慢していたものができなくなる…だから私は言
葉に甘えることにした…

「御免な…ちよお胸…かしてな」

「謝る必要なんかない…それに、俺のでよかつたらいつでも貸して
やる…だから今は…」

私は返事の代わりにコクリとうなずき、龍君の胸で泣く…新しい
決意と共に…！！

Side はやて Out

Side 龍士

はやてと話し、彼女の感情をすっきりさせた後俺はラインの案内
(泣き止んだ後ははやてが呼んだ)で六課の場所を覚えていた…ライ
ンの説明を聞くのも忘れていないし、これで最後かと尋ねるとまだ

外があるという…外でなにすんだと見ると海上にはかなりだっ広いものがあつた

「ありやなんだ？」

「ふっふっふ…よくぞ聞いてくれましたたなのです…！これぞ六課が誇る『陸戦用空間シミュレーター』です…！」

「つまり、ここで新人たちとかと訓練するわけ…！」

「はいです…！今は何もありませんが必要に応じてさまざまな地形を生み出すことができます…！ちなみにこれはなのはさんの監修なんですよ…！」

「へえ…そういやこの耐久テストってしたのか？」

「はいです…！なのはさん、フェイトさん、ヴィータちゃん、シグナム、はやてちゃんそれに龍さんが全力で暴れまわっても壊れることはないですよ…！」

「へえ…じゃ「ならば私と模擬戦闘でもどうだ？」シグナム」

「一度は不覚をとつたが今回こそは勝利して見せる」

「いいぜ。訓練のための場所をとるのに手貸してもらったからな」

「ふむ…では…行くぞ…！」

「ああ…！」

そう言っただけで俺とシグナムはリインを蚊帳の外にシミュレーターに行き、そこでリインがはっとしたように設定とかを聞いてきたので一般的なものにしてもらうと、壊れかけた町並み（後で廃棄都市郡と言つと教えてもらった）にてデバイスと騎士甲冑バリアジャケットを装備して向き合った

「ルールはシンプルで行こうぜ」

「そうだな…戦闘不能になったほうが負け、それでいいか？」

「もちろんだ！！リイン、合図を頼む」

『はいです！！それじゃあれディー…ゴォです！！』

始まった瞬間俺もシグナムも互いにまっすぐ突進しあい、手持ち武器で切り結んだ

「ふっ…今回は剣で来るとはな…テストロッサから聞いてはいたが…」

「フェイトン時と同じもんだぜ、これ…まだこいつの実力は見せちゃイネえがな！！」

そう言っただけで俺は少し力を弱めてシグナムに押させ、そのまま捌いて横なぎに攻撃するも防がれるが、その勢いを利用してさらに攻勢に出る

「はあああっ！！！！」

「くっ！！！！」

俺の剣戟の勢いに押されてシグナムは防戦一方になる…しかし一瞬の隙を突いて飛行魔法で距離を作る

「逃げられたか…」

「射撃に剣…しかし格闘は「できるぜ」…かなり厄介だな」

「どの距離でも対応できる…これが俺の利点であり欠点だな」

「欠点…なるほど、器用貧乏ということか」

「否定はしない…はつきり言われたのはちょっとショックだけどな」

「だが昨今の事情では何でもできるほうが有利なことが多い…」

「確かにな。だが決め手に欠けることが多いから実力が対等のやつと戦うとなると長引くことこうえないからはつきり言って1人で戦えるタイプじゃない」

「仲間の危機に即座に対応できる、そう言った点では貴重だ…特に新人が多いこの部隊ではな…」

「なんか苦勞人になりそう…お前との模擬戦や新人たちとなのはのフォローで…ていうか考えてたら腹立ってきたから模擬戦で解消させてもらおう」

「ふっ…来い!!」

そうして俺たちはその後も何度も切り結びつつ、それぞれ中距離

用の技を互いに放ちあつて牽制しあいながらも戦い続け…

「はあはあ…やはり強いな…赤青」

「そういうお前もな…シグナム…ほんとにリミッターかかってんのか？」

「その私と対等にしか勝負できない…やはり前回はまぐれだったか」

「…あん時はお前の実力が分からなかったからあの状態の俺で全力でいったまでだ…今は実力が分かっているし、一瞬で勝負がついちや面白くないからあえて力をセーブしてる」

「なるほど…新人たちにもいい励みになるだろうな」

「人に物教えるのは得意じゃないが、やれる事やらせていくだけさ」

「ふっ…では…」

「ああ…次の一撃で…終わりだな」

静寂が空間を支配し、一陣の風が2人の間を吹き抜け…

「紫電…一閃…！」

「はああっ…！」

互いに剣を上段に振りかぶって斬りあい…

「クッ…」

シグナムが苦悶の声と共にゆっくり地面に降りていき、俺は自分の得物を見る…罫一つ入っておらず、満足のいく結果にシグナムのそばに降り立つ

「今回も俺の勝ちだな」

「ああ…だが…次は…!」

「ふっ…返り討ちにしてやるよ」

そう言っただけ俺たちはリインの元に戻り、データのほうを確認するためにリインのほうに向かうと満足いったようでニコニコ顔だった。「御二人とも、お疲れ様でした!!ここでどのぐらいなら壊れるのかというデータ取りも終わりました!!」

「そうか…後一つ聞きたいんだが…どんなステージがあるんだ?」

「え〜っと…これです」

そう言っただけリインが見せてくれたのは俺とシグナムが使ったのと森林、それと野原といった感じだ

「…ちょっと追加してもらいたいデータがあるんだが…」

「なんですか?」

そう言っただけ俺はその地形データを見せるとリインとシグナムは疑

問に思ったようだが俺がどういうことのために使うのかと説明したら納得してくれた

「これで新人たちのトレーニング幅が広がったな」

「赤青も教導に参加するの？」

「なのはの補佐でだけだな、まあ魔法で教えられることは少なそうだから俺は体作りのほうを担当することにするよ」

「確かに、体のつくりが不十分では例えどんなにいい魔法が使えるようにも意味はないからな」

「ちゃんと考えているんですね」

「あほ、自分の体の事をケアしてやるのは基本中の基本だ。だからなのはは8年前あんなことがあったんだよ」

「なるほど…」

「隊舎戻ってはやてに報告、んのあと飯でも食おうぜ」

「そうだな」

「はいです…!」

そうして俺たちははやてに報告後、食事を取って別れた。俺は行きたいところがあったから…

10分ほど歩いて俺は寮のほうに来た。まだ人は少ないが、入る

のは危険だから会いたい本人達に念話をして呼び出しておい

「あの…なにか御用でしょうか？」

俺が呼び出したのはエリオとキャロだ…誤解していたことの謝罪と今後のことについて話すために…

「いや…お前さんのことをはやてから聞いてな…誤解していたから謝ろうと思つてな」

「誤解…もしかして僕たちがフェイトさんたちに強制されてるのも思つてたんですか？」

「ああ…地球の一部じゃお前達みたいな子供を戦場に送り出す外道がいてな…フェイトはそんなことはいらないと思いつつもつい…な」

「そうですか…」

「でも龍さんは私たちのことを真剣に考えてくれたんですね？」

「えっ？」

エリオが驚いている…こいつのほうも勘違いしていたみたいだな

「ああ…俺はお前らぐらいのころから施設 正確には孤児院だが入っていてな、そこで親から引き離された子供達をたくさん見てきたんだ」

「……………」

「だからこそ、ほっとけないし、俺が今まで過ごしていた『普通』をお前達にも味合わせてやりたい…自己満足だが、本気でそう思ったんだ」

「龍さんって…優しいんですね」

「そうですね…僕達のことを…こんなに真剣に考えてくれて…」

「俺は自分がちょっといやな目にあっている、でもこれから先に生まれてくる子や今を生きている子供達にはそんな思いをさせたくない、それはお前達に対しても一緒だ」

「…まるで…お父さんみたいです」

「…孤児院にいたころもよく言われた…管理人とかに」

「これからは…お父さんって呼んでも…いいですか？」

「キヤロ？」

「キヤロさん、ずるいです!!僕もお父さんて呼びたいです!!」

「…お兄さんじゃだめか？」

さすが10歳はきつい…いやまず何でだ？俺は今までどおり…だからか？孤児院の子供達のように接したからか？

作 ビンゴー!!

…今なんか聞こえた気がするが無視しよう…孤児院の連中はなん

か言えばしびしび納得してくれたがこいつらじゃそうはいかない…
訓練とかもまだこいつらにはつきりとは言えないしな…仕方ない
って考え事している間に近づいてこられて…

「「だめですか？（涙目&上目遣い）」」

こんな顔されたら了承しかないな…ほんと仕方ない…

「いいぞ…ただな、一個だけ約束してくれ」

「「なんですか？お父さん」」

「…呼ぶのはこういう時だけな、それ以外ときは最初みたいに名
前で呼んでくれ」

「「分かりました、お父さん」」

「「じゃ、もう寝る。それと俺は明日少し日用品をかいに行くが一緒
に行くか？」

「「はい！…」」

そうして俺達は別れ、翌日ちゃんと町で買い物をし、（エリオと
キャラ曰く『お父さんとお出かけ』）そこであまりに仰々しい態度
だったので何とか矯正した

そんなこんな毎日が続いてついに機動六課始動の当日になった…
俺ははやて、ラインと共に部隊長室にいる。『民間協力者』だが『
部隊』に所属という形なので俺も機動六課の制服を着ている…する
とノックの音が聞こえてきた

「どござ〜」

はやてが入室の許可を出すとドアが開き、その前にいた人物達が姿を現す

「「はやて（ちゃん）」」

「うん、2人とも、よう似合っとなるなあ」

「そ、そうかな？」

「なのはそれですごすのか？」

「隊舎内とか公式の場ではね、でも教導がメインだから普段は教導官の制服だよ」

「なるほど…」

「いや〜でも私ら3人が同じ制服って久しぶりやね」

「そうだね」

「そっぴや幼馴染だったな…学校も一緒だったのか？」

「うん、アリサちゃんもすずかちゃんもな」

「……そうとうレベルたけえ学校だったんだな」

と、そこで思い出したようになるのは、フェイトがはやてに対して

敬礼をして出向ということ伝える、それに対してはやても敬礼を返す…なんだかんだ言ってもちゃんと区別はできるようだな

そうこうしていると再びドアが開いてメガネをかけた男性が入ってくる

「失礼します…あ、高町一等空尉、テストロッサ・ハラOWN執務官…ご無沙汰しています」

「え〜っと」

「もしかして…グリフィス君？」

「はい、グリフィス・ロウランです」

「うわ〜久しぶり〜てゆーかすごい、凄い成長してる〜」

「うん、前に見たときはこんなにちっちゃかったのに…」

「そ、その節は…いろいろお世話になりました」

「グリフィス君は私の副官で交替部隊の責任者さんなんよ」

その後も少し雑談(?)が続き、ようやく本題に入る

「フォワード4名を始め、全員揃っています。今はロビーに待機させています」

「ほんなのはちゃん、フェイトちゃん、龍君、部隊の皆にご挨拶や」

「「うん」

そうしてなのは、フェイト、はやてと俺、グリフィスで出て行く
「で、どうですか」

「まあまあ、といったところか…というかあの人に息子がいたのに
びっくりだ」

「あはは…これから一緒の部隊でやっていきますし、よろしくお願
いします、赤青龍士さん」

「こっちのほうこそな、よろしく頼むよ、グリフィス」

そして俺達はロビーにつく。グリフィスが言ったように今動ける
メンバー全員が集合しているようだ。そこではやてからの紹介と挨
拶があり、このまま何事もなくと思っていたのだが…

「ではここで、機動六課に協力していただく民間協力者の方をご紹
介いたします…赤青龍士さんです」

そう言うつてはやての手が俺のほうに向くと全員の視線が俺に集中
する…なんか結構恥ずかしいな

「あ…紹介されたように民間協力者の赤青龍士だ。まだこっちに
着たばかりだから分らんことも多いが、よろしくたのむ」

「ではこれにて解散、皆、たった1年やけど仲よう頑張っていこな。
以上機動六課課長八神はやてでした」

そして俺はなのとは共にフォワード陣を連れて隊舎を歩いていく。ふとそこでのなのが思い出したように

「みんな、お互いの自己紹介はもうすんだ？」

「あえつと「名前と経験やスキルの確認はしました」「後部隊分けとコールサインもです」「」

スバルがこたえるより速くティアナとエリオが答える…この2人は将来性高いな…その答えに満足したのかなのはは訓練に入ること伝えると4人ともちゃんと返事をする…とそこで

「あの、何でお父さんも一緒にいるんですか？」

…キャラが核ミサイル級の衝撃発言をした

「えー！？お、お父さん！？り、龍君、どういことなの！？？」

「とりあえず落ち着けなのは、というかデバイスしまえ…新人達がおびえきっているから」

なんとかなのはを落ち着けてキャラがそういう発言をした経緯を話し、エリオからもそう呼ばれていることを伝える…ばれちゃったら隠す意味はないからな。それに納得してくれたのか完全になのも落ち着いてくれ、キャラの前半の問いに答えることにする

「俺もお前らの教導に参加するからだよ。とはいっても魔法関連で教えられることは多分ないから身体能力のトレーニングのほうで中心になる」

その答えに納得がいったらしく、そこでなのはとは別れ俺はフォワード陣を連れて訓練着に着替えて訓練場へと到着し、そこには既になのはとシャーリーが待っていた

そこでデバイスに関しての説明とシャーリーの自己紹介（俺は昨日の時点で挨拶を済ませた）があり、訓練を開始しようとするとき当然の疑問が飛んできた

「ここですか？」

なのはが少し笑うとシャーリーに指示を出すと、正面にあったところに廃棄都市の映像が浮かび上がる。そして新人達はデバイスの点検と連携チェックを行い、ステージに入り、こちらでも模擬戦闘訓練の準備をする

そしてなのはが新人達に特徴と条件を伝えた後、訓練が始まった

！
なんだかんだで訓練中（詳しくは本編を見てね！！）！

終わった後フォワード陣はかなり疲れ果てている…何も情報がない状況であそこまでやったのだからかなりたいしたものだろう…さて…

「んじやなのは、シャーリー、俺用のやつ出してくれ」

「はい」

「えっ！？お父さんもするんですか？」

エリオのこの発言でシャーリーがちょっとパニックになったのでまた事情を話し、準備をしてもらい、俺も武器を精製して準備を完了する

「レベルはどうする？」

『スピードはフェイト並み、攻撃力はお前並で頼む』

「えっ！！それだとかなりきつくなるんじゃないですか？」

「分かった、数は皆と同じ8体でいい？」

『倍で』

「了解、じゃ、いつくよ…レディ…ゴ…」

そして先ほどみたよりも倍以上速い速度で動き回るがジェットドローン、しかし…

「いくぞっ…！…」

「どういことですか？」

「あれも全身のバネを使って投げただけだ。それにティアナ、覚えているかは分らんが試験のとき、風を感じなかったか？」

「あ、そういえばゴールしたとき上向きに風のようなものが…」

「あれは俺の魔力変換資質の一つだ。そういうのは基本的に一人一つらしいが俺はなぜか確認しただけで6つあった」

「6つもあるんですか？」

「ちよいちよいみる雷・炎、それに少ないが確認されている氷に加えて今言った風に光と闇もあった」

「まだまだ出てきそうだね」

「というかすごいチートくさい気も…」

「俺個人としては後土と水が出てきて欲しいな。まだ欲しいんですか!？」：それがあればバリエーションが増えて少ない魔法戦の経験を補うことができる」

「魔法戦経験少ないんですか!？」

「対人戦はこの力に目覚めた1ヶ月前の犯罪者との戦い、それ以外はシグナムと2回、フェイト、なのはと1回ずつだな…全部勝ったが」

「凄いですね…」

「で、ティアナの質問に戻るがあれはその風で回転速度を上げてさらにいわゆる「強風」での「追い風」状態にしたのさ」

「確かにそれならあのスピードも納得です」

「追尾魔法と同じプログラムを使ったから多少は離れてもコントロールできるからな、使いやすい」

「最後のハンマーは？」

「あれには対フィールドの術式を組み込んであるからたとえAMFといえどもその術式そのものを破壊されたら意味ないからな…それにAMFといえども元々は魔法だからそれを壊しちまえばいい」

「なるほど…確かにそうですね」

「AMFは確かに強力だ…だがどんなに強力といえど人が生み出したものには変わりはない、人が生み出したものを超えるのもまた人だ…そしてお前達にはそれを行える力がある…期待しているぞ!!」

「」「」「はい!!」「」「」

「な、なんか私の言うことがどんどんなくなっちゃっている気が…」

後ろでなのはがたそがれていたが、何とか回復させてその後も俺を含めて全員でトレーニングして本日は終了した

第12話 始動・機動六課（後書き）

は「今回これまでで一番長かったんとちゃう？」

作「前回の後書き見直してさらにオリジナルを加えたら約2話分（約20ページ）…書くのにも約10時間かった」

ア「よく心折れなかったわね」

作「というか一部本編忘れてたからあわてて見直して…ほんとにきつかった」

す「出てこない人っているの？」

作「とりあえず全員最低1話中にワンシーン、会話付きでだす予定は「アルト、ルキノ、寮母のアイナさん…本編で出番少なかったのは今回出てきたグリフィス君除いてそんなかんじやね」

な「あとはなんだかんじって見せ場に出番あるもんね」

ア「というか私達本編に出れるの？」

作「オリジナル設定を入れればアリサも出せる」

す「私は出れるの？」

作「予定じゃ途中で両親説得してエイミイづてにマリーからデバイス技術学んでミッド（こつち）に来る」

は「設定ってどんな？」

作「アリサに上の兄弟がいてそれが会社継ぐ」

な「あ、そっかアリサちゃん3年生のときに継ぐって言ってたもんね」

龍「もしくは親が将来のことを視野に入れて秘密裏に貿易を開始するために送る、そんなところか」

作「それは他のところでなんか見た気がするから却下」

ア「前書きで書いた今の龍士のそれぞれに対する気持ちはどんな感じなの？」

作「こんな感じ…ああ、全員分書くけどいわゆる『アッー』な人じゃないから」

・はやて：告白され戸惑っているが、真剣に受け止めて返事をまじめに考えている

・すずか：はやてと同じ

・なのは：放っておけない…護ってあげたいと思っている

・フェイト：子供に対して優しいやつ、でもあまい所兼過保護なためちょっとそこを直したいと思っっている

・アリサ：しつかりしていて元気な子

・ヒロイン勢はこんな感じ、ヴォルケンは

・シグナム：衣装に目を瞑ればいい好敵手ライバル

・ヴィータ：同僚としてかなり信頼している

・シヤマル：手にかかる姉といった感じ

・リイン：可愛い妹

・ザフィーラ：燻し銀、背中を護らせれる唯一の漢おとこ

こっぴどい感じかな、最後にフォワード陣

・スバル：猪バカ、要思考回路矯正

・ティアナ：全体的に伸びしろがあり鍛え甲斐のあるやつ

・エリオ：最初は背伸びした餓鬼、今は護ってやりたい息子

・キャロ：最初はエリオと同じ、今は護ってやりたい娘
という感じかな

フ「というか私は『名前+さん』なのになんで龍は『お父さん』なの？」

は「ただ父性あふれる人だからちゃうん？」

な「言ってるね、なんか甘えなくなっちゃうんだよね、龍君って」

作「自分で作ったキャラながら以外にボロボロ設定が変わったり+されたりするから結構きつい…」

ア「自業自得よ」

は「で、次回はどうするん？」

作「デバイスGET&フアーストアラート」

な「では次回『第13話 戦いの序章』」

全「大きな空へ、テイク・オフ」

第13話 戦いの序章（前書き）

作「この話からどんどん物語が進んでいきます!!」

ア「早速ネタばれしてんじやないわよ!!」

す「でもちよつとハイテンションだね」

は「なんか悪いもんでもくったんとちやう？」

作「失敬な、ただ書きたいものがかけたから高いだけだ」

な「今回はフォワードの初出勤のところだね」

作「ちなみにこの小説ではフェイトの出番は少なくなりがちになるでしょう」

フ「何で!!」

龍「そのシーンのほとんどを俺が担当するからか？」

は「あゝ、確かに龍君子供の世話上手そうやから…」

な「あんまり先の話すると鬼が笑うから本編にいこうよ」

全「それではお楽しみください」

第13話 戦いの序章

Side 龍士

初日から何日かがたった：俺もフォワードたちも毎日なのは訓練だ：といっても俺は基礎戦闘力が高いらしく、主に魔法の基礎、それこそ学校で習うような内容とユーノから教えてもらった防御や境界の練習だったけどな

「じゃ、最後の訓練、シユートイベーションいくよ。『5分間逃げる』か『私に一撃』入れたら終了。一人でも被弾したら最初からやり直しね」

「今の状態でなのはさんの攻撃、5分間凌げる自信ある？」

「ありません」

「ない」

「AMF使っていないなら…」

「……それはだめ（です）！！というか訓練にならない（なりません）！！」「……」

「んじゃ、なのはに一撃入れる方向で…指揮は頼むぞ、ティアナ」

「龍さんがやったほうがいいのでは？」

「俺は1対1か1対多数しかやったことがない…多数対1なんてのはあんまり好きじゃなくてな」

「……確かに龍さんクラスの人が多数で一人の人に向かっていったら虐めとかそういうレベルじゃないですよ、わかりました」

「何気にむごいな…あ、なのは、準備終わったぞ!!」

「うん、じゃあよーい…スタート!!」

なのはが多数の誘導弾を放ってくるが、全員散開して避け、スバルと共になのはのほうに向かい、攻撃するもシールドに防がれるがそこにティアナの誘導弾が飛んでくるがあっさりとかわされる

「やっぱ一筋縄じゃいかねえか」

「どんどんいくよ〜」

「ワアアティア〜援護〜」

「うっさいスバル!!いまやって…わあ!!こんなときに!!」

「ちっ!!」

スバルが突っ込みすぎてなのはの誘導弾に襲い掛かれ、それをティアナが援護しようとするがデバイスが不具合を起こしてできず、俺が半数を切り裂いたが…

「ほらっ!!」

「くっ!!」

残ったのを俺に向ける…使っているのは黒刀なのでこれを防ぎき
ることはできそうにない…ここまで…いや、まだまだ！！まだあきら
めない！！…そう思った瞬間…

カアアツ！！

体の中心のユニストスから赤い光が出ると同時に俺のジャケット
の腕と足の前と横、そしてユニストスの周りのラインが赤く発光し
た…

『えっ！？』

全員驚いているがこれに一番驚いているのは俺だ…一体何がと思
うと誘導弾がすぐそばまで既に迫っていた…が、俺は驚異的な軌道
でそれを全弾回避しつつ破壊した

『嘘ッ！！』

全員驚いている…その隙をついて俺はなのはに肉薄する…あわて
て防御をするが瞬時にその後ろに回りこむと同時に一撃を与えた…
それと同時に発光も終わる…

「ふう…ってうお！！」

飛行用の魔力の維持も何もできなくなり俺は地面へと落ちる…何
とか着地したが一体なんなのか…今のは

『龍君（さん）（お父さん）、今のはなんですか？』

「いや…俺にもさっぱり…やばいと思って気がついたらああなって

た

よく考えると思い当たるものは存在している…しかし、発動した理由がわからないし、第一あれは『武器』ではないからユニストスの能力をもつてしても発動することはできないはずだ

「…とりあえず、私に龍君が一撃入れたから今日の朝の訓練は終了」

『はいっ！…！』

「くきゅ〜」

フォワードとフリードが元気よく返事をする（フリードは最初見たときびっくりしたがキャラの経歴を思い出して納得した）…しかしここでフリードがなにか様子が変わ

「キャラ、フリードの様子おかしくないか？」

「え、あ、フリード、どうしたの？」

その瞬間、『ボンッ！』という音がする…音源を見るとスバルのローラーブーツから煙が出て、しかも前のほうの車輪がぽっきり折れている

「あちや〜…もう寿命かあ〜」

「こりゃ修復自体難しそうだな」

「ティアナのアンカーガンは？」

「あ、はい…だましましたです」

「うん、皆強くなってきたし、そろそろ新デバイスに切り替えかな」

『新デバイス？』

「デバイスってそんなほいほい…ああでもこいつらの場合使うものが決まっているからそれを応用しや作りやすいか」

「うん、そんなわけで皆ご飯食べたらデバイスルームに集合ね」

『はいっ！…！』

「すまん、俺はこのあとはやてに呼ばれてて、一緒に聖王教会に行くことになってるんだ、セイもな」

「お父さん、セイって誰ですか？」

「俺のユニゾンデバイスだ。普段はロングアーチやボックスの手伝いをさせているから会うことなんざまれだっただろう」

「ユニゾンデバイス持っていること自体初耳なんだけど…」

「あれ？言ってなかったっけ？」

「聞いてないよ！…！」

「…後で何とかあわせるよ…さ、飯食いに行kふわぁ…ふっ」

「眠たいんですか？」

「ああ…最近夢見が悪くてな」

「どんな夢を見ているんですか？」

「えっと…こんな感じかな」

そう言っつて俺はモニターを出してまとめて皆に見せる（隊舎に向かっている最中です）

・ Z、ZZ、Hi-、UC、F91、V2、キュベレイの人間サイズと戦う

・ ゴツド、ウイングゼロ（EW）、Xディバイダー、DX、ターンエー、ターンXの人間サイズと戦う

・ デイステニイー、ストライクフリーダム、ジャスティスの人間サイズと戦う

・ エクシア、00ザンライザーセブンソード/G（GNソード？装備）、00Qフルセイバー、サバーニヤ（最終決戦仕様）、ハルイト（最終決戦仕様）、セラヴィーガンダムGNHW/3Gの人間サイズと戦う

・ 「SD戦士三国伝 Brave Battle Warriors」の劉備、曹操、孫権、呂布と戦う

・ 「ONE PIECE」のCP9、『冥王』と戦う

・ 「BLEACH」の隊長、副隊長に及びそれに順ずる実力者と現世メンバーと戦う

・ 「NARUTO」の実力者集団と戦う

・ 「勇者王ガオガイガーFINAL」のジェネシックガオガイガー、超竜神（氷竜&炎竜）、撃龍神（風龍&雷龍）、天竜神（光竜&闇竜）、ビッグボルフォッグ（ボルフォッグ&ガンブルー&ガンドール）、マイクサウンダース13世、キングジェイダー（ジェイダ

ー&ジェイアーク)、ガオファイガー(ゴルディオンハンマー装備)の人間サイズと戦う

・「機動武闘伝Gガンダム」のドモン・カッシュ、東方不敗マスター・アジア、シュバルツ・ブリーダーと戦う

・「るろうに剣心」の緋村剣心、斉藤一、相楽左之助、明神弥彦、四乃森蒼紫、比古清十郎、鵜堂刃衛、志々雄真実、瀬田宗次郎、悠久山安慈、雪代縁と戦う

・「ドラゴンボール」の孫悟空、ベジータ(フュージョンしたゴジータ、合体したベジット)と戦う

「……戦ってばかりですね」

「これみて言うことは違うでしょ!!というか一体なんなんですかこれ!!」

「とりあえず趣味で集めている地球の漫画やアニメの登場人物やそれに出てくる兵器だな」

「……夢とはいえこんなに戦ったら疲れちゃうよね……」

「しかも妙にリアリティがあるからほんと大変なんだよね…本当に戦っているみたいでさ……」

「シャマル先生に見てもらったらどうですか?」

「そうだな…今晚にでも見てもらおうか」

そうこう言い合っているうちに俺達は隊舎に戻り、シャワーを浴びて食事を取り、フォワードはデバイスルームへ、俺はフェイトとはやてと共に隊舎を後にした

S i d e 龍士 O u t
S i d e はやて

私は今龍君とセイと一緒に聖王教会に来ている。途中までフェイトちゃんに送ってもらい、フェイトちゃんはそのまま地上本部のほうに向かい、私らはちゃんと正装して教会のお偉いさんのところに来た

「セイ…お前とユニゾンしたらどのぐらいの速度出せる？」

「恐らく音速には届きませんが大抵の飛行機には勝てるかと…そんなにイヤなのですか？」

「俺は自分の保身しか考えていない薄汚い豚野郎が嫌いなだけだ」

「……ご両親の件ですか」

「まあ…な」

「ついたで」

ちなみに案内してくれた人はシスターシャツハことシャツハ・ヌエラさん、この扉の先にいる人のおつきの方ということを龍君とセイに念話で説明する…でも今の会話から行くと龍君も結構ヘビーな過去があるようやな…シャツハさんがドアを開けてくれ、私らは中に入っていく

「はやて」

「カリム」

元々顔見知りやった私はすぐに外套をぬいで近づいていく。龍君たちはその私の光景にちよっとびっくりしとるようやね

「そちらの方が…」

「うん、私の故郷出身で私らと同じ古代ベルカ式の使い手、赤青龍士君や」

「始めまして、聖王教会理事・教会騎士団騎士カリム・グラシアです」

「こちらこそ、機動六課民間協力者、赤青龍士です。こちらはユニゾンデバイスのセイです」

「『光天の魔導書』の官制人格で主の補佐をしている聖天大斉、通称セイと呼ばれている。こちらこそ、だ」

「実は龍君たちに一緒に来てもらったのはちよお聞いて欲しいことがあったからなんよ」

「聞いて欲しいこと？」

「うん、カリム」

「はい」

私が促すとカリムが技能^{スキル}を発動する

「これが私の能力、予言者の著書です。これは最短で半年、最長で数年先の未来を、詩文形式で書き出した預言書の作成を行います。しかし、二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できないため、ページの作成は年に一度しかできません。預言の中身は古代ベルカ語で、しかも解釈によって意味が変わることもある難解な文章に加え、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度」

「どの部署のトップもちゃんと目をとおすんよ、信じるか否かは本人しだいやけど、有識者としての予測情報の1つとしてな」

「ですが地上部隊は事実上のトップであるレジアス・ゲイズ中將がこの手の希少技能レアスキルがお嫌いなのであまり信用されていません」

「それが六課設立の理由、だな」

「うん、この中に出てきた予言が、って言うのが正確なところで実はこれ自体は数年間から出てき始めてたんよ」

「その内容は？」

「『古い紅き結晶と、無限の欲望が集う地、蘇りし王のもと、聖地より王の翼が蘇る。死者達が踊り、法の塔は虚しく焼け落ち、数多の海を守る法の船も砕け落ちる』」

「…悪いけど意味があんまりわかんねえ」

「私は少し分かりました。最初に出てくる『古い紅き結晶』は『レリック』、そして『王の翼』とは恐らく『聖王のゆりかご』のことだと思います」

「『『聖王のゆりかご』?』」

「はい、聖王家の正統後継者が生まれ育つもので、私やリインフォースもその中仕組みを応用して生み出されました」

「つまりあれか?お前らみたいな『希少技能』満載のやつってことか?」

「はい、しかし、それだけではありません。少しデータを見せてもらいましたが『ゆりかご』の大きさは管理局（こく）の戦艦と同じです。なので、破壊には相当厳しいかと」

「他に覚えていることはありませんか?」

「いえ、私の記憶ではここまでです。私はあまり関わらなかつたので…しかし、私とユニストスを地球に逃がしたのは聖王陛下です」

「『『えっ!!』』」

「そのときは今からおよそ300年前…恐らく血筋を絶やすまいと考えて、温厚な家臣に自身のお子と私とユニストスを持たせました…私が完全におぼえているのはここまでです」

「それ以後は封印措置をとられたため、か」

「はい」

「でも貴重な情報や…早速クロノ君たちに報告して、ユーノ君に調べてもらおうか」

「ならば、ユニストスとの関連も一緒に調べてもらってもいいか？」
「なぜですか？」

「なんか関係があるような気がするんだ…手間かけちまうけどね」
「分かったわ。それと、機動六課のほうは…」

その後私は龍君に手伝ってもらって新人達のこととかを報告して、ひと段落したからお茶でも飲もうかと話していたところにグリフィス君からがジェットが山岳地帯に出現したという報告を聞いて、すぐに龍君とカリム、セイと目を合わせ

「龍君、セイ、申し訳ないけどこっから飛んで行ってくれるか？」

「ああ!!」

「了解です!!」

「ほなな、カリム」

「ええ、シャツハ、騎士はやてを機動六課まで送ってあげて。それから騎士龍士」

「はい?ツてかなんです、その呼び方」

「あなたの事は多少はやてさんから既に聞いていましたので…敬意を込めてこのような呼び方です」

「そうですね、とにかく今は一刻を争いますから、俺達もここで失礼します」

「はい、シャツハ、騎士龍士が無事に飛んでいけるような場所に案内して」

「はい、騎士カリム、こちらです」

そうして龍君はシャツハさんに案内されてそこでセイとユニゾンして現場に急行、私はシャツハさんに連れられて機動六課へと戻った

Side はやて Out

Side 龍士

あの後俺はシスター・シャツハ（本人にこう呼んでくれといわれた）の案内で出撃要の場所につき、そこで甲冑を展開してセイとユニゾン、グリフィスたちにポイントを教えてもらい猛スピードで現場へと向かった

「セイ、合流地点まで後どのぐらいだ」

『この速度ならば後15分ぐらいで合流できるかと』

「よし、急ぐぞー!」

『はい!』

そして俺達はさらに飛ばしてポイントの近くまで来ると、そこには空戦用のガジェットと戦っているのはとフェイト、列車の最後列のほうで戦っているエリオとキャロが見えた

「ここからなら砲撃系の魔法でいけるよな」

『はい、十二分に撃破可能です』

「よし、なら…」

俺は左手を前に突き出して右手を添え、ベルカ式の魔方陣を展開し、魔力を収束させる

「ライトニング…」

『スプラッシュャー!!』

直後俺達の元から20本近い矢が放たれ、なのはたちの近くにいたガジェットをまとめて葬り去り、その攻撃に気がついたなのはたち念話で

「すまない、遅くなった」

「ううん、龍君もセイもこのまま制空権確保するの手伝ってくれる？」

「了解」

俺はその後両手を合わせて雷の矢を作り出し、

「ライトニング…アロー!!」

声高に技名を言うと同時に相手に投げつける、しかもこの矢は散

弾のようにすることが可能で、広がりつつも威力はあまり落ちないため多数対決でも少数対決でも役に立つ、そうしてガジェットをいっそうしていく中

『ライトニング3、落下!!』

シャーリーの声が聞こえて列車のほうを見るとエリオがどうやら大きいガジェットに吹っ飛ばされたようだ…俺はキャラロに念話をとなぎ

「キャラロ…いいのか、助けなくて」

「お父さん…」

「俺もなのはもフェイトも今からじゃあ間に合わない…お前しかエリオを救えるやつはいないんだ!!」

「でも、私は…」

「お前の力のことは知っている、だが、周りの奴がどう言おうとお前はお前だ!!俺の可愛い娘だ!!」

「お父さん…」

「お前の力は人を救う力、護る力だ…お前ならできる!!俺は、そう信じている!!」

「はい!!」

そういうとキャラロはフリードと共にエリオの元へと降りていく

『ライトニング4、飛び降り!!』

『あれでええ』

『八神部隊長!!』

「AMFは発生源から遠ざかれば効力も弱まる…見せてもらうぞ、キャロ…お前の力を!!」

Side 龍士 Out

Side キャロ

お父さんに励まされて、私はエリオ君を助けたいと思う気持ちを胸に、フリードと共に行つて、エリオ君に追いついた

「ごめんね、フリード…いままで辛い思いをさせて…でも、もう逃げない!!私の力は護る力、皆を救う力だから!!」

「きゅく〜!!」

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚!!」

フリードの心の姿が開放させて、私はエリオ君を抱えている所に、お父さんが来てくれた

「よくやったぞ、キャロ…後はあいつを倒すだけだ」

「はい!!」

エリオ君が目を覚ます

「目え覚めたか…エリオ、行けるな!!」

「はい!!」

そして私がエリオ君にブーストをかけて、お父さんの攻撃魔法と一緒に攻撃して撃破、レリックのほうもスバルさんとティアナさんが無事回収して、列車はライン曹長のおかげ無事に停車して、その後何事もなく終わりました

第13話 戦いの序章（後書き）

な・フ『カラミティ・ブラスト!!』』

作「待てそれはA'sのつてゴブファアアツ!!!」

龍「確かに今回はなのはとフェイトのセリフ少なかったな…」

ア「ていうかフェイトはなかて『プラズマ・ザンバー!!』まだや
つてる」

す「もうオーバーキルの粋だね」

龍「作者が復活するまで時間かかりそうだから俺達だけでしばらく
進めよう」

は「せやね、ではまず感謝コーナー」

ア「nukosanさん、ジェナスさん、感想ありがとございま
した!!」

す「でもジェナスさんつて」「言うな!!」「…はい」

は「質問はないからこのまま終わりになるんかな？」

龍「一応今回出てきた予言、これは本来もうちょっと先に出てくる
はずのものだ」

す「このタイミングで出したのはなんで？」

は「龍君は洞察力が鋭いから黙ってる危険やと思ったからや」

ア「確かに…あんたらに不信感抱いて離反しそうね」

な「聖王のこと出したのも伏線なのかな？」

龍「それは作者に期間とわからんだろう…:というかどうなってんだ、
今」

な「私はもういいからこっちに戻ってきたの、フェイトちゃんはま
だやる気だったみたいだけど」

す「私達より優遇されてるのに…」

は「これで終わりかな？」

ア「次回のことを言わなきゃだめでしょ」

龍「ああ、次回は…未定?どうということだ」

作「実は今回の練習後の見せた奴の裏話でも造ろうと思つてさ」

な「ああ、あれね…つてしれつと復活してるね」

フ「フォトン・ランサー・ファランクスシフト…！」

作「まだやんのかあああつ…！！」

龍「…とにかく、俺のデバイス、ユニストスの能力に触れる話になる可能性があるということだな」

は「ということは私ら全員出番ないんとちゃう？」

龍「まあ作者の腕に期待しよう…したくないが」

な・は・ア・す「意外と辛口コメント…！」

フ「感想や誤字脱字の指摘など待つてます…！」

作（黒焦げ…かろうじて生きてるようだ）

番外編 1 龍士の夢で（前書き）

これは番外編でそのとおり龍士の夢の中であったことです

ここで設定されたものは次回以降では適用されます

ではぜひともお楽しみください

番外編1 龍士の夢で

作「今回は龍士の夢の中の話です!!」

ユ・セ「わゝ（投げやりな拍手）」

龍「いろいろと突っ込みたいことがあるがまずこれはなんだ!?!しかもセイはともかく何でユーのがいるんだよ!!」

作「いや、僕とお前とセイだけじゃ回りそうになりからさ」

龍「とんでもねー事ぶちまけたよこの人」

ユ「ちなみに本編で僕の出番は?」

作「中盤以降、ちなみにオリキャラで恋人がいる設定で再登場する予定」

セ「また大胆ですね…」

作「ユーノも結構好きなキャラだからさ、ちゃんと幸せにしてあげないと…正史ではなのはとのフラグ立っている様でたっていないんだから」

ユ「グフツ!!」

龍「ガンダムネタか…ボケにしては（レベルが）低いな」

ユ「ボケたわけじゃない!!というか早く解説に入らないとだめじ

やないのかい!？」

作「それもそうだな、今龍士がユニストスの能力『武器精製』で使える力の解説のコーナーだったの忘れてた」

全「忘れちゃだめだろ!!」

作「まずはガンダム系では使えるのは一応全武器や全特殊機能(ゼロシステムやNT-Dなど)」

龍「トンでもねえ奴になった、俺」

ユ「ほんと、というか使いこなせるの?」

作「多分無理だね、ここで多分出てこないのもあると思う、DXなんて存在が示唆されるだけで終わると思う」

セ「ちなみに私とユニゾンすると…」

作「威力が上昇する」

ユ「それ以外はないの?デメリットとか」

作「ない!!」

ユ「使用できるのは何個まで?」

作「本編でやって見せたように6つぐらい、でも刀はほぼイメージだから」

龍「そういえばトランザムとかの説明がないが」

作「トランザムはリンカーコアに蓄積されている潜在魔力を開放する。でも使い切ると最低三日間は魔法が使えなくなる」

セ「トリアルシステムのほうは？」

作「一定範囲内にいる魔導師、および戦闘力のある人物のその能力をキャンセルする」

ユ「つまりその範囲内にいる限り戦闘行為をすることができないって事だね」

龍「確実に最後のあたりで使われるだろうな」

ユ「デメリットは？」

作「ない!!」

龍「チート超えてんじゃねえか!!」

作「ただしユニストス内部で作成していて、まだ完成していない」

セ「武装はどのような感じで作るのですか？」

作「だいたい一緒の場所だよ、でもサバーニヤのホルスターは甲冑の平帯につくとといった若干の変更があるけど、それは本編中に描写する（予定）、ハルートの増設ブースターは靴のようにはく感じ」

龍「まだあるよな」

作「後の「SD戦士三国伝 Brave Battle Warriors」は書いてある連中の武器&必殺技、

「ONE PIECE」は六式と覇気の武装色と見聞色、

「BLEACH」は（漫画で使用された）始解&卍解と鬼道に帰刃に虚側の使用技、
レスレクシオカロー

「NARUTO」は（これも漫画で使用された）地水炎風雷遁（血系限界は使用付加）、

「機動武闘伝Gガンダム」は（本編中で使用された）流派・東方不敗、

「るろうに剣心」は飛天御剣流と牙突系と御庭番式小太刀二刀流と刃止めと刃渡りと倭刀術に二重の極みに二階堂平法に縮地、

「ドラゴンボール」は気を本当に使えるようになって瞬間移動とかが可能（ただし気弾類は射撃魔法になる）

こういう設定でいこうと思っています」

龍「口寄せの術は使わないんだな、というかこれ全部魔力見たよらないやつになるんじゃないか？」

作「鬼道とNARUTOの忍法は魔力変換による攻撃に分類されるけど、他のは設定そのまま」

ユ「でもみると隙が大きな技が多いよね」

セ「遠距離用が少ないな…」

作「これで遠距離もあると本当にチート野郎になるから…怪我したりするように調整してある」

ユ「そういえばまだガオガイガーっていうのを説明してないんじゃない」

ない？」

作「これは一番文字数というかスペース使うから…というかここで説明はできない」

全「何で!？」

作「実は何気にキーなんだよね…後半の」

全「まさかのネタばれ!!」

作「だから勇者王のほうはゴルディオンハンマーは出したけど性能はフルに発揮できない状態」

龍「だから金色に光らなかったのか」

作「後必殺技は「龍」シリーズのうちTV番のは使える」

龍「『双頭龍』とか『サンダーブリザード』とか『バーニングハリケーン』とかか？」

作「後『マキシマムトウロン』もね、平帯を手の変わりにして」

ユ「あなたのことだからそれに天竜神のを組み合わせたのもあるんじゃないですよね？」

作「あるよ、たぶん次回か次々回で使うと思う」

龍・ユ（あるんだ、てか使うんだ…）

セ「ということとは前回でた「ゆりかご」もキーですね」

ユ「そうだね、そうじゃなかったらこのタイミングで出さないよね」

作「まあ最初の番外編はこんなところかな」

龍「まだやるのか!？」

セ「もしかしてデートとかもやるのか？」

作「ああ、なのは、フェイト、はやて、すすか、アリサの5人とな」

龍「さつきユーノにオリキャラで彼女造るって言ってたよな？」

作「うん、それも番外編でやるよ」

ユ「なんかちよつといやな予感だするんだけど」

作「最初にやるよ、ユーノのは」

全（やつぱり・・・）

作「ちなみにそれでなのはと会って事も決まってる」

全「鬼か!！」

作「大丈夫、龍士にマッサージされた後だから」

セ「それならなのはの気持ちは主に向いてますから問題ありませんね」

龍「告白されたのか？したのか？」

作「そこも全部考えてある」

ユ「一体いつ書くの？」

作「というかこれから忙しくなるからしばらく書かない」

全「おい！！」

作「土日には書ければいいかな……」

全「言うだけ言って計画倒れかよ！！」

作「いや、ちゃんと実行するぞ！！ただこれから6月の中旬ごろまで少し忙しいんだ、大学が」

全「理由はプライベート！！！」

作「普通だろ、他の作者さんだってそうだろうし」

龍「いや、確かにそうだが……」

作「こういうときだけ青いネコ型ロボットが欲しくなる」

ユ「あんまりそういうの言わないほうが……」

作「一番欲しいのは道具だけだね……」

全「それは一番言っちゃだめだ——!!——!!」

番外編1 龍士の夢で（後書き）

ガオガイガーはネタばれですかね…

それとユーノの彼女、名前や設定など希望があったら感想欄からお願ひしますね

最後に質問や感想などお待ちしています!!!!

追記5 / 16 , 19 , 6 / 17 : ちょっと追加しました

第14話 トレーニング!! (前書き)

作：約1月ぶりの投稿でスー!!

龍：おい、こいつついに壊れたぞ

な：ほんとだ…どうしよう？

す：しょうがないよ、大学の研究室ってそれだけ忙しいんだから

ア：そう、あんたたちから想像もつかないほどにね

は：そうなんか…

フ：なんていうか…ちよつと…ね、

作：やったことねえやつにはわかんねえよ!!あの苦しみは!!

は：血の涙も流して…すごいつらかったんやね

作：…って何もしてくれねえのかよ!!

龍：空想が現実に触れると思うのか？

作：メタ禁止iiiiiiiiiiii!!

は：今回はどないな内容なん？

作：又オリジナル…しかも今回は書いていたら気づいたら1人から

の視点しかない

な：出番は？

作：地球組み以外は全員ある…はず

は：…ならいつてみよか

全：お楽しみください!!

第14話 トレーニング！

Side 龍士

「おし、特別訓練始めんぞ」

「」「」「特別訓練？」「」「」

「ああ、といってもFW陣（お前ら）だけじゃないけどな」

「どういうことで…ってなのは隊長！？」

「フェイト隊長も！！」

「シグナム副隊長にヴィータ副隊長！！」

「八神部隊長も！！」

「龍君、前戦の戦闘メンバー全員集めていたいどんな訓練するの？」

「うん、しかもデバイスなしとか」

「理由をちゃんと説明してもらっぞ」

「ああ、ただ後他に」「すみませ〜ん」「来たか」

「シャマル先生！！シャーリーさん！！」

「リイン曹長も呼ばれたんですか？」

「ハイです!!！」

「つつてもこの3人は監視兼観測だけだな」

「で、いったいどんな訓練するんや？」

「それはな…このフィールドで行う!!リイン!!！」

「ハイです!!！」

そう言つてリインに頼んでおいたものを起動してもらい、訓練フィールドは今まで使用していた廃棄都市ではなく山が出てきたので知っている俺とリインとシグナム以外全員が驚く

「ちょお待ってや!!こんなんいつつけたん？」

「始まる前日にシグナムと模擬戦した後リインに頼んで、教導の補佐してもらつて聞いたときから考えてたからこれ使つての」

「これでいったいどんな訓練するんですか？」

「引き伸ばしても意味がないから発表する…それは…『警ドロ』だ!!！」

『警ドロ!!』

「あの、警ドロって何ですか？」

「あ、ミッドの連中って知らないのか…警ドロって言うのは警察と泥棒に分かれてやる鬼ごっこ…追いかけてっこだな」

「それが一体どんな訓練になるんですか？」

「カリカリすんなティアナ、ちゃんと意味がある、それを説明してやる」

「わかりやすくお願いしますね！！」

「（無視して）まずシャマルの定期健診を一日受けたのは全員覚えてるな」

全員がうなずくがこれがどういう意味かわかっていないのか全員がわかっておらず、首をかしげる…はてやなのはがちよつと可愛く見えたのは内緒だ

「それで俺はシャマルからお前らの筋力に関する…つまりどれだけ肉付きがいいかをちよつと教えてもらってこの訓練をすることを決めたんだけだ」

なのはちよつとずつ意味がわかってきているようだが他のメンバーは少ししかわかっていないだろう…スバルにいたっては少々ショートしかけている

「で、筋力と体力が少々ついてきたみたいだからそれを完全に使いこなせるためのトレーニングが『ファルトレクトレーニング』というものだ」

「いったいどういうものなんですか？」

「それは野山を走ってそのついた筋肉を適切に動かせるようにする、
というものを目的としたものだ」

「つまり、それをやれば自由自在に動きやすくなる、ということか」

「シグナム、正解、それと今回はスターズとライトニングに分かれて行く。隊長のフェイトが執務官だからライトニングが警察、スターズが泥棒な」

「……え……!! (何……!!) ……」

「まあ落ち着け、今回は、だから…次回は逆にするから」

「それで…主はやてとお前はどちらに入るんだ？」

「正直言ってバランス的に難しいんだよな…ライトニングは体力的にきついのが2人、スターズは運動音痴と体力的にきつそうなのが1人ずついるしな…はやてはあまり訓練している様子がないから体力がどのくらいあるのかわかんないし」

「確かに、な…」

そういうと俺とシグナムはエリオ、キャロ、なのは、ヴィータ、
はやてのほうを見る…すると無論

「おい、体力的にきつそうってあたしのことか？」

「当たり前だ…ティアナはあそのスバル(馬鹿)のせいであるだ
ろっしな」

「あはは…まあ…ヴィータ副隊長には劣るでしょうが」

「ならばやてがスターズ、俺がライトニングで問題ないか？」

「まあバランス的にはちょうどいいんじゃないか？」

「それじゃ…シャーリー!!」

「は〜い!」

俺がシャーリーと教導で作成した特別製の簡易デバイスを1人1人に調節したものを渡していき、シャーリーに説明させる…こういうのは専門家に任せるべきだしな

「これは警察側、泥棒側で微妙に機能が違います。泥棒は警察に触れると音がなり、捕まっている間は中央のランプが光っていません。逆につかまった状態から逃げ出さしてもらった場合は違う音になってランプが消えて再び逃げることができます」

「ちょっと待って、それってせっかく捕まえても仲間に助けってもらったらまた捕まえなおさなきゃいけないってこと？」

「そうだ、ただし助けに行くのはリスクがある」

「リスク？」

「捕まえたやつを放っておくか、普通」

全員が首を横に振る…つまりは、だ

「つまり、追いかける人と捕まえたのを見張る人がいる、ということですね」

「そう、そしてその役目は交代して行ったほうがいい…ずっと走りっぱなしじゃ疲労するだけ出し、この訓練の意味がないからな…他に質問は」

「どうしたら終了になんだよ」

「スターズが全員捕まえるか、それともライティングが制限時間中1人でも逃げ切るか、だ。ちなみに制限時間は昼休憩の15分前までだ」

「わかった」

「あ、忘れてた」

「何を？」

「今回、全員魔法の使用禁止な」

「ええ〜〜〜!!」

「なのはが悲鳴を上げる…そりゃ運動音痴のやつにはきついよな…でも」

「これは本人の体つきを整えるためのやつだ…本人の力を使わなきゃ意味ないだろ…ただちゃんとハンデはつけてある」

「えっ…」

「掌とか一定面積以上で触れた場合のみ音がるんだが、なのは、エリオ、キャラは手全体（そう言っただ俺は右の掌、指を左の人差し指で囲む）、ヴィータ、スバル、ティアナ、はやて、フェイトは掌（右の掌のみと、その上の指のみで囲んで示す）、俺とシグナムは少しでも触れたらアウト、という感じだな」

「確かに、シグナムと龍君の体力はこの中でトップなもの、全員同じ条件だとはつきり言っただ有利すぎるわ…これなら少しはすつただけでもアウトになるから」

『それなら…』

「疑問はないようだな…よし、んじゃはじめっか…シャマル!!」
「わかりました!!」

俺はシャマルに言っただ俺たちライトニングを山の中腹に転送してもらい、スターズは麓に歩きで移動してもらい、ラインにモニターでスタートの合図を出してもらい、トレーニングを開始する

逃げる追うの大混戦!!

「ビビビビ……！！！！」

「お、タイムアップのようだな」

「はあ、はあ……お前……速過ぎ」

「提案者が早々つかまるわけにも行くまい……それにエリオとキヤロの手前って意地もあつたしな」

「……おまえ……意外と……親ばか？」

「……否定はしない、が、小さいこの前ではこうしていることが多かったからな……つまりは癖だ」

「癖……そっか、おまえ孤児院だったから……」

「こうして過ごしている時も多かった、それに高校のときは体力のあるスポーツをしてたし、そこから衰えたりしないようにはしてたからな」

「なるほど……そりゃ勝てないか」

「それよかそこですっころがつてる2人にも気をかけてやれ」

「ん……あ、スバル、ティアナ、悪い」

そう言ってティアナとスバルを介抱し始めるヴィータ、そこになのはとはやてと捕まっていたライトニングがやってくる

「あゝ結局捕まえられへんかったか…」

「龍君すつごく足速いね…」

「ヴィータにも行ったが提案者があっさり捕まるわけにはいかんし、孤児院にいたところからの癖も出ちまったしな」

「もしかしてエリオやキャロみたいな子がいたら本気を出す、見たいなか」

「ごめん、シグナム…あたりだ」

「…できればあたってほしくなかったが…というかそれは大人気ないのでは？」

「まあ…あ、言い忘れてたけど今回の訓練で勝手に魔法使ったやつには罰があるから」

『何いいーーーー！！！！！！』

「だって言ったらもつと硬くなるだろ、それを防ぐためにわざと言わなかったんだ…それをシャーリーとこのデバイスでチエックしてくるから、それで回数によって罰の量とか重さとか変えるから」

「う、うそ……」

なのはがなんか絶望したような顔をしている…どんだけ使ったんだ、こいつは…それ以外だとスバル、エリオ、キャロ、フェイトが微妙な顔をしており、八神家の連中とティアナは『やっぱり』的な

顔をしている

「『使用禁止』って言った時点で多少は予測しろ…というかフェイト、おまえ執務官なんだからこのぐらいの言葉の裏ぐらいよめ…それとはやてたちはさすが捜査官…ティアナもよく読んだな…えらいぞ」

「あ、ありがとうございます」

「あはは…ほめられとるのか、それは」

「褒めてるに決まってる…あっちの執務官よりその立場が似合ってるんじゃないか？」

「あはは…ありがとうございます、龍君」

「んじゃ、その罰は…昼食後にそのまま食堂にいてくれそこで発表するから」

「使用していないものは？」

「一応いてくれ…罰があんのはあそこにいるやつらだけみたいだが」

「「わかった」」

「んじゃ、おまえらは飯行つてこいよ…あそこにいるやつら再起動させてな、ラインとシャルマルとシャーリーはすまんがもう少し付き合ってくれ」

「「「はいっ！…！…」」」

そして俺たちはデータを使ってどれだけ魔法を使ったか、どれだけ体つきがよくなったかを確認し、計測が終わると全員で昼食をとりに食堂に向かう

「あ、終わったん?」

「ああ、すまなかつたな、大事な副官と医務官を借りて」

「気にせんでええよ、戦力の底上げに必要なことやから…急に今日一日教導を俺にやらせるよう命令を出してほしい、といわれたときはびっくりしたけど理由聞いたら納得したから後悔もしてへんしな」

「そう言ってもらえると気分が楽になる…あ、ここいいか?」

「もちろんや」

そう言っただ俺たちははやてたちがいるテーブルに座って食事を取る…近くから出ている黒くよんだオーラをがん無視して

「んじゃ、結果と罰の発表いこか」

「了解だ、部隊長…それとヴィータ、シグナム、シャマル、リイン、逃げようとしているそのバカどもをいすに縛り付ける」
なのはとスバル

「…了解」

俺とは1月ほど過ごし、しかも俺がいない間にはやてが俺に告白したことを全員に伝え、なおかつ受け入れてくれたおかげか俺の願いは基本的に聞いてくれる

「次脱走しようとしたらはやてに頼んでなのは、おまえは1週間教導禁止に、スバル、おまえは食事を制限すつから」

「ええっ!!」

「分かったら大人しくしておけよ…回数とそれをやったやつの発表だ…まずは、

1回 フェイト

5回 エリオ、スバル

7回 キャロ

10回以上 なのは

…ぶつちゃけなのは途中で数えんのめんどくなつたからこんな表記だ」

「どんだけ使用したん…なのはちゃん」

「さすがに呆れたですう」

「これは…ごめん、なのは…フォローできない」

「なのはちゃんと一番付き合いの長いフェイトちゃんまで何もいえんとは…ひどすぎるで」

「…だってエリオもキャロも使わないと捕まえれそうになかったんだもん」

「いや、魔法使ってエリオとキャロやつとかよ!!!ていうかシグナムとフェイトはどうして捕まっただんだ?」

「私は徐々に包囲されて、だな…ティアナの指揮力があそこまでとは思わなかった」

「八神部隊長がシグナムさんの癖を教えてくださいださったおかげです」

「その協力関係を生むことも今回の訓練の目的だったからよかったな」

「私も似たような感じ…ティアナがここまで厄介だとは思わなかったな」

「そ、そんな…恐縮です」

「褒められているんだから嬉しがつとけ！俺もおまえの実力は高く評価しているからな」

「ぶつちやけFW陣ではどのくらいの期待値が龍君の中にはあるん？」

「一番高いのはティアナだな、次点がエリオとキャロだ」

「わ、私ですか！？」

「戦いの場で一番怖いのは頭脳が高いやつだ…どれだけ有利だろうとその頭脳で逆転されるかと思うと攻め込んでいる側としては戦々恐々だからな…俺は逃げてるとき一番注意していたのはティアナの行動だからな」

「だから捕まえられなかったのか…」

「そういうことだ、ヴィータ」

「逆に我々は逃げ方が多少甘かった、という事か…」

「一応お父さんに友好的な逃げ方を教えてもらったのですが…」

「それすらもティアさんには読まれてましたからね…」

「というわけで、ティアナは本日の業務は無し！！それは全部なのはとスバルにやってもらおう！！」

「えっと…それが罰ですか？」

「一部、だな…他のは…というか面倒だから一気に発表する…これだ！！」

フェイト：本日、この後の副隊長の分も仕事

スバル：ティアナの仕事も行う、本日食事抜き

エリオ・キャロ：明日のこの時間まで特殊リストバンドをつけて勤務

なのは：本日、この後の副隊長・ティアナの分も仕事、本日食事抜き、来週のこの時間まで特殊リストバンド・アंकバンドをつけて勤務

「ちょっと待って！！なにこの内容！！」

「シャマルたちの意見を取り入れて少し軽めにしてやったのに…そのままにしてやるのか？」

「すみませんでした」

「僕らは…レベル的にどうなんでしょうね？」

「特殊リストバンドって何ですか？」

「ん、ああ…これだ」

俺が見せたのは自分がつけているもの、これは重量があり、一挙手一投足に魔力をかなり消耗するもの、無論、なのはやキャラ用、というか各員それぞれにあわせたものをシャーリーとリインに協力してもらって作成してある

「これをつけてエリオとキャラはこれから24時間、なのはは168時間過ごしてもらおう」

「いつはずしていいんですか？」

「まあ風呂のときぐらいだな、後は原則として禁止だ」

「わかりました」

「それと、キャラとエリオのはもうちょい軽めにしようかと思ったんだが…社会に出て働いている以上、あまり譲歩するのはよくないと思ったからこの感じだ…それでも十分加減したんだがな」

「実は、エリオとキャラは使った回数の半分の量の罰なのですよ」

「「えっ!!!」」

「一応このなかじゃ一番幼いからな…しょうがない、で、目をつぶったんだ…俺ら全員な」

「確かに社会人だが、こいつらはまだ子供、それ相応の措置、という事か」

「そうだ、シグナム…で、そこで嫌なもん振りまいてるやつ、どうにかできないのか…」

「無理です、できるのらとつにやっていますから」

「そうか…ではとつとかかれ…早くしないと残業だぞ」

「…はいつ…!」「…」

ライトニングの3人とシャーリーは返事をしてさっさと出て行くが…スターズと八神家はまだ残っている

「あ、すまん、まだ言ってなかったな…ティアナは本日の業務はないから今日はもうあがりな」

「えっ…いいんですか？」

「ええよ、ティアナが一番がんばったから、ご褒美と思って大人しくやすんどき」

「そうね、意外とあれって体に負担かかるから…ゆっくり休んでね」

「…分かりました、失礼します」

「…で、こいつらどうしようか…」

「完全におちこんでんな…」

「なのはちゃんもスバルにも結構きつい罰が言ったからな…」

「ああ…あれでも加減したんだが『龍さん!!』どうしたシャーリ
ー?」

『頼まれていたもの、エリオ君とキャロちゃんに渡してちゃんとしてもらいました!!』

「分かった、タイマーは?」

『ちゃんと作動していますから、時間になったら音が鳴ってそうしたらはずして持つてくるように言いました』

「分かった…ご苦労だった、シャーリー」

『いえ、私も業務があるので、失礼します!!』

「おっ」

そう言ってシャーリーの通信を終え、なのはとスバルをどうしようか全員で悩む…ちなみにはやてとリンは昨日のうちに俺が手伝って今日提出の分を終わらせてあるので大丈夫だし、ヴィータのはこいつらが負担するから何も問題はない…

そして動き出したのはあれから10分後、はやての『どうせやったら全部期間同じにせえへん?』の一言出だ…部隊長命令だと逆らえないから潔く仕事に向かっていった…

なお、さすがに心配だったので見に行くとなのはは的確に捌いていたが案の定スバルは四苦八苦していた…だが手伝っては罰にならないので全員に手伝わないよう注意した後、両方への差し入れを持つていった…

余談だが終わったのはやはりフェイト、エリオ、キャロが早く次になのは、だったのだがスバルのが終わらなければその上であるなのはが帰れるはずもなく、結局0時過ぎまで残っていたという

第14話 トレーニング!! (後書き)

は：以外にシャーリー、リイン、シャマルが出たなあ

フ：シグナムもね…セリフが多いね

す：というかスバルって子がすごくバカ扱いされているような気が…

龍：気のせいだ

ア：いや、でもあれは

作：気のせいだよ、出番なしにされたい？

ア・す：私たちの勘違いです、どうもすいませんでした

は：…といつてもまずかちゃんは告白しとるから再登場確定やけどな

な：私とフェイトちゃんはどうなるのかな？

作：それは…後のお楽しみです

フ：すっごい意味深だね

ア：あたしもどうなるのよ

作：とりあえずドラマCD聴いて面白そうだったから1はやりませ

は：…となると次回か次々回ぐらいか？

作：そうだね、流利的にもそんな感じかな

フ：そういえばなのはとエリオとキャラは大丈夫なのかな？

龍：ちゃんと1人1人に調節してあるから大丈夫だ…

は：むしろこれではちゃんもキャラもつようだったりしてな

す：ポデビルダーみたいに？(黒笑)

な：イヤーーーー！！！！それだけは絶対にイヤーーーー！！！！

フ：だ、大丈夫だよなのは！！そんな風になっても私たちは友達だよー！！

龍：いや傷口に塩塗りこんでんじゃねえよ！！

は：それにそうなったとしても言葉の裏が読めんかったなのはちゃんの自業自得やん

ア：それを言うならフェイトもでしょう…ほんとに執務官なの？

な・フ：うっ…みんながいじめる

作：そこで抱き合うな、ここはGLじゃないから、NLだから
す：BE「あるかあああああ！！！！！！」

作：んなもん書けるか！！

龍：そんなのかかれるぐらいなら自意識持つよう努力してのっとなるわ！！

は：何気に龍君も危ないなあ

ア：それよか次回はどうなのよ

作：えっと…未定です

は：またかいな…これまでまじめに次回予告とかしとったのに何でなん？

龍：意外と自分で自分の首をしめることだとわかったらしくてな

な・フ・ア・す：おそっ！！！！

作：じゃかましい！！フラグへし折ったるか！！特にすずかとなのは！！

女全：どうもすいませんでした

作：次回はおそらくドラマCD1の可能性が高いです

龍：おそらくそれで2話使って、ホテルアグスタ、か

作：それでは、

全：次回もお楽しみに！！！！

作：一部セリフと罰を変更しました（6 / 1 2 - 2 0 : 0 3）

番外編2！！ アンケート??（前書き）

今回はアンケート風（?）です

ちょっと今後の方針について聞きたいです

今回の参加者はいつも前書き、後書きにいるメンバーとFW陣です

ちなみに時期これで新しくついた設定が有効になるのはCD1の後半からです

一部他の人のことを知っているのはご都合主義じふじです

番外編2!! アンケート??

作：さあやってきました番外編2!!

は：テンション高いなあ

エ：いつもあんな感じなんですか？お父さん

龍：似たようなものだ…しかし今回は今後のことを決めるものだと聞いたが？

作：うん、決めたことは2つほど

な：何々？

作：まず一つ目は『ジエイルとナンバーズをどうするか？』

キ：あの、本編で私とエリオ君が助けたルーテシアちゃんと

テ：シグナム副隊長に救われたゼスト・グランガイツさんは？

フ：もう助かることは決まってるんだよね？

作：もち、ちなみにほかの作品のようにちゃんと寿命どおり生きるようになります

ス：今のところラスボスのままなんですか？

は：せやなったらこんなんださへんて…どうしたいん？

作：個人的には龍士側りゅうじに引き込みたい

フ：何で!?

作：一応裏を知っているものとしては加害者っつーより被害者だから…ほら、これ読め

作者、全員にとある資料を渡す…

数分後

な：私はよいと思うよ

は：私もや…

龍：俺は最初はなからいいと思っていたがな

フ：(すごい複雑そうな顔をして)執務官としてはだめだと思う、でも、私は…

ア：フエイト、あなたの過去からいくと納得いかないでしょうけど…

す：でも少しでも理解しようとする分だけいいと思うよ

テ：そうですね、最初から全否定する人もいそうですから

エ：僕は…ちよっと複雑です

キ：私も…

ス……………

作：スバル、どうした？

バッテリーーン！！

な：スバルが頭から煙を出して倒れた！！

は：これはいつたい…

テ：おそらくこれが難しすぎて理解できなかったんだと…

エ：えっ！！スバルさんって陸士学校首席で卒業したんですよね！？

キ：何で理解できないんでしょうか…

ア：座学の成績と実際の頭のよさは関係ないわよ

す：これって専門用語も多いし理解しづらいよ…龍君が教えてくれたからよかったけど

エ：そういうふうに考えるとなんでお父さんってしってるんです？

フ：私でも知らないようなことあったし…

龍：ユーノに聞いたり、シャマルに教わったりした

F W & a m p : 女全 : なるほど、納得

作：…んで、どう思うよ

は：…ただそうすると新しい敵キャラ考えなあかんで

作：…一応その対策もできている

な：他にキャラは出さないよね？

作：…ドラマCDで海鳴に行ったときに出てくるよ、原作があるキャラが

ス：…コラボですか!？

エ：…スバルさんが復活した!!

龍：…もしかして…あいつらか？

テ：…心当たりあるんですか？

フ：…そういえば14話で匂わせてたね

作：…まあそのとおり

す：…で、どうするか決まったの？

作：…詳しくは最後、さて、次のだ…最後でもあるが

は：…2つしかないんかい

龍：…聞きたいこと多少集約しているんだろ

作：そのとおり！！で、ききたいことは『デジモンとコラボさせてもいいか？』だ

す：あの、あれだよね…でもいいのかな？

テ：てゆうか、何でしょうとか思ったんですか？

作：ゼクスさんが書いている『漆黒の竜人と少女』シリーズがめっちゃ面白かったから

全：すげえ身勝手な理由！！

作：でもちゃんと違いは作るから

な：パートナーデジモンが違うとか？

は：それだけとちゃうと思うわ…多分デジヴァイスつちゅーんのもちゃうんと違う？

作：うん、使うデジバイスはディーアークやディースキャナじゃないやつ全部から適宜選択する

キ：…？統一しないんですか？

工：統一したほうが分かりやすいと思いますが…

作：まあ今決まっていることを発表する、候補のパートナーの最終形態&mp;デジヴァイスだ…複数いるやつもいるから

龍士 デュークモン & amp・デジヴァイバースト

アルファモン & amp・D - 3

アルフォースブイドラモン & amp・デジヴァイス01

なのは ベルゼブモン & amp・デジヴァイスバースト

セントガルゴモン & amp・D - 3

スレイプモン & amp・デジヴァイスバースト

フェイト ロゼモン & amp・デジヴァイスバースト

サクヤモン & amp・デジヴァイス01

オウリユウモン & amp・D - 3

はやて チームブルーフレア & amp・クロスローダー

チームクロスハート & amp・クロスローダー

レイヴモン & amp・デジヴァイスバースト

アリサ カイゼルグレイモン & amp・D - 3

セラフィモン & amp・デジヴァイス01

ビクトリーグレイモン & amp・デジヴァイスバースト

すずか マグナガルルモン & amp ; D - 3

オフアニモン & amp ; デジヴァイス01

ズイードガルルモン & amp ; デジヴァイスバースト

スバル ミラージュガオガモン & amp ; デジヴァイスバースト

ハウホウモン & amp ; デジヴァイス01

ティアナ シャイングレイモン & amp ; デジヴァイスバースト

ホーリードラモン & amp ; デジヴァイス01

エリオ インペリアルドラモン & amp ; D - 3

オメガモン & amp ; D - 3

キャラ インペリアルドラモン & amp ; D - 3

オメガモン & amp ; D - 3

は・けつこつすごいなあ

作・こんだけのキャラの候補を考えるのがマジきつい…

フ・エリオとキャラは最終的なもの？

作・ああ、成長期はこんな感じだ。並び順¹¹上で書いた順だ

龍士 ギルモン、ドルモン、ブイモン

なのは インプモン、テリアモン、クダモン

フェイト ララモン、レナモン、リュウダモン

はやて なし、なし、ファルコモン

アリサ フレイモン、パタモン、アグモン（Ver.1）

すずか ストラビモン、プロットモン、ガブモン

スバル ガオモン、ピヨモン

ティアナ アグモン（セイバース）、プロットモン

エリオ ブイモン、アグモン（Ver.1）

キャロ アグモン（Ver.1）、ガブモン

す：かぶりが多いね

は：まあこんだけあるからなあ…

作：なのでアンケートです

全：早っ！！

作：読者の皆さんにお聞きします

1．スカリエッツィとナンバーズを仲間にするか否か

ちなみに仲間になる、ならないにかかわらず約一名はフルボッコになること確定です

その場合の敵役はもう考えてありますので、ご安心を

2．みんなのパートナーデジモンは何がいいか？

候補以外のがいた場合は名前と最終進化系、デジヴァイスの種類を感想欄に書いてください

ただし、他の方のを確認してダブっていた場合は申し訳ありませんが却下します

1．は『いいよ！』か『だめだよ！』という感じで、

2．はデジモン名だけでいいので『これ！』というものを書いてください

全員：読者も皆さん、投票と評価と感想お願いします！！！！

番外編2!! アンケート?? (後書き)

こんな感じになりました

何か意見とかあったらよろしくお願いします!!

第15話 出張!!地球へ!!(1)(前書き)

作：久しぶりの投稿！お待たせしました！

龍：待つていてくれた人、ありがとう

は：前回の話のアンケートはまだ募集中です

ア：今回の感想欄からお願いしますね

す：ちなみに意見や感想もお待ち中です!!

フ：でもこれって最後に言うべきじゃない？

作：さすがKYの妹、空気の読めなさ率が半端ないな

な：そうだね、そういえばアルフさんも昔そんなところがあった気がするの

フ：え、私もアルフもKYじゃないよ、ホンとだよ!!

ア：そうやって必死に弁護するところが・・・怪しい

龍：まあそういつてやるな、そう簡単に直るものではないのだから
す：何気に龍君が一番ひどい気がするけどね

作：さて、前々からやるといつていたドラマCD編です

全：楽しんでください!!

第15話 出張！！地球へ！！（1）

Side 龍士

俺たちは今本局の転送ポート前に来ている…理由は『第97管理外世界』 - 通称・地球 - においてなくなってしまったとあるロストロギアが見つかったと聖王協会のカリムからはやてに連絡があり、それに伴ってスターズ・ライトニング両分隊にはやて、ライン、シヤマル、俺、セイの合計13人が地球に赴くことになったのだ

「しっかしたまた地球でロストロギア…夜天の書にジュエルシード、クラスで言えば光天の書もなる可能性もあったから3つか…呪われてるんじゃないかねえか？」

「文化レベルB、魔法文化なし…って魔法ないんですか!？」

「ないぞ、俺もはやてとラインとリンディさんにあって初めて知ったし」

「でもなんでそんなところからお父さんや八神部隊長やなのはさんみたいなオーバースの魔導師が出てきたんですかね？」

「たしか高いリンカーコアをもったやつってごくまれに生まれるんだっけ？シヤマル」

「はい、ですが基本的には遺伝ですね」

「何でなのはさんだけなんですか？」

「古代ベルカ式は基本的に血統、つまり親が古代ベルカ式だったら必然的に子も古代ベルカ式になることが多くてな、ゆえに俺とはやてはきっかけさえありゃ魔導師にはなれたんだ、こんな高ランクかどうかは抜きにしてな」

「なるほど」

「それに適正という問題もあるし、魔導師じゃなくても戦う術なんていくらでもあるしな」

「魔導師じゃなくても戦う術なんてないと思いますけど」

「それは偏見だぞ、ティアナ。言っておくが俺は魔法無しでも今のおまえらなら一方的に勝てる」

「「「ええ〜」」」

「あれ、エリオは驚いてないね」

「あ、はい。お父さんが何度か何かやっているのを見て、少しずつですけど教えてもらってますから」

「何してるの？」

「ああ、それは「みんな、準備できたで」…時間切れのようだな、この話はまた今度にするか…今は仕事仕事」

「せやね、なので今から地球に出張や!」

「「「おお〜!」」」

地球か…こんなに早く帰るとはな…孤児院のほうには顔を出せないが、連絡ぐらいはしておくか…それに、あいつらは元気かな…それと、ついたらはやてにちょっと交渉してみるか…いろいろと気になることもあるしな

S i d e 龍士 O u t

S i d e セイ

地球について見たのは私と主が地球で最後に見た光景だった、どうやらここは月村の屋敷らしいが、すぐに車が近づいてきて、ティアナとスバルは車を見てあったことに驚いている

「あれ？エリオとキャロは驚いてないね」

「あ、お父さんが持っていましたから、車」

「地球の物って聞いてびっくりしましたけど、エンジンとかちゃんと調整してあるそうです」

「へえ〜、ちゃんとしてるんですね」

「ああ…それよかはやて、ちょっと頼みたいことがあるんだが」

「何や？」

「俺とセイ、2人で行動させてくれないか？」

「「「「ええ〜！」「」「」」

高町、エリオ、キャロ、ラインの4人が非難の声を上げる…エリオ、キャロ、ラインの方は分かるが高町はなぜだ？

「理由は？」

「隊で分けるとスターズ、ライトニングだろ、そしてはやてたちは後方待機に近い状態、でも俺は経験が少ないから前に出て経験をつみたい、それが理由だな（実は実家がこの市内にあるんだ、そこに行けば予言に関する資料が何か見つかるかもしれない）」

「それやったら1人でもいいんとちゃう？（ほんまか、ならええけど…セイを連れて行く理由は？）」

「私がそばにいたほうが効率いいと思います、亀の甲より年の功、といいますから（おそらく資料がかなり多いのかと、一人では裁ききれないのでしよう）」

「ん〜、まあ龍君は民間協力者やし、問題はないな（なるほどな、そうなん？）」

「（ああ）ありがとう、はやて。ならもう行くぜ」

「はい、主」

「気をつけてな〜」

「「おう（はい）」」

そうして私たちは主の実家へ…ちなみに歩いていったのだが意外と早かったな、しかしこの資料の量…いったいどうやって集めたの

だろう

Side セイ Out

Side 龍士

久しぶりに実家に戻ってきて、相変わらず綺麗にされている…
両親は家事関係が意外とだめだったので、料理人とかを雇っていたのだ。その一環でスイーパーも週一できてもらっていたのでその時のがまだ残っているのだろう

「こつちだ、セイ」

「はい」

セイを伴ってきたのは両親の研究室、そこには両親が生前集めていた資料がすべて残されているのだが…

「ありえないな」

「ありえないですね」

そこにあつたのはほとんどが紙や本の類、データにはしていなかったようだが、これは恐らく

「管理局対策でしょうね」

「ああ、いくら父さんたちでも多勢に無勢じゃ勝てん」

この間知つたのだが管理局の無限書庫にはありとあらゆる資料が眠っているらしい…ということはこの資料もあるのではと思った

のだが一度魔法関係にしないと貯蔵されない仕組みらしい、両親は恐らくそのことを知ったのでそうしたのでらう

「手作業で探すぞ、時間はある…一応な」

「はい、主…結界張ってスクライアから教わったものを使えば早いでしょうしね」

「頼むぞ」

「はい」

そうして俺たちは膨大な資料を検索してヒットしたものを速読して関係ある資料、ない資料に分別して分けていき…

「終わったな…しかし意外となかったな」

「ですが関連するものでも幾つか見つかりましたね…しかし」

「ああ、まさか昔から変だと思っていたが…ここまでとなるとびっくりだ」

その資料のなかには俺の血縁に関するものも残っていたが…これをミッドチルダにいる俺のことを何も知らない連中に知られるのは危険すぎるから…嚴重に保管して手元においておくか

「帰るぞ、集まったし」

「はい、それと先ほど私に夜天の主から思念通話がありました」

「何だつて？」

「一度スターズ、ライトニングと合流して待機所に戻ってくれ、だ
そうです。もしかすると自分たちも合流するかもしれない、とも言
っていました」

「そうか…では行くとするか…どこにいるか分かるか？できればな
のはかフェイトかティアナに聞いてくれ」

「すでに…『翠屋』という喫茶店にバニングス、月村というそ
うです。それと夜天の主とシャマル、リインも合流したと」

「つまり俺たち以外全員『翠屋』にいるってわけか…じゃ、すぐに
行こうか」

「はい、主」

そうして俺たちは『翠屋』に向かった…そこで俺は後悔と苦悩、
そして果てしない苦勞をする羽目になるとも知らずに

第15話 出張!!地球へ!!(1) (後書き)

龍：最後の入ったいなんだ!!

作：次回へのフラグ

す：前回言ってたコラボ？

ア：でも最初の2つはなんか違うんじゃない？

作：実は龍の過去に関係してるんだよ、これ以上は大きすぎるから
いえないけどね

な：たいていの人は推測しちゃうんじゃない？

フ：エ…私全然分かんないよ…

ア：フェイト…あんた…(凄い哀れみの視線)

す：そういえば昔からテストの応用問題とか苦手だったね、フェイトちゃん

は：100%に近い確立で引っかけたモンな

作：引っかけとかってそんなかかるモンなの？応用ってそこまで難しいの？

龍：わからん、解けて当然だったから

作：僕もちよいちよい引っかけたけど、確立であらわすと30
ぐらいかな

は：…というか感謝しなくてええの？

ア：そうよ!!感想を書いてくれたサイバスターさんとnukos
anさんにお礼を言わなきゃいけないでしょう!!特に作者!!

作：はい、そうでした…サイバスターさんとnukosanさん、
感想書いてくださってありがとうございます

龍：次回はいつたいどうなるんだ？

作：お前の知り合いが大量に出てくる…ゲスト扱いだからそれだけで
終わらせる予定だがな

全：次回もお楽しみに!!

な：誤字の報告や感想、意見いろいろ待ってますね!!

は…アンケートのほうもどろどろよろしくお願いします…!

フ…2回言った!?

龍…重要なことだからな

第16話 出張！！地球へ！！（2）（前書き）

作：今回はネタに意外と困った
は：以外やな

な：活動報告ではネタはたくさんあるって言ったのに
龍：今回は原作の形が微塵もないからな…それに口調が分かりづら
いというのもあるのだろう

ア：確かに、ほとんどしゃべってないキャラは特にね

す：それを言つとセリフが誰か分かりづらいこれはきついんじゃないか…

作：自分でもかいて迷うよ…誰をどうしゃべらそうかにね

龍：キャラが多いと1人分のセリフを確保するのもかなり難しいか
らな

フ：確か今回で龍の過去が明かされるんだっけ？

作：ちよつとだけね

な：私つてキーキャラ？

作：実はなのはとはやてはかなり凄いことになる予定

す…：デバイス魔改造とか？

龍：それは全員やる…作者が言っているのはストーリーのことだろ
うな

ア：大怪我でもすんのかしら？

作：それはないから安心していいよ

全：今回も楽しんでください！！

第16話 出張!!地球へ!!(2)

Side セイ

今私はとても困惑している…なぜなら喫茶『翠屋』についたのはいいのだが店に入り、マスターと思しき男性を見た瞬間主が固まってしまったからだ…無論固まっているのは主だけではなくその男性のほうもだ

そしてそれに違和感を感じた高町に似た女性(恐らく母か姉だろう)が男性のほうに、そしてこちらには機動六課関係者が近づいてきた

「龍君? いったいどないしたんや?」

「夜天の主か…すまないが私にも分からない…あの男性を見たらいきなり固まってしまったのだ」

「あの男性って…なのはのお父さんの土郎さんのこと? 面識あったの?」

「少なくとも私と知り合ってからはないはずだ…つまり私と会う以前にあったことがあり、なおかつ硬直するほどの過去があるということだろう…2人の間にはな」

「それっていったい…」

「とにかく、今は主を目覚めさせよう…そちらの…土郎殿、ですかのほうも」

そうして何とか目覚めさせることができた私達だが…これがまさかの出会いだとは思ってもよらなかった…

Side セイ Out

Side 龍士

俺は正直言つて驚愕しすぎて固まっていた…なにせなのは父親が恩人である土郎さんだとは思ひもしなかったからだ…だがそれを理解すると俺の心は罪悪感と後悔と苦惱で一杯となった…

なぜなら俺が6歳だったとき、俺と両親は暗殺されかけ、それを助けてくれたのが土郎さんだったからだ…無論、俺と両親は無事だったが代わりに土郎さんは何ヶ月も生死の境をさまよう大怪我をしてしまったからだ…

だから、俺が以前になのはに言った『孤独』…これを作り出す原因を作ったのは俺にもある、ということだ…こうなるとなのは以前説教した自分を殴り飛ばしたくなってくる…何も知らなかったじや済まされないから…

しかし、何も言うことができない…何を言ってもただ言い訳みたいなのにしかないから…それでも、言わなければ成らないのだろう…過去から逃げることはできないのだから…

「……お久しぶりです、土郎さん…15年ぶりぐらいですか…」

『……』

「…あ、ああ、そうだね…あれだけ小さかったのに…それと…」

親の事は…」

「……………大丈夫じゃないとはまだ完全に言い切れませんがもう大丈夫、とはいえます」

「そうか…それよりもみんな知り合いなのかい？」

「ええ、実は…」ってちょっとまってや!」「はやて?どうかしたのか?」

「いったい龍君と土郎さんはどういう関係何?昔からの知り合い見たいやけど?」

「そうね、あなた…話してくれるかしら?」

「ああ…実はね」

それからは俺と土郎さん…正確には俺の家族と土郎さんの関係についての過去話が始まった…

Side 龍士 Out

Side 土郎

僕が彼や彼の家族と会ったのはボディガードとして最後の仕事をしていたときだったよ…彼らはその要人のお客として招かれていてね…

「俺の両親は結構その筋じゃ有名な学者だったんだ、だから呼ばれた」

そう、そしてその要人はかなり妬まれていたみたいでね…彼を亡き者にしようとするやつらからの暗殺者によく狙われていたんだ

「ついでに言つとくとパーティーとかは暗殺するのにうってつけだぞ、殺しても容疑者が多くなるし、一人殺されたら即座にパニックになるからな…混乱に乗じて逃げやすい…なぜそんなに驚く…特にフェイト」

「いやだつてそんなの初めて聞いたし…」

「こんなのが『優秀な執務官』…どういう基準何だ…」

「確かにね…いわゆる刑事課の警察官のようなものなんだからもうちょっと勉強したほうがいいかもね」

「は、はい…」

「お父さん、龍君、早く続き続き!!」

「そうせかすな、なのは…ちゃんと話すさ」

それで僕はその要人の護衛として、龍土君たちは客として会ったんだ…とはいってもそのとき龍土君のことは知らなかったんだけどね…そして…事件は起こった

「その要人が逃げても最悪大怪我をおうようにそいつらは大型の爆弾を使ったのさ…しかもそれまでとは段違いのを、な」

「ああ、それまで何度も狙われていたとはいったけどそこら辺にいる人でも気をつければ回避できるようなもの…つまりは、だ」

「その要人以外に片付けたいやつがそこにいた、そしてその片付けたいやつってのは」

「龍君の両親やな」

「はやてちゃん、正解だ…今思うと普通の人たちだったからなぜ狙われたかは僕は分からないんだけどね」

「俺は知っているが…ここで、いやここにいる連中に話すことはできないな…俺個人の問題でもあるからな」

「そんな…！話してくれても「信用できもしない連中に話すほど、俺は伊達や酔狂じゃない」っ…！」

「なのは達は信用できないのかい？」

「口が堅いか堅くないかです…はやてあたりは堅そうですがフェイトはうつかり言いそうですんで」

龍君のその言葉に付き合いの長い私達は納得し、フェイトちゃんは落ち込んでいる…

「話を続けましょう」

「ほおっておくのかい？」

「気にしていたら終わりませんよ」

「それもそうだね」

そしてその爆発の一番近くにいたのはその要人…だったんだけどそれを龍士君の両親が突き飛ばしたのを見て、僕は考えるよりも先にその人達を助けに行つてね…おかげで、あの大怪我さ

「その事件の運がよかつたところは、大怪我をしたのが僕だけで他の人はほとんど怪我がなかつたことだけだね」

「だがそれであなたの家族には迷惑をかけた…特にその時のなのは…」

「そうだね…僕もとても申し訳ないことをしたと思つていよ」

「えっ!!」

なのはが驚くが、当然じゃないか

「甘えたい盛りの5歳の娘をほつたらかしたんだ…そして怪我が癒えたら甘えてきてくれるのかと思つたら一非の打ち所のない素直ない子…そのとき、僕は後悔したね…どうしてこんなことをしてしまったのかって」

「自己弁護にもなつてしまつが、悪いのはあなたじゃなくて人を亡き者にして権力とかを手に入れようとした連中だ…」

「どこが自己弁護なんだい？」

「そうですね…むしろ龍士さんの」両親の行動は正しいものと思えますが」

「客観的に見ればそうだろうな…だが俺としては…孤児院に入って親に捨てられた子供達を見てきてな…自分達を庇って助けてくれた人の家族に同じような辛さと悲しさを味合わせてしまった…そう思うと…な」

『……………』

龍士君の言葉には何も言えなくなったよ…自分が辛い思いをしてきたからこそ、人にそうさせるのと、そうさせてしまうのがいやなんだだろうね…

「やさしいね、龍士君は」

「…よく言われますけど、それはただ俺がいたせいで死んでしまった両親への…ただの罪悪感を消したいからですよ…俺はやさしさからやっているつもりはありません」

「君からは、ね…でも君が感じていることと相手が感じることはまったく違ったりするんだよ」

「せやで、龍君は優しい…これはここにいるみんなそうおもってるで」

はやてちゃん言葉に皆　フェイトちゃんは少し？という感じが　頷く…

「…皆…ありが…あれ？龍っちじゃないっすか…こんなところで何してるんすか？」

感動の場面をぶち壊しだね…龍士君の名前を呼んでいたから知り

合いだろうつて…龍土君!?

「いっぺん死んでこいボケえー!!」

叫ぶと同時にその人物の顔面にドロップキック…店中のものが何も壊れてないし…実は龍土君ってかなり強くて凄い?

Side 士郎 Out

Side 龍土

皆との絆…つながりを確信して礼を言おうと、そこにはちよつとしたオーラが漂っていたにもかかわらず、空気を読まずに輪のなかに入ってきたのは中学時代の部活仲間、黄瀬涼太だ

「いきなり何するンすか!!」

「お前が空気読めないからだ!!」

「確かにな」

「今のは入ってくるべきところじゃなかったね」

「最低です」

「おうぐっ!!」

はやて、なのは、エリオ、キャロの容赦ない口撃にorzのポーズを取る黄瀬…

「龍土、あんたこいつの知り合いなの?」

「ん、ああ、そうだぞ、アリサ…中学時代の部活仲間の黄s「名前
は知っているからいいわ」そうか」

「アリサちゃん、知ってるんか？」

「……知ってるも何もここであれをしたって言い出したのは彼よ」

「…私ら巻きこm「それ以上言わないで、はやてちゃん」…「ごめん」

「私達を呼んだのはリンたちを連れて行くためですね」

「ええ、全部で7対7らしいし…子供の教育にもよくなさそうだし
ね」

「いったい何の話だ…と知っていると思っていると復活した黄瀬が」

「いや〜でもよかつたつすよ〜龍つちがちゃんとメール読んでくれ
てて」

「……お前からメールをもらった記憶はないが」

「エ”っ…」

「あ、忘れてましたよ」

「すまん、エリオ…確かに届いているが…拒否権はないのか？」

「ないっす!…!」

「そこまではっきり言われると逆にすがすがしいな…」

「何の誘いだっただんですか？」

「合コン」

「は!?!」

「しかもここで」

「ええ!?!」

「相手は？」

「黄瀬、誰だ？」

「アリサつちとすずかつちに聞いて欲しいっす!?!」

「……土郎さん、よく切れる日本刀はないか？黄瀬^{これ}を今から殺^{バラ}すか
ら」

「ちよ!?!龍つち!?!」

「はい」

「ってなんであるんですか!?!?というか止めてくれないんですか!
」?」

『いやなんかつざいし』

「全員一致！？ってはいじ…青峰っち！！緑間っち！！何するんすか！？」

「決まってんだろ」

「粛清なのだよ」

「へえ〜って龍っち！！マジでちょっとタンマタンマ…ギヤアア！！」

「悪は滅びた」

「お疲れなのだよ」

「悪いな、こいつと一緒に来ないで」

「大輝、真太郎…ってことはテツに敦に征十郎は…まだ」もう来てます「うおお！！」

「テツ、久しぶりだな」

「相変わらず薄いな」

「青峰君も緑間君も龍士君もお久しぶりです…で、僕らにここに来るよう呼んだ人は」

「あっここで寝てる」

「…人を呼び出しておきながら寝るとはひどいですね」

そうして始まった俺達奇跡の世代（青峰大輝、赤司征十郎、黄瀬涼太、黒子テツヤ、赤青龍士、緑間真太郎、紫原敦）と市内で有名な美女7人（後ほど美由紀さんとエイミーさんから教えられた高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、シグナム、シャル、アリサ・バニングス、月村すずか）の合コンが始まった…

正直言っておいてあげばよかった、参加しなければよかったと後に語る運命にもなると知らずに…

第16話 出張!!!地球へ!!!(2) (後書き)

す：今回は意外と急展開があったね

は：とどうかヴィータは？

ア：『美女』じゃなくて『美少女』と言ったら納得して帰ってくれたわ

作：ちなみに携帯を持ってきてくれたのはエリオ、その時にセイに連れて帰るよう言いました

な：帰ったのはF W陣とヴィータちゃんとリンちゃん？

作：はい、そして美由紀さんは参加の声がかからなかったので隅っこでいじけてます

フ：…あんまりスペースはなかったはずだよな？

龍：店とかの内部構造は詳しく分かっていないんだ、気にするな
ア：にしてもあんたすっごいアグレッシブよね

す：うんうん、いきなりドロップキックだもんね

な：本編じゃ普通の人だったのにな、黄瀬君

は：でも番外編やと若干変なところあるから…ええんとちゃう？

フ：小説版と12巻の番外編のことだね

作：これくらいにして次回のちよ〜っとしたネタばれ

な：いいの？

作：別名フラグ

龍：おい

作：…といっても被害を受ける人は1人しかいないから安心して…誰とは言わないけど…ただ男性陣の誰かとだけ言っておく

す：女性陣は…

作：はやてが暴走するかもしれない

は：…どういう意味や…!!

ア：そのままの意味でしょ…スキンシップで胸揉むくせに
は…うぐっ…!!

作：（案外大丈夫そうだな）：ちなみに皆同級生なので『黒バス』
勢は全員なのは達より1つ年上、龍士以外は大学でもバスケットを続け
てるといふ設定です

全：次回もお楽しみに！！！！

第17話 出張！！地球へ！！（3）（前書き）

作：最近週1更新になったな…

す：それと今悩んでることがあるんでしょ、この小説で

龍：スバルとフェイトをどうするかで悩んでいるのだろう

ア：スバルってこはおバカっぽいし、フェイトは絡ませづらいものね
は：てか絡むとしたらエリオ・キャロがらみ…勝ち目あるんかな？
な：ないかもね…出張前の訓練でもフェイトちゃんより龍君の訓練
の方を好んでやっていた気が…

フ：それはティアナもだよ！！龍のすつごく楽しそうだったよ！！

龍：俺は孤児院の子供達にやっているのと同じことをしたただけだ

作：それは逆にすごいね…

す：龍君ってそういうこと昔からやってたの？

龍：ああ、子供って好奇心旺盛で、俺のやってるトレーニングは力
ツコウのものだったんだろうな…それで教えるのが身についた

は：そういえば短時間やけど内容が濃くていいって報告もあったな

ア：完璧超人ね…

作：欠点は微妙に鈍感& amp ;ちよつと思ひ込みが激しかったり
するところかな…後微妙に短期

な：前回の黄瀬君に対してだね…

フ：あれは…多少はしょうがないんじゃない？

作：今回はその続きです

全：楽しんでください！！

第17話 出張!!地球へ!!(3)

Side はやて

そんなこんなで始まった喫茶『翠屋』での合コン…はつきし言つてファミレスとかならまだ分かるけど…喫茶店でこの時間って…おかしいやろ…そのことは黄瀬君以外の男性陣、フェイトちゃん以外の女性陣がそう思っているようや…あ、自己紹介はもう終わったでちなみに並び順はこんな感じや

龍士 はやて(窓際)

テツヤ なのは

真太郎 フェイト

大輝 シグナム

征十郎 シヤマル

敦 すずか

涼太 アリサ(廊下側・キッチン側)

テーブルをはさんでこんな感じや…私は龍君の近くに居たいから、すずかちゃんとなのはちゃんが何や見とったけど、こういうのは早いモン勝ちや…それに私らを半分巻き込んだんやし、アリサちゃん抑えられるはずかちゃんぐらいやからな…フェイトちゃんとシグナムはこういう場は初めてなんか結構緊張しとるな

《シグナム、フェイトちゃん…そんなんやとだめやで》

《し、しかし主…う、こんなことは初めてで…》

《と…というかなんで皆平気そうなの?》

《俺は知り合いばっかだから》

《私は男の人と話すこと資格上多いし、教導してきた人たちと似てるから》

《全員スポーツマンだからな、似てるところは十二分にあるな》

《シャマル、お前は どうして平気なのだ!!》

《なのはちゃんと一緒よ…男性平気じゃないと医務官なんかやっつられないわよ》

「そついや俺らとアリサつちとすずかつちは学生すけど、他の皆は何してるんすか？龍つちも」

「私は医者をしてますね」

「俺はちよつと海外んところにスカウトされてそこで働いてる…企業秘密でそれはいえないがな」

「あ、私も龍君とは同じとこで働いてるんや」

「私も」

「私もだな」

「ってかあたしとすずか以外全員同じとこでしょうが!」

「えっ!!そんなんですか?」

「マジかよー!!」

大輝君とテツヤ君が驚きの声を上げる…声を出していないが他の男性人も驚いているようやね…まあそれもそうか

「ちなみに偶然だぞ、そこで俺が配属されたところがこいつらと偶々一緒に、今日偶然こっちに出張仕事ができたから居るだけだ」

「ではあの子達は何なのだよ」

「これは多少極秘に近いものでな、カモフラージュのためにとある伝で用意した子達だ」

「そうだったのか…」

「ああ、ちなみに俺と赤髪のことピンク髪の子は一応『親子』ってことだから」

「なるほどね…だからさっきあの子達『お父さん』って呼んでただ」

「そういうことだ《ごまかしはこれでOKか?》」

《《《《《ばっちり》》》》》

《えっ…結構バラしちゃった気がするんだけど…だめだと思っただけど…ちゃんと秘密にしないと》

《テストロッサ…お前はもう少し犯罪者とかの考えた方もできるよ

うになれ》

《何で!!》

《嘘を交えた話ってのはな、ちょっと真実を交えると疑われえへんもんなんよ…って言うか龍君よくできるな》

《遺産関係でそういうのをよく聞いたし、ってか孤児院の土地って結構いいところだからそこをのっころうと来た連中のも聞いて覚えて応用しただけ》

《…フェイトちゃんやはやてちゃんより捜査とかそういう仕事に向いている気がするの私だけ?》

《私も思ってたわ…というよりなのはちゃん、そういうのは本人に言わんほうがええと思うんやけど》

《アッ!!》

こんな念話をしてるとは知らないほかの男性人はいきなり落ち込んだフェイトちゃんに驚いていたが、そこは龍君のフォローでどうにかなった…アイコンタクトでちょっと会話してそれで落ち込むこと言われてそれで落ち込んだ、と…本当にうまいなあ…

Side はやて Out

Side 龍士

涼太のやつにも困ったものだな…あいつ以外の俺達キセキの世代はみな一様にそう思っているだろう…なにせ張本人と俺以外にはすでに彼女が居る、俺は積極的に作るうとしなかったから居ないだけ

だが、そろそろほしいと思っていたところですか、はやてからの告白…正直これが一番困ったね

「って龍っち聞いてるんすか」

「お前の馬鹿話聞くよりも有意義なことはこの世にいくらでもある

「「「「「同感)です」「「「「「

「ひどっ！…」

「あんた達さつきから同じ扱いじゃないの…飽きないの？」

「「「「飽きない)ません」「「「「

「龍君、どうしたの？」

「いや、ホンと早くこねーかなーと…」

「だ」「きーちゃん、いったい何してるのかな？」桃っち！？」

「「「「「おそい」「「「「「

「だって場所調べてからだよ！！時間かかるに決まってるよ…！！」

「あのごなたですか？」

「俺達の中学時代のマネージャー」

「桃井さつきです…！！よろしくお願ひしますね…！！」

「あ、はい…」

「っていうかなんでいるんすか!？」

「きーちゃんにちよおおおっとお話しに来ただけだよ」

お話と入っているが桃井の後ろからは般若のようなものが見えて
いるし、殺気も溢れ出てる…涼太、お前の自業自得だからきつちり
と受けて来い

「すみませ〜ん、この人を調きよ…じゃなかった、更正したいので
お店の奥借りていいですか？」

「あ、ああ…どうぞ」

「えっちょっと待って桃つち…てかなんでこんな力強いんすか?そ
れとなんで皆こっち見てくれないんですか？」

「さ、逝〜っつか、きーちゃん」

「行くの字間違ってるっすよ!…てか誰かたーすーけーてー!…」

行っ たな…

「どづいことなの?いつたい」

「そりゃ彼氏が勝手に合コンに連れていかれたら怒るだろ」

「誰の彼氏何？」

「テツ（ヤ）（黒子）（黒子）」

「へえ〜つてええ!!」

「意外なのか？」

「むしろ俺達の中じゃ一番モテたんじゃないか？」

「龍士君には劣ると思います」

「奴に『モテ』で争うのはおろかだと思うのだよ」

「確かにね」

「毎日下駄箱がすごかったからね」

「バレンタインなんかどうやって入れた？という量のチョコが入ってたこともあったな…その日の練習の終わりに部員全員で食ってたけど」

「僕は途中からもらった記憶がないんですけど」

「わざと無視してたんだよ…以外に桃井は嫉妬深かったりするんだよね…あの時期だけ」

「ちなみに俺を除いたモテ順はテツ、征十郎、大輝、真太郎、敦だつたな…手紙もよくもらってたしな」

「テツ以外はな…というかテツを普通の女子が分かるわけないだろ」

「そうだね…多分僕ら波と一緒に居ないと普段から分かるようにはならないだろうね…影薄いから」

「それがこいつの特徴だろ…よく考えると俺もよく分かったよな」

「テツが話しかけたからだろ…本人から聞いたぞ」

「うるせー」ああああああっ！！」「…終わったか」

「意外にかかったね」

「それだけ怒り心頭だった…ということなのだよ…」

「僕はこれで4回目ですから…仏の顔も3度までですね」

『なるほど、納得』

「…で、これからどうすんだ、はやて」

「アリサちゃんここに帰ってそこで夕食、後は自由時間や《ロスト
ロギアが出るまでな》」

「了解《準備は？》」

《ばっちりや、皆が手伝ってくれたし…案外もうヴェータがフアエ
ルさん達と準備してくれてるやろうな》

《わかった》

そうして俺達は解散してアリサの家に向かうことになった…涼太？あいつはあの後自分以外彼女持ち+俺が2人の美女から告られているということと言ったら真っ白に燃え尽きていたよ…てか告られたことないんだな、あいつ…

Side 龍士 Out

Side セイ

私は騎士ヴィータ、FW陣、そして月村の家のメイド達と共に夕食の準備をしているのだが…

「こおんの馬鹿スバル！！つまみ食いスナナ！！」

「だって～お腹すいちゃって～」

「我慢してくださいよスバルさん…」

「そうですよ…それにスバルさんのつまみ食いしよつとする量、つまみ食いってレベルじゃないですよ」

「そうですね」

「キュル～」

そう、ナカジマがつまみ食いをしよつとしてそれをランスターが止める、そのやり取りがすでに10近く行われている…さすがに呆れたな…

「主たちがいない場合は連絡が来ると言っ手筈になっていただろう、それまで待て」

「セイさん、それは犬の躰の方法だと思つのですが…」

「一緒だろっ」

「誰がわんこですか!！」

「あんたよあ・ん・た…自覚ないの?」

「あつたら言わないと思います」

「うっ…皆がいじめる…」

「あ、お父さんから連絡が来ました!！」

「主はなんと?」

「えっと、『元凶^{バカ}がつぶれたからすぐ戻る、準備をしておいてくれ』
だそうです」

「わかった、でははじめよう…バインド!！」

「何で私をバインドでがんじがらめにして動けなくするんですか!」
「!」

「邪魔されないようにするためだ」

「ひどい…」

そうして私たちが準備を始めて幾ばくかしたら主たちが帰ってこ

られた：ナカジマを見て驚いたがエリオ達が説明すると全員納得顔であったな…まあ普段からあの量なのだからそう思われても不思議ではないな

Side セイ Out

Side 龍士

今は夕食が終わって風呂をどうするかと話し合いの最中だ…ちなみにここには機動六課メンバーのほかにも高町家、エイミーさん、アルフの5人が合流している。高町家の皆さんが来ているのはどっかのバカが原因のようだ……

「すみません、土郎さん……」

「いや、龍士君の気にするところじゃないよ」

「…あのバカの増長をとめられなかったという意味での謝罪です」

「……一応、素直に受け取っておくよ」

「はい」

「それとね……」

「何ですか？」

「なのはとほどういっつ関係なんだい？（殺気+）」

「なのはですか…一応六課では補佐してます」

「しかし、フェイトちゃんが保護している子達からは『お父さん』と呼ばれていたけど」

「あの子達が分けありなのはさっき聞いたじゃないですか…それで俺がきついことを言って、それが自分たちのことを思ってたあの子達が知ってそうなったんです」

「そうか…子供が戦うのは嫌いなのかい？」

「命のやり取りをさせたくないって言うのが本音です…命は作り出すのは難しいですけど失うのは一瞬ですからね…」

「…そうか…」

「それと…もうちょっとなのは定期的に帰ってくるよう強く言っただろうがいいですよ…あいつたぶんワーカーホリックです…しかも自分の体を省みずに無茶なことばかりやってますね」

「分かるのかい!?!」

「自分も似た時期がありましたから…それで気がついたんです。それでまあ体の調子を戻すマッサージをしてあげました…調子は良好だと思えますよ」

「…そうか……マッサージだとお!?!」

「ちょ、土郎さん!!声大きい!!」

「あなた、どうしたのよ…そんな大声出して」

「美由紀イ！！俺の小太刀を持ってきてくれ！！」

「ちょ、お父さん！？」

「お父さん！！いったいどうしたの！！」

士郎さんの大声を聞いて高町家の面々が集まってくる……それとはやて、すずか、顔をつけて黒いオーラ出して密談するな、ちよつと周囲が引いてるから……

「なのは！！彼にマッサージしてもらったって言うのは本当か！！」

「ふえ！！……うん、してもらったよ！！」

「他に何にもされてないか！？」

「う、うん……本当にマッサージだけだよ……ね、レイジングハート」

「Yes」

「そうか……いや、みんなすまなかったね……はっはっは……桃子、手を離してくれないか？」

「い・や（天使のような笑顔）」

「いや、ほんとにすまなかったと……あああ！！！！」

士郎さん、娘溺愛するタイプだったんだな……いや、さっきの話からもそれは分かるな……俺にはそういう人がもう居ないから……羨ましいな

そして話し合いとかの結果、海鳴市にある『スーパー銭湯』に行くことになったのだが…なんでこの時拒否しなかったのかと俺は正直疑問に思うのだった…

第17話 出張！！地球へ！！（3）（後書き）

作：はい終わりです

す：長引きすぎじゃない？

ア：というか私の出番ほとんどないじゃない！！

な：フラグのほう大丈夫なの？

作：大丈夫大丈夫：フェイト以外はもうプランができてる

龍：なんでフェイトはないんだ？

は：正直言つて他の作者さんの作品で優遇されとるからちゃう？

ア：後はちよつと執務官として抜けているところがあるからじゃない？

作：うん、僕のイメージだけどなんか違法研究所行つても裏調査とかそういうのしなさそう：ただあるもの調べて終わりつて感じ

ア：す・な・は：ああ

フ：皆ひどい！！

龍：言葉裏を読めないのがちよつとな

フ：うう

は：となるとハーレムは4人？

作：そうなることも視野に入れてる：ブレブレで駄目すぎだとは思
うけど

な：はつきりと決めてないからいいんじゃない？

す：私としてはご自由に、って感じかな

作：とということで行っている『スカリエッティ』と『デジモン』
に加えて『フェイト』をハーレムに入れるか否か答えていただき
たいです

龍：答えの内容で代わるのか？

作：ああ、『スカリエッティ』と『デジモン』は新しいボスキャラ
が、『フェイト』は僕がまたちよつと作るのに苦労するだけ

全・皆さん、協力お願いします！！そして、次回も楽しみにして
てください！！

作・そして感想やご意見等いろいろ待ってます！！

第18話 出張!!地球へ!!(4) (前書き)

作：また更新した!!

龍：今回までだったよな、アンケート

な：どうしてもデジモン使いたいの？

は：使いたいんやろうな…ここまで伸ばしとるんやから

ア：私のフラグはどうなるの!?

す：アリサちゃん必死だね

フ：私なんかへし折られそうなんですけど!?

な：フェイトちゃんはよく優遇されてるから折られてもいいと思うの

フ：なのは!?

ア：むしろほとんどスポットに当たってない私達に譲ってよ!!

す：まあ確かにそうだね

龍：今回で本編の流れは終了する

全：それでは楽しんでください!!

第18話 出張！！地球へ！！（4）

Side エリオ

僕達は八神部隊長や現地協力者のすずかさん、アリサさんの案で『スーパ―銭湯』というところに行くことになりました

「どういうところなんですか、お父さん」

「隊舎にある大浴場と大きな差はないよ、ただ俺も言ったことはないからよくは知らないけどね」

「え、でも昔住んでたんですよね？」

「ああ、といっても小学4年生…今のエリオたちぐらいだな、その時から孤児院だったし、その前まではそんなところに行くぐらいなら家のほうが安上がりだからって親も連れてってくれなかったし」

「お風呂釜が壊れたりはしなか…もしかして壊れても」

「はい、両親が自力で直してました…まあだから俺も多少は詳しいです」

「いったい何なの…あなたの家族」

「俺を筆頭に化け物家族とでも言うべきか？」

「お父さんは化け物なんかじゃありません！！」

「わかってる、物のたとえだ」

「言葉の綾じゃないのかい？」

「似たようなものですよ」

「違うと思うけど・・・」

「皆、ついたで〜」

「いらっしやいま…何名さまですか？」

「え〜つと大人が…」

「子供は…」

今お父さんとフェイトさんが人数を数えています…えつと大人は
・お父さん、八神部隊長、なのはさん、フェイトさん、アリサさん、
すずかさん、土郎さん、桃子さん、美由紀さん、シグナム副隊長、
シヤマル先生、セイさん、エイミィさん
子供は

・僕、キャラ、ヴィータ副隊長（見た目的に）、リインさん、アルフ
こんな感じかと思っていたら

「ほなら大人14人、子供4人ですね」

「あれ？ヴィータ副隊長は？」

「あたしは大人だ！」

「スバル…あんなね…」

「すみません、僕もヴィータ副隊長は子供側に入ると思っていました…あ、」

「よかった、ちゃんと男女別だ」

「ん？それが普通なんじゃないのかい？」

「僕はまだ子供だから女子寮なんです…もちろん…」

「そうか…いや、迂闊だったね」

「いえ…」

そんな会話を土郎さんとしていたら

「大きいお風呂だって、楽しみだね、エリオ君！！」

「うん、フェイトさん達と楽しんできてね」

「えっ…エリオ君は？」

「僕は男だから…」

「でも、あれ」

「あれ？……………」
『お子様とのご入浴は11歳以下まででお願いします
す』…ってええー！！」

「ふふつ、エリオ君、10歳!」

「あ、いや、ほら、アリサさんとかすずかさんとか美由紀さんとか桃子さんとかスバルさんとかティアナさんがいるし…」

「私は別にかまわないわよ」

「私も」

「てか、普段から頭とか上げるとか言ってるじゃない」

「そつだよエリオ、一緒に入ろう…ね」

全員反対していない…というかフェイトさんまで加わってきた…
あっ…!!

「ほ、ほら僕普段からお父さんとは入っていないからこんな機会ぐらい許してくれませんか?」

「そつだな、たまにはエリオと入りたいな…普段はヴァイスの奴が多いからな」

よかった、お父さんがフォローしてくれた!!

「そつだね…エリオ君は10歳、ということはそのそろそろ思春期だ…桃子を筆頭にした美女達のところじゃちょっときついんじゃないかな」

し、士郎さんも!…て

「「こんなときでもほのけは忘れないんですね・・・」」

「ほなら、あがったらまたここに集合、ということであええか？」

『もちろん』

「皆さんの分のロッカーも確保しましたよ」

「んじゃ、行きますか」

お父さんの一言で僕達は男湯へ、なのはさんたちは女湯へ行きま
した…ただ…

「え〜つと…」

このときキャロがさつき読んでいた看板をもう一度読んで何やら
考えているなど僕は思いもしませんでした…

Side エリオ Out

Side 龍士

俺達はこちらでの拠点であるアリサの別荘のコテージに風呂がな
いため、こっつして銭湯に来て今日1日の汗を流している訳で…

「エリオ、こっち来い。背中流してやるから」

「えっ！でも…」

「遠慮なんかすんな！いいからこい」

「は、はい」

そうして俺はエリオの背中を洗っているとそこに…

「エリオ君、お父さん」

「キ、キャロ!?!」

「11歳以下だったらどつちでもいいからな…来ないから来たと言
う事だろ」

「そうだね…そういえばなの「土郎さん、いろいろ問題ありそうな
んでやめてください」そうしとくよ」

「あ、あの、お父さ「キャロも洗ってあげるからおいで」はい!」

そうして俺はエリオとキャロを洗ってやり、かわりに2人から洗
ってもらい、その後2里は子供用の露天風呂へ、俺はもう1つの露
天風呂のほうに向かった…『混浴』の2文字をしっかりと確認せずに

「昔見た事やりたかったけど実際にできるとはな」

俺は今お盆の上に徳利とお猪口を置いて湯船に浮かべている…T
Vで見て大人になったらやりたいと思っていたのだ

「しっかし…どこにあるのかがよく分からんし転移する可能性もあ
るのに…騎士カリムは何を…まさか働きすぎのあいつらへの温情…
あ「龍士!?!」アリサ!?!」

「何でいんのよー!」

「こっちのセリ…ってあれ見る!」

「えっ…こ、混浴!？」

「ちゃんと確認しとけばよかったな…」

「ええ…ってどこに行くのよ!」

「上がるだけだよ…アリサもちょっと気まずいんじゃない?」

「べ、別に気まずくなんかないわよ!」

「そう、んじゃ遠慮なく」

そう言っただけ俺は再び湯船につかる…とはいってもアリサからはちやんと少し距離をとっている

「それ…お酒よね」

「ああ、俺は成人しているからな」

「そう…今日は…ごめんなさい」

「何がだ?」

「無理に合コンに誘ったみたいだったから」

「お前が謝る必要はない、謝るべきなのはあの涼太のみだ…なのは

「たちには謝ったのか？」

「ええ… 私たちに協力してくれてるんだからって笑って許してくれ
たわ」

「いい友人関係だな」

「ありがと… あなたの友人達よりはいいと思うし」

「あのなかでダチはバカ以外だ」

「そう… ま、納得ね」

「ああ… 本当に友達思いだよな」

「何だよ」

「あいつらがずっと働きずめでほとんど休めないし、出会いがない
とか聞いてたんだろ、そして何がきっかけか知らないがあいつと会
って、今日来ると聞いてセッティングしたんだろ」

「！…！…！… ばれないと思ってたんだけどね…」

「気がついたのは俺ぐらいだよ… それとどうやってあったかは言わ
なくていいぞ」

「聞かないでくれて助かるわ」

「ああ…」

(すぐかやはやてが好きになるのも分かるわ…龍士は優しくて、人のことをよく考えてくれる…私があつたことのないタイプ…すごく惹かれる…すぐかが言つたことも今なら理解できる…よし!!)

「ねえ、龍士…ちょっと聞いてほしいことg」反応キャッチ!! 至急集合!!」…あ…」

「時間切れか…仕事だから俺は行くぜ」

「分かつたわ…」

そして俺達は全員集合して確保には俺とセイ、それにFW陣が担当。件のロストログアはスライムみたいで分裂していくがそれを俺とセイが殲滅し、FWが本体を見つけてティアナとキャロが見事なコンビネーションで封印、これで終了となった

「っテ早!!」

「どつたのティア?」

「いや、なんか言わなきゃいけない気がして…」

「でももうこれで帰っちゃうんだよね…」

「うん、任務完了やからね」

「あまり向こうをあけるわけにも行かないしね」

「FW陣の訓練もあるし」

「とはいっても明日の夕方まではいても問題ないだろう…影響がどのくらい残っているか、とか理由なんかいくらでもあるだろ」

「そうよ！…あの、ほら…フェイトとはやてと知り合ったときもそうだったじゃない！」

「そっだね」

「それにFWの連中も1日くらい休ませてやらないと体をぶっ壊すぞ…そうなたら責任が行くのはお前ら3人…特にフェイトは重いだろうな…保護者でもあるから」

「…はやて、いいと思うよ」

「「フェイトちゃん!？」」

「たまには休みをあげても、休んでも罰は当たらないよ」

「そっやね…よし!!拠点に戻ったらそこから明日の夕方までおやすみや!」

『おお〜〜〜!〜!〜!』

こうして俺達の出張任務は終わった…とは言っても後1日残ったけどな…しっかし恋ってのはすごいな

…俺はその翌日にそれを思い知った

第18話 出張!!地球へ!!(4)(後書き)

作：というわけで終わったドラマCD1です!!

龍：アリサのフラグが半分ぐらいたったな

な：これははつきりたったほうじゃない?

ア：ていうか戦闘描写無し?

作：気力なくなりました

す：へたれだね

は：すずかちゃん、言ったらあかん：折られるで

龍：次回はどうなるんだ?

作：結構楽しいことになる、特に女性側にとっては

女全：ほんと!?

全：というわけで、次回も楽しみにしてください!!

は：誤字脱字や感想、意見にアンケートなどたくさん待ってます!
!

番外編3!!! アンケートの結果!? (前書き)

今回の更新はアンケートの結果です

それを踏まえて今後のストーリーの流れをちょっと開示します

ただ2つ目のはいわゆる意見を聞くためのものだったのでだいぶ変わって、というか別物になっちゃってます

答えてくださった方は本当にごめんなさい!!

番外編3!!! アンケートの結果!?

作：というわけで結果な

龍：唐突なことこの上ないな

な：でもこれがないと今後ができないよ

フ：そうだね、しかも出すのはドラマCD1中とってたからこ
じやないと駄目だもんね

は：ただ私の勘やと最後のができてないからこれをぶち込んだとい
う感じなんやけど

す：いいんじゃない、出番があるんだから

ア：身も蓋も無いわね…

テ：まずは一つ目ですか？

キ：え〜と、スカリエッティが仲間になるか否かでしたよね

作：あれは仲間にする、てかアンケート全部がそんな感じだった

エ：僕は身の危険を若干感じるんですけど…

作：大丈夫、ストーリーも骨組みは出来上がってるから、それにつ
いては後編で

ス：次はなんですか

作：2個目すっ飛ばして3つ目

ア：フェイトをハーレムに入れるか否かね

作：入れることになりました、これもアンケートが全部そんな感じ

フ：よ、よかった

龍：オリジナルストーリーって増えるのか？

作：もともと原作崩壊、レイプクラスのが前提だから：全員魔改造確定

エ：魔改造って…何するつもりなんですか！？

作：ただ精神的に大人にしたりデバイスを強化していくだけ

龍：ちなみにエリオ、ティアナ、キャロのは強化プランがすでにできているから：もう5話位進んだらお披露目になるかもな

な：私たちは？

作：なのははこういう作品ではよくある『魔王』シーンあたりで、後の面子はオリストって感じになるかな

な：むっ…っ…いっ…のっ

フ：オリストはどんな感じになるの？

作：え〜と概要だけで良いかな

ア：ネタばれになっちゃうからね、そんな感じで良いわよ

作：んじゃ、下のものを見てくれればすぐに分かる

フエイト とある違法研究所に龍士と一緒に調査

はやて カリムとの会見

アリサ・すずか デート

F W 陣 訓練

は：ちよお待ってや！！何でアリサちゃんとすずかちゃんだけデートなん！？

フ：そうだよ！！不公平だよ！！

な：ず〜る〜い〜の〜

龍：待てお前達…作者のことだ、ちゃんと策があるはずだ

作：うん、実はF W 陣以外のストーリーは後半とかに重要なものになってるから

テ：私たちのはどうなんですか？

エ：僕達に重要だけど大きくストーリーにはかかわらないんじゃないんですか？

作：まあそんな感じ

キ：早く最後に行ったほうが良いんじゃないですか？

作：そうだな、2つ目のアンケートの結果を踏まえて決まったのは出すということ、そしてそのパートナーだ。クロスウォーズを使うかと思ったがやはり1対1がいいと思って却下した。ちなみにデジモンは成長期 成熟期 完全体 究極体って感じで、デジヴァイスは全員共通で『デジヴァイスバースト（初期はi c）』だ

龍・ギルモン グラウモン メガログラウモン デュークモン

な・ハグルモン クロツクモン ナイトモン ロードナイトモン

フ・クダモン レツパモン チェリンモン スレイプモン

は・ベアモン サングルウモン マタドウルモン デュナスモン

ア・アグモン ジオグレイモン ライズグレイモン シャイングレイモン

す・ガオモン ガオガモン マツハガオガモン ミラージユガオガモン

ス・フレイモン アグニ（ヴリトラ）モン アルダモン カイゼルグレイモン

テ・ストラビモン ヴォルフ（ガルム）モン ベオウルフモン マグナガルルモン

エ・ドラコモン コアドラモン（青） ウィングドラモン エグザ

モン

キ・ブイモン エクスブイモン パイルドラモン インペリアルドラモン

と、これで決定

テ：私とスバルのがアリサさん、すずかさんと変わってますね…

ス：でも私達の以外全部『ロイヤルナイト聖騎士団』もしくはそれに順ずるのって気がするんだけど（資料を事前に渡してます）

作：ただ2人は後半でかなり重要な役があるからそれを考えたらこれが妥当とかんだえたんだ

龍：知りたい人はStrikerSの本編の24・5話を見てくれ

フ：でもキャラのはジョグレス体ってのがあんだけど

作：詳しくは地球後のお話をお楽しみに！！というわけでこの後の話の大まかなものをどうぞ！！

「新しい生命体？」

「ああ、それらへの対応もすでに対抗策を持っているということとで六課が当たることになった」

「了解しました」

「あなた達は今ここで拘束させてもらっ

「すまん…やることがある」

「お願い」

「最後に言いたいことはあるか」

「ああ…私の子供達を…頼む…あのなかにいる人たちも救ってくれ」

「分かった…やはりお前は俺の思ったとおりの男だったな」

「私が行けば…誰も傷つかないんだよね」

「やめろ…いくな…行くな…！！！！！！」

「ははははははははっ！！！！」

「もうしゃべるな…耳障りだ！！！！」

は：誰が誰かわかりやすいな

な：順番はどんな感じなの？

フ：ベタにこのまま、なんじゃないかな

ア：…このなかで台詞しゃべったのは誰？

す：え〜と多分はやてちゃんと龍士君じゃない？

ス：そうなのかな？

テ：…どうなのよ、作者

エ：お父さんらしさは結構でてる感じはします

キ：そうですね、カッコいいです！！

は：…でもなんで守護騎士しゅごきしやセイにはないん？

作：はやてのパートナーヴォルゲンリッター＝守護騎士、龍士のパートナー＝セイって感じになるから

は：…ああ、リンカーコア同士でつながっているからって感じなことやな

フ：だからアルフにも無いんだ

な：…じゃあ新しく出てくる子にもあるの？

ア：それもそうね、どうなのよ

作：ちゃんと考えてあるよ…ただみんなびっくりすると思う

す：それだけのものってことだね

キ：ちよつと楽しみです

作：楽しみに待っていてくれ、で、今回はここまで！！

全：これからも『魔法少女リリカルなのはリリカルなのはS t r i
k e r s 青年と魔導師の交わり』をよろしくお願いします！！

作：そして誤字、脱字、感想や意見などいろいろと待っています！！

番外編3!!! アンケートの結果!?(後書き)

はい、終わりました

実はちょっと見え張ってます

知りたい方は感想欄からどうぞ

8/8:ちょっと修正しました

第19話 出張!!地球へ!!(5)(前書き)

作：一ヶ月ぶりの投稿です!!

龍：これ先週の時点で出来たのに何でしなかったんだよ?

作：リアルに書ききって力尽きた

ア：アホね

す：でも今週は2話投稿する予定っぽいから勘弁してあげようよ

な：でも私のパートナーだけかわいくないの

は：いきなりネタばれはよくないと思うで、なのはちゃん

フ：でもそうだよね

作：詳しくはあとがきで

全：では今回もよろしくお願いします!!

第19話 出張！！地球へ！！（5）

Side 龍士

「昨晚ロストログアを封印して任務終了し、療養をかねて俺達はアリサが用意してくれたコテージに泊まり、俺は今日課のランニングをし終わったところティアナとであった」

「ティアナ、お前も自主トレか？」

「龍さん・・・はい、そんなところです」

「そうか・・・ま、ほどほどにな休むときはガーッと休んどかないとおもわねえミスするからな・・・」

「・・・経験があるんですか？」

「ああ、こつちの学校はテストを一定の時期にやるんだがな、それで『自分は大丈夫』と過信して勉強せずに挑んで赤点ぎりぎりだったことがあったからな」

「赤点って何ですか？」

「んー、分かりやすくいうとその点数とってしまつと補修・追加の勉強だなーとかがたくさんつく、最悪学校を辞めさせられる」

「・・・それで休むときは休むのとどう関係してるんですか？」

「やるべき事をちゃんとやれ、ってことだ。休む時は休むってこと」

をやるってことだ、俺のランニングはやらないと逆に体調を崩しかねんからやっているだけだがな」

「そうですか…ならやり過ぎないように見てもらってもいいですか？」

「いいぞ、それに教導補佐だからアドバイスもしてやる」

「ありがとうございます」

そうしてティアナは簡単なトレーニングをはじめ、それが聞こえたのかエリオとキヤロも起きてきて一緒になってトレーニングを始めた（といっても約30分ぐらいだったが）、そしてその終わりに俺からアドバイスをして、それが終わり全員で朝食の準備が終わるころには全員が起きてきた

「お、皆おはよう〜」

「」「」「おはようございます、皆さん」「」「」

「おはよう〜、あんた達早いわね〜」

「俺は日課」

「私もです」

「音が聞こえたので」

「私はそれでエリオ君が起きる気配がしたので」

「ア…じゃあキャラロ…僕が起こしちゃった？」

「ううん、気にしないでいいよエリオ君、楽しかったし」

「朝食にしよう、ティアナ達が手伝ってくれたからもうできてるしな」

「そっちな、ほなみんな席について、せうの『いただきます』」

朝食をとり始めた俺達…場所はコテージの前で昨日夕食を取った場所と同じだ。ちなみにこの後は昨晚ちよつと話し合っただけでフェイトはエリオ・キャラロと、ヴィータ、シグナム、シャマル、セイは4人で、スバルとティアナで行動、なのはは実家の手伝い、はやてとすずかは図書館といった具合で俺は何もすることがなかったので適当にぶらっつこうかと思っただけだ…

「アリサはどうするんだ？今日」

「どっつて…」

「他の連中はもうやること決めてるけど、お前はどっつて？」

「あんたはどうするつもりなの？」

「適当にぶらっつく…ドストレートに言つとウインドウショッピングみたいな感じかな」

「…そっ」

「どっつかしたのか？」

「どうもしないわよ!」

「お、おう…」

わけわかんないな…まあぶらつくと言っても地理が分からないという欠点がおもつくそあるわけだがな…何とかなるだろう

…そうこうしているうちに全員でかけてしまったな…ま、どうとでもなるか。そうして出かけようとする

「あんたって地理分かるの？」

「いや」

アリサが話しかけてきた。聞いてきたことは普通のことだし、事実そうだから何も問題はないと思ったのだが

「そんなのじゃ迷うわよ!!こっちに来なさい!!案内してあげるから!!」

「そうだな、そうしてもらおうか…」

そんなこんなで俺はアリサと出かけることになった…ってこれはデートじゃ…ないな、だって付き人というか執事の鮫島さん（昨日の時点で自己紹介済み）が一緒なんだから…ただちよつと笑みが浮かんでいたのが気になるな

Side 龍士Out

Side アリサ

なのはは翠屋、はやてとすずかは図書館、シグナムさんやヴィー
タ達は何か用があるとセイつてのを連れてどっかにいって、フェイ
トは自分の被保護者達と、スバルとティアナは2人で出かけるらし
いから…残るのはあたしと龍士だけなんだけど…あいつは適当にぶ
らつくと言つてたけど地理大丈夫かと聞いたら案の定知らないと答
えたからあたしが案内してあげることにした…べ、別にあいつが迷
子とかそんなのになつたらいやだとかあいつとデートしたいとかそ
んなのじゃないからね!!

「で、どこに行きたいの?」

「ん…ちよつと服が見たいな、自分のやエリオ、キャロ、リイン
とかのだな」

「子供好きなの?」

「ああ、あの子達の笑顔見ると癒されるし、守ってあげたい存在
でもあるし、未来を担う存在だから大切にしたいからな」

「……未来?どういうことよ」

「日本でちよつと問題起きてるだろ、年金とかさ。それで今を担う
のが俺達、未来を担うのが自分の子供とかじゃないかって思うよう
になってな…ちよつとした漫画を読んだのも影響してるが」

「N RUTO?」

「…否定しない、てかよく覚えてるな」

「あたしも好きだから、少年　ンプ」

「そっか、あ、そのコミックスの最新作も買いたいんだ」

「いいわよ、あたしも時間がなかったから買ってないのよ」

「服も一緒に見れるところだと楽だな」

「ショッピングモールがあるから大丈夫よ、というかそこに行く予定だったし」

「そっか、サンキュー」

そう言っつて格好よく微笑む龍士…これは…もう間違いないわ…あたしが龍士に抱いてる感情ははやてやすずか、そして恐らくなのは抱いてるのと同じね…ま、なのは鈍チンだから気がついてないでしょうけど…ユーノの奴も不憫ね

「はくしよ!!」

「どうしたんだいユーノ？」

「大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だから気にしないで」

なんて会話が無限書庫であつたらしい

で、話している間にショッピングモールについたわね…って

「フエイト…あんたもここに来たの？」

「あ、アリサ…うん、ちょっと見たり遊んだりするんだっただけが
が…いいってエイミーに教えてもらったから」

「へえ…ん？エイミーさんってお義姉さんって呼んだほうがいいん
じゃないか？」

「エ…ア…その…」

「昔からそう呼んでたんだからその癖が抜けないんですよ、この子
って昔からそんなところがあつたから」

「そうなのか…意外とかわいいというか抜けてるといふかそういう
ところがあるん…いや、相違や訓練のときもそんな感じだから直し
たほうがいいぞ」

「う…」

「お、お父さんとアリサさんはどうしてここに？」

「ん、服を見に来たのと本とかを買いに来たんだ」

「どうせだから一緒に回りましょう、大人数のほうが楽しいし」

「俺はかまわない」

「私もいいかな」

「僕もいいです」

「私もです」

そうして私たちは一緒に見て回った。服は龍士が選んだりしてたけど結構センスがよかったわね。エリオにはカッコいい系、キャロには可愛い系、あたし達には自分で言うのもなんだけどあたし達のよさが引き立つような服を選ばれたわ。ただ不公平だろうからとなのは達の分の服を選んで買ったのはちょっとね。でもこれも龍士のよさなんでしょうね。あ、ちょうどフェイトと2人つきり。聞いたいこと聞いてみますか

「フェイト、ちょっと聞きたいことがあるんだけど…」

「何、アリサ」

「ミッドって一夫多妻制って認められてるの？」

「エ…いきなり何？」

「いいから答えてよ」

「えっと、魔法主義だから魔導師で高ランクであればあるほど増えるって感じかな、龍士は管理局始まってほとんど出たことのないEランクだから詳しく聞いてみないと分からないけど3人以上は確実だと思うよ」

「そう…はやてはこのことしって」「しつとるよ」「はやて!？」

「どうしたのははやて? ずずかと一緒に図書館に行ったんじゃ」「私もいるよ」「ずずか!？」

「実はな、他にも魔導師でもなんでもない管理外世界の人がミッドチルダに移住できるかも調べたんよ」

「そ、そんなことも…六課で忙しかったはずなのに…」

「クロノ君やカリムが手伝ってくれたからちよつと時間できたんで調べてみたんよ」

「それは…まあ問題が無い様でもあるしいんじやないの?」

「い、いいのかな…」

「で、どうなの、はやてちゃん」

「龍君やとまあ立場の問題も含まれるから最大で5人、移住は管理局に役立つ技術や能力もってるのと現地に保護者ないしそれに順ずる人がいることやね、よくあるのは婚約者ファイアンセや妻パートナーやね」

「そう…つまり龍士と婚約したりして立派な技術持ってたら私やずずかも移住できるってことね」

「そつやよ、ただ現地で婚約してる場合はそつちの法律に順ずるか…日本の法律やとその方法はどつちかしか無理や」

そつか…ちなみに昨日はあたし達5人、スバルとティアナ、シグ

ナムさん達、エリオとキャロと龍土とセイという風に別れて寝たのよね…その場であたしはちゃんとはやて達に教えたら…ちよつと騒ぎになりかけたわね…でも負けないといったら不適に笑われたわ…確かに告白してる二人には不利だけど、負けないわよ!!

「でも保護者がいれば良いし、そっちに行つてから婚約しても問題は無いんですよ」

「まあなあ…でも前例が無いからちよつと厳しいかも知れんな」

「でもいいよ、保護者ははやてやなのはなら上の連中とかも黙るでしょ」

「たぶんな、でも問題は技術とかやな…」

「大半が無理に近いもんね…」

「能力とかがつて言うと未来予知とかそんなの？」

「そう…だね、ただ明確だったりしたほうがもつといい、かな」

「そっか、でもちよつとでも可能性が出てきたんだからがんばるわよ!!…つて」

「あそこにいるの……なのはじゃない？」

「え…あ、ほんとだ!!…なのはちゃん!!…」

「ふえっ!あ、皆、ここにいたの?」

「うん、偶然ね」

「ふえ〜あ、これからどうするの？もうすぐお昼だけど」

「あ、もうそんな時間何やね、それじゃあ移動しよか」

あたし達は服を選んで買ってきた龍士達と合流してバイキングのお店に行ったら…

「何をしとるだ…あのバカは…」

バイキングの料理を大盛りで取っているスバルとそれを止めよう、もしくは抑えさせようと奮闘しているティアナの姿だったわ…

S i d e アリサ O u t

S i d e 龍士

俺達は昼食をとろうと店に入ったら馬鹿スバルと御守ティアナに会い、状況を把握し即座にその場にいた大人メンバーが店員達に謝罪をした

「まったく…バイキングでとり放題だからといえやりすぎだこのバカタレ」

「だっておなかすいてたんですもん!!」

「だったら何度もとりに行けば良いでしょうが!!」

「面倒くさいじゃん!!」

「ドたま力チ割ったるか貴様（殺気）」

「ひっ…だ、だってとり放題じゃないですか!!」

「あのねスバル、ここは社員寮とかじゃないんだよ」

「たくさんの方がいるんだから譲るとか我慢とかも必要なんだよ」

「なんで家族は結構まじめなのに末っ子はこんなんやろか…」

「確かに…特に親父さんはまともの一言で済ませられる人だったのにな」

「甘やかしたとかじゃないの?」

「あ、それかも」

アリサの一言に俺とティアナが同意する…それでスバルは落ち込んでいるが、たいした問題ではない

「あそこで落ち込んでいる馬鹿はほっとおいて俺たちも食おう」

『うん』

そうして俺たちは昼食をとった後結局全員で行動することになった、主に馬鹿スバルのせいで…しかしそれから少ししたらいきなり

ドオオオオオン!!!!!!

「何!? 爆発!?!」

「外のほうに行くぞ！！そこで何が起きたかわかるはずだ！！」

俺の言ったことにしたがって全員で外のほうに出ていくと黒い恐竜のような怪物が　ざっと見10匹以上　が暴れていた。

「あれはいつたい何や!？」

「知らん!!だがひとつだけわかっていることがある」

「なに?」

「あいつらを放っておいたらたくさんの人が怪我、最悪死んでしまいかねん、守秘義務とかそんなの無視してでも人命救助のために俺たちの力を出し惜しみするべきじゃない」

「そんな!!!」

「…龍君はどうすべきやと思う?」

「はやてちゃん!?!」

「…屋内でも自由に動ける俺たち大人陣とエリオ、ティアナであいつらを迎撃、キャロは俺たちと一緒に行ってそこで人がいたらその治療、スバルはその護衛、アリサとすすかは逃げ遅れた人の避難誘導を頼む、それとはやて」

「もうよんだよ」

「わかった、じゃあみんな行くぞ!!!!」

「ちょっと待ってください!！」

「何だティアナ」

「どうしてそう簡単に決断できるんですか!? あいてはどんな生物なのかわからないですよ!！」

「…あんなのを相手にできるのは日本国内では自衛隊ぐらい、だが来るかどうかからん。なら戦える力があるのにそれを出し惜しみして人を傷つけさせた、など後悔してもしきれん。それに、人を救うのに理由が要るのかよ」

「!！」

「龍君!! あそこに見たことない生物体がいるよ!！」

「何!！」

そこで俺が見たのは赤い小さな恐竜みたいなので、その直後に黒いの尾が建物に当たり、その瓦礫がそいつの上に落ちて行った…

「ちい!！」

『龍(君)(さん)(お父さん)!！」』

ガガガッ!！」

ギリギリ間に合ったか…

「おい、大丈夫か」

「へ、う、うん…」

「そうか、なら逃げろ、あいつらの注意は俺たちが引いておく」

「無理だよ！あいつら、すごく強い！！」

「だから君も逃げていたのだろう、俺も勝てるとは言わん、だがここで戦わなかったら守れなかったって後悔する、だから俺は戦う、ここに生きているものを守るために！！」

「！！！」

俺は赤いちび恐竜にそう言つとジャケットと武器（今回はサバーニヤの最終戦仕様とサポートとしてセム2体）を出してやつらの元に向かおうとするとおもむろに引っ張られた

「なんだ」

「お願い、ギルモンも連れてって！！」

「お前ギルモンって言うのか…危険だが自分のみは自分で守れるな」

「うん！！！」

「よし、しっかり捕まっているよ」

俺はギルモンを背に乗せて現場に向かうと、そこでは俺と同じようにそばにそれぞれモンスターをそばに置きながら戦っている皆がいた

「状況は!?!」

「龍君!?!…実はちょっとおかしいんよ」

「どついつ…確かに、認識疎外の結界とか張っていないのに人が独りもいないな」

「うん、これはまるで…」

「誘き寄せられたみたいか?…そのとおりだ!?!」

「誰や(だ)!!」

「私の名前は…ファントモン!?!」

ファントモン：完全体：ゴースト型：ウイルス種：必殺技・ソウル
チョッパ―

巨大な鎖鎌を持った死神のようなデジモン。バケモンとは違い上級のゴーストデジモンで、ファントモンにとり憑かれたが最期、完全に死が訪れるだろう。首からぶら下げている眼球の形をした水晶は、マンモンの紋章と同じく千里眼の力で全てを見通すことができるため、死期の近い者を見抜いてしまう。体を覆う布の中身は別次元のデジタルワールドに通じていると言われ、必殺技は巨大な鎖鎌で敵の魂をも切り裂く『ソウルチョッパ―』。この技を受けたものは魂ごと消滅してしまう。

「われらはデジモン…電子データでできた存在だ!?!」

「電子データ…コンピュータの中とかで生きている存在ということ

か…しかしなぜこの世界に出てきている…この世界では普通存在することはできないはずだ…！」

「できるのだよ…この世界には『魔力』というのがあるだろう？それで我等は、今ここにいる私とDKティラノモンはいるのだよ」

ダークティラノモン：成熟期：恐竜型：ウイルス種：必殺技・ファイヤーブラスト

ウイルス感染によって黒く変色し凶暴化したティラノモン。肉体を作るデータがバグを起こして狂暴なデジモンに変化しており、目の前の物全てを敵と見なすようになっていいる。

「ここでお前たち以外は殺してはならないといわれていたからほかの人間どもは逃したが…お前たちを始末した後のことは聞いていない…！お前たちを殺して、この世界にいる人間どもをすべて抹殺してやる…！」

「な…！」

「なぜそんなことを…！そんなことをしてお前たちに何の利益がある…！」

「我らの世界にある人間たちが来た…もう何十年前になる…我等は驚いたが友好的に接しようとした…だが…！奴らはいきなり我々を攻撃してきたのだ…！」

「…！」

「多くの仲間が死んでいった…そして途中で奴らは我らと交友しようといってきたのだ…！これ以上攻撃されたくなくば…！」

「！」

「それは脅迫といったほうがいいな……」

「そのとおりだ……我等はもう戦い続けることは出来ず、我らの中の特殊金属を一部提供することで何とか生き延びたのだ……」

「だがどうして今になってこんなことをするんだ？復讐か？」

「そうだ……あの方を首領として我等は貴様たち人間への復讐を開始したのだ……まず手始めにお前たち機動六課を潰す……！お前たちさえ潰せば我等の真の復讐の対象に簡単に近づけるからな……！」

「なるほどな……ある程度理性的でもあるようだな、無差別に殺害等をすればお前たちを襲った連中と同じになるからか」

「お前は賢いな……その分危険だ……まずはお前から排除させてもらおう……！」

「くっ……！」

フロントモンが大上段に振りかぶって俺に切りかかり、俺は何とか受け止めるもパワーが違い、吹っ飛ばされて壁に激突する

「ぐっ……！」

「かつて人間にたくさん殺されたからわれらが弱いと思ったか？時間がたてば殺されないように鍛えるのが普通だ……もはや人間ではわれらを殺すことは出来んぞ……！」

「う…ぐ…」

「これでおわ「ファイヤーボール!!」ぐお!」

「ギル…モン」

「龍はやらせない!! 僕が龍を守る!!」

「なぜだ!! こいつはわれ等を虐殺した人間と同じ力を持っているのだ!! いかお前も殺されるぞ!!」

「なら僕はもう死んでる!!」

「!!!」

「龍はさっき僕と会った、殺すのならそのとき殺せる!! でも龍はしなかった…それどころかお前たちの攻撃で来た瓦礫から僕をかばってくれた!! だから龍を僕が守る!!」

「ギルモン…」

「そうだ!!」

「僕たちも守る!!」

「彼らは僕たちを守ってくれた!!」

次々とモンスターが現れる…向こうとは違って種々多用だ…

「彼らは僕たちを殺したりしない!!」

「人間すべてがそんなのじゃないんだ!!」

「僕たちは人間達と一緒に戦う!!」

「お前たち…」

ギルモン：成長期：爬虫類型：ウイルス種：必殺技・ファイヤーボール

腹部に危険の象徴とされる「デジタルハザード」マークが刻まれた爬虫類型デジモン。ほかに通常技として「ロックブレイカー」がある

ハグルモン：成長期：マシン型：ウイルス種：必殺技・ダークネスギア

歯車のような形をしている。自身の体内にも無数の歯車が内蔵されており、それが一つでも欠けると機能停止してしまう。自身の歯車を埋め込んだデジモンを操る事が可能だが、善悪の区別がつかないため自分が悪いデジモンに利用される事が多い。ほかに通常技として「巻き込み」、「コマンドインプット」、「ハグルアタック」、「クラッシュデバイス」がある

クダモン：成長期：聖獣型：ウクチン種：必殺技・弾丸旋風、絶光衝管狐がモデル。左耳のイヤリングには聖なる力を溜めている。常に薬莢に体を巻きつけている。ただし通常のクダモンと違い、薬莢から離れて単独で行動できる。ほかに通常技として「ホーリーショット」がある

ベアモン：成長期：獣型：ウクチン種：必殺技・小熊正拳突き

小熊のような獣型デジモン。臆病な性格ながら誰とでも友達になれる人懐っこさを持つ一方で、強力なパンチ力を秘めているため手を

傷めないようにベルトを手に巻いている。ほかに通常技として「ベアロール」、「ベアクロー」がある

アグモン：成長期：爬虫類型：ワクチン種：必殺技・ベビーフレイム（バーナー）

全身黄色で、ややデフォルメをかけた肉食恐竜のような出で立ち。腕に赤い革ベルトをつけ、指が3本になっている。X抗体版の必殺技であるベビーバーナーが使用可能になっている。ほかに通常技として「スピットファイア」や「するどいツメ」がある

ガオモン：成長期：獣型：データ種：必殺技・ローリングアッパー、ダブルバツクハンド

ガジモンの亜種で素早さを生かした格闘戦を得意とする。なお、手にグローブを装着しているのは生えかけている爪を保護するためである。ほかに通常技として「ガオラッシュ」がある

フレイモン：成長期・ハイブリット体：バリアブル種：必殺技・ベビーサラマンダー

アグニモンがパワーを失った半獣半人の姿。やんちゃな性格だが伝説の十闘士のスピリットを受け継いでいるため、成熟期クラスでは歯が立たないほどの強さを持っているが戦う気力が無くなってしまっている

ストラビモン：成長期・ハイブリット体：ワクチン種：必殺技・リヒト・ナーゲル

ヴォルフモンが力を失った時の姿。半人半獣である。成長期だが十闘士の力を受け継いでいるため、成熟期のデジモンでも歯が立たない程の力を持つ。ほかに通常技として「リヒト・バイン」がある

ドラコモン：成長期：純潔竜型：データ種：必殺技・ジ・シユルネン

すべてのドラモンタイプ始祖とされる純潔竜型デジモンであり、最も古い存在の一つ。その身体能力は成長期の中ではトップクラスである。全身の鱗には一枚だけ“逆鱗”と呼ばれる箇所が在り、そこに触れられると意識を失うほどに怒り狂う。光るものを収集するクセがあり、特に金属や宝石類には異常な執着心を見せる

ブイモン：成長期：小竜型：フリー種：必殺技・ブイモンヘッド額のV字が特徴の小竜型デジモン。古代種の末裔であり、アーマー進化が可能。優秀な戦闘種族でもある。ほかに通常技として「ブンパンチ」、「ホツピングキック」がある

俺にはギルモンが、なのはには歯車みたいなのが、フェイトには管狐みたいなのが、はやくには黒い小熊みたいなのが、アリサには黄色い小さい恐竜が、すずかには青い小熊みたいなのがそばに来るのが、キャロには青く額に「v」の字があるのがそばにつく

「私はハグルモン!!!」

「私はクダモン!!!」

「俺はベアモン!!!」

「おいらはアグモン!!!」

「私はガオモン!!!」

「僕はフレイモン!!!」

「私はストラビモン!!」

「僕はドラコモン!!」

「俺はブイモン!!」

「もう言ったけど…僕はギルモン!!」

『僕たちと一緒に戦って!!』

「それはこっちの台詞だ…」

「せやね…私らの力じゃ絶対になわへん…」

「だから…お願い!!」

「力を貸して!!」

そう俺とはやて、アリサ、さすががそういうと体の中から魔力とは違う力がわきあがってくる…手を見ると俺とはやては魔力光と同じ色のものが、アリサとすずかには髪の色と対応したものが浮かんでいる…何なのかわからずにいると

「それはデジソウルだよ!!」

「デジ…ソウル?」

「そう!!昔僕たちと心を通わせた人たちが発動させたといわれている伝説の力だよ!!」

「でも…どうすれば…」

そう、力を得てもしっかり使えなかったら意味がない…そう思っている俺たちの間に何か機械が現れる…

「これはデジヴァイスだ!!」

「デジヴァイス…?」

「そう!! デジソウルをそれに注入して僕たちに向けて!!」

「…わかった!! 行くぞ!! はやて、すずか、アリサ!!」

「…うん!!」

「…デジソウル…チャージ!!」

画面に「EVOLUTION」の字が現れるとギルモンたちが光に包まれる…そしてそれを見たエリオ、キャロがドラコモンとブイモンに同じように助力を頼み、それに触発されてフェイト、なのはと続きスバルに促されてティアナも渋々と言った感じだったが同じようにすると同じようにデジソウルとデジヴァイスが現れ、俺たち同様デジソウルをチャージしていく…

光の中から現れたのはギルモンを大きくしたような、時計の上の人(?) みたいなのが乗ったような、大きな刃の尾を持った狐のような、前足に大きな刃がついた獣のような、オレンジ色の恐竜のような、青色の狼のような、赤い人型みたいなのが、白い狼人間みたいなのが、青い大きな翼を持った竜が、胸に「X」の字がついた青

白い翼を持つ竜人みたいなのが現れる…

「さあ、行くぞー!!」

俺は直感した…これは…今回のことでもっと大きなものに巻き込まれていたのだということに…

第19話 出張！！地球へ！！（5）（後書き）

作：個人的に流れはよかったと思う

龍：ちなみに選んだ理由は？

作：完全に個人のイメージ、ただデジモン特有のを残したつもりは：どんななん？

作：「心と心でつながっている」というのと、後は究極体になったときとの兼ね合いかな

な：もうどんなのになるのかは決まっているモンね

フ：そういえば作者さんってヴィヴィオが可愛くて好きって聞いたけど？

ア：もしかして…

作：小さい子供って見ると和むから好きなんだ

す：まともな理由でよかったです

龍：そういえば候補いるのか？

作：後いるのは残っている年少組みで、もう決まっています

は：最近デジモンの3DCGでできたやつ見てどう思ったん？

作：フェイトとエリオにはあわねえ、やっぱりヴィヴィオのパートナーはこいつだと確信した

す：そこまで決まってるんだ…

ア：もう一人の子も…まあキャラの見てたらわかるわね

な：今後のストーリーをもう言っちゃっているようなものだけどね
フ：アリサとすずかはどうなるのかな？

龍：こいつのことだ、ちゃんと戦場に出る計画があるんだろう…どうなるかわ知らんが

作：そこは次回をお楽しみに！！

全：言っちゃったよ、おい！！

ア・誤字脱字や感想、意見などいろいろ待っていてあげるからね！

第20話 出張！！地球へ！！（6）（前書き）

作：何とか書き上げた！！

龍：これでドラマCD編は終了か？

な：でもこれだけで約2カ月？

は：週末更新って言うのが裏目にでたんとちゃう？

す：平日更新にするとうなるの？

作：更新できないことはないけど1話1話がすごく短くなる

ア：必然的に話数が増えるのね：別にいいんじゃないじゃと思っただのは私だけかしら？

全：いや、それは俺（私）らも思った

作：ちなみに次回もオリジナルになります

全：ここで次回予告するな！！

す：そういえば新企画っぽいのがあって聞いたんだけど…

龍：さつき紙を渡されたな：どれどれ：何々、『没ネタ& amp ;新連載予定小説設定簡易紹介コーナー』？ふざけてるのか？

作：至って真面目、基本的には前者がメインだから心配しないで

フ：新連載予定小説って言うのは？

作：活動報告に書いたのとかだね、これをメインに進める予定だから書くのはもう少し後になるかな

す：今回の没ネタって何？

作：実はヒロインははやて一択だった

は：なんでハーレム系にしてん！！

龍：あれだ、あんまりにもモテないから書いたら大人向けっぽい感じなっちゃったからだろう

作：そ、てか実はこの時点で恋人同士で桃色空間を休憩時間ことにはら撒く2人になるはずだったんだけど…

フ：けど？

作：ヴィヴィオの母はなのはってイメージが強かったからこうなった

な：よかつたの

作：それにゆりかご船のときにちよつとした状態になるからだめだ
と思つたんだ

ア：どんな：もしかしていわゆるあれ？『デク』言うな！！』『わか
つたわよ

作：今後もこんな感じになります

全：それでは本編をお楽しみください！！

第20話 出張!!!地球へ!!!(6)

Side 龍士

「ギルモン進化ー!!!……グラウモンッ!!!」

「ハグルモン進化ー!!!……クロックモンッ!!!」

「クダモン進化ー!!!……レツパモンッ!!!」

「ベアモン進化ー!!!……サングルウモンッ!!!」

「アグモン進化ー!!!……ジオグレイモンッ!!!」

「ガオモン進化ー!!!……ガオガモンッ!!!」

「フレイモン進化ー!!!……アグニモンッ!!!」

「ストラビモン進化ー!!!……ヴォルフモンッ!!!」

「ドラコモン進化ー!!!……コアドラモンッ!!!」

「ブイモン進化ー!!!……エクスブイモンッ!!!」

グラウモン：成熟期：ウイルス種：魔竜型：必殺技・エギゾースト
フレイム

深紅の魔竜」と呼ばれている魔竜型デジモン。ギルモンの頃にあった幼さは消え、より野性的で凶暴なデジモンへと進化をしている。また、ウイルス種のデジモンではあるが、テイマーの育て方次第では忠実に従うので、正義のためにも戦うこともある。グラウモンの

咆哮は大地を揺るがすほどの威力を持っており、戦いの前には攻撃的な唸り声をあげ敵を威嚇する。得意技は両肘のブレイドにプラズマを発生させ敵を攻撃する『プラズマブレイド』。必殺技は爆音と共に強力な火炎を吐き出す『エキゾーストフレイム』

クロックモン：成熟期：データ種：マシーン型：必殺技・クロノブレイカー

コンピュータのタイマーを司る、時の守護者。コンピュータやネットワーク全ての“時間”と“空間”を管理しており、1999年～1999年の間であれば、自在に時間を進めたり戻したりすることができる。非常に危険で恐ろしい能力を持っているため常に中立の立場を保っており、ワクチン・ウイルス間の争いには関与しない。そのため、もしこの均衡がどちらかに傾いたとき、デジタルワールドは崩壊すると言われている。必殺技は敵の体を流れる“時”を破壊する『クロノブレイカー』。この技で“時”を止められたデジモンは再起することは不可能である。

レッパモン：成熟期：ワクチン種：聖獣型：必殺技・駆裂空斬、
獣牙乱撃、真空カマイタチ

尻尾が刃になつている鎌鼬カマイタチの様なデジモン。尻尾の刃自身に意志があり、背後からの不意をついた攻撃にも対処できるようになっている。しかし意志の疎通が合わず戦いの最中に尻尾とケンカをしている姿も目撃されている。森の中での戦闘を好み、爪と尻尾を上手く使い木々を軽々と駆け登るため、森の中でレッパモンと戦うのは細心の注意が必要とされる。必殺技は、前転しながら突撃する『駆裂空斬』と、鋭い爪で相手を乱れ裂く『獣牙乱撃』。また、尻尾を振った時には、目には見えない風の刃『真空カマイタチ』を放つので油断できないデジモンである。

サングルウモン：成熟期：ウイルス種：魔獣型：必殺技・ステイツ

カーブレイド、ブラックマインド

崇高なる吸血オオカミデジモン。デジモンとしてはかなり古い種であり、デジタルワールド創世記のころから生き残っているといわれている。サングルウモンに血を吸われたデジモンはデジコアの情報をも全て抜き取られ、生命活動が出来なくなり絶命する。サングルウモンは自分の意志で自らをデータ分解しパケット単位でネットを駆け巡ることで瞬時に別の場所に移動することができる。このためサングルウモンを捕獲するのは非常に困難であると言われている。必殺技は数千の小型ブレイドを投げ飛ばし相手を一瞬のうちの串刺しにする『ステイツカーブレイド』と、自らのデータを分解し相手の影の中に溶け込み消える『ブラックマインド』だ。

ジオグレイモン：成熟期：ワクチン種：恐竜型：必殺技・メガフレイム、メガバースト、ホーンインパルス

グレイモンの亜種と推測される特殊なデジモン。頭部の甲殻や体も全身凶器の様に発達し、より攻撃的な姿となっている。必殺技の『メガフレイム』は口から超高熱火炎を吐き出し全てを焼き払う。また、『メガフレイム』を口内で極限まで高め爆発的な威力を持つ『メガバースト』を放つ。さらに、巨大な角で突進して敵を粉碎する『ホーンインパルス』も強力な攻撃である

ガオガモン：成熟期：データ種：獣型：必殺技・ダッシュダブルクロー、ガオガハウンド、スパイラルブロー

ガオモンの体格が大きくなり、グローブで保護していた爪がしっかりと成長した獣型デジモン。四足ではあるが、脚力は強靱で熊のように立ち上がり攻撃することもできる。必殺技は、敵に見えないスピードで接近して放つ『ダッシュダブルクロー』と、強靱な歯で噛み付き、相手が倒れるまで決して離さない『ガオガハウンド』。また、口から渦巻状の強力な風を一気に放つ『スパイラルブロー』をもつ

アグニモン：成熟期：バリアブル種：魔人型：必殺技・バーニング
サラマンダー、サラマンダーブレイク

インドの火の神“アグニ”をモデルとする魔人型デジモン。スピリチュアルファイアーと呼ばれる聖なる炎を自在に操作する能力と東洋武術を用いて戦う。得意技は手の甲をこするようにして炎を飛ばす『ファイアーダーツ』、必殺技は両腕から竜の炎を放つ『バーニングサラマンダー』と体を回転させながら炎のキックをくらわす『サラマンダーブレイク』

ヴォルフモン：成熟期：バリアブル種：戦士型：必殺技・リヒト・ズイーガー、ツヴァイ・ズイーガー

スターウォーズに登場するライトセーバーに酷似する剣リヒト・シユベアトを二本装備する。セントアメジストがはめ込まれた鎧は正義に目覚めると強度が増し、反対に悪に染まると脆くなる特性を持つ。得意技は左腕から光の弾を発射する『リヒト・クーゲル』、目から光線を出す『シュトラール』、必殺技はリヒト・シユベアトで敵を真つ二つにする『リヒト・ズイーガー』と2本のリヒト・シユベアトを一つに繋げて攻撃する『ツヴァイ・ズイーガー』

コアドラモン（青）：成熟期：ワクチン種：竜型：必殺技・ブルーフレアブレス、ストライクボマー、ジ・シユルネン - ?

「ドラモン」の名を冠するデジモンにはデジコアに必ず竜因子のデータを有しており、その竜因子データの割合が高ければ高いほど体の形状が竜型になっていくが、コアドラモンの竜因子データ割合は100%となっており、まさしく純血の竜型デジモンである。体表が青いコアドラモンは、標高の非常に高い山岳地域だけで採掘される「ブルーダイヤモンド」と呼ばれる希少な宝石を多量に摂取したドラコモンが進化した姿といわれており、険しい山々で生き延びるための発達した翼で高速な飛行を行うことが出来る。必殺技は、青

「…俺は見ているだけじゃなく、ギル…いや、グラウモンとともに戦う…お前たちはどうする？」

「龍君とおんなじや」

「私もね」

「私もだよ」

「僕もです」

「私もお父さんと一緒にです」

「ティアはどうするの？」

「行くに決まっていますでしょう」

「アリスとすずかはどうするんだ？」

「悔しいけど、ここから応援することしか出来ないわ」

「うん、私もアリスちゃんも一緒に戦いたいけど…」

「出来ることと出来ないことぐらいわかる…ただひとつだけ言わせて」

「何（ん）や？」

「無事に帰ってきてね」

「…ああ!」

「行くで!」

「……はい!」「」「」「」

俺たちは別れてそれぞれのパートナーのところへ行つた…新たな戦いに…

Side 龍士 Out

Side エリオ

僕はキャラとフリードと一緒にコアドラモンとエクスブイモンが3体のDKテイラモンと戦っているところに来た…

「コアドラモン!」

「エクスブイモン!」

「キュー!」

「エリオ!」

「キャラ!…そっちの小さい竜は?」

「フリード、もう1匹の私のパートナー…私たちもあなたたちと一緒に戦いに来たの!」

「他の所にももう皆向かっています!…それにパートナーって言うの

は守ったり守られたりするものじゃなくて、力を合わせる物だって
教わったから!! キャロ!!」

「うん、エリオ君!! 任せて!! 『竜魂召喚!!』」

「ギャオオー!!!!」

キャロにフリードを元の姿にしてもらい、僕とキャロはその上に
乗る

「これがキャロの力か!!」

「すごい…あいつらを牽制してくれ!! 君らの力じゃあ大きなダメ
ージは与えられない!!」

「わかった!! フリード、ブラストレイ!!」

フリードがブラストレイを放ってDKティラノモンのうち1体の
顔に当てて怯ませ、その隙を突いてエクスブイモンが攻撃を加え、

「エクスレイザー!!」

必殺技を放ってDKティラノモンを1体倒した…するとDKティラ
ノモンは塵となって消えてしまった…

「どういうこと?」

「僕たちデジモンは寿命を終えたりして死ぬとあなるんだ…」

「ただ、命は繋がっている、俺たちはそれを忘れずにいよう…それ

に、完全に死んだわけではないしな」

「えっ!?!」

「デジモンのデータはどこでなくなっても僕たちの世界の『始まりの町』というところに行って新しい命として再び生を受けるんだ」

「そっか…よかった…」

「エリオもキャロも優しいね」

「うん、君たちが俺たちのパートナーでよかったよ」

「まだ敵は残ってる…いくよ!」

「」「」おう(うん)(はい)!!」「」

Side エリオ Out

Side ティアナ

私とスバルは2対のDKティラノモンと戦っているアグニモンとヴォルフモンのところに来た

「よし、いっくぞー!!」

「ちょ、スバル!?!」

スバルがいきなりウイングロードをDKティラノモンのところまで伸ばし、その上を疾走していく…って!!

「スバル馬鹿！！相手の力量もわかんないのに飛び出さないで！！」
私が注意した直後、DKティラノモンが口から炎を、ファイヤーブラストをスバルに放つ

「え……」

「スバル！！」

アグニモンの声が聞こえたかと思うとスバルの前に飛び出して

「おおお！！！！」

という声とともにファイヤーブラストをかき消した

「なぜ来た、今のお前たちでは敵わないんだぞ」

「……パートナー放っておいて自分だけ安全な場所にいるなんて、あたしには出来ないわよ」

「あたしもです！！！！」

「幸い、このデジヴァイスって言うのであいつらの特徴とかもわかったから何とかやれるわ、あなたたちと力をあわせればね」

「そうか、わかった」

「で、どうするんだ」

「あたしは射撃が出来るから牽制に徹する、スバルも機動力はある

から相手の注意をひきつけて、アグニモンとヴォルフモンはそれで出来た隙を突いて攻撃、といった感じね」

「「わかった」」

「任せて!!」

「じゃ、行くわよ!!…クロスファイヤー・シュート!!」

あたしのクロスファイヤー・シュートがDKティラノモンのほうに飛んでいく…誘導弾だし小さいから体躯の大きいあいつらじゃあダメージはほとんどないけど、気を引くには十分!!

それに、スバルもその隙間を縫って相手の近くを動き回ってる…相手がスバルを視認できるところで挑発していたようにも見えたけど…気にしたら負けね…そしてあいつらの注意があたしたちに向いたところで…

「バーニングサラマンダー!!」

「ツヴァイ・ズイーガー!!」

アグニモンとヴォルフモンが止めを刺す…うん、初めてなのにもう何年もペアを組んでる感じだわ

「お疲れ、ヴォルフモン」

「アグニモンも格好よかったよ!!」

「ティアナとスバルが気を引いてくれたからだ」

「君たちがいなかったらもつと時間がかかっていた、礼を言うのh
「ストップ」？」

「あたしたちはもうパートナーなんだから、礼とかは無し、労い合
う位にしましょ」

「ふっ、そうだな」

「まだ他の所にもいそうだな、そこの増援に行こう」

「「「ああ（ええ）（うん）！！」「」」

S i d e ティアナ O u t
S i d e はやて

私となのはちゃん、フェイトちゃんはクロックモン、レッパモン、
サングルウモンが4体のDKティラノモンとたたかつとる場所に着
き、

「「「ダイバイン…バスター！！」「」」

「「「プラズマランサー…ファイヤ！！」」

そのうち3体に同時に攻撃を当て、隙を作ったら、その意図を理
解したのか

「ステイツカーブレイド！」

「クロノブレイカー！」

「真空力マイタチ！」

全員が必殺技を当ててその3体に大きなダメージを与える…私らでは眼に見えるダメージを与えられへんかったのに…やっぱり実力さやろうか…

「どうしてきたんだ？」

「一緒に戦うためや」

「でも君たちの攻撃はほとんど聞かないんだぞ」

「わかってるよ…でもね」

「仲間の…ううん、パートナーだけを戦わせたりはしないよ」

「どうしてなんだ？」

「仲間やパートナーは力を合わせて戦うもんやから」

「…わかった、俺たちがメインで攻撃するから君たちは援護してくれ」

「俺たちの後ろ…頼んだぞ」

「」「任せて！」「」

私らはおのおの遠距離攻撃を開始する…ただフェイトちゃんはパートナー少ないし、なのはちゃんも私は私と同じで中距離やけど自

分でしとめるのがメインやから私が中心になっ
て行っ感じになっ

Side はやて Out

Side 龍士

俺はグラウモン、ジオグレイモン、ガオガモンがDKテイラノモン3体にフロントモンと戦っているところに来て

「霜天に坐せ…氷輪丸!!」

氷で出来た竜をその4体に向けて放つ…手加減したら危険と思っ
たのであいつら(隊長陣やFW)と違い非殺傷設定になんかしてい
ない…それゆえか思っ
たよりもダメージを与えているように見える

「龍!!」

「来たのか」

「DKテイラノモンは水や氷といった攻撃に弱い、助かったぞ」

「ほんとか、炎に対抗するために選んだんだが功を奏してよかつた
ぜ」

「ではこのまま俺たちが」

「ああ、後ろは安心してくれ」

「行くぞ!!水遁・水龍弾の術!!」

水の龍が襲い掛かり、その直後に氷の竜が襲いかかっていく…水

で濡れているため凍る量が大きくなり、DKティラノモンの足が完全に凍りつき、動きが止まったのでそこを

「エギゾーストフレイム!!」

「メガバースト!!」

「スパイラルブロー!!」

と、攻撃を加えて一気に倒す…すると3体は塵になって消えていく…これを見て驚いて俺に（後から聞いたことだが）エリオ、キャロと同じ説明を彼らから受けた

「後はお前だけだな、ファントモン」

「くっ…むっ!!」

「ブルーフレアブレス!!」

「ストロングクラッチ!!」

「メッサーアングリフ!!」

「フリード、ブラストレイ!!」

コアドラモンとエクスブイモン、エリオにキャロにフリードが来てファントモンに攻撃し、さらに

「サラマンダーブレイク!!」

「リヒト・ズイガー!!」

「ディバイーン…バスター!!」

「クロスファイヤーシュート!!」

アグニモン、ヴォルフモン、スバル、ティアナの攻撃が当たって
怯んでいるところに

「クロノブレイカー!!」

「**駆**駆裂空斬!!」

「ステッカー・ブレイド!!」

「アクセルシューター、シュート!!」

「トライデント…スマッシュャー!!」

「クラウド・ソラス!!」

クロックモン、レツパモン、サングルウモン、なのは、フェイト、
はやても攻撃を加えていく…といったもデジモンたちの攻撃にフリ
ードの炎は聞いているように見えるがやはり魔法攻撃は来た感じは
しない…もしかして

「お前ら非殺傷設定って解除したのか？」

「え!？」

「何で解除するんですか？」

「殺されたいのか？」

「え……」

「でも、殺しちゃったらいつらと同じに……」

「どうやら貴様らは我等を完全に殺すべを持たぬようだ……その男も含めて」

「完全に……？という事だ、デジモンは死んだら『始まりの町』に行くはずじゃないのか？」

「僕もそう聞いてます」

「私もです……」

「つまり、昔虐殺を行った連中に殺された奴らは『始まりの町』にて再び生をうけなかつたってことがか……？どうやったんだ？」

「われらも知らん……だがここでこれ以上戦うのは不利、引かせてもらおうぞ」

「……ま……逃げられたか」

捕まえようとした瞬間、特殊なゲートが開いてファントモンが撤退していく……

「はやて」

「この事はクロノ君たちに伝える必要があるな……」

「ああ……（それだけじゃない、おそらくミッドチルダにも現れるだろう……その時のためにも地上本部や地上の部隊との連携が必要……そういうところ辺はどうなってるんだ？）」

これで地球での仕事は一通り終わったことになる……しかし、これから先の戦いはもっと厳しいものになるだろう……もっと強くならな
いと……新しい仲間とパートナーとともに……護る為に……！！！！

第20話 出張！！地球へ！！（6）（後書き）

作：ここでのデジヴァイスicにはディーアークと同じ機能があります

龍：苦手とかわからないのか？

ア：そこら辺はデジモンが知ってるんじゃないの？

作：個体数が多いのは知っていますが、少ないのは知りません

な：つまり究極体との戦いは…

作：必然的に厳しくなります… つか簡単に勝ったら面白くないし

す：今後はどうなるの？

は：クロノ君達と対策会議ちゃう？

龍：後地上関係のことも出てきそうだな

な：でもトップのレジアス中將との関係悪そうだけど…

龍：ストレートに言ったのが逆によかったらしい、今でも時々勧誘の話が来る

作：そこら辺は描写する必要ないからここで書いてるんですけどね

は：…今メツチャいやなフラグたった気がすんのは気のせい？

フ：気のせいじゃないと思うよ… もしかして

作：うん、ミッドにも現れるよ、てか今後はミッドにしか出てこない

フ：機動六課はミッドチルダにあるからね

な：今後はどういう感じなの？

ア：あたしとすずか、ちゃんとミッドチルダにいけるんでしょうね？

作：もちろん、詳しくは次回をお楽しみに！！

デジモン関係解説・設定

『デジヴァイス』

デジヴァイスは『デジモンセイバーズ』に出てくるデジヴァイス
icと同じ

以下各個人の色

龍士：大で言うオレンジの部分が赤

なのは：淑乃と同型

フェイト：イクトで言う紫の部分が黄色

はやて：大で言うオレンジの部分が黒

アリサ：大と同型

すずか：大で言うオレンジの部分が紫

スバル：トーマと同型

ティアナ：大、アリサの色逆転型

エリオ：大で言うオレンジの部分が黄色

キャラ：淑乃、なのはの色逆転型

またこのデジヴァイスには『ティマーズ』の『ディーアーク』のデジモンスキャン機能が搭載されている。これでデジモンのタイプを調べることが可能。ただしすべて調べられるわけではなく、希少種や伝説の存在は認識できない

『デジソウル』

ここでは伝説の力と伝えられており、デジモンでも発動できるがもともとデジタル体なので視認できるわけではない。極めることが出来ればエリオやキャロといった子供でも完全体と（デバイス無しただし格闘術ができることが前提）互角ないし優位に立って戦うことも可能。だが極めたものが一人もいないため眉唾物といわれている…

『進化』

デジモンにとって『成長』にあたる・幼年期 成長期 成熟期 完全体 究極体という順になっている。究極体より上の存在があるとも言われているが、極められたデジソウル同様神話の中の伝説の存在といわれている。

『デジタルワールド』

人間の世界とは時間の流れが違い、デジタルワールドのほうが流れている時間は早い。そのため人間界では数年前でもデジタルワ

ルドでは数十年前になっている。なお、デジタルワールドで死ぬと『始まりの町』に帰るが、デジタルワールドで数百年前（人間界では百年ほど前）に人間に行われた虐殺では帰ることはなかった。これの原因はわかっていない。このこと恨んでいるデジモンは多く、これが原因で今回の争いは起きた。

『デジモンたちの（イメージ）声優』

基本的にアニメのキャストそのままです

ギルモン：野沢雅子さん（ティマーズ、X-evolution、セイバースから）

ハグルモン：千葉進歩さん（セイバースから）

クダモン：葛城七穂さん（セイバースから）

ベアモン：神谷浩二さん（セイバースから）

アグモン：松野太紀さん（セイバースから）

ガオモン：中井和也さん（セイバースから）

フレイモン：竹内順子さん（フロンティアから）

ストラビモン：神谷浩二さん（フロンティアから）

ドラコモン：神奈延年さん（クロスウオーズから）

ブイモン：野田順子さん（アドベンチャー02から）

こんな感じです

デジモン関係解説・設定（後書き）

9/18：デジモンたちのイメージ声優追加：まさかのダブリ発見
：orz

ドラゴモンの声優変更

第21話 護る為に…（前書き）

作：今回はちよつと重要です

龍：だいぶ性格変わってないか？

は：今回出てくるキーキャラさんやね…確かにそうやと思うわ

な：私もちよつと変わったよね？

ア：ええ、そういえば翠屋にいたとき何かあったの？

な：な、何も無いよ！！（顔真っ赤）

す：（なのはちゃんもか…）

フ：今回ののは？

作：次回作の設定の簡単説明

龍：これではないのだよな？

な：順当にvivid？

作：うんにゃ、両方…死ぬかもしれないけど

フ：タイトルも少し変わるんだね

は：でもなんか楽しそうやね

す：で、設定は？

ア：案外私たちと龍士の間に…

作：アリサの予想であたり、ただそれでちよつと難しいんだよね

龍：性別と名前か

は：これが終わるまでまだ時間あるから大丈夫やろ

す：今回はここまでだね

全…では本編をお楽しみください！！

第21話 護る為に…

Side クロノ

「で、本当にそれだけなのか？」

はやてたち機動六課が地球にて謎の生物と交戦した、というのをエイミーから聞いてユーノに資料を要請しようと思ったがその生物の概要が分からない以上出来ない為、まずは機動六課のメンバーに話しを聞くことになって、冒頭のせりふというわけだ

「ああ、信じられんかも知れんが事実だ」

主に話したのは民間協力者である『赤青龍士』…本来ならばはやてがすべきことなのだがはやてが彼に一任した…どうということなのだろうか…

「ほかに聞きたいことはあるのか？」

「ん、ああ、そいつらはこれから先どこに現れそうなんだ？」

「ミッドチルダ」

「何だつて!？」

「そいつらを率いてきたやつがそう宣言した、まず間違いはないだろう」

「そうか…」

しかし彼の言っていることは間違いはないだろうがまだ隠していることがあるだろう…得られた情報は

・魔力により電子データが実体化した存在、つまりはリインフォースなどのユニゾンデバイスに近い生命体だということ

・彼らは人間のように成長するのではなく姿形が変わる『進化』を行うということ

・強さにランクがありその中でも個体数の少ない究極体は一撃で戦艦を落とせるだけの実力を持っているということ

・我々の時間軸で数十年前に人間に虐殺を行われ、今回の行動はその一端だという事

・なぜすぐ行わなかったのかは不明

・その生物たちの名称等を調べられるのは彼らが持っている『デジヴァイス』のみ、対抗できるのもまた同様

といったところか、ちなみに何か隠しているということが分かったのはフェイトが目に見えてうるたえており、それに何人かが目ざとく注意の視線を向けていたからだ

「まあ、これ以上聞いても君は、いや君たちは口を開かないだろうからな、これで仕舞いとすよ」

「わかった」

そう決まるや否や、彼らは足早に去って行った…書類とかはまだ期限があるのだが…

Side クロノ Out

Side 龍士

クロノとの会合、というか尋問まがいのを何とか終えてエイミィ

さんに頼んで早急に用意してもらった使い魔登録の書類を出せばもう何も心配はない…

「キャラとはやてとフェイトがいなかったらこれもうちよつと時間かかるころだったな」

「キャラはフリード、はやてちゃんはザフィーラさん、フェイトちゃんにはアルフさんがいるからね」

「アリスとすずかは、どうなるのかな？」

「もうちよい時間かかるやろつな…何せ『維持魔力の要らない使い魔』にて『魔力のない人でも自由に使用可能』この事実でたくさん注目は集まるけど」

「所持しているのは私たちだけ…ですからね」

「どうやって手に入れたのかとかでかなり問題が出てきそうですね」

「それははやてたちの腕の見せ所だな…と、それじゃスターズとライトニングはセイとラインとシヤマル連れて先に六課に戻ってくれ」

「そやね、ほならみんなあとでな」

「はやて?..」

「主？赤青を連れてどこに行くのですか？」

「レジアス中将に面会しに」

「主とはやて殿は始めてあったときからうまくやっていた、そのことをちゃんと思い出したようだな、リイン」

「はいです！！セイはどうして反対しなかったんですか？」

「私は主と一緒にだったからな、それでレジアス中将の人柄はそれなりに分かっているつもりだ…裏は流石に読めなかったがな」

「…それじゃ行くよ、皆」

「なのは!?!」

「龍士君もはやてちゃんも一度決めたら曲げないもん」

「それはそうだが…」

「でも、後でちゃんと説明してくれるよね」

「もちろん」

「ほら、みんな行くよ」

「……………はい（うん）（ああ）」

意外にしつこかったな…でもまさかなのはが一番最初に折れるとはな

「ちょっとビックリやったわ」

「なのはが一番最初に折れたことがか？」

「うん、なのはちゃんって友達が危険なことするの結構嫌がるから…」

「でも地上のこと一番知っているのもなのはだろうしな、教導隊で」

「うん…あ、来られたで」

「お久しぶりですね」

「ええ、オーリス三佐…急で申し訳ありません」

「用件は最近見かけ始めた謎の生物に関することですね…八神二佐がおられるのはなぜですか？」

「彼女も今回の件にはかかわっていますので」

「わかりました、こちらです」

オーリス三佐の案内で俺とはやてはレジアス中将の部屋に着いた…さて、交渉開始と行きますか

Side 龍士 Out

Side レジアス

わしは今最近見かけ始めた謎の生物について分かったことがあると以前スカウトしてオブラートながらはつきりと断りつつも、地上にいる人たちを守るうとする意志が強い赤青龍士から言われたため娘のオーリスに迎えに行かせ…

「中将、来られました」

「分かった、入れてくれ」

「はい、こちらです」

「失礼します」

「…八神二佐がいるのは…今回の件に彼女もかかわっているからか？」

「ええ、ですがそれだけではありません」

「いったいなによ」「すみませんでした、レジアス中将」「…何に對しての謝罪かね？」

「これまでいろいろと好き勝手やってきたことに対しての、です」

「…彼がきつかけかね？」

「はい、ですがそれだけではありません、レジアス中将と私は共に地上の平和を願うものです。私が中将に嫌われていることは理解しています。ですが、嫌われているからといって避けるのはだめだといわれました」

「願いが一緒ならば、自身を嫌うものとも手を組む、と？」

「はい」

「ふっ…くくっ…」

「レジアス中将？」

「いや、まさか嫌っている本局の人間に頼られたのでね」

「うれしくて笑った、ということですか」

「ああ、では我々はどついう要求があるのだ？」

「え？」

「何もないのか？」

「中将閣下、その話は本題が終わってからお話しします」

「（龍君！？）そうですね、そちらのほうご理解していただけると
思います」

「わかった、話してもらおうか」

そこで聞いた話はとんでもないものだった…

「つまり、その生物たちは『デジタルモンスター』という種族で、
人間に殺されたものたちの復讐でここに現れ始めた、ということだ
な」

「そしてそれに対抗できるのは同じデジモンのみ、そして現在所有
が分かっているのは…」

「君たち機動六課、及び地球にいる現地協力者2名、か」

「はい、ですが我々だけで対処できるとは到底思えません」

「地球に出現したときは1つの種類で10体以上現れました、そして私たちが所有しているデジモンはそれぞれ違います、このことから」

「最低20種類以上、下手をすれば100や200はいる、ということか」

「そしてそれがミッドチルダ各地で暴れたしたら六課だけでは手に負えません」

「ですが、魔導師では刃がたたないのでは…」

「倒すことはおそらく難しいでしょう、ですが動きを止める、バインドとかならば数人単位で行えば出来ると思います」

「それに種類によって苦手なものもあるようですから、それに関する情報を共有していくことで確実に対処できるようにしたいとも考えています、ですが…」

「今機動六課と地上の部隊は108部隊以外協力関係にないため、それがすさまじく難しい」

「ですから、今回中将に会いに来たということですね」

「はい、卑怯だとは思いますが、このような手を使わなければ協力は得られないと思ったからです…我々機動六課も、中将と地

上部隊の思いも同じですが、互いにいがみ合ってますから」

「…先ほどの謝罪はそれも含まれていたのかね？」

「はい、地上を守るための、同じ思想を持ち部隊でありながらないがしろにしていたことも勝手ですが含めていました」

「…そうか…これからは君たちのようなものの時代なのかもしれぬな」

「中将？」

「わしは昔魔導師を志したが、適性がないとはねられた…しかし、地上を平和にしたいという志は忘れずにいたかったのだが…いつの間にかゆがんでしまったようだな」

「どついうことですか？」

「君は多少推察がついているのではないのかね？」

「ええ、私見ですが恐らく地上を守る戦力を確保するために違法者を手を結んでいる、しかもかなり厄介なものと、そしてそれを紹介したのは悪意ある存在ということぐらいですかね」

「悪意ある存在？」

「地上本部（じじょうほんぶ）に始めて来たときからずっと感じているんだ…それを」

「…君たちは管理局の創設者たちでもある最高評議会を知っているかね？」

「ええ」

「一応は…まさか!？」

「気がついたようだな…君が感じた悪意は彼らからのものだろう」

「…でもどうして『悪意』なんでしょうか?彼らは今まで…」

「…だからこそ悪意なんです」

「え?」

「今まで()…()、つまりこれまで変わったことがないということですよね」

「…そうなりますね」

「管理局が創設されたのは150年ほど前ですよね?」

「ええ…まさか!？」

「彼ら…いや、やつらは人間の体を捨てて生きている…おそらく脳だけになって…な」

「奴らは自分たちが導いてこそ世界が平和になると思っている」

「…腐っているってレベルじゃないですね…独裁者よりも性質が悪いですよ」

「我々は権力も集中しているしな」

「三権分立がなくなってないですからね、立法・司法・行政はバラケさせておかないと暴走しても止められない…というかもうなってますよね」

「…そうですね」

「個人的にはもう管理世界増やすこと自体阿呆だと思っんですけどね」

「確かにな、それが原因で人員不足は発生しているうえ、一部の世界には悪いことが多いことのほうが多いからな」

「どういことですか？」

「…俺やはやては魔力があるから強盗とかが家に押し入ってきても抵抗できるよな」

「ええ、その通りですね」

「しかし魔力がない普通の人は管理世界だと魔法の類以外は使つてはいけないから強盗が銃を突きつけてきても身を守ることが出来ない」

「同じものを使うことが出来ませんからね…その世界の警察関係もそうですね」

「…つまり理不尽な暴力に対抗する手段が0ということですね」

「うむ、しかしわれらはどうすることも出来ない」

「トップがトップですからね…それにほとんどが権力に執着したボケですから…」

「頭が痛いですね」

「ええ、まったくです」

そこで全員でため息をつく…まったく…

「管理局（ミ）が在つての平和ではなく平和のために在るといふのに…」

「同感だな…ところで八神二佐、数日後機動六課はオークシヨンの護衛任務があると聞いたが」

「お耳が早いですね…はい、確かにありますが…正直厳しいですね」

「ほとんどが外で暴れるのが得意な連中だからな、俺も含めて」

「それだけではない、それはロストロギアのオークシヨンのだ」

「…理念まもらねえ組織つて初耳なんですが…」

「そうだな、管理局は封印・管理すると言つのにそうしたものを民間に渡すとは…本局上層部の奴らは…」

「耳が痛いです」

「恐らくそれによつて危険なものを犯罪者に渡すのも出てきそつで

「すね」

「うむ、それもあわせて行ってほしい…近くの部隊をいつでも増援として送れるようにも手配しておこう」

「ありがとうございます」

「そしてもう一つ…これだ」

「これは・・・？」

「次元犯罪者ですね…名前は…ジェイル・スカリエッティ!？」

「うむ、彼と彼の仲間を折を見て保護してほしい」

「保護…ですか？」

「彼も老害の連中の被害者ですか？」

「うむ…アジトの方は後ほど秘匿で送る」

「分かりました」

「彼とどういふ関係なのかも察せました…が、気にしないことには
ます」

「ありがとうございます」

「では失礼します」

「うむ…オーリス、彼らを六課まで」

「はい、中将」

その後俺たちは中将の手配した車で六課まで戻り、今後の方針を全員を集めて説明し、本局と地上をつなぐ部隊として動いていくことになっていく…

第21話 護る為に…（後書き）

作：KYだから出番も短くして隠しました

龍：処置がひでえな…

は：でもまあせな一気に捕まえに行きかねなかったんやろ？

フ：確かにクロノってそういうところあるから…

な：フェイトちゃんとはじめてあったときもそうだったの

ア：私たちはどうなるの？

作：アグスタが終わったら出てくるよ

フ：ああ、アグスタでデジモンの力の有用性を示すんだね

龍：それならいいな

作：次回からはアグスタ、原作とは大幅に変える予定です

全：お楽しみに！！！！

す：意見や感想、誤字指摘などいろいろ待ってます！！

第22話 ホテル・アグスタ（1）（前書き）

作：気がついたら10万PV突破してた

龍：おい

す：記念に何かやるの？

は：私ら誰かとデートとか？

な：なら私だよな？

ア：私よ！！

フ：アリサとすずかは、本編で書かれる事決まってるからいいんじゃないかな？

作：書くとしたら番外編形式だよ、しかも結構ハツチャケ気味の

龍：…果てしなくいやな予感がする

な：今回はどんな没ねたなの？

は：いや、設定かも知れへんやん

作：今回は没ねたで、実は龍士のパートナーはドルモンにするつもりだった

す：なんでギルモンにしたの？

フ：ほかのロイヤルナイツを使えばよかつたんじゃないの？

作：いや、実はあの子がさらわれることはもう確定してて…

ア：それで兼ね合いを考えたらこうなった、って言うことね

は：まあ確かにメギドラモンっちゅーのを相手にするのはキツツいな…

龍：デクスドルゴラモンも相当だろうけどな

な：で、その子のパートナーは？

作：ちゃんと決めてるよ、そのときにまたデジモンの設定・解説のところかその第2段を作って載せる

全：…それでは本編をお楽しみください！！

第22話 ホテル・アグスタ（1）

Side 龍士

「とうわけで、機動六課は今後ロストログア『レリック』の調査・確保と平行してミッドチルダに現れたデジモンへの対処を各地上部隊と暫定的ではあるが協力して行なうことになりました」

「これはレジアス中將から結果を出してからといわれているからそうなっている、そしてもう一つ」

「今まで出現していたがジェットの製作者、ジェイル・スカリエツのテイの搜索及び保護も行うことが決まりました」

「保護？逮捕じゃなくて？」

「理由は彼の経歴を調べたんだが、確かに経歴のデータ（・・・）として残ってはいるが実在したかが分かっていない。彼が普通の人間なのか、それとも何者かのクローンとして生み出されたのか分からないからな、何者かに生み出されたのなら黒幕がいるはずだから、そいつを捕まえるために保護するということだ」

「なお彼のアジトの方はすでに地上部隊が搜索し、発見しているため突入等の準備が万全に整い次第、機動六課もそれに便乗させてもらう予定です」

「そしてこれは地上本部・及び地上部隊と俺とはやての独断で決めたことだからもし失敗したとしても被害を受けるのは俺だけだから心配する必要はないぞ」

「…はてしなく不安なんですけど」

「何がだ？」

「それ…畏じゃないですよね？」

そのティアナの言葉に気づいたようにスバル、エリオ、キャロ、なのは、フェイト、シャルル顔を見合わせ、俺たちに視線を向けてくる…それに対して俺たちは

「俺たちもその可能性はあると考えている、だからこれまでレジアス中將からその任務を受けた部隊のことを洗いざらい調べている」

「半分は正式任務として在ったからすぐ分かったけど、極秘任務の方は今オーリス三佐にお願いしてそろえてもらっているところです」

「信頼できるんですか？相手はアインヘリアルとかを作ろうとしている人たちですよ」

「するしかない、というかアインヘリアルというのが作られているという証拠はなかったぞ」

「…えっ！！」

「恐らく、誰かが予算を横流ししたか、何かを維持するためにそれを作ることが出来なくなつたか、市民の不安を取り除くために出たものかまでは分からないけどな」

「とにかく、これから先はこんな感じだ、そしてそれを実現するた

めに必要なのが今日のホテルの護衛任務だ」

「ホテル・アグスタ、ここでロストログアのオークションが行われます」

「それをリックと誤認してガジェットが来るかもしれないからその対処、ということだね」

「ああ、そしてこういう場合は犯罪者への横流しの隠れ蓑としてはうつつつけだ、だから」

「そのようなことをしている人物の搜索も平行して行う、ということですね」

「そうだ、そして守備配置だが」

「そこは私が説明します。外・ホテル周辺は高町分隊長、ティアナ、龍君、キャロ、シャマル、ヴィータ、リイン、セイ、私の9人で指揮は私とティアナ、龍君の3人で連携して取ります。ホテル内部はハラオウン分隊長、スバル、エリオ、ザフィーラ、シグナムの5人で指揮はハラオウン分隊にとってもらいます」

「ち、ちよつと待ってください！！ホテルの中少なすぎませんか？」

「ホテルの中に入られたら負けだぞ」

「なら、外をもつと増やしてもいいんじゃない」

「スバル、私たちだけで今回の任務は行うんや、ホテルの護衛もしなければいけないけど、一番守らないかんのはそのオークションに

参加しとる人たちや、その人たちの避難誘導及び護衛が出来るメンバーはその5人しかおらへんねん」

「隊長陣だとフェイトとシグナム以外は室内だと不利、FWはテイアナもだし、キャロもフリードが全開で出せないからな、デジモンたちは成長期でもガジェット？型程度なら何とかなるだろうからな」

「基本的にはどう行っていくつもりですか？」

「外で徹底的に叩き潰す」

「シヤマルとリイン、キャロが探知して私とセイが大規模に、残りを高町分隊長とティアナが中心となつてたたくという感じや…あ、ヴィータとデジモンたちは主に私らが攻撃されたときの護衛やから、心に留めといてな」

「分かりました」

「とはいってもこれはガジェットが来たときの配置、それまでは先日決めた配置のままていくからな」

「どうして？」

「これなら相手が油断するやろ」

「なるほど、油断しているところに一気に行くって感じですね」

「一気に、かどつかは微妙だがその感じ方で間違つてはないな」

「これは六課のこれからを決める大事な任務や、皆、しっかり頼む」

「君の事は義姉ねえさんから聞いているよ、赤青龍士君…ヴェロツサ・アコースだ」

「…義姉あねって誰だ？」

「カリム・グラシアだよ」

「…あの人か…にしても似てないというか、真面目そうじゃないな」

「ははは、よく言われるよ…実は監察官としてもそれを見逃すわけにはいかないからね、協力させてもらおうよ」

「ありがたい…連絡はこちらでしておく」

「…わかった」

その後俺ははやてに念輪でそのことを伝え、数分後にその人物を発見し潜入、その現場の映像と言質を録ると突入して逮捕、連行のためにヴァイスが待機しているヘリの所に行き、キャロとシャマル呼びだし、そのことを伝えて六課隊舎の方に送り、シャーリー達に背後関係を洗わせることを指示してはやて、なのは、フェイトたちのところに合流する

「龍君、お疲れ様や」

「すごいね」

「俺一人じゃ無理だったけどね」

「ユーノ君久しぶり」

「うん、なのは」

「ロツサも久しぶりやね」

「で、ほかにもいそうか？」

「いや、今回は彼らだけだったようだね」

「そうか…真面目な話、ロストロギアで始まった連中としてはどう思う？」

「そうだね…危険性がないものだろうとロストロギアだから…今後はなくした方がいいかな」

「せやね…もしかしたら危険なものを流す人、こないだフェイトちゃんか調べて分かったジユエルシードの例もあるからな」

「うん、なんとかしないとね」

「そうだね」

「俺も同感だ…それと一つ聞きたいんだが他世界の信仰対象となっているのを筆頭に、その世界自体で何かしら認知されているものは俺たちが『危険だから』という理由で強引に持っていったらお前たちはどう思う？」

「それって強盗とか言っんちゃっ？」

「うん、ちゃんと交渉とかするべきだね」

「でもそれはすぐには行えないだろうな…俺たちが…でもそれまでの間にそいつらのように腐る可能性もあるしな」

「難しいね…」

「本当にね…」

「うん…」

「クリアールヴィントのセンサーに反応!! ガジェットがこっちに向かってるわ!!」

「なのはちゃん!! 龍君!! 行くで!!」

「うん(おう)!!」

俺たちはデバイスを起動して外へ出てシャマルたちと合流した

「シャマル、状況は!？」

「?型及び?型の混成部隊がまっすぐこっちに向かってきます…距離はまだあるけど…」

「どうするべきやと思っつ?」

「ここまで来られるより、その位置で迎撃した方がいいな」

「分かった、なら詠唱開始するから、時間稼ぎよろしく」

「よし、なのはあそこまで届かせられるか？」

「ちょっと…厳しいかも」

「セイ!!」

「…流石にあの距離は…」

「…俺もスナイプは苦手だから…」

「あっ!!」

「どうしたシャマル」

「ガジェットの動きがよくなりました、有人操作に切り替わった可能性があります!!」

「有人操作…ということは操っている奴がいるはず、ここを中心にそこまでの距離の倍ぐらいで探査をしてくれ」

「もうしてます…この先のあの崖あたりです!!」

「…俺とラインで行く」

「…せやね、いざというときはユニゾンも許可するわ」

「よし、ライン、探査を継続して俺の肩に乗れ、その方が早い」

「ハイです!!皆さん、ここは任せたです」

「頼んだで!!」

そうして俺とリインは有人操作を行っている人物を止めるためにシヤマルが発見した位置へと急いだ

Side 龍士 Out

その数分前

Side ゼスト

俺の名はゼスト・グランガイツ、隣にいるのは部下のメガーヌの娘のルーテシア・アルピーノだ。俺たちはとある目的のためにここまで来た。それは、スカリエッティの真実をとある人物達に告げるためだが、

「どうした、ルーテシア」

「おもちゃたちが、近づいてきてる」

「そうか。都合だな、ルーテシア、インゼクトを使って有人操作に切り替えて彼らの元へ向かわせる」

「どうして…」

「彼らの実力を測るためだ、彼らは多少頭が切れるようだ、接近戦が出来る奴はあそこにはほとんどいない、全員が遠距離からガジェットを倒すつもりだ」

「でも、お母さん達は…」

「奴なら、大丈夫だ…」

「…分かった」

ルーテシアは不承不承といった感じだがとりあえず動いてくれた…この子の母、メガーヌ・アルピーノともう一人、クイント・ナカジマとはある目的のために潜入した際、俺も含めて大怪我を負い、その治療を行ってくれたのがスカリエツティだった…

最初はかなり驚いたが今となつては納得だ…人は皆生きたいと思うものだ、そこにクローンだのなんだのは関係ない、奴もまたそう…自身が生きるために、自分を作った連中のいうことを聞いていただけなのだ…

「ゼスト、こっちに2人…かな、近づいてきてる」

「ほう、この位置を特定したか…その割には攻撃が来ないが」

「多分森があるから細かい位置まで特定していないんだと思う」

「しかし砲撃とかなら気に…環境…か」

「s」さて、そこまでにしてもらおうか「…!!」

「抵抗しなければ攻撃はしないです!!」

「あれは…」

「ダミーだ」

「氷で作った分身…よくよく考えるとそんなことよく出来ましたよね」

「服さえ着せりゃこの天気と距離だ、何とでもごまかせる」

「…そちらの言い分に従おう、ルーテシア」

「うん」

「リイン」

「ガジェットの有人操作がOFFになったようです…一気呵成に破壊してます」

「よし、次はあんたらだが…何者だ？」

「俺の名はゼスト・グランガイツ、この子はルーテシア・アルピーノ…お前達に俺達の保護を頼みたい」

「襲ってきて保護って…」

「理由は？」

「俺達とはある真実を知っている、そのことを伝えにきた」

「…うそは言っていないようだな…」

そういうと男は俺とルーテシアに突きつけていた刀を下げた…と

「ちっ！！！！」

その瞬間私とルーテシアは男に小さいのと一緒に抱えられ中へと飛んでいた…そして私達がいたところには見たこともない生物がいた…これが人間の悪意の結果だと私が知るのもう少し後のことだが…

第22話 ホテル・アグスタ（1）（後書き）

作：ゼストさんが少し策士みたいになってしまった

龍：いいんじゃないね？

は：元隊長さんなんやから

ア：なのはとフェイトは見習うべきね…ところで私達の出番は？

作：これが2話ぐらいだから26話位には出られるよ

す：その後はまた訓練とか？

フ：だろうね

龍：そういやティアナの誤射はこれだとないんだよな

な：でも何か苦しそうな顔のしていたの

す：ちゃんと話し合っただけでね

ア：あんたよく話さずに勝手に進めていくところあるんだから

な：…善処します

龍：そこは分かったとかじゃないのか？

作：なのはだから…

は：次回はどうなるんや？

フ：ゼストとルーテシア、ラインたちは大丈夫なの？

龍：無事に済ませたい…てかテラ環境破壊…

な：気にするのはいいけどし過ぎちゃだめだと思うの

全：次回もお楽しみに！！

フ：誤字脱字の指摘に意見、感想とかいろいろ待ってます！！

第23話 ホテル・アグスタ(2) (前書き)

作：今回も結構重要です

龍：にしてもがんばるな

ア：まさかの3日連続投稿だもんね

す：書く時間は長いけどね

フ：更新するだけいいと思うよ

な：放置より100%ましなの

は：それより今回はドンなんなん？

作：今回はこれが終わるかもうちよつと余裕が出来たら書きたい奴の簡単な設定紹介

す：どんなの？

ア：あれじゃない？遊戯王の奴じゃない？

龍：だが今放送している奴も含めると4つもあるんだぞ、どれにするのか？

な：恋愛は：放り込めるのはGXとかそういうのだね

は：オリジナルだすん？

作：今回は5D's編を紹介します、主人公はGXの主人公・遊戯十代とヒロイン・天上院明日香の子供です

龍：そういう作品つてもうあるだろ？

ア：あれはタイムスリップ系だからそうじゃないタイプなんでしょ？

は：時系列的にGXからあまり時間がたつてない奴か？

な：そもそもそうじゃないと牛尾つて人が化け物になるの

フ：そうだね、同一人物だったらクローンと疑えるよね

(5D'sは公式で武藤遊戯たちの時代からの数十年後の世界です)
作：まあ今回はこんなところかな

全：では本編をお楽しみください！！

第23話 ホテル・アグスタ（2）

Side 龍士

俺とリインは有人操作に切り変わったガジェットの操縦者を見つけるためにシャマルに言われたポイントに近づき、相手に見つかることも分かっていたため…

「水分身の術！！」

俺は自身とリインの分身を作り出し、それをそのまま向かわせ若干遠回りしてその場所から少しはなれたところに降り立つ

「どづしてここから？」

「操縦者はあれを俺達と思っているからな、それで背後から忍び寄って逃げられないようにする」

「なるほどです」

「いくぞ」

そのまま近づき、刀を首筋に当てて簡単に尋問を行ったのでリインに言っってはやて達に連絡を取ろうとした瞬間

「「あー！！」」

「どづした！？」

く、他のデジモンにとってはその存在は脅威となっている。必殺技は脊髄から発射される有機体系ミサイル『グラウンド・ゼロ』。ほかに得意技として『カースブレス』がある

「完全体…でも、やるしかないか…ギルモン…！リアライズ…！」

「おう…！」

「…！」

「デジソウル…チャージ…！」

「ギルモン進化…！！…グラウモン…！」

「リイン…！ユニゾン行くぞ…！」

「えっ…は、ハイです…！」

「…ユニゾン・イン…！」

「…！」

リインとユニゾンしたことにより俺の服と髪は黒かった部分は青白色になる…にしてもゼストさんは何に驚いてんだ？…とにかく

「行くぞ…！」

俺はリインとユニゾンしたことで身体能力も上昇し、リインは氷系のため、

「舞え、袖白雪そでのしらゆき！！次の舞、白漣！！」

こういった技の威力も上がっているからグラウモンをサポートしやすい…敵が凍った隙を見逃さず

「エギゾーストフレイム！！」

グラウモンの必殺技が直撃する…これはかなり効いたはずだ…

「どうだ…」

「分からない、だが、あれだけでは倒せてはいないだろう」

「何！！」

「そつなの？」

「奴は完全体、ランクが上だから…」

「だが倒せないわけがない、1人の奴とは違い、こっちは連携が取れ…何か来るぞ！！」

「ミサイルか！？」

「奴の必殺技の『グラウンド・ゼロ』だ！！よける！！」

「くっ！！」

何とか直撃は免れたものの威力は高く、爆風で俺達はほとんど身動きが取れない状態だ…そこに追撃として口から『カースブレス』

が放たれ、俺達を襲う

「くくくああ!!」「」

グラウモン、俺 & amp; リイン & amp; ルーテシアちゃん、ゼストさんの順で並んでいたためグラウモンが盾のような役割をしてくれたので俺達へのダメージは大きくはないが…

「グラウモン、無事…ッ!!」

完全体の一撃を受けてまともに入れるはずはなく、グラウモンはかなりのダメージを追っているようだ…だがそれだけではないように見えるのだが…

「あ」

「どうした、ルーテシアちゃん」

「あそこに…何かいる」

「あれは…デジモン!?!」

俺はすぐさまエックする

ワームモン：成長期：フリー種：幼虫型：必殺技 - ネバネバネット、シルクスレッド

気弱で臆病な性格の幼虫型デジモン。ブイモン等と同じ古代種族の末裔で、デジメンタルの力でアーマー進化することで、信じられないようなパワーを発揮することができる。また、脆弱な幼虫が力強い成虫に成長するように、いつの日かパワー溢れる成熟期へと

進化すると言われている。必殺技は粘着力の強い網状の糸を吐出し相手の動きを封じこめてしまう「ネバネバネット」と、絹糸のように細かい先端が尖った針の様に硬質な糸を吐出す「シルクスレッド」
。ほかに通常技として『ランダンロール』、『ワームホイール』、『ワームスクラッチ』、『ワームテイル』、『ワームハング』がある
一緒に見ていたルーテシアちゃんはすぐさまワームモンのそばに駆け寄り、どんな状態かチェックし、安堵したような顔になる

「大丈夫なのかい？」

「うん、気絶しているみたい」

「う、ううん…」

「大丈夫？」

「わッ！！人間？」

「大丈夫？」

「え…大丈夫…だけど…」

「そう…よかった」

「…僕に何もしないの？」

「????？」

「ああ、ルーテシアちゃん、その子を連れてゼストさんのところに行

「つてここから離れ「おりゃ!!」「ウオ!」

俺はゼストさんとルーテシアちゃんとワームモンを自身たちを囿に離そうとした時にいきなり炎の攻撃がきてビックリした

「ルールーから離れる!!旦那、大丈夫か?」

「ああ、それからアギト、あいつは敵ではない」

「えっ…: そうなのか?」

「ああ」

「自己紹介は後だ、アギト…: だっけか?ここは俺とグラウモンが引き受けるからルーテシアちゃんとゼストさん、ワームモンをアグスタの方に連れて行ってくれ!!」

「はっ!?!」

「あいつに抵抗できるのはデジモンを持つ奴だけだ!!…: させん!!参の舞!!白船!!」

俺はスカルグレイモンに白船を放ち、口からの攻撃を一時的に止めるが、そんなに時間は持たないことも分かっている

「早くしろ!!死にたいのか!!」

「わかった、アギト、ルーテシア、行くぞ」

「旦那…: 分かった」

「…気をつけて」

「ああ」

ゼストさん達がかけていくと同時にグラウモンもダメージが少し回復したのか立ち上がり、プラズマブレイドで攻撃を再開し俺も袖白雪から刀を氷輪丸へと変更し氷の竜で攻撃を開始する

「はあ！！」

「おお！！！」

しかし世代の差、そして自力の差というのはどうしても覆しようがなく俺達は防戦に追い込まれていく…さらにリインからホテル前はいまだにガジェットが出現しているらしく援護も期待できない…

(このままじゃジリ貧だ…どうするか…はっ！！！)

考え事をしていた隙に『カース・オブ・ゼロ』が放たれるも、ギリギリで回避するが…

「しまった！！！」

「まずい！！！」

放たれた方向にはゼストさん達がいたのだ…木や距離があり、なおかつ直前で俺達がガードに入ったとはいえダメージを免れることは出来なかったようでゼストさんに庇われる感じでだがルーテシアちゃんもアギトもワームモンも突っ伏している…そして

ズウウンー!!

グラウモンが倒れる…既に1撃もらっていたのだ…体に蓄積されたダメージに耐え切れるはずはない…

「くそぉ……………」

思わず声が漏れる…護る為に…大切なものを護る為に魔法の力も…デジモンたちの力も手に入れたのに…

「俺は…弱い…」

「龍さん…」

「強くなりたい…守りたいものを…しっかりと守れるよう…今よりも…もっと、もっと…強くなるんだぁー！！！！！！」

「こゝ、この力は…?」

ロングアーチ

「八神部隊長ー!!」

『こちらでも確認!!龍君の力が大きく上がってる!!』

「これは…今まで発動しているデジソウルとは比べ物にならないくらい大きいですー!!」

『まさか新しい進化?…確認とデータ取得お願いな!!』

「ハイ!!!」

現地

「デジソウル…フルチャージ!!!」

今までよりもはるかに大きいデジソウルをデジヴァイスに注ぎ込む…そこからさまざまいい光の筋が出てグラウモンを包み込むと同時にグラウモンの眼が開く

「グラウモン進化!!!……………メガログラウモン!!!」

「さらに…進化した…」

メガログラウモン：完全体：ウイルス種：サイボーグ型：必殺技 - アトミックブラスター

「巨大なグラウモン」の名前を持つ、サイボーグ型の完全体デジモン。その名の通り体は大きく巨大化しており、上半身は最強金属“クロンデジゾイド”でメタル化されている。両肩に付いている2基のバーニアで飛行することもでき、対空・対地攻撃の両方が可能である。有り余るパワーで暴走するのを抑えるために、顎の部分にクツワのような拘束具を付けている。また背部の部分から帯のように伸びる「アサルトバランサー」は伸縮自在で、敵を貫き刺すこともできる。得意技は両腕の「ペンデュラムブレイド」で敵を切り裂く『ダブルエッジ』、殴りつける『ハンマーエッジ』、放電する『メガロスパーク』。必殺技は両胸の砲門から原子レベルで敵を破壊する『アトミックブラスター』

「いくぞ、メガログラウモン!!!」

「ウオオオオオーーーーー！！！！！」

俺はメガログラウモンの後ろから飛び出し、何匹もの氷の竜をスカルグレイモンに放つ…先ほどまでは殺傷設定なのにあまりダメージがなかったのに今度は多少効いている…このことから

「もしかするとデジソウルの大きさが関係しているのか…？」

「可能性は大きいな」

「一気に畳み掛けるぞ！！！」

「オオ！！！！！」

俺の氷の竜がスカルグレイモンの行動をどんどん封じていく…その隙を突いてメガログラウモンも『ダブルエツジ』や『ハンマーエツジ』でダメージを与えていき…動きが大きく鈍ったところで

「水遁・大鯨弾の術！！！」

しかし反応されて『カース・オブ・ブレス』を放たれるが…

「残念だったな」

俺の放った水の鯨は『カース・オブ・ブレス』を飲み込みさらに肥大化してスカルグレイモンに襲い掛かり眼に見えてダメージが出ている上、水浸しのような状態なので大きく魔力を注ぎ込んでかなり大きな氷の竜を作り出しスカルグレイモンにぶつけ、ほぼ凍結させたところに

「アトミックブラスター!!」

メガログラウモンが必殺技を打ち込んでデータに変換させる…

「リイン、向こうはどうなっている?」

「まだ続いているみたいです」

「よし、メガログラウモン!!」

「おう!!」

「ゼストさんたちは大丈夫ですか?」

「なんとかな…このことも説明はしてくれるのか?」

「もちろんです、ルーテシアちゃんが抱えているワームモンのこと
もありますからね」

「では、行きますよ!!」

俺達はメガログラウモンの肩に乗ってアグスタ正面へと戻り、戦
線に参加する

「破道の三十一、赤火砲!!」

「ダブルエッジ!!」

俺達の攻撃でさらに何体か破壊することに成功する…残りももう

少なそうだ

「後どのくらいだ？」

「後20体ぐらいです！！」

「よし、なのは、ティアナ、援護頼む！！ヴォルフモン、クロックモン、一緒に頼む！！」

「了解！！」

「分かりました…」

「いいだろう」

「分かった…」

そうして俺達が接近戦を仕掛け、残ったメンバーは俺達への援護射撃を開始すし、次々と破壊していくその中で…

『ティアナ！！4発ロードなんて無茶よ！！クロスミラージユも！！』

「ティアナ！？」

「何してんだよあいつ！！」

「できます、クロスミラージユも！！」

「Yes」

「クロスファイヤー…シュート!!」

ティアナのクロスファイヤーシュートが俺の背後から躍り出てガジェットを殲滅していくが…

「龍君!!危ない!!」

「!!」

撃ちもらったのかその中の一発が俺の顔の方に向かってくるが俺はそれをスウエーバックでよけながら残っているガジェットに

「破道の三十三、蒼火墜!!」

を放ち、撃墜するが…

「ティアナこの馬鹿!!無茶したうえ味方撃つてどうすんだ!!」

ヴィータがティアナを叱責するが

「やめるヴィータ、もう終わったことだ」

「デモよ…」

「はやて、とりあえず現場の検分は俺とリイン以外に任せて、ちょっと保護した人たちがいるんだが…」

「わかった、連れてきてくれるか？」

「メガログラウモンの肩に乗ってる」

「分かった」

この後はやてと一緒に聞いた、ゼストさんたちの話は…先に進んだらもはや戻ってくることは出来ない、そんな印象を受けるものになることを…俺達は予想だにしていなかった

第23話 ホテル・アグスタ(2) (後書き)

作：グラウモンが完全体に、そしてティアナのミスショットはなくなりませんでした

龍：なくすと思ったんだが…というか進化のところあれば…

ア：セイバースのパクリよね…

作：微妙に違うぞ!!

す：パクツた事自体は否定しないんだね…

は：まあ否定したらちよつとな…

フ：そういえばあそこのあたりに人の気配がするんだけど…

な：あ、そういえばそうだね

作：おっと、忘れるところだった…実は少し前に龍士がほかの作者さんの作品の後書きに出演してな、こちらのここにも出ていただくことになったんだ、龍士、紹介を

龍：俺かよ…ま、いいや。『魔法少女リリカルなのは』ある転生者の新たな世界』の主人公、『トキガワ コダイ』君だ

コ：よろしくな、それと龍士これを忘れていつてたぞ

龍：ア…

は：なんやの？

コ：俺が作ったロールケーキだ、クリーム、チョコ、フルーツの三種類セット

フ：何で忘れたの？

龍：作者ぶつ殺すことに意識向いてたから…

な：何があったの!?

コ：…この作者が送ってきたロシアンルーレットケーキ(8個セット)の当りを俺とコヨリが引いてこいつも食ったからだ

ア：半分自業自得じゃない？

龍：う…

コ：…とにかく食べる、味が落ちる

作：それじゃ早速…ん〜！！うまい！！

ア：ホント、美味しいわね…

フ：紅茶もほしくなるね

コ：ほれ

す：ありがとう…うん、どれもお店で売っているのより美味しいって皆どうしたの！？

な：私が作ったのより美味しいの…喫茶店の娘なのは…主婦というか料理をコダイ君よりも長いのに…

（コダイはまだ中学生ぐらいです）

龍：俺も自信あつただけど…井の中蛙って思い知らされたわ

コ：胃の中蛙？

作：違う！！井戸の中にいる蛙って事だ！！ちなみに正しくは『井の中の蛙大海を知らず』！！簡単に言うと世間知らずだ

ア：向こうの私達…苦労してるわね

女全：うんうん

龍：あゝ、ごめん、フォローできない

コ：何がだ？

作：流石天然

龍：もうちよつと自分に向けられている、特に女性陣から向けられる感情には敏感になった方がいいよ、絶対面白くなるから

コ：そういうのは家の作者に行ってくれ

作：まあ初めてのコラボにしてはうまくいったかな？

（コダイ含め）全：いや、まったく

作：どちくしよ〜！！（ダッシュでどこかに行きました）

コ：流石に戻らないと家族が心配するから、俺は行くぞ

龍：ならこれをもっていつてくれ

コ：なんだ？

龍：昔作ったマグカップ×6（形は普通で色が赤、青、黄、紫、緑、水）だ

コ：手作りか…後書きの方なら使えるかな？

龍：出来れば使ってくれるとありがたいな、俺達の友情の証として

コ：俺と友人：物好きだな

龍：迷惑だったか？

コ：いや、ありがたくもらっておく：またな

龍：ああ、あ、転送はしてやるよ

コ：助かる、苦手なんだ

シュン！！

ア：行つたね：

す：向ここの私達、がんばれ！！

な：諦めちゃだめなの！！

は：ファイトやで！！

フ：姉さんや母さんと一緒に幸せにね！！

龍：次回はアグスタの後半、後また六課か

ア：これであたし達も出れるかもしれないのね！！

す：楽しみだな

全：次回もお楽しみに！！！！

な：誤字脱字報告に意見、感想などいろいろ待ってるの！！

第24話 ホテル・アグスタ(3) (前書き)

作：今回から更新速度落ちるかもしれない

龍：またか

ア：またプライベート？

す：学生だもんね

作：……そうですね

な・フ・は：ちゃんと話してね？(デバイス構えています)

作：遊戯王TF6をやりたいから！！

龍：あほか

ア：呆れたわ

す：これは…ちょっと…

な：全力全開！！

フ：疾風迅雷！！

は：響け終焉の笛！！

作：戦略的撤収…トリプルプレイヤー！！！！ブルウアア

アアアア！！！！

龍：と言うわけで今回没ネタとかは作者が吹っ飛んだからなしだ

す：好評でも不評でもなかったもんね

ア：感想自体『それ以上言っちゃだめ！！』やっぱ禁句か

全：それでは本編をお楽しみください！！

第24話 ホテル・アグスタ(3)

Side はやて

「なるほど、そういうことですか…きつちりとこちらで保護させていただきますから、安心してください、ゼスト・グランガイツさん、ルーテシア・アルピーノちゃん」

「それにこちらとしても襲ってきた連中の正体やレジアスのことが聞けたからな、感謝する」

「ありがとう」

「でも驚いたわ…ルーテシアちゃんもデジモンに選ばれて、スバルのお母さんがゼストさんの部下やったなんて」

「確かに…そう考えると奇妙な縁だよな」

「そつとも言えるな」

「うん」

「ところで…ルーテシアちゃんは召喚士系何？」

「百聞は一見に如かずと言うから、見せてもらえるかな？」

「いいよ、おいで、ガリユー」

そういうと人型の虫っぽいのが出てきた…これは

「昆虫系か…なるほど、ワームモンと相性はよさそうだな」

「むしろ悪かったらびっくりするぞ」

「ここまで仲がいいからな」

そう、ルーテシアちゃんは龍君がスカルグレイモンと戦っているところでワームモンを助け、その後ずっと胸に抱いているんや…ワームモンの方も顔を見るとうれしい様子…あ

「何…これ」

ルーテシアちゃんの顔の前に光が出たかと思うとその中から白と紫のデジヴァイスが現れた

「デジヴァイス…どうやら」

「うん、これは報告することも増えたな」

「どうということだ？」

「さっきの戦闘で俺が使ったのと同種の奴さ、それを使うとワームモンを進化させることが出来る」

「ほんと…!？」

「わっ」

「あ、ごめんね、ルーテシア…実は僕、同じワームモンの中でもな

「かなか進化できなくて困ってたんだ…そしたら急に周りが光ってあそこにいたんだ」

「俺達のパートナーが現れたときと同じだな」

「ますますわからへんことも増えたけどな」

「まあな」

「なぜ君らやルーテシアにパートナーが現れたのか、ということか」

「ええ、そしてどうして昔は完全に殺すことが出来たのに今はその技術が失われてしまったのか、どうやってデジタルワールドを発見したのか、私達にデジモンのパートナーをつけた理由や目的、つけた人というか存在は何者なのかとかですね」

「殺すのは失われてよかったけどな」

龍君の言葉にギルモン、ベアモン、ワームモンが同意する…まあ私もおんなじ気持ちやけどな

「では申し訳ないですけど私達が隊舎に戻るまで待つてもらってもよろしいですか？」

「いや、私も元局員だ、足手まといにはならんから手伝わせてもらえないか？」

「私も…一部は私のせいだから」

「うん…」

「人手は多い方がいいからいいんじゃないか？それにもし何かしたら俺達が止めるし」

「分かったわ、ではこちらの赤青龍士と共に行動することを条件に認めましょう」

「恩に着る」

「ありがとう」

そうして龍君達は外に向かって行った。陸士ではいまだに伝説と知られているゼスト隊にしてその隊長のゼストさん。ちよつとは陸との関係が良くなると思え。ってそんなことのために利用したらだめやな。上に立つものとしては正しいのかも知れへんけど。私はそんなことせえへん。それが私の理想やから。！！

S i d e はやて O u t

S i d e 龍士

俺はまず現場について確認したのは作戦に参加していたメンバー、なのは、ティアナ、キャロ、シャマル、ヴィータ、リン、セイの状況の確認で、現在検分をしているのはティアナ以外だ。

「ヴィータ」

「龍か。後ろの2人は？」

「検分の手伝いをしてくれる、先ほど保護することが決まった人たちだ。はやての許可も貰ってる」

「ゼスト・グランガイツだ」

「ルーテシア・アルピーノ」

「そうか… ヴィータだ、邪魔すんなよ」

「分かっている」

「それでヴィータ、ティアナが見当たらないが」

「あいつはさっきので落ち込んで裏に行ってる… お前は大丈夫か？」

「避けたの見てただろ… というかあれはあいつも悪いが俺の機動も多少悪かったかもしれないねえ… あいつは結構凄いやからこんなところで潰しちゃだめだろ」

「まあな… よく考えるとあの時あたしも言い過ぎたかな」

「確かにな… 上に立つものとしてあそこであれはひどいな」

「俺も同感だ」

「何でてめーに言われなきゃいけないーんだよ」

「この人は元々管理局の部隊の隊長さんだよ」

「なッ… そうなのか？」

「ああ… そういえばお前の部下にはスバルがいたな」

「知ってんのか？」

「あいつの母親が俺の部下だった」

「そうか…で、龍士はどうすんだ？もうほとんど終わってるし、お前の方はユーノの奴がいたからなのはと一緒に引っ越して」

「そうか…ならティアナのどこにでも引っ越してみるかな」

「…分かった、あたしも後で行ってみるよ…でもよ」

「ゼストさんとルーテシアちゃんは…」

「一緒とは言われたがそれは検分の場合だけだ、それ以外のときは他の見張りでも就ければいいだろう」

「ですね、じゃ、ヴィータ頼む」

「んなこったろうと思ったよ…ま、任されてやるよ」

「すまん、今度なにか奢る」

「気にすんな、早く行って来い」

「ああ」

そうして俺はヴィータに任せてティアナがいるという方向に向かう…途中で缶コーヒートを2つ購入していく途中で…

そう言っ て俺はティアナがいる方向へと再び向かい…そこで壁に手を付き 恐らく泣いているであろう ティアナに声をかける

「泣いて後悔するか…それがミスしたときには一番だな」

「!?!?!」

「ほら」

俺はティアナに缶コーヒーを投げ渡す

「…あゝあれの事だったら気にしなくてもいいぞ」「えっ!?!」

「ああいうミスは今後しないようにするために意識する方が重要だ…俺も昔似た様なミスをしたことがあったからな」

「…どんなのですか?」

食いついてくれたか…正直すぐに走ってどこかに行っちまつかと思っただが

「昔バスケットスポーツをしてただけだよ」

「それは前聞きました」

「そうだったな、そこで始めたばっかのころはミスの方が普通でしてないときを思い出す方が難しかったな」

「えっ…」

「その台詞でお前が俺をどう見ているのかがよく分かった」

「う…」

「最初から何でも出来るやつなんてこの世には存在していない、皆何かしら努力しているものさ、お前同様な」

「でも才能が…」

「才能センスがあつても気が付かなきゃ意味ないし、使いこなせるようになるにはちゃんとトレーニングしないといけない、そういうのも努力って言うんじゃないのか？使いこなすための努力ってよ」

「…」

「俺だつてそうさ、これを手に入れてからはまず自在に使いこなせるようトレーニングばかりさ…と言ってもそれで体を壊したら意味がないからある程度でやめてるがな」

「どうして…責めないんですか」

「責めたらさつきあつた事はなかった事になるのか？」

「…ならないです」

「だろう、そんなことをいつまでもうじうじ気にしている暇があつたら次からしないようにどうすればいいのか考えた方がいいと俺は思つ…やっぱ昔を思い出すな」

「どんなのですか？」

「バスケの試合で試合終了直前にパスミスして逆転負けしたこと」

「それは…」

「その後1週間ぐらいかな…もうそれ自体が嫌いになりかけたんだ…」

「そんなになんですか!？」

「ああ、だってそれに勝つてりゃ小学校の全日本大会の準決勝進出だったからな…本当に皆に顔向けできなくてさ…だからやめようとしたんだが…」

「とめられたんですか？」

「ああ、そのときの監督にな、お前が持っているその経験はとても貴重なものだからってな、そしてそれを経験したからお前はもっと強くなれるって…こうして人に教える立場に立ってようやく本当の意味で分かったんだ」

「その経験を次に生かせるようにと、ですか」

「そうだ、自分のような思いをするやつがこれ以上でないようするためとかだな」

「龍さんの言いたいこと、なんとなく分かった気がします」

「それでいいのさ…」を聞いて十を知るなんて芸当、出来るやつはいないんだから」

「ア…はい…」

「それに人を頼るのは弱さじゃない、そのこともちゃんと覚えておけ」

「ハイ…！」

「じゃ、戻るぞ」

「はい」

そうして俺達は戻ったものの、ほとんど終わっていたため役に立たなかった…とは行ってもなのはが戻ってきたらティアナがなのの方に向かい、なにやら話していたな…まあ2人の表情からいいことのような…ん？

「どうした、キャロ？」

「お父さん、あの子は？」

キャロの言った子とは恐らく

「ルーテシアのことか？」

「ルーテシアちゃんって言うんだ…」

「ああ…そんなに気になるんだったら話しかけてこればいいじゃないか…それにこれからは一緒だしな」

「どじいじいよっ」

「六課で保護することになってな、それにデジモンも持ってるから…恐らくお前達の5人目のメンバーとしてこれから一緒に戦っていく事になるだろうな」

「そっか…」

「仲良くしてやってくれるか？」

「うん！ー！」

そんな会話をキャロとしていたら向こうからこっちに来たな

「はじめまして…」

「あ、はじめまして！キャロ・ル・ルシエです！ー！」

「ルーテシア・アルピーノ」

「よろしくね、ルーテシアちゃん！ー！」

「ルー」

「「え(は)？」」

「ルーって、呼んで…龍さんも」

「うん、ルーちゃん」

「これからよろしくな、ルー」

「うん」

こうしてキャロとルーは友達になったな…というかいまさらだがFWでエリオが孤立している感じがするな…というか全体的に男女比もおかしいな…

「お父さん」

「おう、どうしたエリオ」

「あの子は」

「ん、ああ、あの子は…」

以後キャロと同じやり取りがあり

「よろしくね、ルー」

「うん、エリオ」

こうした感じで俺達のホテル護衛任務は一応終了した…といってもこの後いろいろ報告書とか作って、俺とはやてに至ってはレジアシ中將との面会とかもあるが…平和のため、頑張りますか!!

第24話 ホテル・アグスタ(3) (後書き)

作：次回はまたオリジナル

龍：レジアス中将との面会か

ア：あたし達の出番よね！？

す：ミッドって海鳴とあまり変わらないんだよね

フ：うん

な：楽しみなの

は：出番出番

作：そういえば何気にはやての出演率高いんだよな

龍：指導シーンがほとんどないからな

な：どういうことなのかな？かな？

フ：私もほしいな

作：ちゃんとあるから！！デバイスを向けるな！！

ア：今回で仲間になったのは？

す：え〜っと、ゼストさんとルーテシアちゃんとアギトちゃんだね

フ：ゼストさんはどんな感じなの？

は：体の方は完治しとる見たいやし前線に出しても問題はないみたいや

な：フェイトちゃんがこれないときも訓練はもつと大丈夫になったね

龍：と言うよりも教える人物がそれぞれ確定したような…

は：確かに…

ア：武器が似てるのね？

作：そ、今後エリオはゼストと龍士の2人から教わって半端なく強くなります

す：ルーテシアちゃんとキャロちゃんは？

龍：恐らく知らないことを互いに補い合って、俺が護身系の格闘術を教えると言う感じか？

は：それでええと思うよ、スバルとティアナはヴィータなのはち

やんやね

龍：それを俺が補佐：って何気に俺全員？

ア：出来るやつのところには仕事は集まるから

す：でも疲れて倒れそうだね

な：そうなる前にちやんと休ませるよ

フ：なのはが休ませなくても私が休ませるよ

は：いざとなったら部隊長権限使うし、大丈夫やよ

作：今後の六課がちよつと不安だ：

全：次回もお楽しみに！！

す：意見に誤字脱字報告、感想やコラボ要請などいろいろ待ってま
す！！！！

第25話 仲間と得る新しき道（前書き）

作：今回からこっちも変わります、俺と主人公2人に

龍：後順番も変わったな…：こっちは俺が先か

鳳：しかしここで大量に出してたのは元々出番のためだからな…：あ、俺は作者のもう一つの作品「真・恋姫十夢想」伝説を継ぐ者と愚者「」の主人公、珀武麒麟、真名は龍鳳ゆえ、ここでは「鳳」で表現される

作：久しぶりの更新

龍：約1月半だぞ1月半！！長すぎるわ！！

鳳：スランプではないな、俺のほう書いてるし

作：こっちに限ってスランプ

龍・鳳：待てこら

作：『恋姫』は意外と楽だけどこっちはね…

龍・鳳：いっぺん殴らせる

作：さあて、本編に…ってバインド！？

龍・鳳：さあ…逝こっか

作・ちよ。
字がちが
・
・
・
あああああ
!!!!

第25話 仲間と得る新しき道

Side 龍士

俺とはやては任務の翌日、まとめた報告書と共にレジアス中将与面会し、会ったことを包み隠さず報告した

「と言うのが今回起きたことです」

「分かった…しかしあいつが生きていてくれたとは…」

「連れてくるといろいろと問題がありそうなので出来ませんでした
が…」

「いや、生きていることが分かっただけでわしの心も幾分か楽になった」

「しかしまさか平和のために自分の信念を曲げる振りをして奴等へのスパイになる…自分と同じ信念を持つものが出てくると信じて…
そちらの方が凄いと思いますよ」

「それが本局のものと言うのは奇妙としか言えんな」

「そうですね…」

「例の件はこちらで勧めておこう、準備が出来次第おって連絡する」

「」「了解です」

「では、食事でも一緒にどうかね？」

「一緒に一緒に一緒にいただきます」「」

で、俺達は地上本部の食堂に一緒に移動したんだが…かなり奇異と言つか物珍しいものを見る視線にさらされたな

「視線が気になるのかね？」

「少し…」

「地上に居るものたちはわしが本局の連中を嫌っていることを知っているからな…」

「希少技能持ちも好かれないと言う噂も聞いたことがありますか？」

「希少技能を持ち、それを平和のために使おうとしている、それはかまわん…だが…それをかさに本来ならば犯罪行為であるはずのことを平然ともみ消したりし、同じ思想や思いを持つものを見下す、それが気に食わんだ!!」

「そういうことだったんですか…」

「確かに本局の連中がしたことはそんなんですね…ここにも居ますし」

「う…反論できへんわ」

「そうだな…だが八神はやて、お前はそうして許されたことをあまりよしとしていない、だからこそこうして戦っているのだから？」

「まあ…ハイ、そうですが…」

「ならばいい…お前は考えを改めのためだからな…そこに居る赤青のおかけかね？」

「はい」

「ふむ…はやくわしの階級近くまで上がってきてほしいものだな」

「なぜですか？」

「なに、後進は若い者に任せて老兵は去るのみ、と云うことだよ」

「楽隠居させる、と云うことですね」

「くっくっく…まあ、そういうことだ」

豪快に笑いながら進むレジアス中将…追いかけるながらそれを見て俺は少しだけ父を思い出した

「どうしたん？龍君」

「少し昔を思い出しただけさ…忘れちゃいけないことをね」

「さよか…」

そうして俺達は一緒に昼食をとり、そのときにレジアス中将がはやたと俺を恋人同士の様だからかい、2人してそれに真っ赤になつたりもしたが、無事に終わって

「では、今後デジモンとうの対応は機動六課を中心に行く」

「了解です」

「地球にまだ確か君らの友人でデジモンを持っているものが居たな、彼女達もこちらにこれるよう手配しておく、2〜3日後にはこれるだろう」

「ありがとうございます」

「では」

「失礼します」

こうして面会も終了し、俺達は六課に戻った。その後は何事もなく進んでいくと思っていたのだが、運命と言うのは、どうも残酷のようだ

Side 龍士 Out

Side ティアナ

私はあの時…龍士さんを打ちかけた…周りの注意から龍士さんはよけたけど…もし直撃していたらと考えると…怖いことこの上なかつた…

そしてそのことを龍士さんは責めなかった…ミスは誰にでもあることだからと、そう言って…その言葉は嬉しくて…逆に辛くて…責めてもらえれば楽になるのに…

ヴィータ副隊長も言い過ぎたと言ってあの後階級が上なのに謝ってくださって…そのときにこのことを言ったらアドバイスをもらえた

せめてもらえば確かに楽になるが、それだと起こった事そのものを忘れちまう、そうしないようにしてくれただろうと…

だから私はなのはさんのところに行ってこのことを謝罪して…今後起こさないようにするにはどうすればいいのかと相談して…

「ウワアアアア~~~~!!!!」

「ほらティアナ、次行くよ」

「あの、これで、本当に…」

「アクセルシューター、シュート!!!!」

「キャアアアアアア!!!!」

今、なのはさんのたくさんの誘導弾から逃げ回る羽目になりました…なんでもこれの軌道を簡単に読み取れるほどの観察力や洞察力を身につければいいらしいけど…明らかに多すぎると思うんです…50個とか何なんですか!?

Side ティアナ Out

Side 龍士

帰ってきて訓練場に着てみたらスバルはヴィータ、キャラはルーと一緒にフェイトと、エリオはゼストさんが見ており、ティアナの様子を見に来たんだが…

「これっていじめじゃないか？それともストレス発散か？」

「それは僕達皆思ったよ」

ふと見るとそこにはデジモンたちが皆一緒にいた

「お前らは？」

「僕らは僕らで一緒に訓練してたんだ」

「そうか」

「なんかなのはイメージが変わりそう」

「ハグルモン…言ってるな、それは」

「仲間だよな？」

「獅子は子を千尋の谷に突き落とすと言うが…あれは流石にないだろっ」

「なんか集中力を上げる為の方法を聞きに言っつてこの訓練になったよっだよ」

「本当か？ストラビモン…馬鹿かあいつは…ちょっと止めてくる」

「あ、龍…行っちゃった…」

その後俺は無理やりわって入りなのは誘導弾を全部叩き落した

「龍君！！何するの！！」

「止めただけだ」

「どうして止めるの！！」

「こんなん集中力なんか上がるか！！」

「あがるよ！！」

「根拠は！！」

「私が今まで教導した子達はこれで上がったモン！！」

「そいつらって空飛べるのか？」

「うん」

「決まった、お前は阿呆だ」

「ひどい！！」

「ティアナは陸戦型だぞ！！空飛ぶやつと一緒にすんな！！」

「ア」

間向けな、忘れていた感じの声を出したなのはに俺は無言で飛び
上がって拳骨を落とす

「~~~~~!!!!」

「自業自得だ…それにティアナの小隊指揮能力は眼を見張るものがある跟前に言っただろう、それと同時に伸ばさなければまったく持つて意味がない」

「じゃあ、どうすれば…」

「観察眼を鍛えるという点は間違っではなかったが…方法がだめすぎたから…」

そこまで言っただけ俺はティアナの能力を十二分に引き伸ばせる訓練方法をじっくりと考える…が、なかなかいい案は浮かんでこなかった…が、

「じゃあはやてちゃんに聞いてみる？」

「部隊長か…確かに小隊指揮と射撃でかぶっているっちゃかぶっているが…」

「動き回る私ととまって撃つ八神部隊長じゃちょっと違うと思えますが…」

「参考にはなるでしょ」

「まあな」

「じゃ、聞いてみるね」

そう言っただけなのははやてに経緯を説明し、はやても自身の経験

からこういうのがいいのではないかとアドバイスを出し、それをちやんとメモするティアナ…これで俺はお役ごめんのようだな…エリオたちの様子でも見に行くかな

S i d e 龍士 O u t

S i d e ゼスト

俺は軌道六課に保護された後、何か出来ることはないかとこの部隊長と赤青がレジアスに会いに行く前に尋ねると部下に槍使いが居るからそいつを鍛えてほしいといわれ、今対峙しているのだが…

「まだまだだな」

「はあっ…はあっ…」

「構えはいいが隙が多い、ガジェット程度なら何も問題はないが実力者との対決になるとこうして差が出来る」

「ハイ…」

「どうすれば差はなくなると思っっ？」

「え…」

「分からんか…」

「ハイ…すみません」

「謝ることはない、君はまだ幼い…やはり基本的なことから教えていった方がいいかも知れんな」

「基本…ですか？」

「そう、槍術自体の基本だ…構えろ」

「は、ハイ!!」

俺とエリオは槍を構えあつて対峙し、俺は徐々にエリオを威圧していく…やはり慣れていないのか気おされる感じになり、汗を噴出しているようすがめに見え、後退しそうになったところで俺は構えを解き、威圧するのも同時に終了すると、エリオは全身から力が抜けたように座り込む

「やはりやったことはなかったか」

「いえ、お父さんが同じことをしてくれたことはあつたんですが…」

「義理とはいえ息子や娘…恐らく子供に俺は甘いようだ」

「お父さん」

「見ていたのか」

「ああ、お前の方が教えるのはあつているのかもしれない…」

「確かに、あのキャラロという子の方はどうする」

「そっちの方も…ライトニングとルーはお前が鍛えてやってくれるか？」

「…いいだろう、ナカジマの娘とティータの妹は頼むぞ」

「ああ…ティータって誰だ？」

「あの子の兄だ…もう亡くなっているがな」

「すまん」

「いいさ、俺も知ったのはつい最近だからな」

「ティアナさんが魔導師になったのは…」

「奴の遺志を継ぐため…それだけではない気もするがな」

「分かるのか？」

「なんとなくだがな…あせっている感じだ」

「ア…なんとなく分かるぜ、俺は徒手空拳、格闘術や武器を使つたのならここに居る連中に負ける気はしねえが魔法の技量は…なあ」

「僕もちよつと分かります」

「それに自分の周りは優秀さが眼に見えるからな」

「キャラは希少^{レアスキル}技能持ち、エリオはこの年で魔導師ランクが一緒…」

「ナカジマは家族のバックアップがある、お前達は知らないだろうがな」

「それに俺を含めて隊長陣の魔力量はあいつの倍近く、おまけに全員顔が売れてる」

「よくよく考えると凄い豪華メンバーですよな」

「それだけ今後この部隊に失敗は許されない、それもプレッシャーになってるんだろな」

「……お父さん護衛任務前に失敗は許されないうて……」

「うん、今マジで反省している」

「まあデジモンたちが受けた仕打ちのことを鑑みれば失敗は許されないだろう、彼らとの友好関係を築くためにはな」

「だが…上は下のことを考えなくちゃいけない、上司と部下見たいな関係じゃなくてもな」

「…確かにな」

「ま、もう少しゆっくり考えていくさ…時間はあるからな」

「デジモン達がすぐに攻めて来るかも知れんぞ」

「それはない、だったらもう一気呵成に来てもいいはずだ…なにせこっちは向こうのことをほとんど知らないんだからな」

「…まるで僕達を試しているようですね」

「遊んでいるのかもな」

「恐らく両方、と言うのが俺の考えだ…もしかしたら奴のアジトから情報を得て何か策を考えているのだろう…嫌な予感が強いがな」

「そうか…では訓練を続けようか」

「ハイ!!」

「俺はほかのどこを見に行く」

「分かった」

赤青が去り、俺はエリオとの訓練を再開する…俺の部隊も女傑が多かったからか、なんとなく新鮮な気分になったな

Side ゼスト Out

Side 龍士

あの後俺はキャロ、ルー、フェイトの様子を見に来るとはやても来ていた

「なんかここは一番人集まってんな」

「「「「あ、龍（君）（お父さん）（士さん）」」」」

「教導は？」

「あ、うん…大体いい感じかな」

「はやては？」

「ああ、龍君も来てくれたから調度ええわ」

「どうしたの、はやて」

「うん、急で悪いんやけど明日、フェイトちゃんと龍君にはある研究所の調査に行つて欲しいんよ」

「その研究所って言うのは？」

「寂れたところにあるやつや」

「怪しさ爆発だな」

「うん、それで何かデータが残つたりしてないか見てきて欲しいんよ」

「そついつことなら分かつたよ、はやて」

「俺もかまわない…ゼストさんが来てくれて本当に助かるな」

「龍君一人ではぼ全員のフォローし取つたからな…」

「今後は少しみりゃいいだけだからな、ほぼスタイルが出来上がつているスターズのコンビはともかく、ライトニングとルーはいろいろ教え甲斐があるからな」

「そつなの？」

「スタイルがあまりしつかりと確立していないからな、ある程度接

近戦対策も教え込むからな」

「……いらなくない(ですか)?」「……」

「……じゃあはやて、この状況になったらどうするつもりだ?」

「へっ?」

はやてがほうけた隙に俺ははやての脚を払ってすっころばして押し倒し、右手には武器生成で作り出したナイフを持ち右足に乗り上半身が動かないよう肩から首元を左腕で抑える

「り、龍君!?!」

「龍、何してるの!?!」

なんかはやてとフェイトが顔を真つ赤にして慌てているが少し殺気を出すと静まり返る……

「俺は凶悪犯罪者、それを追い詰めたものの今の今のように隙を付かれこうなったでしょう……味方がおらず、接近戦が出来ない……後はもう俺のなすがままだ……生かすも殺すも俺次第だ」

そう言っつて殺気を強めるとはやての顔がこわばる

「接近戦の対処法をちゃんと知っておけばここから逆転することも出来る、しかし、今は知らないからずつとこのままだ……どうすればいいのか、実践してみな」

言っつとはやては何とかしようと思をよじるが元々男女間では力の

差があり、普段から鍛えている俺とはやてではその差は大きくなるため必然的に動くことは出来ない…が、少し冷静になったのか多少自由が利く左足で俺の右足を蹴る

「まあそれも対処法の一つだな…一番良い方法は魔方陣を出すことなく俺に魔法で攻撃する事でもあるかな」

「「「「あ……」「」「」

「それ以前に接近戦の対処とかが出来るのなら足を払おうとした時に何か手は打てるしな」

「…そうだね」

「それに多少接近戦のことを知れば…ここだとスバル、ヴィータ、シグナム、エリオ、ゼストさんに俺といった面子の対策も考えられるようになるしな」

「ああ〜」

「全く…」

「で、はやて。明日のいつ結構なの？」

「そうだな、確かに気になる」

「明朝や。以降の判断は2人にお任せするで」

「責任放棄かよ」

「そう取られてもじゃあないけど…実は今回の、半分嫌がらせなんよ」

「そうか…分かった」

「任せて、はやて」

「うん、期待してるわ」

こうして俺とフェイトの潜入調査(?)任務が決まった…ここで俺達は知る…果てしない闇と欲望を…

第25話 仲間と得る新しき道（後書き）

作：次回へのフラグ

龍：番外編で書いた順じゃないんだな

鳳：良いだる別に…出番が減るわけじゃないんだし

作：順番的にはフェイト、はやて、なのは、アリサ・すずか、FWと予定しています

龍：そして…

鳳：黒いラム肉さん！！感想ありがとうございます！！

作：こっちで感想来たの久しぶりだったので嬉しかったです

龍・鳳：これからも皆さんこの小説をお願いします！！

ア：誤字脱字に意見・感想など待ってます！！でも自分が書かれていやだと思うことは書かないでくださいね！！

第27話 新たな姿、チリンモン（前書き）

作：久しぶりの更新だぜ！！

龍：ストーリー大丈夫だよな？

鳳：まあ読んでくれ

第27話 新たな姿、チリリンモン

今俺はフェイトとパートナーデジモンと共にはやてに指示された研究所に来ているが・・・

「誰もいないな」

「まあ廃棄されたところだって言ってたし」

「だがそうだったのは最近だろう？ だったらまだ調査員とかいても良いんじゃないか？」

「全部調べ終わってたって言ってたけど・・・」

「ここにデジモンの反応があったとか？」

「その可能性が高いよ。だって、そんな感じがするから」

「ああ、結構大きいな」

「なら気をつけないとな・・・此処だとメガログラウモンは戦いずらい」

「そうだね」

「まあこういうところは決まって隠し扉があってそこに何かあるのがお決まりだけだな」

「そんな・・・そんなのわかんないよ」

「まあ見てろ」

俺は壁に近づいて耳をつけたり叩いたりして調べていって・・・

「見つけ」

「そ、そんな風にして見つかるものなの!？」

「こづいうのは多分探查対策でそういうのに反応しないように防壁とかがついてるんだろ。だから違法研究とか証拠は小さいのしか見つからないのさ」

「す、凄い・・・」

「むしろなんで気づかないのか理解に苦しむ」

「ええっ!!!」

「そついやデジモン達は俺の部屋のゲームとか見まくってたな」

「デジモン達の成長率がいちじるしいね」

「お前はなめすぎてるな」

「」「うんうん」

「てかこんな事してないでさっさと入るぞ」

話を切り上げて隠してあった部屋の扉を開けてはいると・・・

「う、これは・・・」

「まるでバ○オハザードだな」

たくさん死体の死体にホルマリン漬けにされている到底人とは思えな
いたくさんの者の入ったカプセルだった

「とにかく調べよう」

「う、うん」

「においが気持ち悪い」

「怖い・・・」

そんな事を言いつつ中央にあったパネルを操作してどのような研
究をしていたかを調べまくる

「やっていたのは・・・プロジェクトFに・・・戦闘機人計画か・・・」

「優秀な人物のクローンを作り出してその肉体の一部を機械に変え
て能力を上昇させる」

「でも拒否反応で全滅ってあるね」

「しかし使われた人物は相当な人達・・・ってああ!!」

「まああいつらも使われていたとしてもおかしくないわな」

そこには『高町なのは』『フェイト・T・ハラオウン』『八神はやて』の3人の名前があった

「しかし魔法ばつかに頼ってっからこんな事になるんだよ」

「え、でも……」

「日本の犯罪発生率と比較するとこっちのほうが治安悪いぞ」

「そっなの?」

「よく調べてるね」

「そりゃ自分の住んでるところの情報はちゃんとしいっ・なんだ?」

「何か来る」

「これは……デジモンだ!」

「構えろ!! フェイト!!」

「うん!」

俺がユニストスでジャケットを展開すると同時にフェイトもBJを展開してバルディッシュを構える

「来る!」

「があああっ!」

「こいつは・・・」

俺はデジヴァイスを取り出して猿のようなデジモンの情報を調べる

エテモン 属性：ウイルス 世代：完全体 パペット型 必殺技
ラブ・セレナーデ、ダークスピリッツ、空中ダークスピリッツ

突如としてデジタルワールドに出現した正体不明のデジモン。

キング・オブ・デジモン”を自称し、その戦闘力は想像を絶する。
あの、謎のデジモン「もんざえモン」を陰で操っていると噂される。
あらゆる攻撃に耐える強化サルスーツに身を包んで、果てること
ない戦いのため今日も全世界を飛び回っている。必殺技は敵のハ
ートを切なくさせ、戦意を消失させる『ラブ・セレナーデ』と、触れ
るものを全て消滅させる黒い球体『ダークスピリッツ』得意技に『
モンキック』、『ダークミュージカル』、『グレイトフルナツコー
』、『ダツシユグレイトフルナツコー』がある

「完全体か!!」

「龍、此処じゃ狭くてメガログラウモンじゃ身動きが取れない」

「わかってる!!フェイト、脱出するぞ!!」

「うん」

だが・・・

「つるめ!!!!」

「くっ!!」

「きゃ!!」

「うわ!!」

ドアを抜けるにはあいつを抜けなければならない、しかし、こちらに抑えられそうな奴はいない・・・

「(どうする・・・このままじゃ全滅だ!!)」

「龍・・・一か八か、メガログラウモンになろう!!」

「ギルモン・・・そうだな、このまま座して死を待つより遙かに良いな!!」

俺はデジヴァイスを構えて

「デジソウル・・・フル、チャージ!!」

「ギルモン進化!!・・・・・・メガログラウモン!!」

やっぱりでかい・・・かなり体がかがめても天井とかに一部が埋まってる

「ダブルエッジ!!」

攻撃も小さく出すがエテモンにはモーションが大きく、なかなかあたりそうにない・・・なら

「フェイト！！射撃で援護だ！！」

「レッパモンの大きさならまだ大丈夫だ！！」

「分かった。デジソウル・・・チャージ！！」

「フェイトはクダモンをレッパモンに進化させるとフォトンランサーで援護する

「レッパモンはこの狭い空間で出せる最大速度でエテモンを攪乱している

そして俺も

「スパイラルバレット！！」

「両手を銃のように構えて次々と高速螺旋回転している弾丸を打ち出していく

「これは威力、貫通性、安定性、連射性の4つに優れたオリジナルだ

「銃と某漫画から作ったがかなり使い勝手が良い・・・そしてエテモンは俺達の攻撃を喰らうかメガログラウモンの攻撃を喰らうかの状態までもっていったが・・・

「うるうるああああ！！！！」

「なに！！ぐあっ！！」

「メガログラウモ・・・があっ！！」

しまった、良いの一発もらっちゃった!!

「龍!!メガログラウモン!!」

「まずいぞフェイト、この状況は・・・」

戦力の大幅ダウン・・・仕方ない

「フェイト・・・」

「龍?」

「俺が囷になる。その隙にレッパモンと一緒に逃げて六課に応援を頼んでくれ」

「そんな!!」

「それしか今は手がない!!」

「っ!!」

フェイトとレッパモンの速度は間違いなく一番だ。俺達の比にならないほどに・・・だから此処から脱出して応援を頼んでくれるのはフェイトたちしかいない!!

「わかった。でも無理はしないでね」

「それこそを『無理』だな・・・行くぞ!!」

俺はエテモンに肉弾戦を挑む。今回は刀もセイもないからこついでうのしか戦闘手段がない……もつとも

「はあああ!!」

武装色で硬化して『流派・東方不敗』の技をこつそり使っているためそんなに苦戦しているつもりはないが……

「やはりきつい……人間とでは違いすぎる!!」

そして横目でフェイトが行くのを確認した瞬間

「があっ!!!!」

「っ、龍!!」

「ば、止まるな!!」

「あ……」

エテモンにまた扉をふさがれた……まずい……メガログラウモンは既にギルモンに退化させて俺のデジヴァイスの中だ

「くそ……」

どうすれば良いのか全くわかんねえ……

「龍……諦めちゃだめだよ!!」

「分かってる!!だが何も良い考えが浮かばないんだ!!」

「あせつてもだめ!!」

「っ!!」

「いつも冷静に・・・クロノが言ってた意味、分かったよ」

「フェイト・・・」

「それに、龍は何度か私達を守ってくれた。だから今度は」

「我々が守る番だ!!」

その瞬間、二人から大きなデジソウルが出る

「デジソウル・・・フル、チャージ!!」

「レッパモン進化!!・・・チイリンモン!!」

「進化した・・・」

チイリンモン 属性：ワクチン 世代：完全体 聖獣型 必殺技：
疾風天翔剣、迅速の心得

デジタルワールド創生の頃に誕生した古代デジモンであると言われており、完全体にして究極体と互角の強さを誇ると伝承されている聖獣型デジモン。強大な力を持つデジモンであるが、争いを極端に嫌い、殺生は決して行わないと伝えられている。デジタルワールドに生きるすべてのものを慈しむ慈悲深い性格を持つが、それ故に無益な殺生を行う存在に対しては、手加減なしの制裁を加えることもあるという。必殺技は上空から一気に急降下し、頭部の角で敵を

貫く『疾風天翔剣』と素早い動きで分身を繰り出し相手を攪乱する
『迅速の心得』得意技に『改心の波動』がある。

「ダークスピリッツ!!」

「甘い!!」

消えたような軌道で避けるチイリンモン・・・凄い・・・

「終わりだ!!」『疾風天翔剣』!!」

「あああああつ!!」

終わった・・・

「お疲れ様」

「ああ」

「んじゃ、データを取れるだけとってとつと帰るか」

「そうだね」

その後重要なデータの中にスカリエッティのアジトのデータを発見し、他の部隊と合同で追い詰める事になるのは、また先の話だ

第27話 新たな姿、チイリンモン（後書き）

作：簡単に更新！！

龍：簡単言っな！！

鳳：お前軽いな！！

作：次回ははやてかな？

龍：何でも良いから早くしてくれ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8645q/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 青年と魔導師の交わり

2011年12月11日19時14分発行